

国道 438 号道路改築事業（飯山工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

第 9 冊

# 沖遺跡

2024.2

香川県教育委員会

国道 438 号道路改築事業（飯山工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

第 9 冊

# 沖遺跡

2024.2

香川県教育委員会

# 序 文

国道 438 号道路改築事業 ( 飯山工区 ) に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書も、本報告で 9 冊目となりました。開発事業で失われる遺跡の情報を後世に伝えるための記録資料が、本報告書です。

丸亀平野中央部を流れる土器川と、平野東部の大東川との間の平野部のうち、飯野山より南側は、かつて律令国家により鷯足郡坂本郷・小川郷・井上郷とされた地域です。この地域での埋蔵文化財の知見は、これまで限られたものでしたが、国道 438 号道路改築事業に伴う発掘調査により、地域がたどってきた土地の履歴を明らかにすることができました。

今回報告する沖遺跡 ( 丸亀市飯山町上法軍寺 ) では、弥生時代から江戸時代に至る遺構・遺物が見つかっています。「遺構」は地面や地形を加工して造られた施設の痕跡、「遺物」は様々な生活で使われた広い意味での道具や材料のことです。時代とともに変わる地形環境に応じて、先人たちが土地を切り拓き、生活の場としていたことが、遺構や遺物から読み取ることができます。土地の開発や彼らの生活が必ずしも安定したものでないことは、遺構・遺物の中に空白期があることからうかがえますが、幾度にもわたる大地への働きかけの結果が、現在の田園風景であることを知るならば、唯一無二の歴史がここで営まれてきたことを実感することができるのではないのでしょうか。

本報告書の「まとめ」では、現在の景観の重要な基盤をなす条里型地割の成立過程、小範囲に分布する特徴的な土器椀、火鉢形土器の様相について考察しています。また、これまで明確でなかった県内における室町時代から江戸時代頃の土器について、把手付鍋や播鉢を題材に時代による変化を検討した編年案も提示しています。これらを、今後も検討すべき点の多い課題として、多くの方々に御活用いただき、また御批判をいただけることを切望しております。

最後になりますが、発掘調査から本報告書刊行に至るまで、多大な御理解と御協力をいただきました関係諸機関、地元関係者の方々に、深甚なる感謝を申し上げて、序文の結びといたします。

令和 6 年 2 月

香川県埋蔵文化財センター  
所長 佐藤 竜馬

# 例 言

- 1 本報告書は、国道 438 号道路改築事業(飯山工区)に伴い実施した、沖遺跡(香川県丸亀市飯山町上法軍寺)の発掘調査の本報告である。
- 2 発掘調査及び整理作業は香川県教育委員会が調査主体となり、香川県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査及び整理作業においては、次の方々、機関の協力を得た。  
地元自治会、地元水利組合、丸亀市文化財保存活用課、丸亀市飯山南コミュニティセンター、岡山理科大学、香川県土木部道路課、中讃土木事務所、香川県産業技術センター、東信男、荻野繁春、首藤久士、高上拓、富岡直人、乗岡実、松田朝由、真鍋一生(順不同、敬称略)  
角礫凝灰岩製五輪塔の記載については、石材などを含め大川広域行政組合松田朝由氏よりご教示を得た。記して感謝申し上げます。
- 4 報告書の作成は香川県埋蔵文化財センターが実施した。執筆は第 1 章、第 2 章第 1 節、第 5 章第 2・3 節を益崎卓己、第 2 章第 2 節、第 3 章第 4 節、第 5 章第 1・4 節を溝上千穂、第 3 章第 1～3 節を蔵本晋司・益崎・溝上、第 5 章第 5 節を益崎・溝上・佐藤竜馬が分担して行った。第 3 章第 1～3 節の執筆者は各文章末尾に記載した。第 4 章の執筆者については目次を参照されたい。なお、編集は山元素子が担当した。
- 6 本書で用いる座標系は世界測地系(国土座標第Ⅳ系)で、標高は東京湾平均海水面を基準とした。
- 7 遺構は、次の略号により表示した  
SA：柵 SB：建物 SD：溝 SK：土坑等 SP：柱穴 SR：自然河川 SX：その他の遺構
- 8 遺構断面図の水平線上の数値は標高(m)である。
- 9 遺構断面図中の注記については、色調に小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』を参照した。
- 10 土器観察表の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』を参照した。同表中の残存率は遺物の図化部分に占める割合であり、完形品に対する割合ではない。
- 11 遺物の時期は、次の文献を参照した。  
上田秀夫 1982「14～16 世紀の青磁椀の分類について」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会  
荻野繁春 1985「西日本における中世須恵器系陶器の生産と資料」『福井考古学会会誌』第 3 号福井考古学会

- 小野正敏 1982「15、16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会
- 尾上実 1983「南河内の瓦器碗」『藤澤一夫先生古稀記念 古文化論叢』藤澤一夫先生古稀記念論集刊行会
- 佐藤竜馬 1995「楠井産土器の編年」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第18冊 国分寺楠井遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団
- 佐藤竜馬 2000「高松平野と周辺地域における中世土器の編年」『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 空港跡地遺跡Ⅳ』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター
- 鈴木康之 1996「土器類」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅴ—中世瀬戸内の集落遺跡—』広島県教育委員会
- 野上建紀 2000「磁器の編年(色絵以外)」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会
- 乗岡実 2002「近世備前焼播鉢の編年案」『岡山城三之曲輪跡』岡山市教育委員会
- 藤沢良祐 2008『中世瀬戸窯の研究』高志書院
- 間壁忠彦 1991『考古学ライブラリー 60 備前焼』ニューサイエンス社
- 松本和彦 2003「西の丸町地区出土の陶磁器について」『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第5冊 高松城跡(西の丸町地区)Ⅲ』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター
- 盛峰雄 2000「陶器の編年」『九州陶磁の編年』九州近世陶磁学会
- 山本信夫 2000『大宰府条坊跡ⅩⅤ—陶磁器分類編—』太宰府市教育委員会

# 本文目次

## 第1章 調査に至る経緯と経過

- 第1節 調査に至る経緯……………1
- 第2節 発掘調査と整理作業の経過……………2

## 第2章 立地と環境

- 第1節 地理的環境……………4
- 第2節 歴史的環境……………6

## 第3章 調査の成果

- 第1節 調査の方法……………8
- 第2節 基本層序……………10
- 第3節 1～3区の調査……………38
- 第4節 4・5区の調査……………178

## 第4章 自然科学分析

- 第1節 香川県沖遺跡出土動物遺存体の分析……………186
- 第2節 プラント・オパール分析（令和元年度調査）……………189
- 第3節 プラント・オパール分析（令和3年度調査）……………193
- 第4節 放射性炭素年代測定……………199
- 第5節 沖遺跡出土土師器の胎土材料……………204
- 第6節 出土木製品の樹種調査結果……………216
- 第7節 沖遺跡出土のサヌカイト製石器の産地推定……………218
- 第8節 沖遺跡出土鍛冶・鑄造関連遺物の調査……………223
- 第9節 沖遺跡出土木製品の樹種同定……………231

## 第5章 まとめ

- 第1節 遺構の変遷……………236
- 第2節 沖遺跡周辺における条里型地割の展開……………243
- 第3節 「特徴的な」土師質土器碗の分布と展開……………248
- 第4節 沖遺跡出土の土師質土器火鉢について……………252
- 第5節 中世後期～近世前期における土師質土器把手付鍋・播鉢について……………271

# 插图目次

第1图	遺跡の位置	1	第55图	1-2・3-1区SD3040平・断面図、出土遺物	62
第2图	地質分類図	5	第56图	3-3区SD3049平・断面図	63
第3图	周辺の遺跡	7	第57图	1-2・3-1・3-2区SR3001 SR3002平面図	64
第4图	調査区配置図	9	第58图	1-2・3-1・3-2区SR3001 SR3002断面図	65
第5图	基本土層模式図	10	第59图	1-2・3-1・3-2区SR3001出土遺物	66
第6图	2-3区北壁・東壁・西壁土層断面図	12	第60图	2・3区遺構配置図(中世以降)1	68
第7图	1-1区東壁土層断面図	13	第61图	1～3区遺構配置図(中世以降)2	69～70
第8图	1-1区北壁、2-1区北壁・西壁土層断面図	14	第62图	1-1・2-1区SB1002平・断面図、出土遺物	72
第9图	2-2北区西壁・南壁土層断面図	15	第63图	2-3区SB2001平・断面図、出土遺物	73
第10图	1-2区東壁、2-2南区西壁土層断面図	17	第64图	2-3区SA2001平・断面図	73
第11图	1-3区東壁・南壁土層断面図	18	第65图	3-1区SB3101平・断面図	74
第12图	3-5区南壁・西壁・北側拡張部東壁土層断面図	19	第66图	3-1区SB3102平・断面図、出土遺物	75
第13图	3-4区北壁土層断面図	20	第67图	3-1区SB3103平・断面図	76
第14图	3-4区東壁・北側拡張部東壁、 3-3区北壁・北東壁土層断面図	21	第68图	3-1区SB3104平・断面図、出土遺物	77
第15图	3-3区東壁・西壁土層断面図	23	第69图	3-1区SB3105平・断面図	78
第16图	3-1区東壁土層断面図	24	第70图	3-2区SB3201平・断面図	79
第17图	3-1区西壁土層断面図	25	第71图	3-2区SB3202平・断面図	80
第18图	3-1区北壁、3-1北拡張区北 南壁・北壁 ・西壁土層断面図	26	第72图	3-2区SB3203平・断面図	81
第19图	3-2区東壁土層断面図	27	第73图	3-2区SB3204平・断面図、出土遺物	82
第20图	3-2区東壁土層断面図(土層注記)	28	第74图	3-2区SB3205平・断面図	82
第21图	3-2区西壁土層断面図	29	第75图	3-2区SA3201平・断面図	83
第22图	3-2区南壁土層断面図	30	第76图	3-2区SA3202平・断面図	83
第23图	4区東壁土層断面図	31	第77图	3-2区SA3203平・断面図	84
第24图	4区西壁土層断面図1	32	第78图	3-2区SA3204平・断面図	85
第25图	4区西壁土層断面図2	33	第79图	3-2区SA3205平・断面図	86
第26图	5区東壁土層断面図	34	第80图	3-2区SA3206平・断面図	87
第27图	5区西壁土層断面図	35	第81图	3-2区SA3207平・断面図、出土遺物	88
第28图	5区西壁土層断面図(土層注記)	36	第82图	3-3区SB3301平・断面図	89
第29图	4区北東隅・南壁(東半)土層断面図	36	第83图	3-4区SB3401平・断面図	90
第30图	4区南壁(西半)、5区南壁土層断面図	37	第84图	3-4区SB3402平・断面図	91
第31图	1～3区遺構配置図(弥生時代後期以前)	39～40	第85图	3-4区SA3403平・断面図	91
第32图	3-3区SK3030平・断面図	41	第86图	3-2区SK3001平・断面図、出土遺物	92
第33图	1-1区SD1016平・断面図	41	第87图	3-2区SK3002平・断面図、出土遺物	92
第34图	1-1区SD1020平・断面図	41	第88图	3-2区SK3003平・断面図	93
第35图	2-1区SD2001平・断面図	42	第89图	3-2区SK3004平・断面図、出土遺物	93
第36图	2-1区SD2002平・断面図	42	第90图	3-2区SK3005平・断面図	93
第37图	1-3・3-2区SD3022平・断面図	43	第91图	3-1区SK3006平・断面図、出土遺物	94
第38图	1-1・2-3・3-3区SD3054平・断面図	44	第92图	3-1区SK3008平・断面図	94
第39图	1-3・3-2区SR3004平面図	45	第93图	3-1区SK3009平・断面図、出土遺物	95
第40图	1-3・3-2区SR3004断面図、出土遺物	46	第94图	3-1区SK3010平・断面図	95
第41图	1～3区遺構配置図(古墳時代～古代)	49～50	第95图	3-1区SK3011平・断面図	95
第42图	1-1・2-1区SD1005平面図	51	第96图	3-1区SK3011出土遺物	96
第43图	1-1・2-1区SD1005断面図	52	第97图	3-1区SK3012平・断面図	97
第44图	1-1・2-1区SD1005出土遺物	53	第98图	3-1区SK3013平・断面図	97
第45图	1-1・2-1・3-1区SD1006平・断面図、 出土遺物	54	第99图	3-1区SK3014平・断面図、出土遺物	97
第46图	1-1・2-1区SD1008平・断面図	55	第100图	3-1区SK3015平・断面図	97
第47图	1-3区SD1019平・断面図	55	第101图	3-1区SK3016平・断面図	98
第48图	2-3区SD2003平・断面図	55	第102图	3-1区SK3017平・断面図	98
第49图	1-3・3-2区SD3019平・断面図	56	第103图	3-1区SK3018平・断面図	98
第50图	3-2区SD3020平・断面図、出土遺物	57	第104图	3-1区SK3018出土遺物1	99
第51图	3-2区SD3021平・断面図、出土遺物	58	第105图	3-1区SK3018出土遺物2	100
第52图	1-2・2-2・3-1区SD3039平面図	59	第106图	3-1区SK3019平・断面図、出土遺物	100
第53图	1-2・2-2・3-1区SD3039断面図1	60	第107图	3-1区SK3020断面図	100
第54图	1-2・2-2・3-1区SD3039断面図2・出土遺物	61	第108图	3-1区SK3021平・断面図	101
			第109图	3-1区SK3022平・断面図	101
			第110图	3-1区SK3023平・断面図、出土遺物	101
			第111图	3-1区SK3024平・断面図	102

第112図	3-3区SK3025平・断面図、出土遺物	102
第113図	3-3区SK3027平・断面図	103
第114図	3-3区SK3028平・断面図	103
第115図	3-4区SK3029平・断面図	103
第116図	3-4区SK3031平・断面図、出土遺物	104
第117図	3-4区SK3032平・断面図	104
第118図	3-5区SK3033平・断面図、出土遺物	105
第119図	3-2区SX3001平・断面図、出土遺物	105
第120図	3-2区SX3003平・断面図、出土遺物	106
第121図	3-2区SX3008平・断面図、出土遺物	106
第122図	1-1・2-1・3-3区SD1001 SD1002 平・断面図	107
第123図	1-1・2-2区SD1007平・断面図、出土遺物	108
第124図	1-1・2-2区SD1009平・断面図、出土遺物	109
第125図	1-1区SD1010平・断面図	109
第126図	3-2区SD3001 SD3004平・断面図、 出土遺物	110
第127図	3-2区SD3003平・断面図	111
第128図	3-1・3-2区SD3005 SD3011平・断面図、 出土遺物	112
第129図	3-2区SD3007平・断面図	114
第130図	3-2区SD3007出土遺物1	115
第131図	3-2区SD3007出土遺物2	116
第132図	3-2区SD3010平・断面図	117
第133図	1-3・2-4・3-2区SD3013 SD3014 平・断面図	118
第134図	3-2区SD3014出土遺物1	119
第135図	3-2区SD3014出土遺物2	120
第136図	1-3・2-4・3-2区SD3014出土遺物	121
第137図	3-2区SD3013出土遺物	122
第138図	3-2区SD3016平・断面図、出土遺物	124
第139図	1-3・3-2区SD3023平・断面図	124
第140図	3-2区SD3025 SD3026 SD3027 平・断面図	126
第141図	3-1区SD3028 SD3029 SD3033平・断面図	128
第142図	3-1区SD3028出土遺物1	129
第143図	3-1区SD3028出土遺物2	130
第144図	3-1区SD3029 SD3033出土遺物	130
第145図	3-1区SD3030平・断面図	131
第146図	3-1区SD3032平・断面図	132
第147図	3-1区SD3032出土遺物1	133
第148図	3-1区SD3032出土遺物2	134
第149図	3-1区SD3032出土遺物3	135
第150図	3-1区SD3032出土遺物4	136
第151図	3-1区SD3032出土遺物5	137
第152図	3-1区SD3034平・断面図、出土遺物	138
第153図	3-1区SD3035平・断面図	139
第154図	3-1区SD3036平・断面図	139
第155図	3-1区SD3037平・断面図、出土遺物	140
第156図	3-1区SD3041平・断面図、出土遺物	141
第157図	3-3区SD3042 SD3043平・断面図	142
第158図	3-3区SD3042 SD3043断面図	143
第159図	3-3区SD3042出土遺物1	144
第160図	3-3区SD3042出土遺物2	145
第161図	3-3区SD3042出土遺物3	146
第162図	3-3区SD3042出土遺物4	147
第163図	3-3区SD3042出土遺物5	148
第164図	3-3区SD3042出土遺物6	149
第165図	3-3区SD3042 SD3043出土遺物	150
第166図	3-4区SD3044平・断面図	151
第167図	3-3区SD3045平・断面図	152
第168図	3-3区SD3047平・断面図	153
第169図	3-3区SD3050平・断面図	154
第170図	3-4区SD3051平・断面図、出土遺物	155
第171図	3-4区SD3052平・断面図	155
第172図	3-4区SD3053平・断面図	155
第173図	3-4区SD3055 SD3056 SD3057 SD3059 平・断面図	157
第174図	3-4区SD3058平・断面図	158
第175図	3-5区SD3061平・断面図、出土遺物	158
第176図	3-5区SR3003平・断面図、出土遺物	159
第177図	2区ピット平・断面図	164
第178図	3-1区ピット平・断面図1	165
第179図	3-1区ピット平・断面図2	166
第180図	3-1区ピット平・断面図3	167
第181図	3-1区ピット平・断面図4	168
第182図	3-2区ピット平・断面図1	169
第183図	3-2区ピット平・断面図2	170
第184図	3-2区ピット平・断面図3	171
第185図	3-4・5区ピット平・断面図	172
第186図	1・2・3-1区遺構外出土遺物	174
第187図	3-1区遺構外出土遺物	175
第188図	3-2区遺構外出土遺物	176
第189図	3-3区遺構外出土遺物	177
第190図	3-4・3-5・3区遺構外出土遺物	178
第191図	4・5区遺構平面図	179
第192図	5区SK5013平・断面図	180
第193図	4区SD4012平・断面図	180
第194図	4区SD4018平面図	181
第195図	4区SD4018 SD4019断面図	182
第196図	5区SD5014平・断面図	183
第197図	5区SA5001平・断面図、出土遺物	183
第198図	4・5区ピット平・断面図	184
第199図	4・5区遺構外出土遺物	185
第200図	おもな動物遺存体	188
第201図	分析試料の採取位置	190
第202図	植物珪酸体分布図	191
第203図	産出した植物珪酸体	192
第204図	分析サンプル断面	193
第205図	花粉分布図	194
第206図	植物珪酸体分布図	195
第207図	7層から算出した花粉化石	197
第208図	7層から算出した植物珪酸体	198
第209図	年代測定を行った試料 (No.1) (ピンは5年間隔)	201
第210図	年代測定を行った試料 (No.2) (ピンは5年間隔)	202
第211図	ポイントカウント法による粒子組成図1 (番号は分析No.に対応)	209
第212図	ポイントカウント法による粒子組成図2 (番号は分析No.に対応)	210
第213図	ポイントカウント法による粒度分布図 (番号は分析No.に対応)	211
第214図	遺跡と周辺の地質 (松浦ほか(2002)の20万分の1の地質図幅 「岡山及び丸亀」を編集)	212
第215図	分析試料と胎土の偏光顕微鏡写真	214
第216図	胎土の偏光顕微鏡写真	215
第217図	樹種同定 顕微鏡写真	217
第218図	香川県内のサヌカイト原石採取位置	219



第 219 図	サヌカイト産地推定判別図 1	221	第 229 図	岸の上遺跡周辺の推定条里坪界線と 溝・掘立柱建物の配置	245
第 220 図	サヌカイト産地推定判別図 2	222	第 230 図	沖遺跡周辺の推定条里坪界線と 掘立柱建物の配置	246
第 221 図	鍛造滓 (250) の顕微鏡写真・EPMA 調査結果	228	第 231 図	特徴的な土師質土器椀	249
第 222 図	鍛造鉄器片 (214) の顕微鏡写真・ EPMA 調査結果	229	第 232 図	出土地点分布図	251
第 223 図	ガラス質滓 (400) の顕微鏡写真・ EPMA 調査結果	230	第 233 図	沖遺跡出土の火鉢 (1)	253
第 224 図	光学顕微鏡写真 (1)	233	第 234 図	沖遺跡出土の火鉢 (2)	254
第 225 図	光学顕微鏡写真 (2)	234	第 235 図	土師質土器火鉢の変遷表	255
第 226 図	遺構変遷図 (1)	237 ~ 238	第 236 図	対象遺跡位置	271
第 227 図	遺構変遷図 (2)	239 ~ 240	第 237 図	土師質土器把手付鍋の形態的変異 (バリエーション)	274
第 228 図	遺構変遷図 (3)	241	第 238 図	土師質土器播鉢の形態的変異 (バリエーション)	275
			第 239 図	土師質土器把手付鍋・播鉢編年図	282

## 表目次

第 1 表	統一した遺構番号の一覧	8	第 21 表	原石採取地と判別群名称	220
第 2 表	2・3 区ピット一覧	162	第 22 表	測定値および産地推定結果	220
第 3 表	3 区ピット一覧	163	第 23 表	鑄造関係遺物の供試材の履歴と調査項目	227
第 4 表	4・5 区ピット一覧	185	第 24 表	鑄造関係遺物の供試材の化学組成	227
第 5 表	動物遺存体属性表	187	第 25 表	樹種同定結果	231
第 6 表	プラントオパール分析試料 (令和元年度) 一覧表	189	第 26 表	樹種同定結果一覧	232
第 7 表	試料 1g 当りのプラント・オパール個数	190	第 27 表	沖遺跡周辺における推定条里坪界線溝の展開	243
第 8 表	プラントオパール分析試料 (令和 3 年度) 一覧表	193	第 28 表	沖遺跡周辺における掘立柱建物主軸方向の変遷	244
第 9 表	産出花粉孢子一覧表	194	第 29 表	香川県域における出土事例一覧	250
第 10 表	試料 1g 当りのプラント・オパール個数	195	第 30 表	火鉢観察表 (沖遺跡)	257
第 11 表	ウィグルマッチング測定試料および処理	199	第 31 表	共伴関係表	257
第 12 表	試料 No. 1 の放射性炭素年代測定、暦年較正、 ウィグルマッチングの結果	200	第 32 ~ 44 表	火鉢観察表 (1) ~ (13)	258 ~ 270
第 13 表	試料 No. 2 の放射性炭素年代測定、暦年較正、 ウィグルマッチングの結果	200	第 45 表	対象遺跡の所在地および報告書	272
第 14 表	土師器の胎土分析試料の詳細	204	第 46 表	見せかけ上の共伴関係一覧	273
第 15 表	試料の粘土中の微化石類と砂粒組成の 特徴記載	207	第 47 表	土師質土器把手付鍋・播鉢の変遷と仮共伴関係の対応	278
第 16 表	胎土中の粘土および砂粒の特徴一覧表	207	第 48 表	土師質土器把手付鍋の各属性と型式設定	279
第 17 表	岩石片の起源と組み合わせ	207	第 49 表	土師質土器播鉢の各属性と型式設定	280
第 18 表	ポイント法による粒子の同定・計測結果	208	第 50 表	土師質土器把手付鍋・播鉢の併行関係	281
第 19 表	出土木製品樹種同定表	216	第 51 ~ 69 表	土器観察表 (1) ~ (19)	287 ~ 305
第 20 表	サヌカイト分析試料一覧	218	第 70 表	瓦観察表	306
			第 71 表	土錘観察表	307
			第 72 表	用途不明土製品観察表	307
			第 73 表	石器観察表	308
			第 74 表	金属器観察表	309
			第 75 表	木器観察表	309
			第 76 ~ 77 表	掘立柱建物・柵列一覧表 (1)・(2)	310 ~ 311

# 図版目次

## 写真表紙

令和元年度 現地説明会終了後

## 図版 1

- 1-2 区全景 北から
- 1-3 区全景 南から
- 1-3 区 (3 面) 完掘状況 南から
- 2-1 区全景 南から
- 2-1 区 SD1005・SD1006 周辺 南から

## 図版 2

- 2-2 北区遺構検出状況 北から
- 2-3 区全景 南から
- 2-4 区全景 南から
- 3-1 区全景 北から

## 図版 3

- 3-1 区全景 南から
- 3-1 区全景 (3 面) 南から
- 3-1 区南拡張部・3-2 区北拡張部全景 東から
- 3-2 区全景 南西から

## 図版 4

- 3-3 区全景 南から
- 3-3 区全景 北から
- 3-4 区全景 西から
- 3-4 区全景 南東から

## 図版 5

- 1-1 区東壁 南西から
- 1-1 区東壁 (SD1005 部分) 南西から
- 1-2 区東壁 南西から
- 1-2 区東壁 南西から
- 1-3 区東壁 (SD3019 部分) 北西から
- 1-3 区北壁 南から

## 図版 6

- 2-1 区西壁 (北半) 北東から
- 2-1 区西壁 (南半) 北東から
- 2-1 区北壁 南から
- 2-2 北区西壁 北東から
- 2-2 北区西壁南端 (SD3039・SD1008 部分) 東から
- 2-2 北区南壁 (SD3039 部分) 北から

## 図版 7

- 2-2 南区西壁 南東から
- 2-3 区北壁 南西から
- 2-3 区東壁 南西から
- 3-1 区北壁 (SD3039 部分) 南から
- 3-1 区西壁 (SR3001 部分) 北東から

## 図版 8

- 3-1 区北壁 南から
- 3-1 区東壁 北西から
- 3-2 区東壁 西から
- 3-2 区下層確認 西から

## 図版 9

- 3-2 区西壁 東から
- 3-3 区東壁 西から
- 3-4 区東壁 西から

## 図版 10

- 3-3 区西壁 SK3030 断面 東から
- 2-1 区 2 面 SD2001b-b' 断面 東から
- 1-3 区東壁 SD3022 断面 西から
- 2-3 区 3 面 SD3054e-e' 断面 西から

- 3-2 区 SR3004 遺物出土状況 東から
- 3-2 区 SR3004 断面 北西から
- 1-1 区東壁 SD1005 断面 西から
- 2-1 区 SD1005 東から

## 図版 11

- 1-1 区 SD1005 土器 (25) 出土状況 北西から
- 1-1 区 SD1005 土器 (25) 出土状況 東から
- 1-1 区 SD1005 土器 (21・24) 出土状況 北から
- 1-1 区 SD1005 土器 (24) 出土状況 西から
- 1-1 区 SD1005 土器 (25) 出土状況 上から
- 1-1 区 SD1006 完掘状況 東から
- 1-1 区西壁 (SD1006 部分) 断面 東から
- 1-1 区 SD1006b-b' 断面 西から
- 3-1 区 SD1006e-e' 断面 東から
- 1-1 区 SD1006 土器 (29) 出土状況 西から

## 図版 12

- 1-1 区 SD1007・SD1008 付近 西から
- 2-2 区 SD1008c-c' 断面 北東から
- 2-3 区 SD2003a-a' 断面 北東から
- 1-3 区東壁 SD3019 断面 西から
- 3-2 区 SD3020 土器 (44・45) 出土状況 南から
- 3-2 区 SD3020 完掘状況 北西から
- 3-2 区 SD3020a-a' 断面 東から
- 3-2 区 SD3021 断面 東から
- 1-2 区 SD3039 完掘状況 南西から

## 図版 13

- 1-2 区 SD3039b-b' 断面 南東から
- 3-1 区 SD3040 完掘状況 南西から
- 3-1 区 SD3040b-b' 断面 東から
- 1-2 区 SD3040d-d' 断面 南東から
- 3-3 区 SD3049 断面 北から
- 3-3 区 SD3049 完掘状況 南から
- 3-1 区 SR3001・SR3002 完掘状況 東から
- 3-1 区 SR3001・SR3002 完掘状況 西から
- 3-1 区西壁 SR3001 断面 東から
- 3-1 区 SR3001 断面 東から

## 図版 14

- 3-2 区 SR3001 検出状況 東から
- 3-2 区 SR3001 完掘状況 北から
- 3-1 区 SR3001 獣骨出土状況 東から
- 3-2 区 SR3001b-b' 断面 東から
- 3-2 区 SR3001 遺物出土状況 西から
- 1-1 区 SB1002-SP1004 断面 東から
- 1-1 区 SB1002-SP1011 断面 南から
- 1-1 区 SB1002-SP2018 断面 西から
- 2-1 区 SB1002-SP2010 断面 西から
- 1-1 区 SB1002-SP2008 断面 西から

## 図版 15

- 2-3 区 SB2001・SA2001 完掘状況 南から
- 3-1 区 SB3101・SB3102 完掘状況 北から
- 3-1 区 SB3101-SP3239 断面 南から
- 3-1 区 SB3101-SP3263 断面 南から
- 3-1 区 SB3101-SP3265 断面 北から
- 3-1 区 SB3102-SP3240 断面 西から
- 3-1 区 SB3102-SP3273 断面 南から
- 3-1 区 SB3102-SP3244 断面 東から
- 3-1 区 SB3103 完掘状況 北から

3-1 区 SB3103-SP3295 断面 北から

図版 16

3-1 区 SB3103-SP3298 断面 西から  
3-1 区 SB3103-SP3317 断面 東から  
3-1 区 SB3103-SP3331 断面 西から  
3-1 区 SB3104・SB3105 完掘状況 南から  
3-1 区 SB3104-SP3348 断面 東から  
3-1 区 SB3104-SP3372 断面 西から  
3-1 区 SB3104-SP3401 断面 西から  
3-1 区 SB3104-SP3401 遺物出土状況 西から  
3-1 区 SB3105-SP3368 断面 東から  
3-1 区 SB3105-SP3374 断面 西から  
3-1 区 SB3105-SP3416 断面 南から  
3-2 区 SB3201～SB3205・SA3201～SA3207 南西から

図版 17

3-3 区 SB3301a・b 完掘状況 北から  
3-3 区 SB3301-SP3604 断面 東から  
3-3 区 SB3301-SP3612 断面 北から  
3-3 区 SB3301-SP3614 断面 東から  
3-3 区 SB3301-SP3603 断面 東から  
3-4 区 SB3401 完掘状況 南東から  
3-4 区 SB3401-SP3627 断面 東から  
3-4 区 SB3401-SP3678 断面 西から  
3-4 区 SB3401-SP3694 断面 南から  
3-4 区 SB3402 完掘状況 南東から  
3-4 区 SB3402-SP3619 断面 東から

図版 18

3-4 区 SB3402-SP3625 断面 西から  
3-4 区 SB3402-SP3642 断面 西から  
3-4 区 SA3403-SP3620 断面 西から  
3-4 区 SA3403-SP3711 断面 西から  
3-4 区 SA3403-SP3712 断面 西から  
3-2 区 SK3001 断面 南から  
3-2 区 SK3002 断面 東から  
3-1 区 SK3006 断面 南から  
3-1 区 SK3009 断面 南から  
3-1 区 SK3010 断面 南から  
3-1 区 SK3012 石検出状況 東から  
3-1 区 SK3013 断面 北から  
3-1 区 SK3014 断面 南から  
3-1 区 SK3015 断面 東から  
3-1 区 SK3011 断面 南から  
3-1 区 SK3011 完掘状況 西から  
3-1 区 SK3018 断面 西から

図版 19

3-1 区 SK3018 遺物出土状況 西から  
3-1 区 SK3019 断面 東から  
3-1 区 SK3023 遺物出土状況 南西から  
3-3 区 SK3024 断面 西から  
3-3 区 SK3025 断面 北から  
3-3 区 SK3025 断面 東から  
3-3 区 SK3025 遺物出土状況 東から  
3-3 区 SK3027 断面 南から  
3-3 区 SK3027 断面 東から  
3-3 区 SK3027 遺物出土状況 東から  
3-3 区西壁 SK3027 断面 東から  
3-4 区 SK3029 断面 南から  
3-2 区 SX3001a-a' 断面 南から  
3-2 区 SX3003a-a' 断面 西から  
2-1 区 SD1001・SD1002 完掘状況 東から

図版 20

1-1 区西壁 SD1001・SD1002 断面 東から  
1-1 区 SD1001・SD1002b-b' 断面 西から  
3-3 区西壁 SD1001 断面 東から  
1-1 区西壁 SD1007 断面 西から  
3-2 区 SD3001a-a' 断面 南から  
3-2 区 SD3001d-d' 断面 南から  
3-2 区 SD3005b-b' 断面 南から  
3-2 区 SD3005d-d' 断面 南から  
3-1 区 SD3005a-a' 断面 西から  
3-2 区 SD3007b-b' 断面 北から  
3-2 区 SD3007c-c' 断面 東から  
3-2 区 SD3007 動物遺存体・鉄製品 (145) 出土状況 南西から  
3-2 区 SD3007 完掘状況 南から

図版 21

3-2 区 SD3007 完掘状況 東から  
3-2 区 SD3007 完掘状況 西から  
3-2 区 SD3013・SD3014 完掘状況 西から  
3-2 区 SD3010b-b' 断面 西から  
3-2 区 SD3013b-b' 断面 西から  
3-2 区 SD3013・SD3014 断面 東から  
3-2 区 SD3013・SD3014c-c' 断面 東から  
3-2 区 SD3013・SD3014d-d' 断面 東から  
3-2 区 SD3014 東壁断面 西から  
1-3 区 SD3014a-a' 断面 東から  
1-3 区南拡張 SD3014 西壁断面 東から

図版 22

3-2 区 SD3023 完掘状況 西から  
3-2 区 SD3025・SD3026 完掘状況 南から  
3-2 区 SD3025・SD3026b-b' 断面 南から  
3-2 区 SD3027c-c' 断面 南から  
3-1 区 SD3028d-d' 断面 南から  
3-1 区 SD3028・SD3029a-a' 断面 北から  
3-1 区 SD3029b-b' 断面 北から  
3-1 区 SD3028 遺物出土状況 北から  
3-1 区 SD3028 遺物出土状況 西から

図版 23

3-1 区 SD3030a-a' 断面 東から  
3-1 区西壁 SD3032 断面 東から  
3-1 区 SD3032a-a' 断面 東から  
3-1 区 SD3032 土器 (272) 出土状況 南から  
3-1 区 SD3032 土器 (274・313) 出土状況 西から  
3-1 区 SD3032 五輪塔 (308) 出土状況 西から  
3-1 区 SD3037a-a' 断面 東から  
3-1 区 SD3041a-a' 断面 南から  
3-3 区 SD3042 遺物出土状況 南から  
3-3 区 SD3042b-b' 断面 北から  
3-3 区 SD3042c-c' 断面 北から  
3-3 区南壁 SD3042a-a' 断面 北から  
3-3 区 SD3042 ①土器 (368) 出土状況 西から  
3-3 区 SD3042 ①遺物出土状況 東から  
3-3 区 SD3042 ③遺物出土状況 北から

図版 24

3-3 区 SD3042 ③木器 (401) 出土状況 東から  
3-3 区 SD3042 ③木器 (401) 出土状況 北から  
3-3 区 SD3042 ④遺物出土状況 北から  
3-3 区 SD3042・SD3043 南から  
3-4 区 SD3044b-b' 断面 北から  
3-3 区 SD3045b-b' 断面 北から

3-3 区 SD3047b-b' 断面 北から  
3-3 区北壁 SD3050 断面 南西から  
3-3 区 SD3050b-b' 断面 北から  
3-4 区 SD3051 断面 東から  
3-4 区 SD3052 断面 南から

図版 25

3-1 区 SP3261 断面 南から  
3-1 区 SP3299 断面 南から  
3-1 区 SP3319 断面 西から  
3-1 区 SP3304 断面 北から  
3-1 区 SP3323 断面 西から  
3-1 区 SP3354 断面 西から  
3-1 区 SP3422 断面 東から  
3-1 区 SP3432 断面 北東から  
3-1 区 SP3442 断面 東から  
3-2 区 SP3083・SP3084 断面 南西から  
3-4 区 SP3633 断面 南から  
3-4 区 SP3690 断面 北から  
4 区遺構検出状況 南から  
5 区遺構検出状況 南から

図版 26

4 区西壁 東から  
5 区南壁 (SK5013 部分) 北から  
4 区 SD4012 断面 南から  
4 区 SD4018・SD4019 完掘状況 南から  
4 区 SD4018・SD4019c-c' 断面 南から  
4 区南壁 (SD4018・SD4019 部分) 北から  
4 区西壁 (SD4018・SD4019 部分) 東から  
5 区 SA5001-SP5005 断面 東から

図版 27

遺物写真

図版 28

遺物写真

図版 29

遺物写真

図版 30

遺物写真

図版 31

遺物写真

図版 32

遺物写真

図版 33

遺物写真

図版 34

遺物写真

図版 35

遺物写真

図版 36

遺物写真

図版 37

遺物写真

## 第1章 調査に至る経緯と経過

### 第1節 調査に至る経緯

香川県坂出市と徳島県徳島市を結ぶ国道438号は、中讃地域を南北に貫く主要幹線道路である。近年の交通量の増加による慢性的な渋滞の緩和や交通事故の軽減などを目的として、香川県土木部道路課(以下、道路課と略称)では、同路線の改修工事を計画した。

これをうけて香川県教育委員会(以下、県教委と略称)では、同路線周辺に多くの埋蔵文化財包蔵地が所在することから、平成5年度より道路課と協議を進め、条件の整った地点から順次試掘調査等を実施し、対象地内の埋蔵文化財の包蔵状況を確認した上で、文化財保護法に基づく保護措置を実施してきた。

沖遺跡は、平成29年度・令和2年度に実施した試掘調査の結果、新たに周知の埋蔵文化財包蔵地に登録された遺跡である。

国道438号改築工事予定地のうち水田部分については平成29年11月までに用地取得が完了したことから、平成29年11月・平成30年1月に試掘調査を実施し、対象地内の埋蔵文化財の包蔵状況について確認を行った。その結果、一部のトレンチで、古代～中世を中心とした溝や柱穴などが検出されたことから、試掘調査対象地のうち1449.76㎡を新たに「沖遺跡」として、文化財保護法にもとづく保護措置が必要と判断した。その後、沖遺跡の南隣接地1546㎡について令和2年9月までに用地取得・既設建物の解体が完了したことから、令和2年10月に試掘調査を実施した。結果、沖遺跡で検出した遺構面が連続することを確認したため、試掘調査対象地の全域にあたる1546㎡を「沖遺跡」の範囲に追加した。なお、試掘調査の詳細については、既に報告されている(香川県教育委員会編2018、同2021)。



第1図 遺跡の位置

## 第 2 節 発掘調査と整理作業の経過

沖遺跡の発掘調査は、道路課と県教委との間で、道路改築工事範囲のうち市道名沖線東側の境界構造物設置範囲 130㎡ (1-1 区～1-3 区) について平成 30 年度 (第 1 次調査) に、市道名沖線東側の残る 499 ㎡と同西側 1407㎡について令和元年度 (第 2 次調査) に、市道五反地沖線南側の 1543㎡について令和 4 年度 (第 3 次調査) に、それぞれ香川県埋蔵文化財センターを調査担当として実施することで合意した。

第 1 次調査は平成 30 年 9 月 1 日～10 月 31 日、第 2 次調査は平成 31 年 4 月 1 日～令和元年 9 月 30 日、第 3 次調査は令和 4 年 4 月 1 日～6 月 30 日の期間で、それぞれ香川県教育委員会を調査主体とし、香川県埋蔵文化財センターが担当して実施した。

整理作業は、令和 4 年 4 月 1 日～5 月 31 日、令和 5 年 4 月 1 日～8 月 31 日に、香川県埋蔵文化財センターにおいて実施した。

遺物の接合・図化・写真撮影と遺構図の浄書、遺構写真の整理などを行い、本書にまとめた。出土遺物量は、28ℓ入りコンテナ 52 箱である。本報告を作成するにあたり、本遺跡を評価する上で必要と認めるすべての遺構・遺物について報告することを原則とした。また、調査時に作成した図面については、ほぼ全てを本書に掲載し、撮影した写真は、類似したカットを選択するなどして、必要最低限のものを収録した。また、出土遺物は遺構出土遺物の図化を最優先とし、遺構外出土遺物については特に必要と認めるもののみ図化・掲載することとした。

発掘調査及び整理作業の体制は以下のとおりである。(益崎)

各調査区の実施時期と調査面積

調査区名	調査調査期間	調査面積 (㎡)
1 区	平成 30 年 9・10 月	130
2 区	平成 31 年 4 月～ 令和元年 9 月	1,906
3 区		
4 区	令和 4 年 4 月～6 月	1,543
5 区		

### 平成 30 年度発掘調査の体制

香川県教育委員会事務局 生涯学習・文化財課			香川県埋蔵文化財センター		
統括	課長 副課長	白井道代 片桐孝浩	統括	所長 次長	西岡達哉 時松弘志
総務・生涯学習推進グループ	課長補佐 主事	中川聡朗 山下詩織	総務課	課長(兼務) 副主幹 主任	時松弘志 斎藤政好 高橋範行
文化財グループ	課長補佐(兼務) 主任文化財専門員 主任技師	片桐孝浩 信里芳紀 真鍋貴匡	調査課	主任 主任 課長 文化財専門員 囑託	丸尾麻知子 木村義信 横井隆史 古野徳久 森下友子 角野勲

### 令和元年度発掘調査の体制

香川県教育委員会事務局 生涯学習・文化財課			香川県埋蔵文化財センター		
統括	課長 副課長	原田智 片桐孝浩	統括	所長 次長	西岡達哉 石野高雄
総務・生涯学習推進グループ	課長補佐 主事	中川聡朗 辻おしえ	総務課	課長(兼務) 副主幹 主任	石野高雄 斎藤政好 高橋範行
文化財グループ	課長補佐(兼務) 主任文化財専門員 文化財専門員	片桐孝浩 松本和彦 真鍋貴匡	調査課	主任 主任 主任 課長 文化財専門員 文化財専門員 技師 囑託 囑託 囑託	丸尾麻知子 横井隆史 寺尾一夫 古野徳久 森下友子 山元素子 益崎卓己 今井由佳 名倉美保 濱田邦彦

## 令和4年度発掘調査の体制

香川県教育委員会事務局 生涯学習・文化財課			香川県埋蔵文化財センター		
統括	課長	荻原絢嗣	統括	所長	高原康
	副課長	佐藤竜馬		次長	北山健一郎
総務・生涯学習推進グループ			総務課	課長(兼務)	北山健一郎
	課長補佐	長谷川江里		主任	岩西浩二
	主事	安藤瑞基		主任	石田こずえ
文化財グループ	課長補佐(兼務)	佐藤竜馬		主任	松浦佐和
	主任文化財専門員	森下英治		主任	遠山豊
	文化財専門員	宮崎哲治	調査課	主任	寺尾一夫
				課長	北山健一郎
				文化財専門員	長井博志
				技師	溝上千穂
				会計年度任用職員	今井由佳
				会計年度任用職員	徳永貴美

## 令和4年度整理作業体制

香川県教育委員会事務局 生涯学習・文化財課			香川県埋蔵文化財センター		
統括	課長	荻原絢嗣	統括	所長	高原康
	副課長	佐藤竜馬		次長	北山健一郎
総務・生涯学習推進グループ			総務課	課長(兼務)	北山健一郎
	課長補佐	長谷川江里		主任	岩西浩二
	主任主事	安藤瑞基		主任	石田こずえ
文化財グループ	課長補佐(兼務)	佐藤竜馬		主任	松浦佐和
	主任文化財専門員	森下英治		主任	遠山豊
	文化財専門員	宮崎哲治	資料普及課	主任	寺尾一夫
				課長	信里芳紀
				主任文化財専門員	蔵本晋司
				会計年度任用職員	土井美穂
				会計年度任用職員	中野優美
				会計年度任用職員	加藤恵子
				会計年度任用職員	大山和子
				会計年度任用職員	大林真沙代

## 令和5年度整理作業体制

香川県教育委員会事務局 生涯学習・文化財課			香川県埋蔵文化財センター		
統括	課長	佐々木隆司	統括	所長	佐藤竜馬
	副課長	白川暁美		次長	萱原宥純
総務・生涯学習推進グループ			総務課	課長(兼務)	萱原宥純
	課長補佐(兼務)	白川暁美		副主幹	高原保弘
	主任主事	安藤瑞基		主任	十川晃
文化財グループ	課長補佐	森下英治		主任	松浦佐和
	主任文化財専門員	蔵本晋司		主任	遠山豊
	文化財専門員	竹内裕貴	資料普及課	課長	信里芳紀
				主任技師	益崎卓己
				技師	溝上千穂
				文化財専門員	山元素子
				会計年度任用職員	北濱敦子
				会計年度任用職員	小早川真由美
				会計年度任用職員	土井美穂
				会計年度任用職員	中野優美
				会計年度任用職員	加藤恵子
				会計年度任用職員	大山和子
				会計年度任用職員	小林奈充子
				会計年度任用職員	山本基公美
				会計年度任用職員	佐立晶子
				会計年度任用職員	池内妙子
				会計年度任用職員	大林真沙代
				会計年度任用職員	池田匠
				会計年度任用職員	竹内悦子

## 第2章 立地と環境

### 第1節 地理的環境

沖遺跡は、丸亀平野の南東部、香川県丸亀市飯山町上法軍寺に所在する。調査地の西方 1.5kmには土器川が北流し、周辺に大規模な扇状地が形成される。南方には土器川の扇状地起源と考えられる岡田台地が広がり、南方約 300mには旧綾川によって侵食され形成された岡田台地北縁の段丘崖が東西に伸びる。東方には、旧綾川によって形成された谷底平野と考えられる大東川低地が広がる。調査地は、これらの扇状地・谷底平野の境界付近に位置する。

調査地北側隣接地には大東川が東流する。この大東川は仲多度郡まんのう町・丸亀市綾歌町付近のため池の水を集めて岡田台地上を北流し、段丘崖を下って大東川低地へと流れ出る。段丘崖下で東へと流下方向を転じ、調査地の西方約 200 mで大窪池から流れ出る大窪谷川と合流した後、調査地北側隣接地をさらに東へ流れる。調査地は大窪谷川によって開析された大窪谷谷口の北東側前面にあたり、調査地の西側には北東方向へ開く小規模な扇状地が広がる。調査地付近の現在の水田面標高をみても、北東方向へわずかに傾斜する様子が認められる。

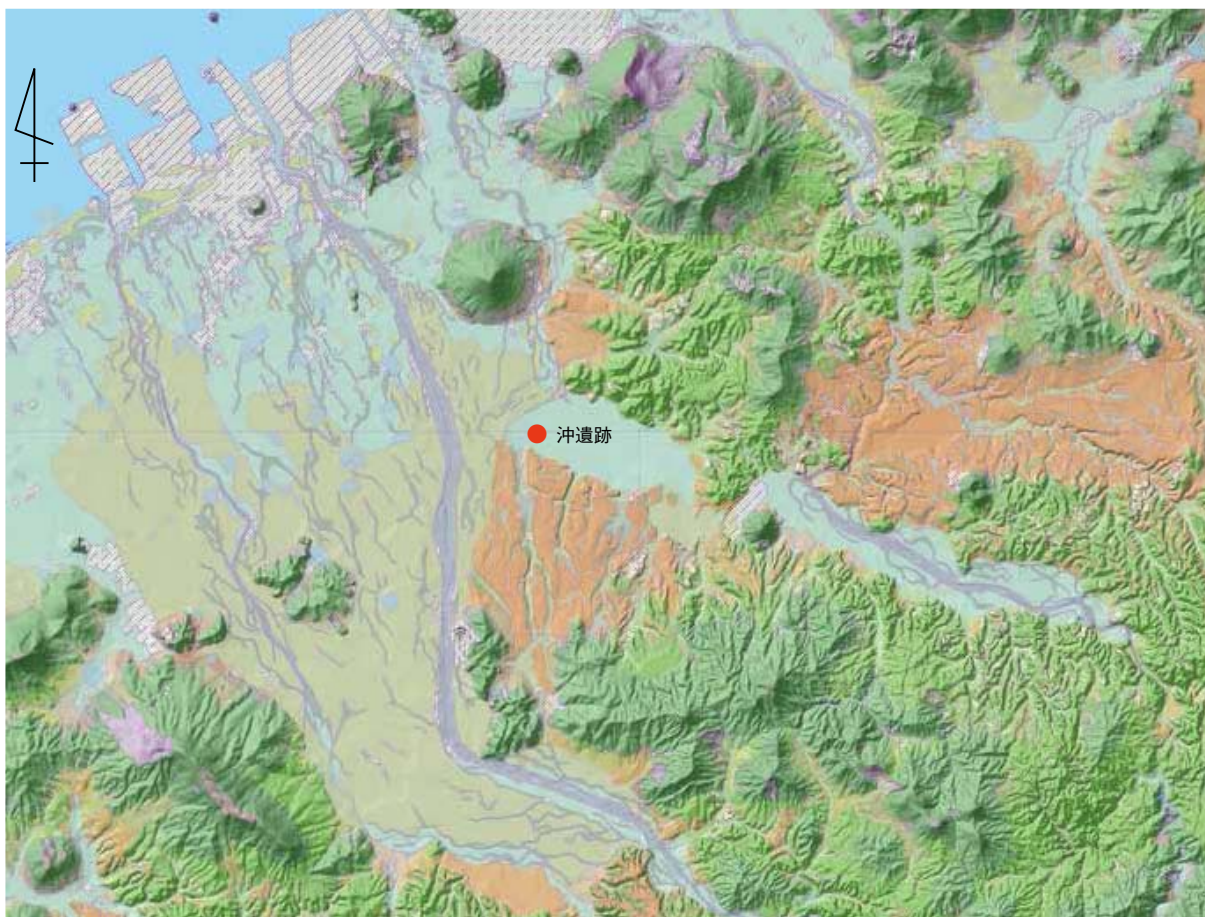
また、周辺の現地表面の標高をみると、調査地北半から名遺跡南半付近には南西－北東方向の帯状の低地の存在が想定できる。実際に現在の大東川はこの低地帯内を東流するほか、平成 30 年度に実施した名遺跡の発掘調査でも、調査地南半で古代から中世にかけての東西流する自然河川、河川由来の洪水砂により埋没した古代の水田を検出している（香川県教育委員会 2021）。付近に先行する古代以前の埋没河川が存在する可能性も想定でき、弥生時代から現代に至るまで、調査地付近は小規模な河川に面した低地であったと推定される。

そのほか、調査地周辺には、現在の市道・農業用水路等が概ね 100～120 m間隔で定期的に配される様子が確認でき、古代から中世にかけて施工された条里地割の痕跡と考えられている（金田 1988）。これらの南北軸は北から 30° 前後西へ振れており、丸亀平野における既知の条里地割の方向とも概ね一致する。今回の調査でも、この推定条里方向に並行する 12 世紀後半から 13 世紀代の溝を複数条検出しており、古代末から中世前半期にかけて、周辺微地形の改変と土地区画の整備が行われたものと推定できる。

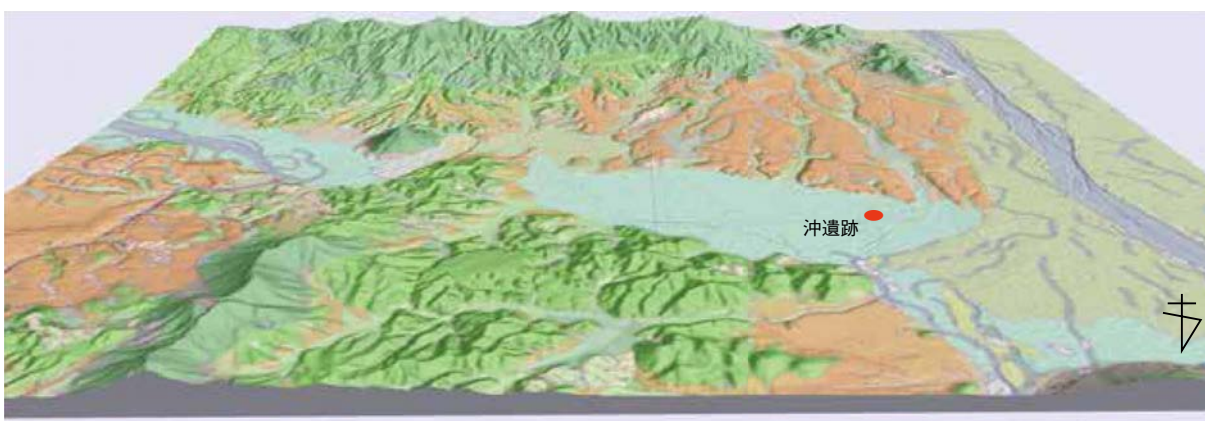
一方で、沖遺跡の約 1km北方では条里型地割は明瞭には観察できず、南西－北東方向の帯状に地割が乱れる。この乱れの南北両岸には、高さ 0.5～1 mほどの段丘崖が認められ、旧土器川などの埋没河道の痕跡と考えられる。これらの旧河道については、古代末から中世初頭にかけて土器川・大東川の河床の下刻により徐々に周辺の扇状地面や谷底平野が段丘化・高燥化し、河道はしだいに埋没したことが指摘される（木下 1991・1995）。そのほかにも、岸の上遺跡北側から飯野山南麓にかけて、主に条里型地割南北坪界線の乱れが確認でき、条里地割施工に前後する時期に埋没した複数条の旧河道の存在が推定できる。

また、大東川は調査地の西 400 mにある古代寺院法勲寺跡付近で南へと逆流し、岡田台地北縁の段丘崖に当たって再び北東方向へと流れを変える。北東方向へ緩く傾斜する扇状地の地形に逆らい、法勲寺跡を迂回するような流形であり、人為的に付け替えられた可能性がある。その後は地形の傾斜に沿って東流するが、沖遺跡北側では推定条里坪界線に沿って直線的に流れる。法勲寺跡付近での不自然なクラックとの前後関係は定かでないが、人為的な付け替えの可能性が考えられる。古代のいずれかのタイミ

















地理院地図（陰影起伏図・地形分類図）を加工・加筆して作成



地理院地図（陰影起伏図・地形分類図）を加工し三次元化して作成

 山地	 扇状地	 氾濫平野
 地すべり地形	 自然堤防	 後背湿地・湿地
 台地・段丘	 砂州・砂丘	 旧河道
 山麓堆積地形	 凹地・浅い谷	 河川敷・浜

第2図 地質分類図

ングで周辺微地形の開発・改変が行われたものと推定できる。現在の沖遺跡周辺は、本来の自然地形と人為的に改変された地形が混在する地形環境と理解できる。

#### 引用・参考文献

香川県教育委員会編 2021『名遺跡』香川県教育委員会

金田章裕 1988「条里と村落生活」香川県編『香川県史 1 通史編 原始・古代』四国新聞社

木下晴一 1991「条里型地割施工以後の地形変化」『香川理学会会報 No.11』香川県地理学会

木下晴一 1995「大東川流域の段丘崖」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 16 川津二代取遺跡』香川県教育委員会ほか

長谷川修一ほか 2010「丸亀平野と飯野山」香川大学公開講座「讃岐ジオサイト探訪」資料

## 第2節 歴史的環境

沖遺跡の周辺の低地部では、弥生時代以前にさかのぼる遺跡は認められない。しかし飯野山の山裾部に位置する坂元神社遺跡、岡田台地上の開析谷内に位置する大窪池遺跡、仁池遺跡からは、旧石器時代もしくは縄文時代とされる石器が採集されており、周辺での人間活動の痕跡は認められる。

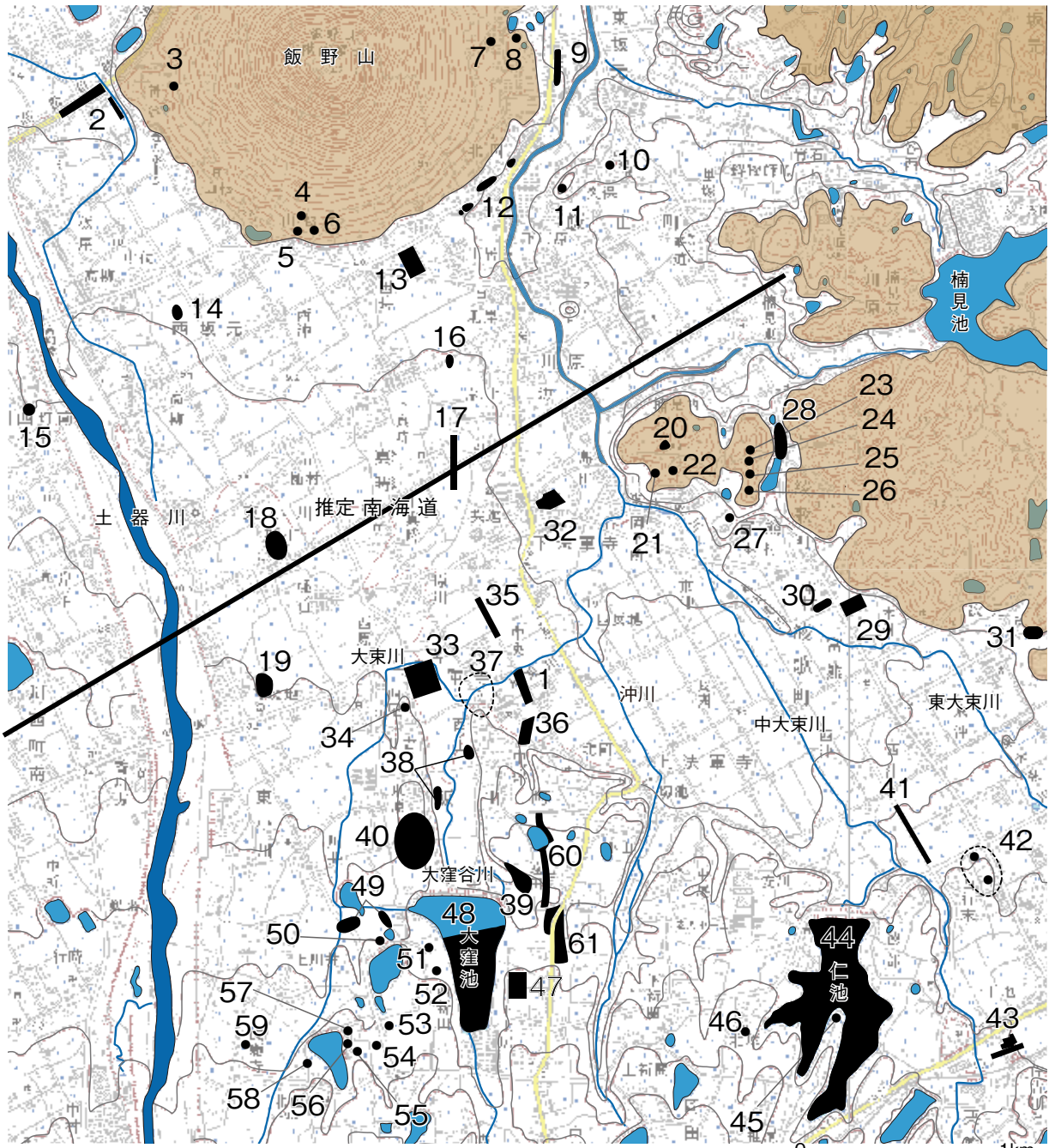
弥生時代から古墳時代中期には、調査地の北東側、大東川沿いの微高地上を中心に集落が展開する。一方の低地部では、当該期の遺構は自然流路が主体で遺物量も乏しく、明確な居住の痕跡は認められない。大東川の河岸段丘上に位置する北岸南遺跡では、弥生時代後半～古墳時代前期の大型灌漑水路を含む複数の溝を検出した。溝は流路方向から土器川旧河道または大東川より取水し、灌漑用水として利用した後、土器川等の旧河道へと排水していたものと考えられ、北岸南遺跡周辺は水田等の耕作地として開発されたことが明らかになっている。土器川東岸に位置する西坂元内板遺跡、西内遺跡では、当該期の明確な遺構は認められず、土層堆積状況から土器川の氾濫原であったと理解されている。

続く古墳時代後期になると、集落遺跡の立地に変化が認められる。岸の上遺跡や名遺跡など大東川低地の中央に位置する旧河道に近接した微高地上で、竪穴建物や総柱建物が出現する。また第1節に既述したように名遺跡からは古代の自然流路と水田跡が検出されており、微高地上を居住域として、近接する低地を生産域として開発・利用した様子がみられる。

古代になると、7世紀後半頃に岸の上遺跡において、官衙的な性格が推定される大型掘立柱建物群が出現し、8世紀前半頃には付近に南海道が敷設される。周辺の現地形に認められる条里型地割は、同時期以降、順次整備が進められたものと推定される。沖遺跡周辺では、大型掘立柱建物群が検出された東原遺跡や遠田遺跡など、岡田台地上の開発が活発化する様子が認められる。そのほか、沖遺跡南方に近接する沖南遺跡からは、当該期に法勲寺と同文の軒瓦や多くの輸入陶磁器類が出土しており、法勲寺に関係のある人物の住居を想起させる。

中世になると、飯野山の南麓付近に所在する飯山北土居遺跡や東坂元秋常遺跡で居館の堀や屋敷地が確認されるほか、岸の上遺跡、名遺跡、沖遺跡でも中世の集落跡や遺物が認められるなど、遺跡の周辺に当該期の集落が点在することがわかる。また周辺低地部での段丘化の進行に伴い、低地部の開発が活発化する可能性が考えられる。

近世以降になると、岸の上遺跡や北岸南遺跡で土坑などは検出されるが集落跡は検出されていない。各遺跡の調査結果より遺跡周辺の大部分は耕地化されていたものとみられる。



国土地理院地形図1/25,000の一部に加筆 等高線は5m間隔

(1/30,000)

- |               |            |              |             |           |
|---------------|------------|--------------|-------------|-----------|
| 1 沖遺跡         | 13 飯山北土居遺跡 | 25 富熊6号墳     | 37 西の山遺跡    | 49 上川井遺跡  |
| 2 飯野東二瓦礫遺跡    | 14 西坂元内板遺跡 | 26 富熊神社古墳    | 38 大窪谷遺跡    | 50 前谷古墳   |
| 3 真時古墳        | 15 原竜王山2号墳 | 27 富熊神社神事場古墳 | 39 遠田遺跡     | 51 内光寺荒神塚 |
| 4 坂元神社西古墳群2号墳 | 16 北岸南遺跡   | 28 十三塚古墳     | 40 東原遺跡     | 52 内光寺椀塚  |
| 5 坂元神社西古墳群1号墳 | 17 岸の上遺跡   | 29 新土井遺跡     | 41 行末西遺跡    | 53 富野氏車古墳 |
| 6 坂元神社西古墳群3号墳 | 18 若宮遺跡    | 30 堂ノ元遺跡     | 42 行末遺跡     | 54 渋谷氏古墳  |
| 7 大谷古墳        | 19 西内遺跡    | 31 次見遺跡      | 43 佐古川・窪田遺跡 | 55 大道墓地古墳 |
| 8 西の宮古墳       | 20 法敷寺城跡   | 32 下法軍寺館跡    | 44 仁池遺跡     | 56 大林氏2号墳 |
| 9 東坂元北岡遺跡     | 21 次郎山1号墳  | 33 法敷寺跡      | 45 椎尾東遺跡    | 57 大林氏1号墳 |
| 10 極楽寺古墳      | 22 次郎山2号墳  | 34 講留靈王古墳    | 46 北原古墳     | 58 車塚     |
| 11 久保大塚       | 23 富熊4号墳   | 35 名遺跡       | 47 大坪屋敷跡    | 59 成願寺跡   |
| 12 東坂元秋常遺跡    | 24 富熊5号墳   | 36 沖南遺跡      | 48 大窪池遺跡    | 60 岡遠田遺跡  |
|               |            |              |             | 61 岡遠田南遺跡 |

第3図 周辺の遺跡

### 第3章 調査の成果

#### 第1節 調査の方法

調査地は国道 438 号改築事業対象地のうち、バイパス新設予定地である。南北約 145m、東西約 25m と南北に細長く、調査地内を東西・南北に市道が交差する。調査区は、第 4 図に示すとおり、主に市道を境に 5 区に大別し、調査時の工程や調査開始前に設置されていた隣接耕地への用排水に使用する仮設水路、私道等により、調査段階でさらに小区画に分割して調査を実施した。

1・2・3 区は市道五反地沖線北側に位置し、南北延長約 90m、最大幅約 20m を測る。調査は直営方式により実施し、遺構検出面までの各層は重機により掘削、以降の各層と遺構は人力により掘削した。また、調査に伴う掘削に先立って、業者委託により基準杭を設置し、遺構図面の作成に使用した。各遺構図については、各遺構の状況に応じて、遺構実測支援システムまたは手描きにより実施した。

1・2・3 区ともに、遺構名は原則として検出順に付したが、調査年度や市道をまたいで検出し、調査時には異なる番号を付した遺構で、整理作業の過程で同一遺構と考えた遺構については、遺構番号の統一を行なっている。統一後の遺構番号は第 1 表のとおりである。（益崎）

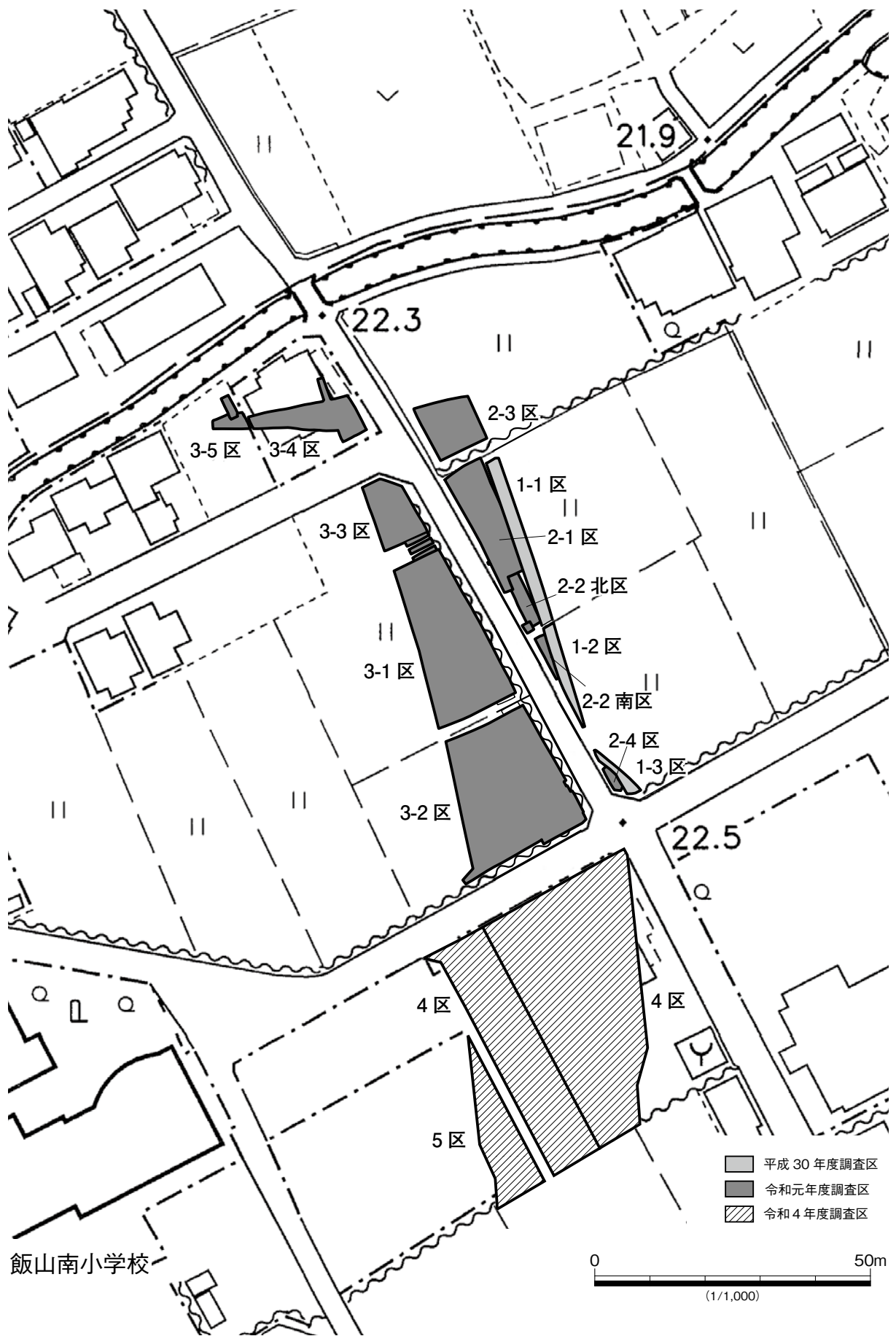
4・5 区の調査対象地は、南北延長約 45 m、最大幅約 35 m であり、調査区西部を水路が南北に横断する。調査区は、第 4 図に示すように水路より東側を 4 区、西側を 5 区と大きく区分し、調査段階でさらに小区画に分割して調査を実施した。調査前は飯山南コミュニティセンター及び駐車場として使用されていた。

調査は直営方式により実施し、基本的に遺構検出面までは重機により掘削し、それ以下は人力にて掘り下げを行った。また、測量に要する基準杭は、業者に委託して設置した。包含層等の遺物は調査小区が狭小であるため、特にグリット設定は行わず、必要と認められた遺物については、トータルステーションで出土位置を測量、記録し、出土状況を写真撮影するなどして取り上げた。

遺構名は、調査時には検出順に付したが、本書を作成するにあたり、すべて新たな番号を付して統一した。（溝上）

第 1 表 統一した遺構番号の一覧

報告書遺構名		変更した遺構名		報告箇所
区	遺構名	区	変更前の遺構名	
3-2 区	SD3022	1-3 区	SD1017	第 3 節 -1
3-3 区	SD3054	2-3 区 1-1 区	SD2004 SD1015	第 3 節 -1
3-2 区	SR3004	1-3 区 3-2 区	SR1002 SX3007	第 3 節 -1
1-1 区	SD1006	3-1 区	SD3038	第 3 節 -2
3-2 区	SD3019	1-3 区	SD1014	第 3 節 -2
3-1 区	SD3039	1-1 区	SD1011	第 3 節 -2
3-1 区	SD3040	1-2 区 2-2 区	SD1012	第 3 節 -2
3-1 区 3-2 区	SR3001	1-2 区	SR1001	第 3 節 -2
1-1 区	SD1001	3-3 区	SD3046	第 3 節 -3
3-2 区	SD3005	3-1 区	SD3031	第 3 節 -3
3-2 区	SD3014	1-3 区 2-4 区	SD1013	第 3 節 -3
3-2 区南 拡張部	SD3023	1-3 区	SD1018	第 3 節 -3



第4図 調査区配置図

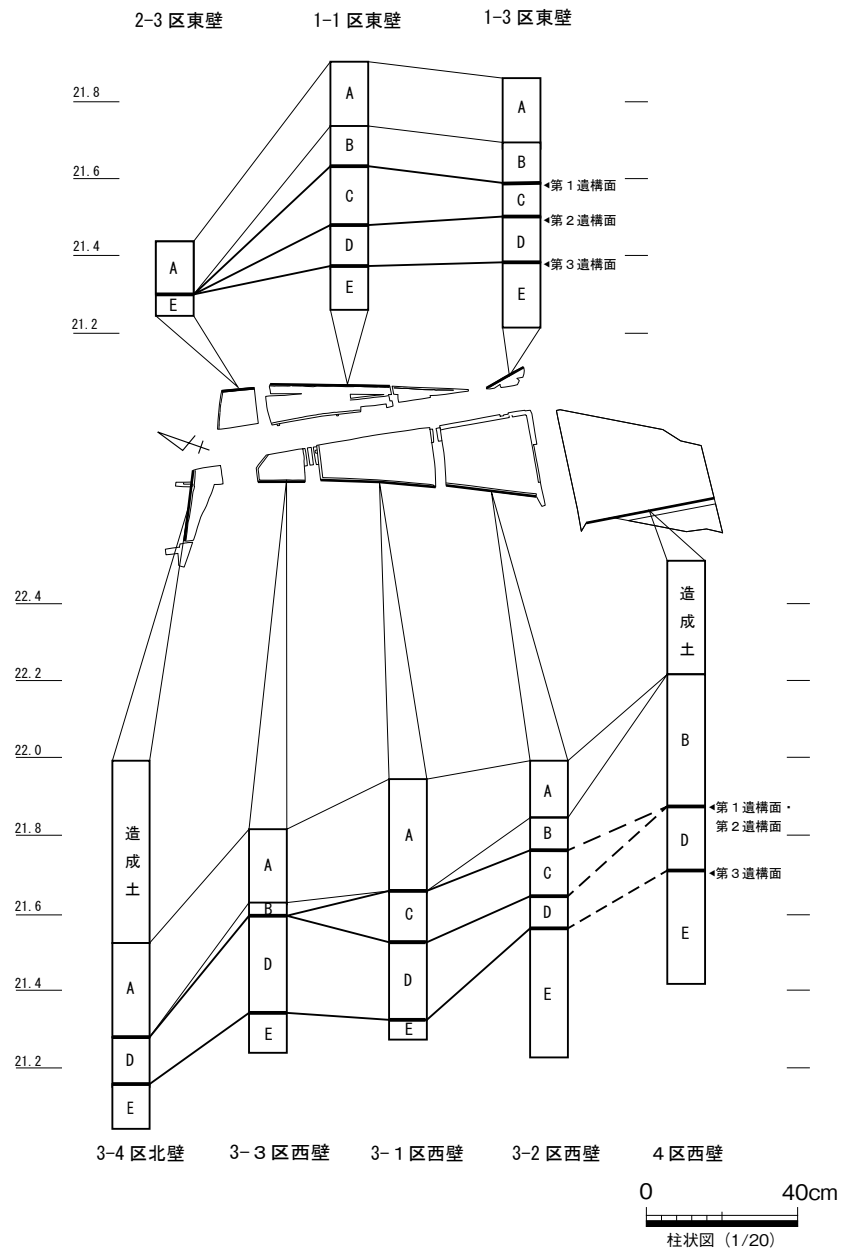
## 第2節 基本層序

対象地内の土層は、調査区ごとに土色・土質にわずかな差異はあるものの、概ね A～E 層に大別できる(第5図)。

A 層は、現代の水田耕作に伴う耕作土である。A 層上面の標高は、3-4区・4区・5区では造成により上面が削平された可能性もあるが、南西から北東方向に緩やかに傾斜する様子が認められる。

B 層は、A 層直下に認められる水平堆積層で、旧耕作土と考えられる。調査区により、2～3層に細分できる。重機掘削中に近世後半期の遺物を包含することを確認しており、同時期以降の堆積と理解した。

C 層は、調査地中央部の 1-1～1-3区、3-1～3-2区で認められる黄褐色～褐灰色系の砂質シルト～シルト質細砂層である。上面で古墳時代～近世後半期までの遺構が検出でき、第1遺構面として調査を実施した。検出した中世後半期～近世前半期と推定される柱穴等の大半が残存深 10cm 前後と極めて浅く、



第5図 基本土層模式図

近世後半期以降の耕地化に伴い、上部が削奪された可能性が高い。3-3区以北および4・5区では堆積を確認できないものの、上記の削奪により消失した可能性が推定できる。

D層は、C層直下に堆積する黒褐色系粘質シルトである。上面で溝2条を検出したことから、第2遺構面として調査を実施した。2-3区を除く全ての調査区で10～30cmの堆積を確認できる。上下の第1遺構面・第3遺構面で検出した遺構の出土遺物より、弥生時代後期～古墳時代前期の間に形成された堆積層と理解できるが、D層上面で検出した遺構に遺物は認められず、詳細な形成年代の絞り込みは困難である。

E層は、D層下位に堆積する黄褐色系粘質シルト～細砂で、上面で溝・自然河川を検出したことから、第3遺構面として調査を実施した。3-2区で検出したSR3004埋土最上層より弥生時代後期の甕体部片が出土しており、同時期以前に形成されたものと推定できる。なお、本遺構面より下位の土層については、各調査区においてトレンチ等で確認したものの、遺構・遺物は確認できなかった。

以下各調査区の土層堆積状況について詳述する。(益崎)

## 2-3区 (第6図)

調査前は水田等の耕作地として利用されていた。現地表面の標高は21.6m前後である。調査区壁面東・北・西の3面において、層序の記録を作成した。

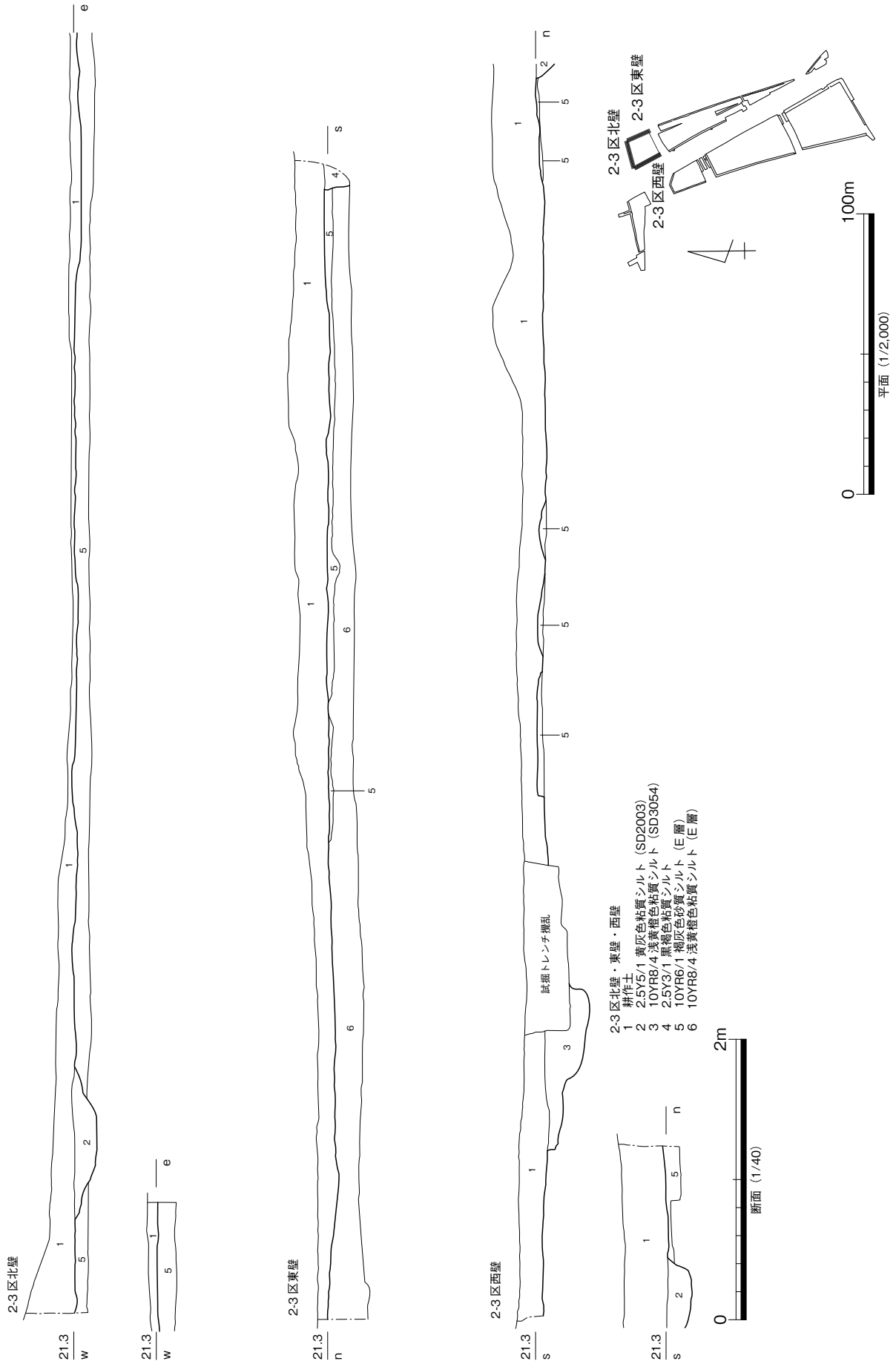
本区では、現耕作土(A層)直下に、褐灰色砂質シルト(E層)が堆積していた。溝や柱穴等の遺構が検出されたため、第1遺構面として調査を実施した。遺構面の標高は21.3m前後で一定し、遺構面上に旧耕作土層等の堆積が認められなかったことから、近年の地下げ等により、遺構面上面が強い削奪を被っていると判断した。また、遺構面の標高値は、後述する南に隣接する1-1区・2-1区の第3遺構面の標高とほぼ等しく、おそらく南に隣接する各調査区で確認された第1・2遺構面は、本区では削奪された可能性が高いと判断される。(蔵本)

## 1-1・2-1・2-2北区 (第7～9図)

調査前は水田等の耕作地として利用されていた。現地表面の標高は、21.95m前後である。本調査区では、1-1区北・東壁、2-1区北・西壁、2-2北区西・南壁の各壁面において、基本層序の記録を作成した。

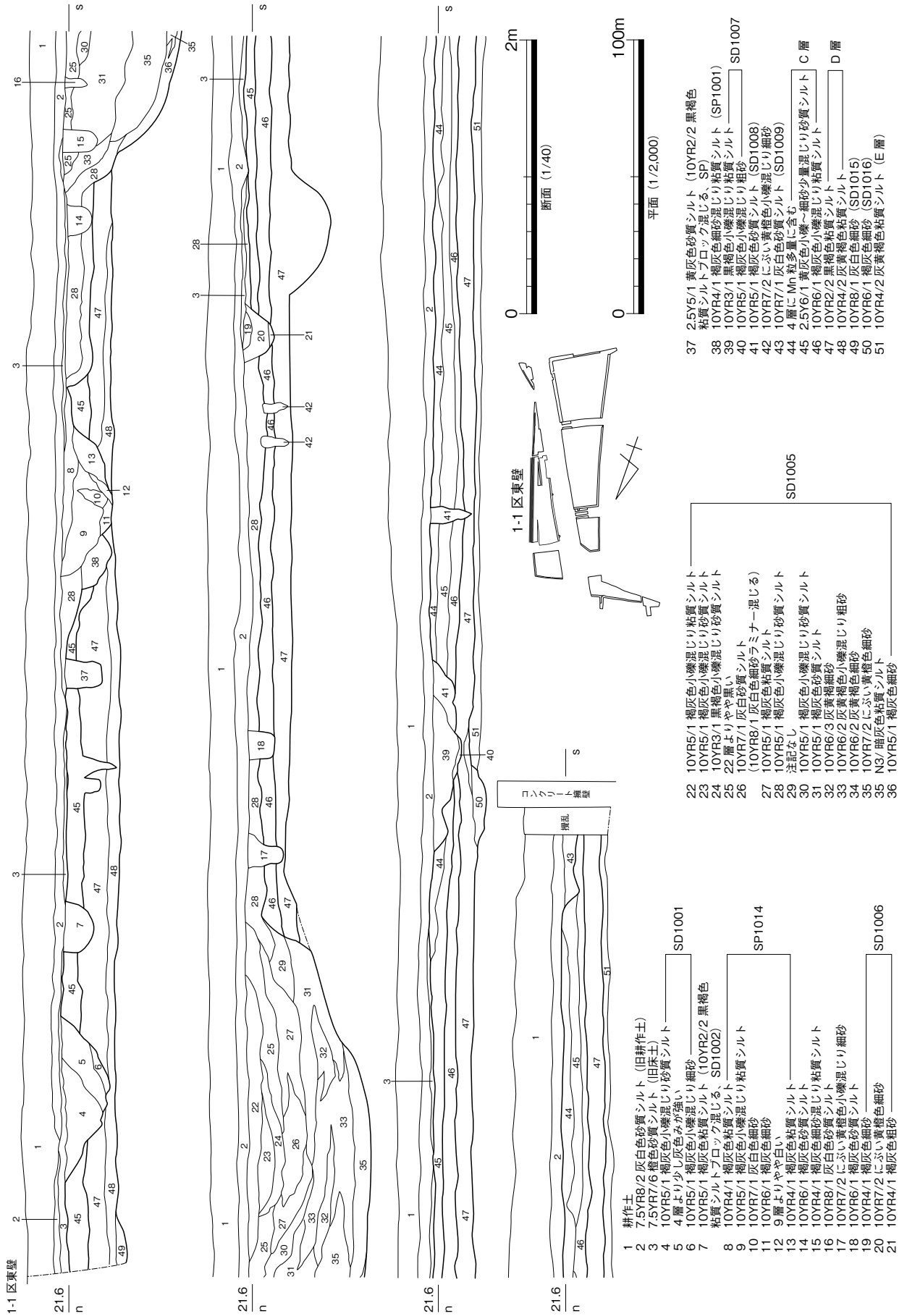
本区では、現耕作土(A層)下で、最大2層に細分される旧耕作土とみられる水平堆積層(B層)が認められた。それら旧耕作土層からの出土遺物に近世後半以降に位置付けられる遺物が認められることから、近世後半～近代の耕作土層と考えられる。旧耕作土層(B層)直下には、黄灰色砂質シルト(C層:第7図1-1区44・45層)やにぶい黄橙色砂質シルト(C層:第8図2-1区16層)、褐灰色粘質シルト(同図2-1区17層)等が水平に堆積しており、溝等の遺構が検出されたことから、第1遺構面として調査を実施した。遺構面上面には、若干の起伏が認められるものの、標高21.65m前後で概ね一定しており、上面に堆積していた旧耕作土層の存在からも、本遺構面も近世以降の耕地化により、顕著な削奪を被っている可能性が高い。

第1遺構面のベースとなる黄灰色砂質シルト等を掘り下げると、黒褐色粘質シルト(D層:第7図1-1区47層、第8図2-1区19層)上面で、溝SD2001を検出した。検出した遺構はSD2001のみであるが、本遺構面を第2遺構面として調査を実施した。本遺構面上面も若干の起伏が認められるものの、その標高は概ね21.5m前後で一定している。検出された遺構の残存深は浅く、本遺構面上面も人為的に削奪・

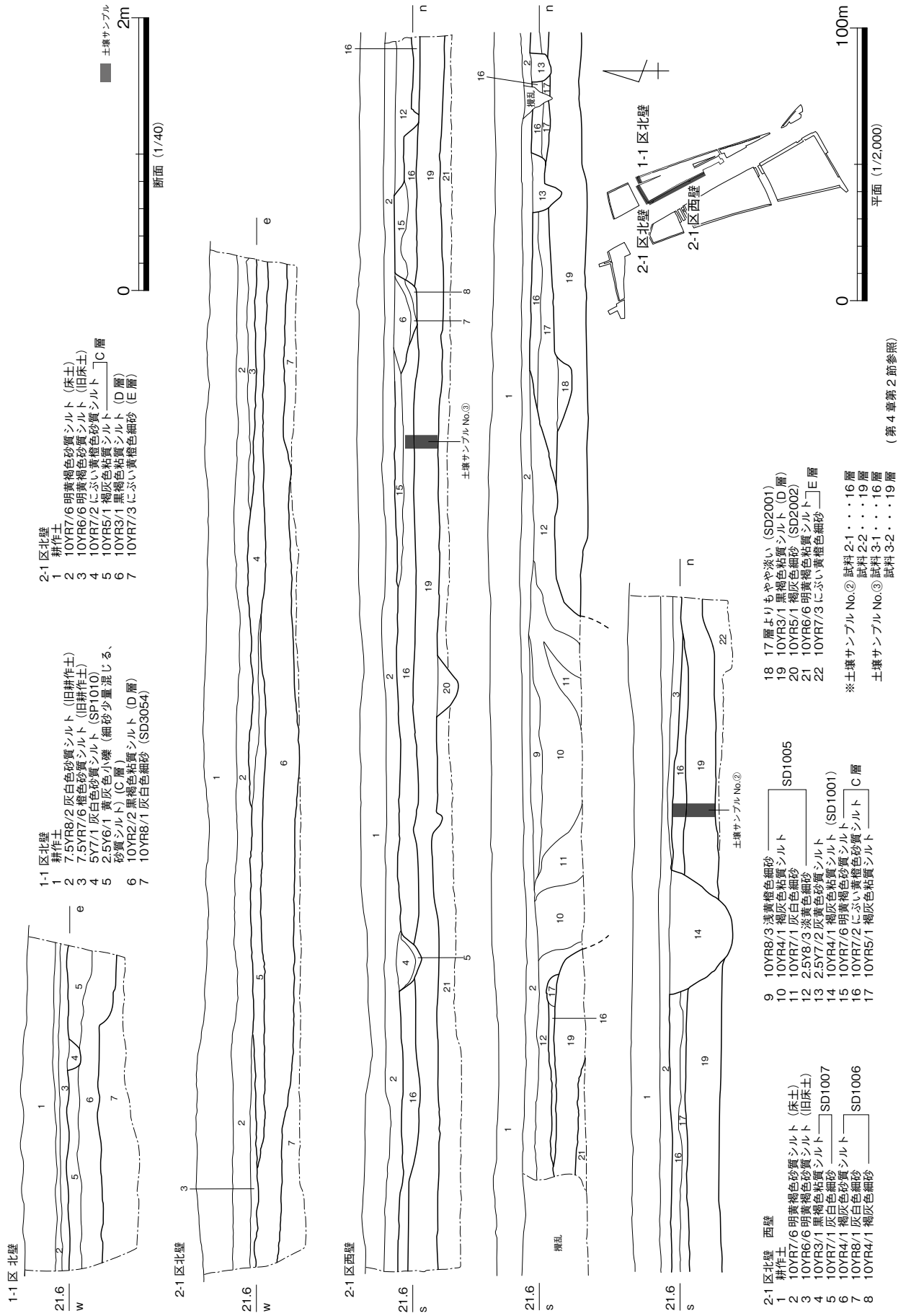


第6図 2-3区北壁・東壁・西壁土層断面図

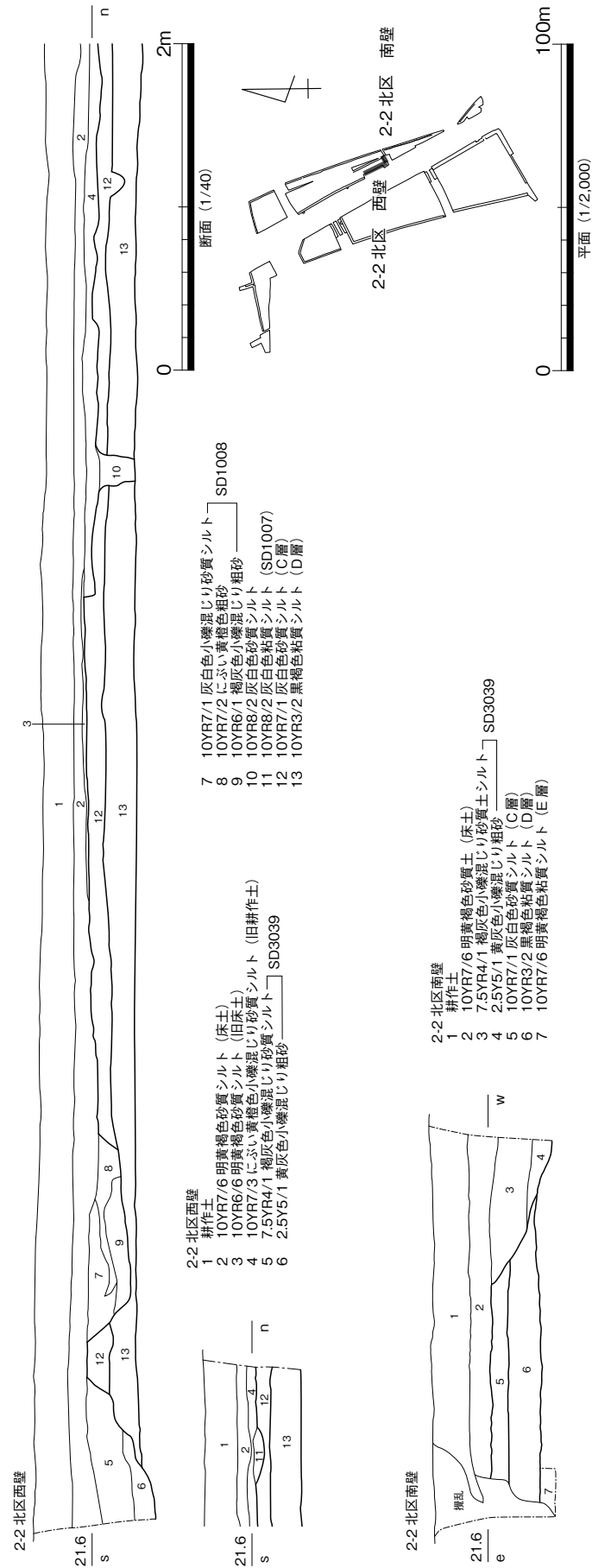




第7図 1-1 区東壁土層断面図



第8図 1-1 区北壁、2-1 区北壁・西壁土層断面図



第9図 2-2 北区西壁・南壁土層断面図

平坦化され、上面に堆積した第1遺構面のベース層を耕作土として、水田等として利用された可能性が考えられる。

第2遺構面のベースとなる黒褐色粘質シルトを掘り下げると、黄褐色系粘質シルト（E層：第7図1-1区51層・第8図2-1区21層）やにぶい黄橙色細砂（同図22層）上面で、溝SD3054やSD1016等の遺構を検出したことから、本遺構面を第3遺構面とした調査を行った。本遺構面より下位の各層から遺物は出土しておらず、遺構も確認されなかったことから、本遺構面が最終遺構面となる。本遺構面の標高は、調査区北端で21.25m前後、南端で21.35m前後をそれぞれ測り、緩やかに北へ傾斜して検出された。（蔵本）

### 1-2・1-3・2-2 南区（第10・11図）

本調査区も調査前は水田等の耕作地として利用されていた。現地表面の標高は、21.85m前後であった。本調査区では、1-2区東壁、1-3区東・南壁、2-2南区西壁の各壁面で、層序の記録を作成した。

本区でも、現耕作土（A層）下で、最大2層に細分される旧耕作土とみられる水平堆積層（B層）が認められた。おそらく上述した1-1区等の堆積層と同質であることから、近世後半期以降の耕作土層と考えられる。旧耕作土層下には、褐灰色砂質シルト（C層：第10図1-2区42層・第11図1-3区10層）が堆積し、その上面で溝SD3039・SD3040・SD3014等や自然河川SR3001を検出したことから、本遺構面を第1遺構面として調査を実施した。SD3039は上述した2-2北区（南拡張部）第1遺構面へ延長し、遺構面として連続することが確認された。遺構面上面には、若干の起伏が認められるものの、標高21.6m前後で概ね一定しており、本遺構面も耕地化による削奪を顕著に被っている可能性が高い。

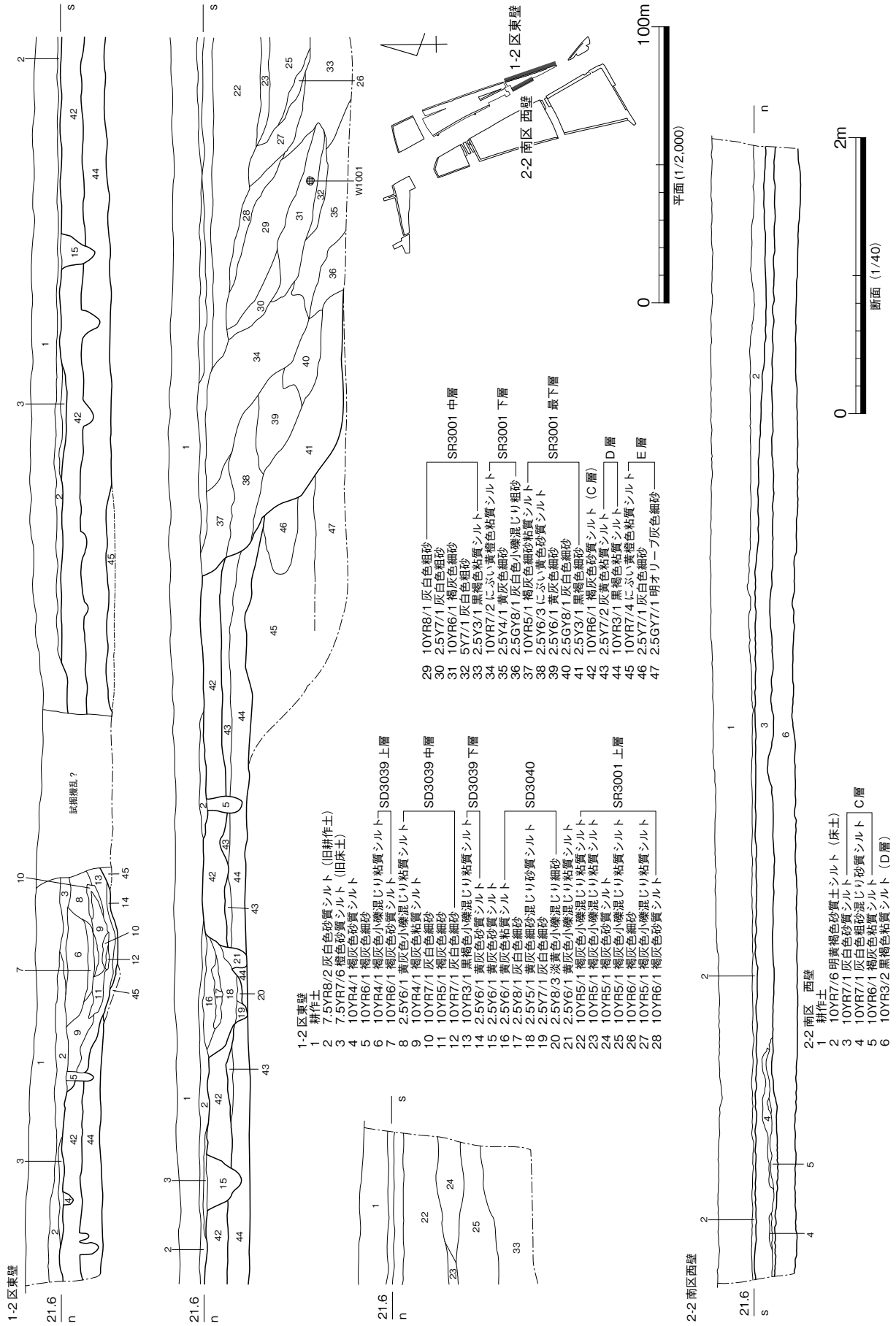
第1遺構面のベースとなる褐灰色砂質シルト層を掘り下げると、上述した1-1区等より連続する黒褐色粘質シルト（D層：第10図1-2区44層・第11図1-3区11層）や灰黄色粘質シルト（D層：第10図1-2区43層）の水平堆積が確認された。検出レベルや堆積層より、本層上面が1-1区等の第2遺構面に連続することから、本区においても第2遺構面として調査を実施したが、明確な遺構は確認できなかった。また、当該遺構面上面には、若干の起伏が認められるものの、標高は21.45m前後で一定しており、1-1区等同様、耕地化に伴い上面が平坦に削奪された可能性が考えられる。

第2遺構面のベースとなる黒褐色粘質シルト等を掘り下げると、黄色系粘質シルト（E層：第10図1-2区45層・第11図1-3区21層）の上面で溝SD3022や自然河川SR3004を検出したことから、本遺構面を第3遺構面として調査を行った。ベース層や後述する遺構面の標高が近似することから、上述した1-1区等の第3遺構面に相当する遺構面と判断する。本遺構面の標高は、1-2区北端で21.3m前後、1-3区南端で21.4m前後をそれぞれ測り、上述した1-1区等と同様に緩やかに北へ傾斜する。（蔵本）

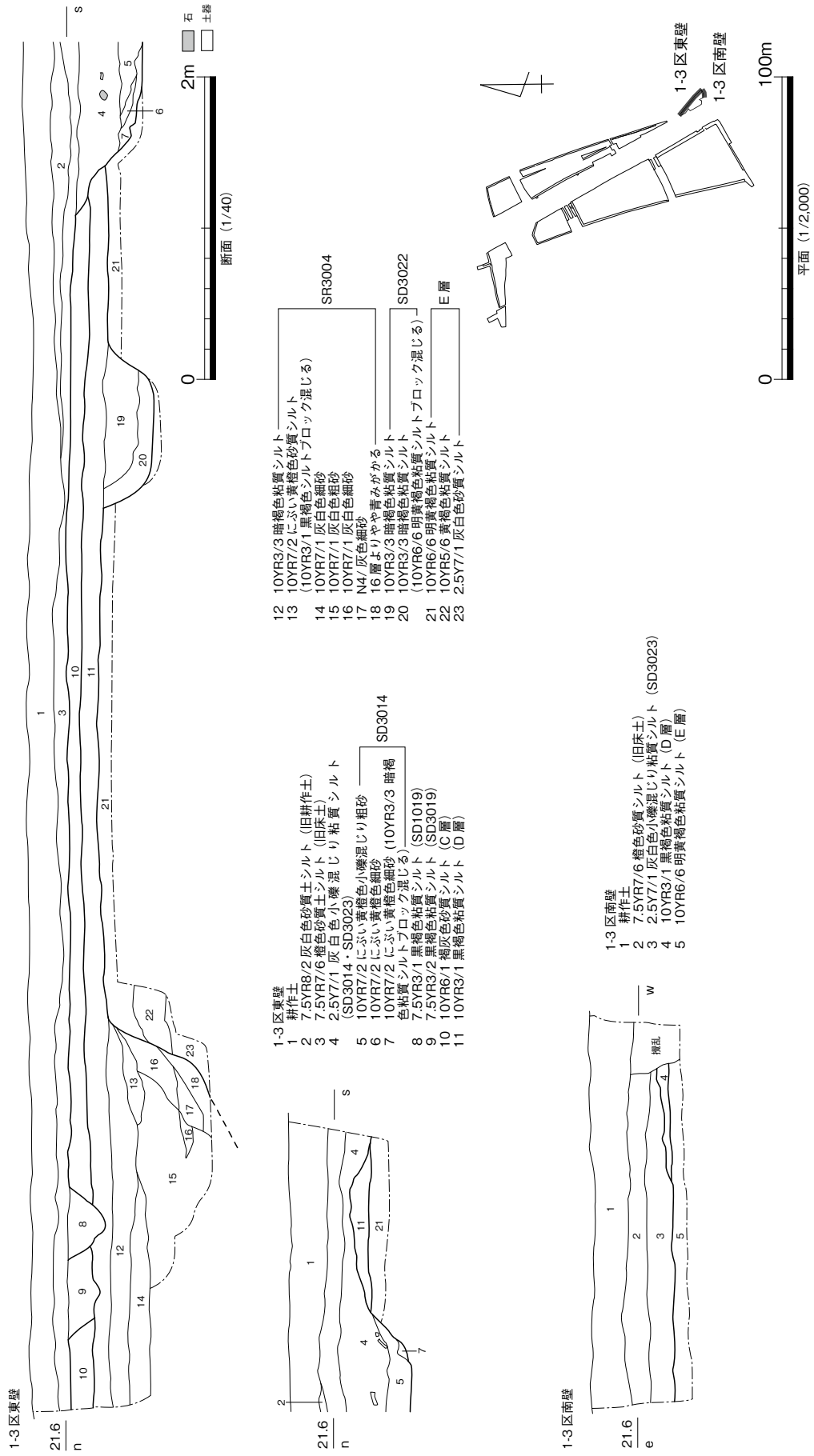
### 3-4・3-5区（第12～14図）

調査前は水田等の耕作地として利用されていた。現地表面の標高は21.92m前後である。本調査区では、3-4区北壁・東壁、3-4区北側拡張部東壁、3-5区南壁・西壁、3-5区北側拡張部東壁の各壁面において、層序の記録を作成した。

3-4区では、花崗土（1層）下に4層に細分される旧耕作土や盛り土とみられる水平堆積（B層：第13図3-4区北壁2～5層、第14図3-4区北側拡張部東壁3～6層）、3-5区では現耕作土（A層）下で、旧耕作土層とみられる水平堆積（B層：第12図3-5区南壁2層）が認められた。この旧耕作土層直下で黒



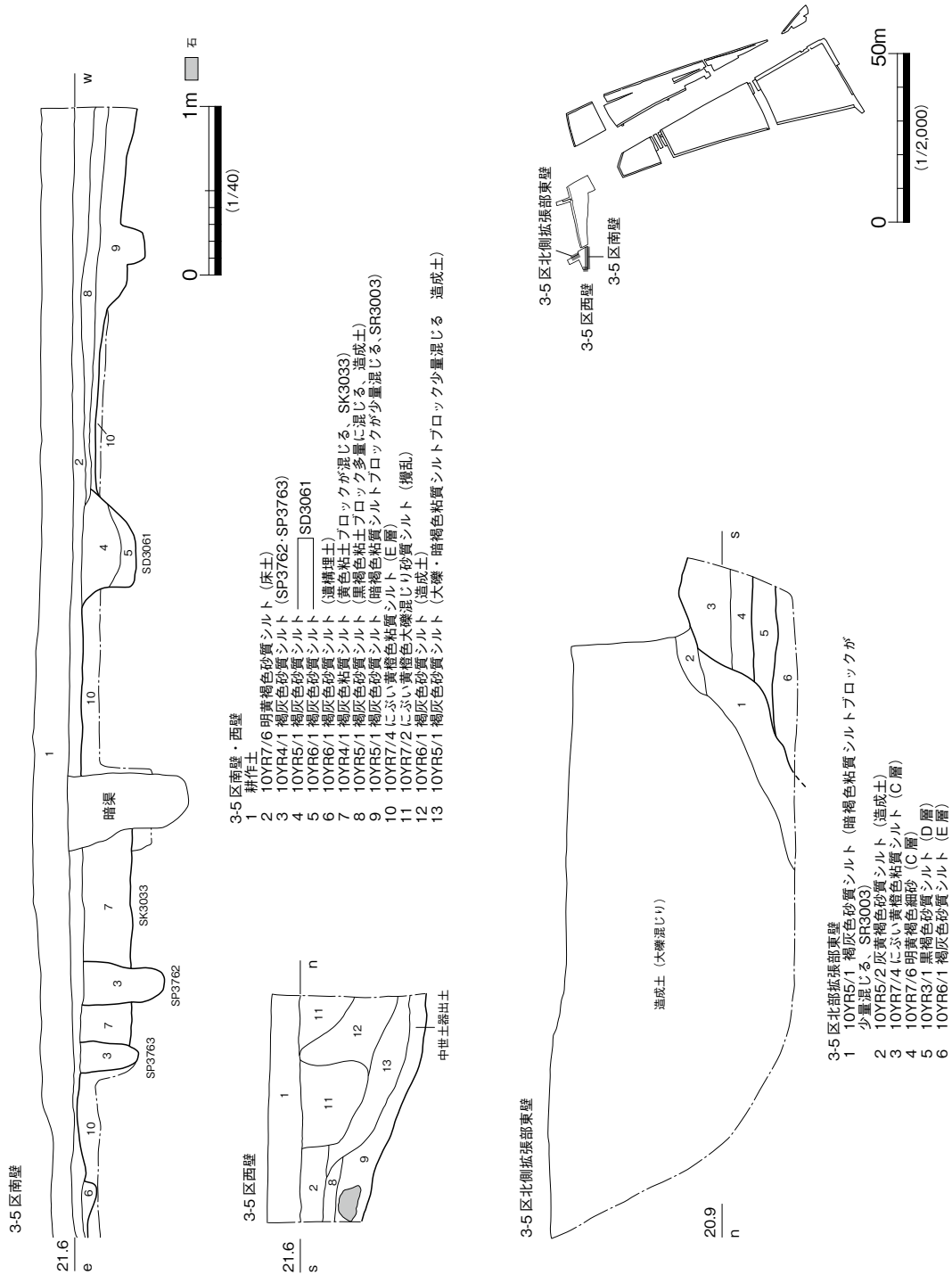
第10図 1-2区東壁、2-2南区西壁土層断面図



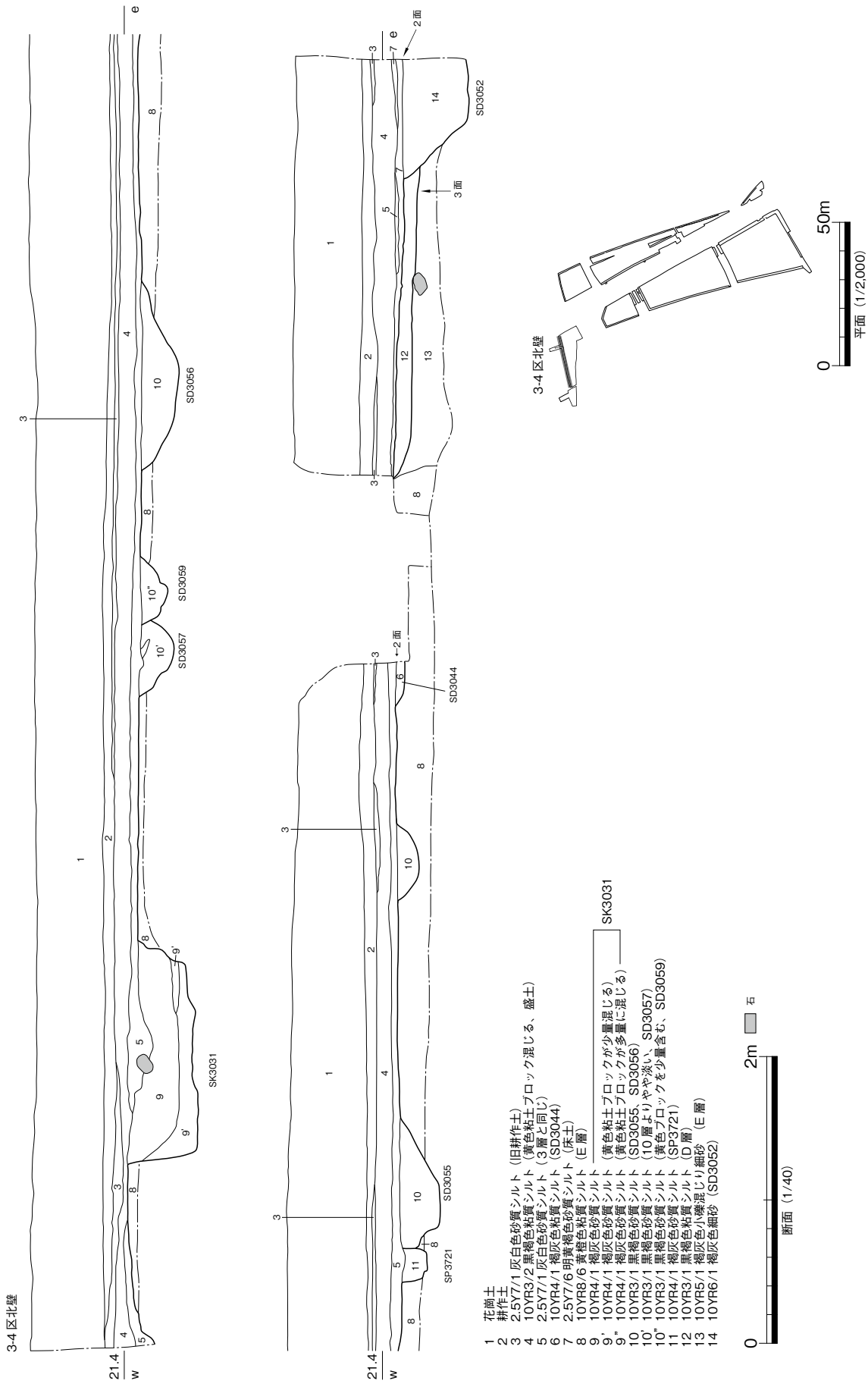
第 11 図 1-3 区東壁・南壁土層断面図

褐色粘質シルト(D層:第14図3-4区東壁9層、第13図3-4区北壁12層)が水平に堆積しており、溝等の遺構が検出されたため、第1遺構面として調査を実施した。遺構面上面には、若干の起伏が認められるものの、標高21.4m前後で概ね一定している。3-4区の大部分で黄橙色粘質シルト(E層:第13図3-4区北壁8層)、3-5区でいふ黄橙色粘質シルト(E層:第12図3-5区南壁・西壁10層)が検出されており、上面に堆積していた旧耕作土層の存在からも、本遺構面も近世以降の耕地化により、顕著な削奪を被っている可能性が非常に高い。

第1遺構面のベースとなる黒褐色粘質シルトや黄橙色粘質シルト、にふい黄橙色粘質シルトを掘り下

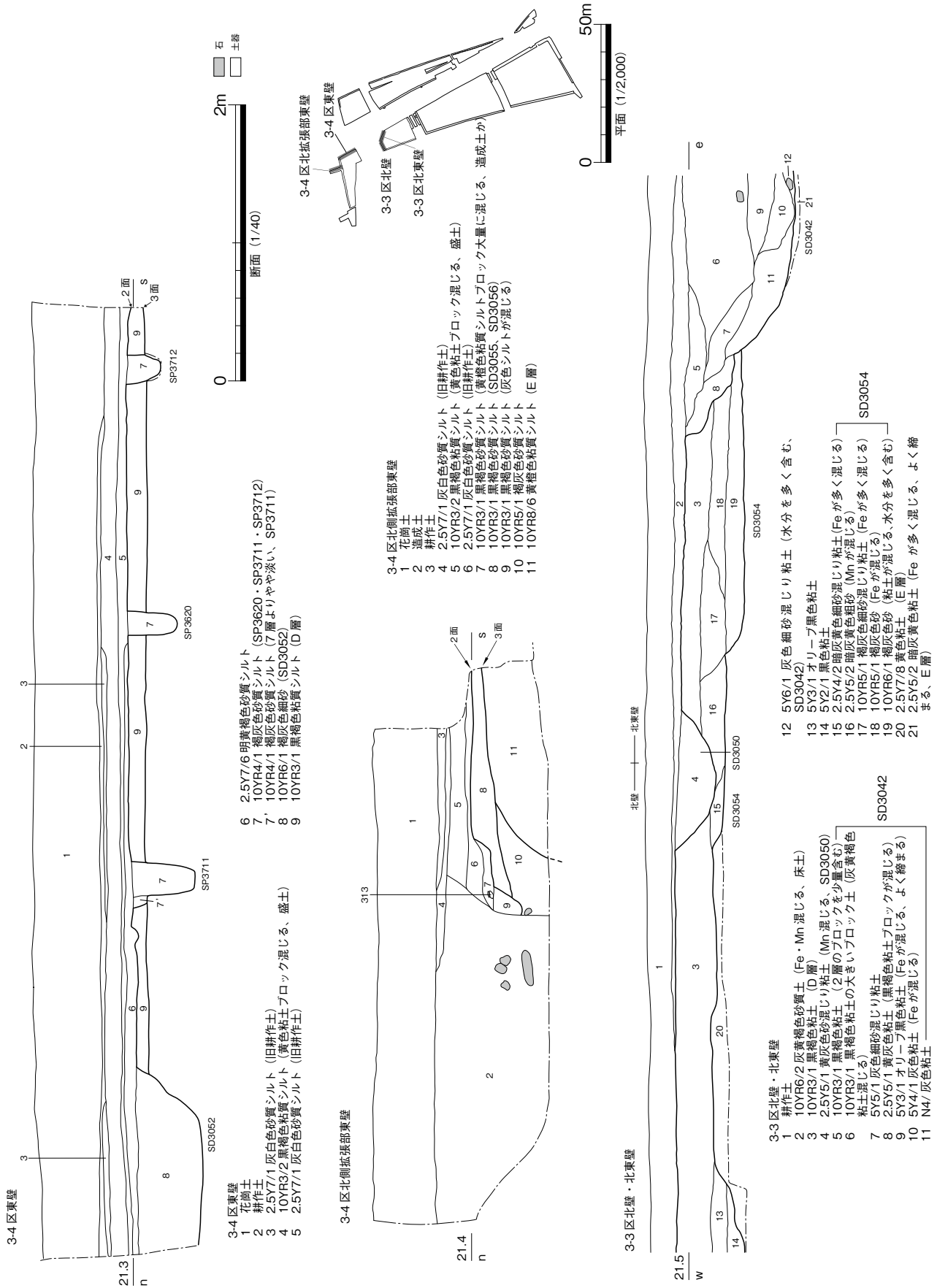


第12図 3-5区南壁・西壁・北側拡張部東壁土層断面図



第13図 3-4区北壁土層断面図





第 14 図 3-4 区東壁・北側拡張部東壁、3-3 区北壁・北東壁土層断面図

げると、褐灰色小礫混じり細砂(E層:第13図3-4区北壁13層)が堆積していた。検出レベルより、本層面が1-1区等の第2遺構面に連続することから、3-4区においても第2遺構面として調査を実施したが、明確な遺構は確認できなかった。本遺構面の標高は、調査区北端で21.31m前後、南端で21.29m前後をそれぞれ測り、ほぼ平坦ながらも若干南へ傾斜して検出された。(溝上)

### 3-3区 (第14・15図)

調査前は水田等の耕作地として利用されていた。現地表面の標高は21.79m前後である。本調査区では、調査区東、北東、北、西の各壁面において、層序の記録を作成した。

本区では、現耕作土(A層)下で最大2層に細分される旧耕作土とみられる水平堆積層(B層:第15図3-3区東壁2・3層、第14図3-3区北・北東壁2層、第15図3-3区西壁2層)が認められた。これらの旧耕作土層直下で、黒褐色粘土層(D層:第15図3-3区東壁15層、第14図3-3区北・北東壁3層、第15図3-3区西壁3層)が水平に堆積しており、溝等の遺構が検出されたため、第1遺構面として調査を実施した。遺構面上面には若干の起伏が認められるものの、標高21.56m前後で概ね一定しており、上面に堆積していた旧耕作土層の存在からも、本遺構面も近世以降の耕地化により、顕著な削奪を被っている可能性が高い。

第1遺構面のベースとなる黒色粘土を掘り下げると、黄色粘土(E層:第15図3-3区東壁20層、第14図3-3区北・北東壁20層)、灰白色粘土(第15図3-3区西壁5層)上面で、土坑SK3030、溝SD3054を検出した。検出した遺構はSK3030、SD3054のみであるが、本遺構面を第2遺構面として調査を行った。なお本遺構面のベースは1-1区等の第3遺構面のベースと同等のものである。本遺構面の標高は、調査区北端で21.2m前後、南端で21.23m前後をそれぞれ測り、ほぼ平坦な状態で検出された。(溝上)

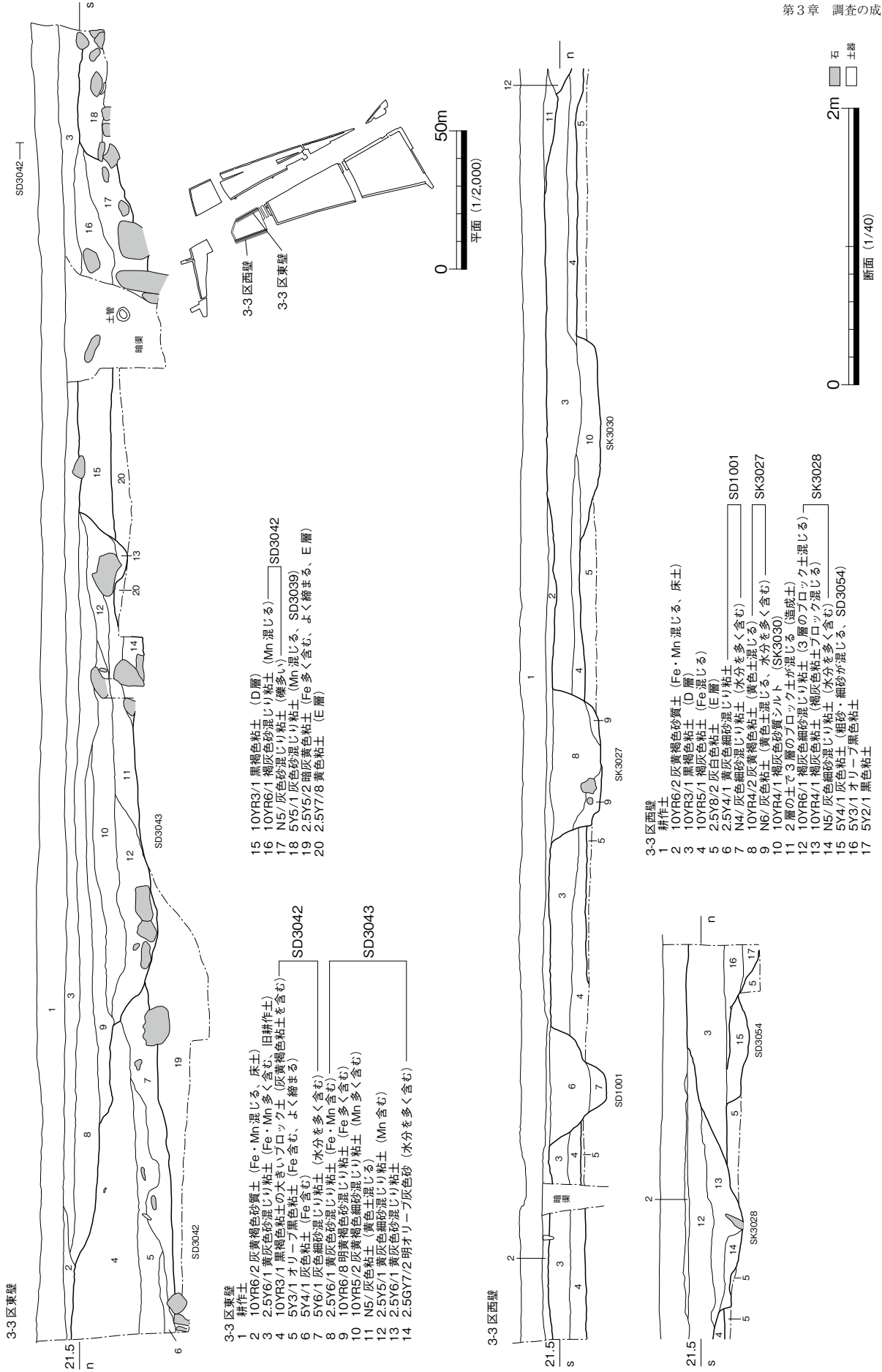
### 3-1区 (第16～18図)

調査前は水田等の耕作地として利用されていた。現地表面の標高は21.97m前後である。本調査区では、調査区東・北・西、3-1区北側拡張区北・南・西の各壁面において、基本層序を記録した。

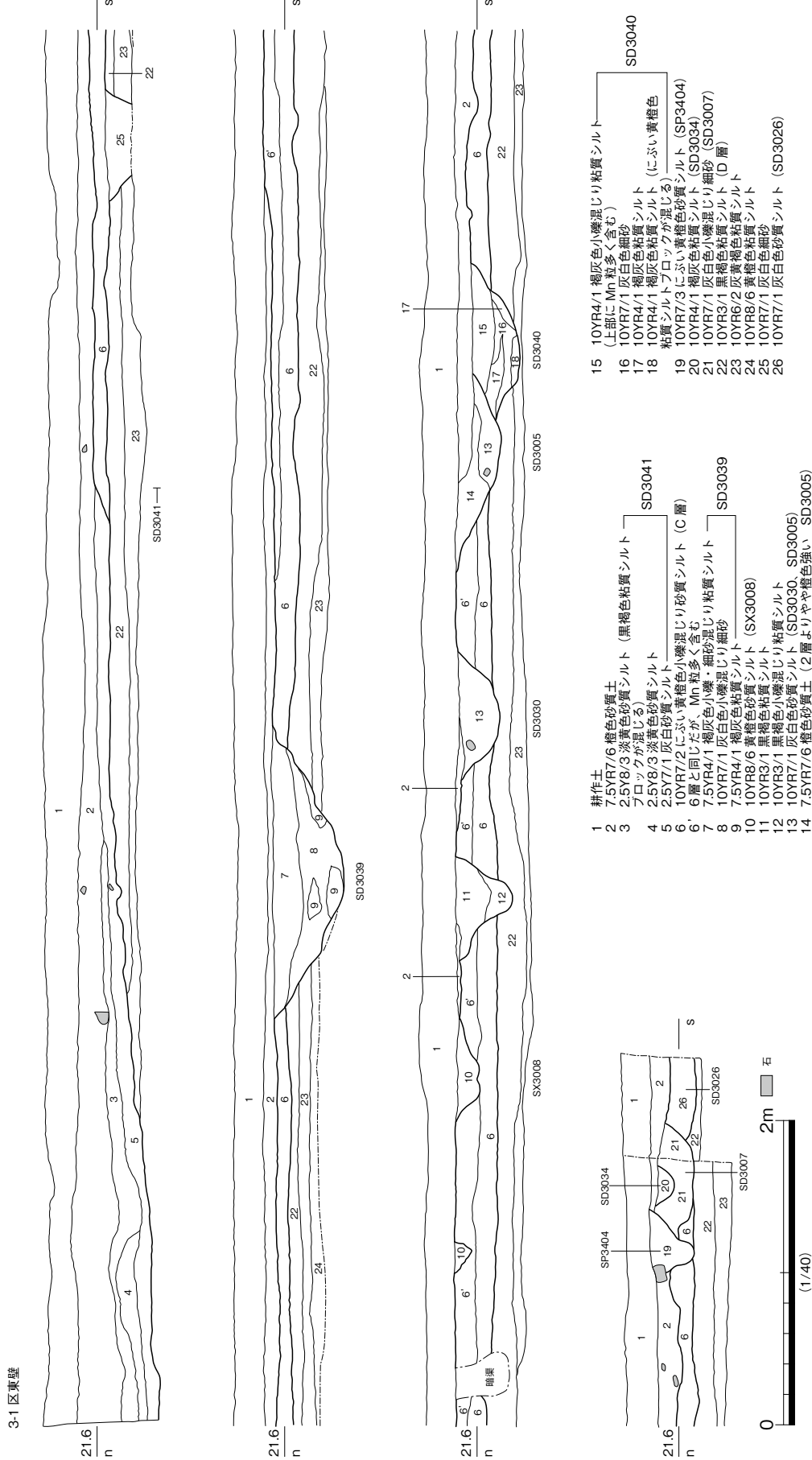
本区では、現耕作土(A層)直下になぶい黄橙色小礫混じり砂質シルト(C層:第16図3-1区東壁6層)、褐灰色小礫混じり粘質シルト(C層:第18図3-1区北壁20層)、浅黄色砂質シルト(C層:第17図3-1区西壁10層)が水平に堆積しており、溝や性格不明遺構、自然河川が検出されたため、第1遺構面として調査を実施した。遺構上面には、若干の起伏が認められるものの、標高21.67m前後で概ね一定しており、上面に堆積していた旧耕作土の存在からも、本遺構面も近世以降の耕地化により、顕著な削奪を被っている可能性が高い。

第1遺構面のベースとなるになぶい黄橙色小礫混じり砂質シルト等を掘り下げると、黒褐色粘質シルト(D層:第16図3-1区東壁22層、第18図3-1区北壁22層、第17図3-1区西壁11層)の水平堆積が確認された。検出レベルや堆積層より、本層上面が1-1区等の第2遺構面に連続することから、本区においても調査を実施したが、明確な遺構は確認できなかった。

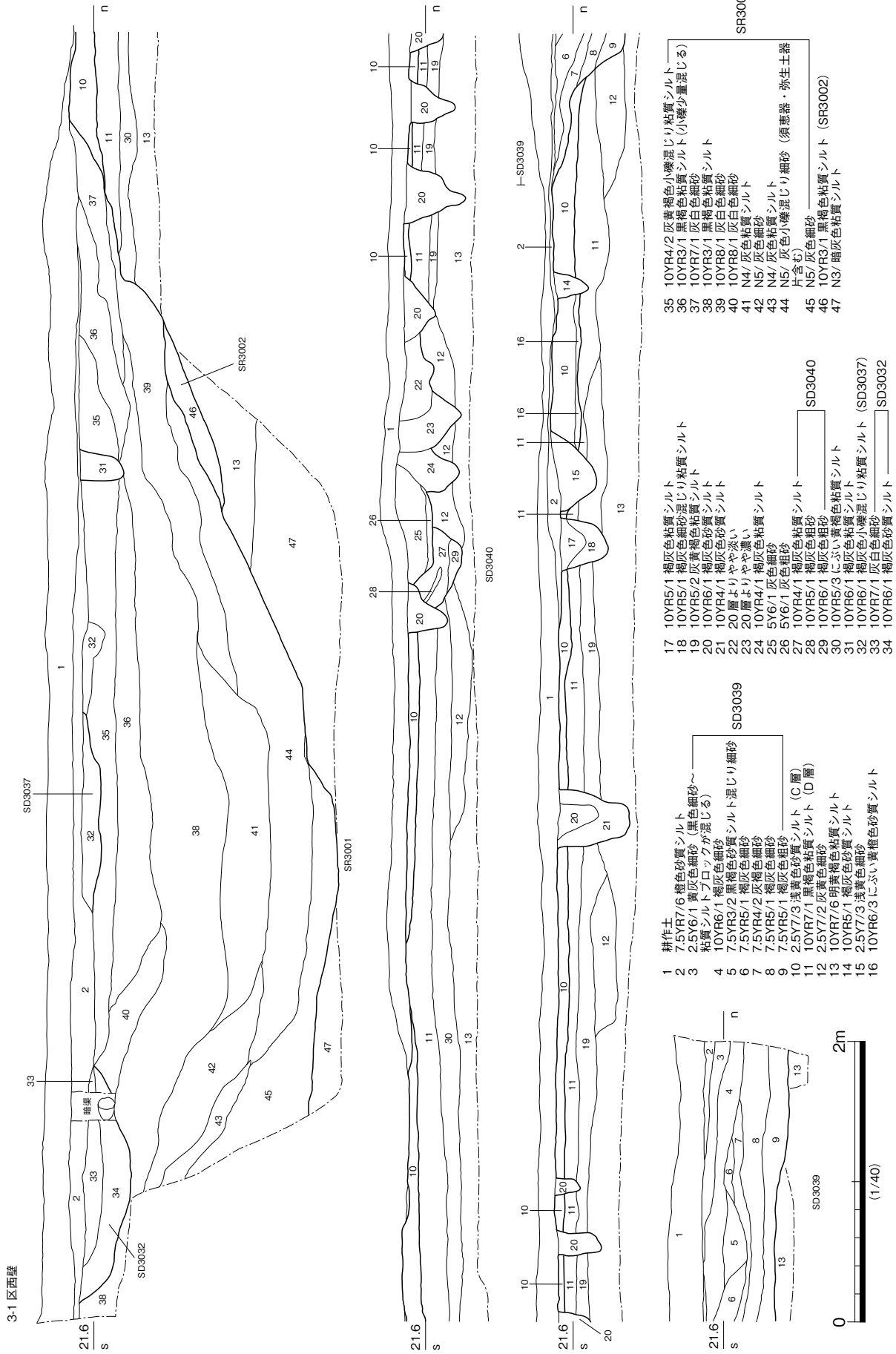
本遺構面の標高は、調査区北端で21.5m前後、南端で21.47m前後をそれぞれ測り、緩やかに南に傾斜して検出された。(溝上)



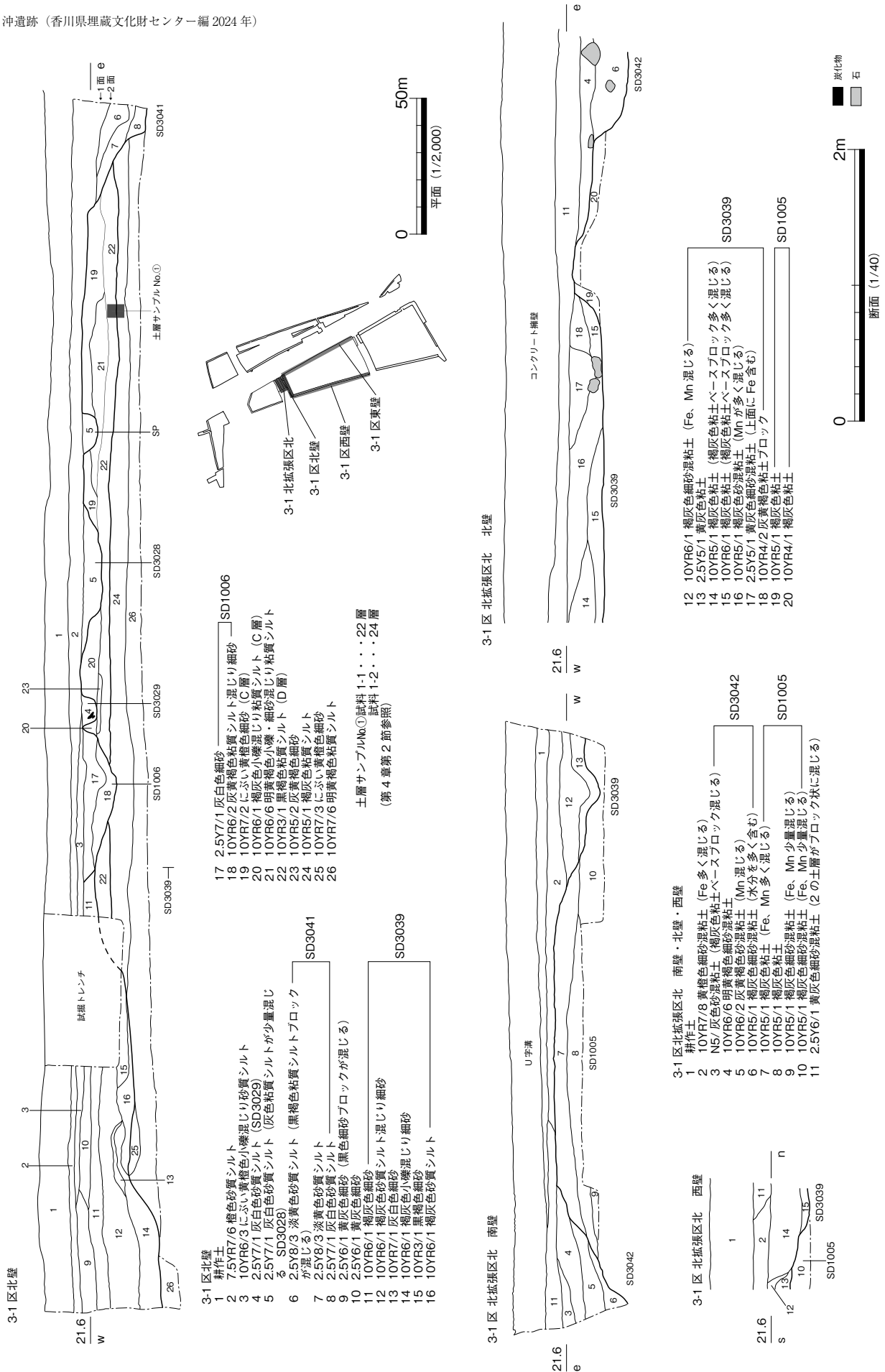
第15図 3-3 区東壁・西壁土層断面図



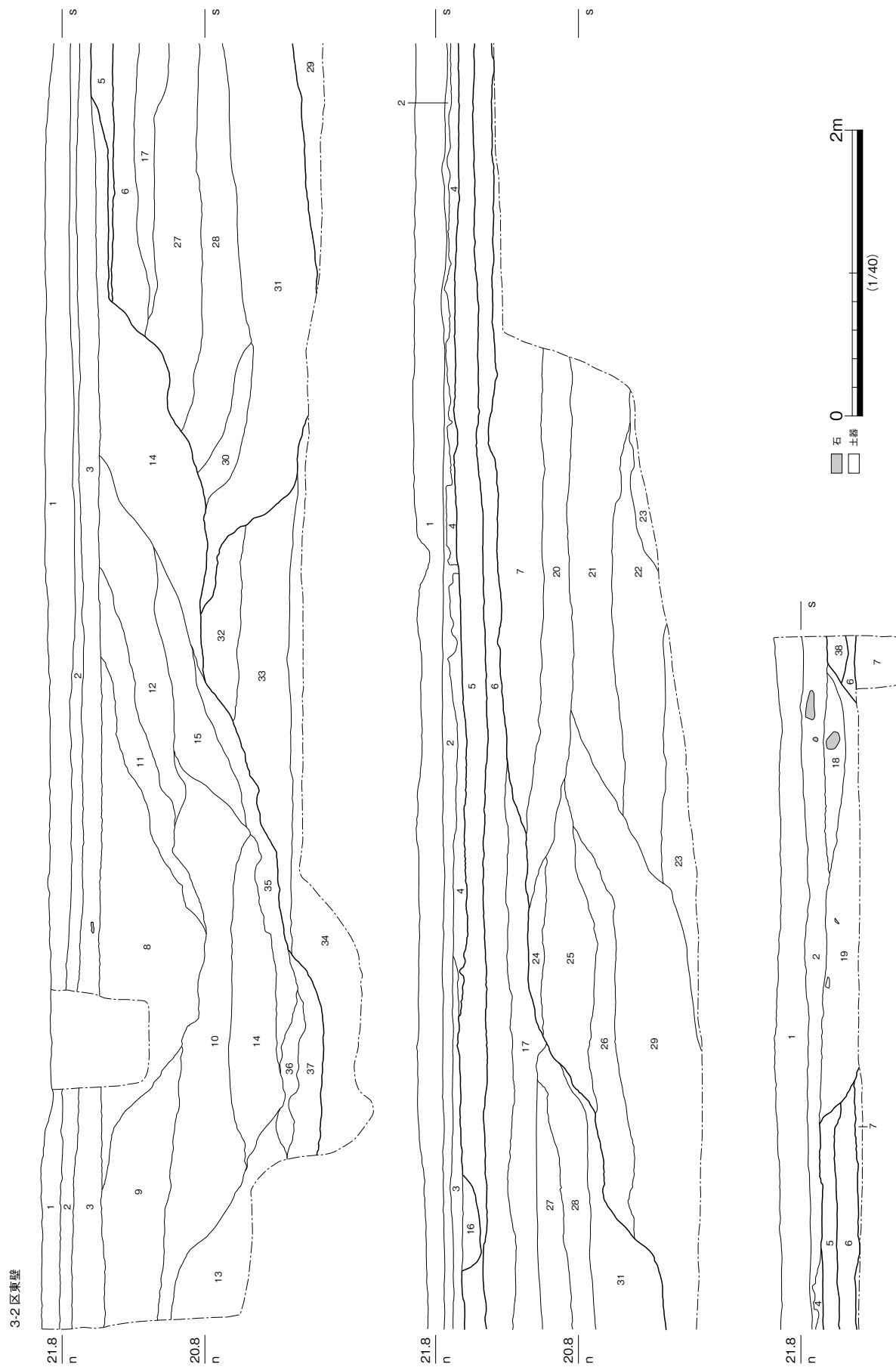
第16図 3-1 区東壁土層断面図



第17図 3-1 区西壁土層断面図

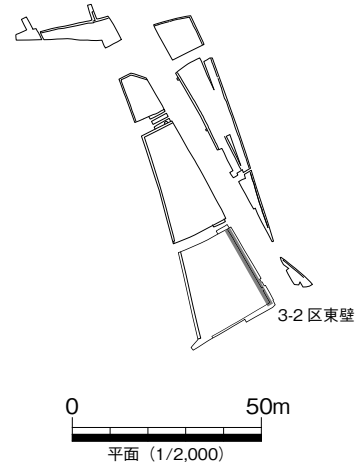


第 18 図 3-1 区北壁、3-1 北拡張区北 南壁・北壁・西壁土層断面図



第19図 3-2区東壁土層断面図

- 3-2 区東壁
- 1 2.5Y4/1 灰色シルト～細砂（現代耕作土）
  - 2 10YR7/1 灰白シルト（Fe・Mn 斑紋、床土、南壁 2 層に対応）
  - 3 2.5Y7/2 灰黄色シルト混じり細砂（Fe・Mn 斑紋、白色中砂を少量含む、SD3026）
  - 4 10YR5/1 褐灰色シルト～極細砂（Mn 斑紋、白色中粒砂を少量含む）
  - 5 10YR6/1 褐灰色シルト混じり極細砂～細砂（Fe・Mn 斑紋、C 層、南壁 5 層に対応）
  - 6 10YR4/1 褐灰色シルト（白色細砂粒を少量含む、D 層、南壁 8 層に対応）
  - 7 2.5Y6/3 オリーブ黄色細砂混じりシルト（南壁 9 層に対応）
  - 8 10YR6/1 褐灰色シルト混じり極細砂（黄褐色シルトをラミナ状に含む、SR3001 上層）
  - 9 2.5Y7/2 灰白色細砂（Fe・Mn 斑紋、灰色極細砂をラミナ状に含む、SR3001 中層、南壁 8 層に対応）
  - 10 10YR3/1 黒褐色シルト～極細砂（灰色細砂をラミナ状に含む、SR3001 中層）
  - 11 10YR4/1 褐灰色シルト～極細砂（灰黄色細砂をラミナ状に含む、SR3001 中層）
  - 12 2.5Y3/1 黒褐色シルト～粘土（自然木の細片をまばらに含む、SR3001 中層）
  - 13 2.5Y3/1 黒褐色シルト～粘土（灰白色極細砂をラミナ状に含む、SR3001 下層）
  - 14 10YR7/1 灰白色細砂～中粒砂（SR3001 中層）
  - 15 2.5Y3/1 黒褐色シルト（SR3001）
  - 16 2.5Y6/1 黄灰色砂質シルト（SD3010）
  - 17 10YR8/2 灰白色細砂～極細砂（黒褐色シルトブロックを含む、SR3004）
  - 18 10YR7/1 灰白色シルト混じり細砂～中粒砂（Fe・Mn、炭化物細片を少量含む、SD3013）
  - 19 10YR6/1 褐灰色シルト混じり極細砂（白色細砂をラミナ状に含む、SD3014 上層）
  - 20 10YR7/3 ぶい黄橙色シルト混じり細砂～極細砂（Fe・Mn 斑紋）
  - 21 5Y6/2 灰オリーブ色細砂（Fe・Mn 斑紋、著しい沸水とクライ化）
  - 22 2.5Y3/1 黒褐色シルト（灰色細砂をラミナ状に含む）
  - 23 10YR2/2 黒褐色シルト
  - 24 10YR4/1 褐灰色シルト混じり極細砂（黄灰色シルトを含む）
  - 25 5Y6/1 灰色シルト混じり細砂～極細砂（炭化物細片を含む）
  - 26 5Y4/1 灰白色シルト混じり細砂～極細砂（黒色シルトをラミナ状に含む）
  - 27 2.5Y6/1 黄灰色シルト混じり極細砂（青灰色細砂をラミナ状に含む、SR3004）
  - 28 2.5Y5/1 黄灰色シルト～細砂（灰色細砂をラミナ状に含む、多量の木片、炭化物を含む、SR3004）
  - 29 2.5Y4/1 黄灰色シルト～細砂（灰色細砂をラミナ状に含む）
  - 30 2.5Y3/1 黒褐色シルト（灰白色細砂をラミナ状に含む、SR3004）
  - 31 2.5Y3/1 黒褐色シルト（灰色細砂～中粒砂をラミナ状に含む、自然木の木片、種子、炭化物を含む、SR3004）
  - 32 5Y6/2 灰オリーブ色細砂（Fe・Mn 斑紋、著しい沸水とクライ化、21 層に対応）
  - 33 2.5Y3/1 黒褐色シルト～細砂（灰色細砂をラミナ状に含む、22 層に対応）
  - 34 10YR2/2 黒褐色シルト（23 層に対応）
  - 35 10YR3/1 黒褐色シルト（32 層由来のシルトブロックをまばらに含む、SR3001 下層）
  - 36 10YR6/1 褐灰色細砂～中粒砂（SR3001 下層）
  - 37 2.5Y4/1 黄灰色シルト（Fe・Mn 斑紋、SR3001 最下層）
  - 38 10YR7/2 ぶい黄橙色シルト混じり細砂（Fe・Mn 斑紋・斑晶、SD3027）



第 20 図 3-2 区東壁土層断面図（土層注記）

### 3-2 区（第 19～22 図）

調査以前には水田・畑地等の耕作地として利用されており、現地表面の標高は 22.1 m 前後であった。本調査区では、東壁、南壁、西壁の各壁面で、層序の記録を作成した。

本区でも、現耕作土（A 層）下で、旧耕作土とみられる水平堆積層（B 層：第 19・20 図東壁 4 層）が認められた。1～2 区の耕作土層と同質であり、近世後半期以降の耕作土層と考えられる。旧耕作土層下には、褐灰色シルト混じり細砂（C 層：第 19・20 図東壁 5 層・第 22 図南壁 5 層・第 21 図西壁 3 層）が堆積する。上面で溝 SD3001～SD3027 や自然河川 SR3001、多数の柱穴群を検出したことから、本遺構面を第 1 遺構面として調査を実施した。遺構面上面には若干の起伏が認められるが、概ね標高 21.7 m 前後で一定している。後述のとおり大部分の柱穴群が残存深 10cm 以下であることから、本遺構面も耕地化による削奪を被っている可能性が高い。

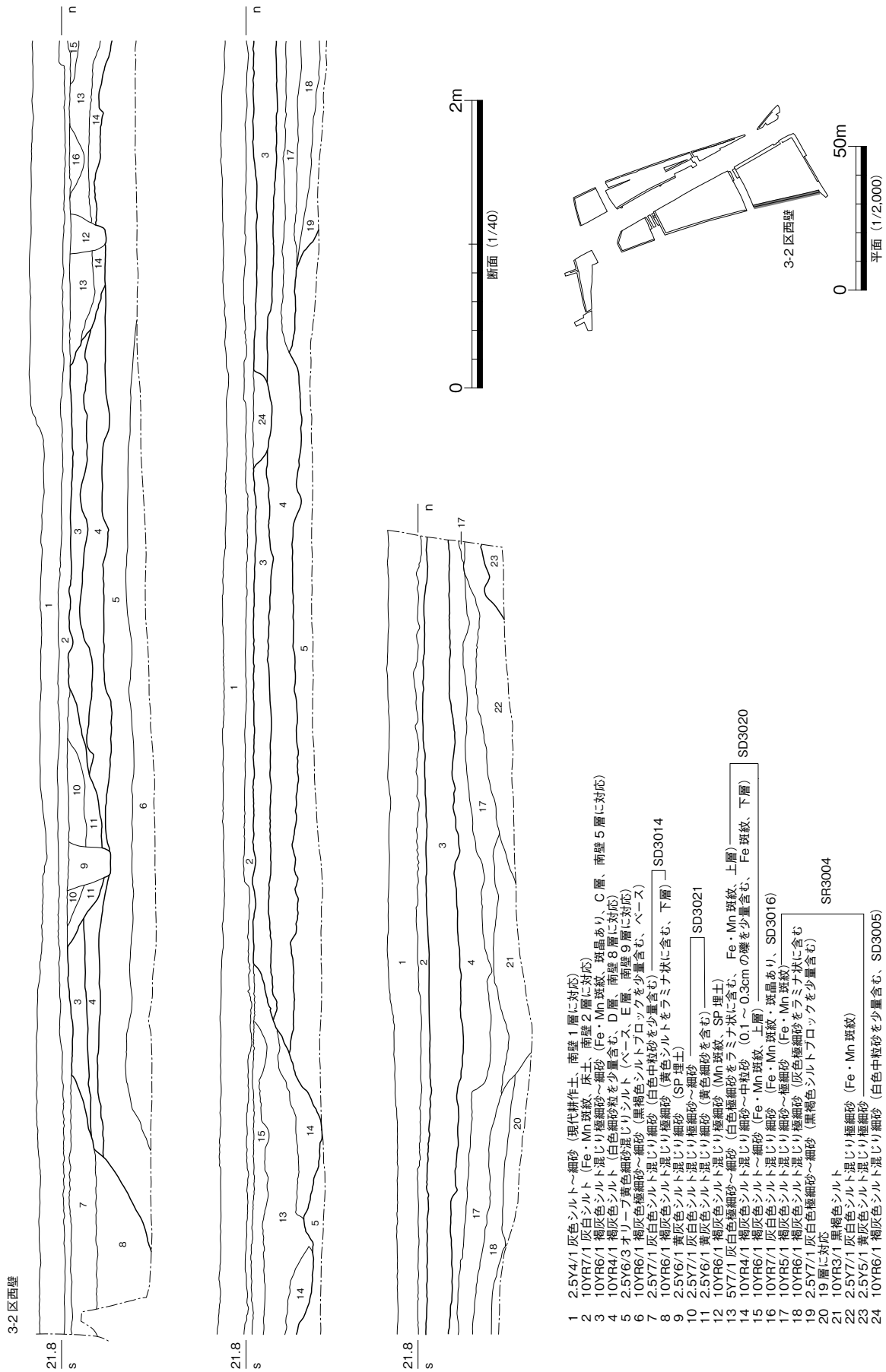
第 1 遺構面のベースとなる褐灰色シルト混じり細砂の下には、褐灰色シルト（D 層：第 19・20 図東壁 6 層・第 22 図南壁 8 層・第 21 図西壁 4 層）の水平堆積が認められた。検出レベル・土質より、本層上面が 1～2 区の第 2 遺構面に連続すると判断し、第 2 遺構面として調査を実施したが、遺構は確認できなかった。

第 2 遺構面のベースとなる褐灰色シルト混じり細砂を掘り下げると、黄色系砂質シルト（E 層：第 19・20 図東壁 7 層・第 22 図南壁 9 層・第 21 図西壁 5 層）の上面で自然河川 SR3004 を検出したことから、本遺構面を第 3 遺構面として調査を行った。遺構面レベル・土質の類似から、上述した 1～2 区等の第 3 遺構面に相当すると考えられる。本遺構面の標高は、3-2 区北西端で 21.3 m 前後、3-2 区南西端で 21.6 m 前後、3-2 区南東端で 21.7 m 前後をそれぞれ測り、緩やかに北東方向へ傾斜する。（益崎）

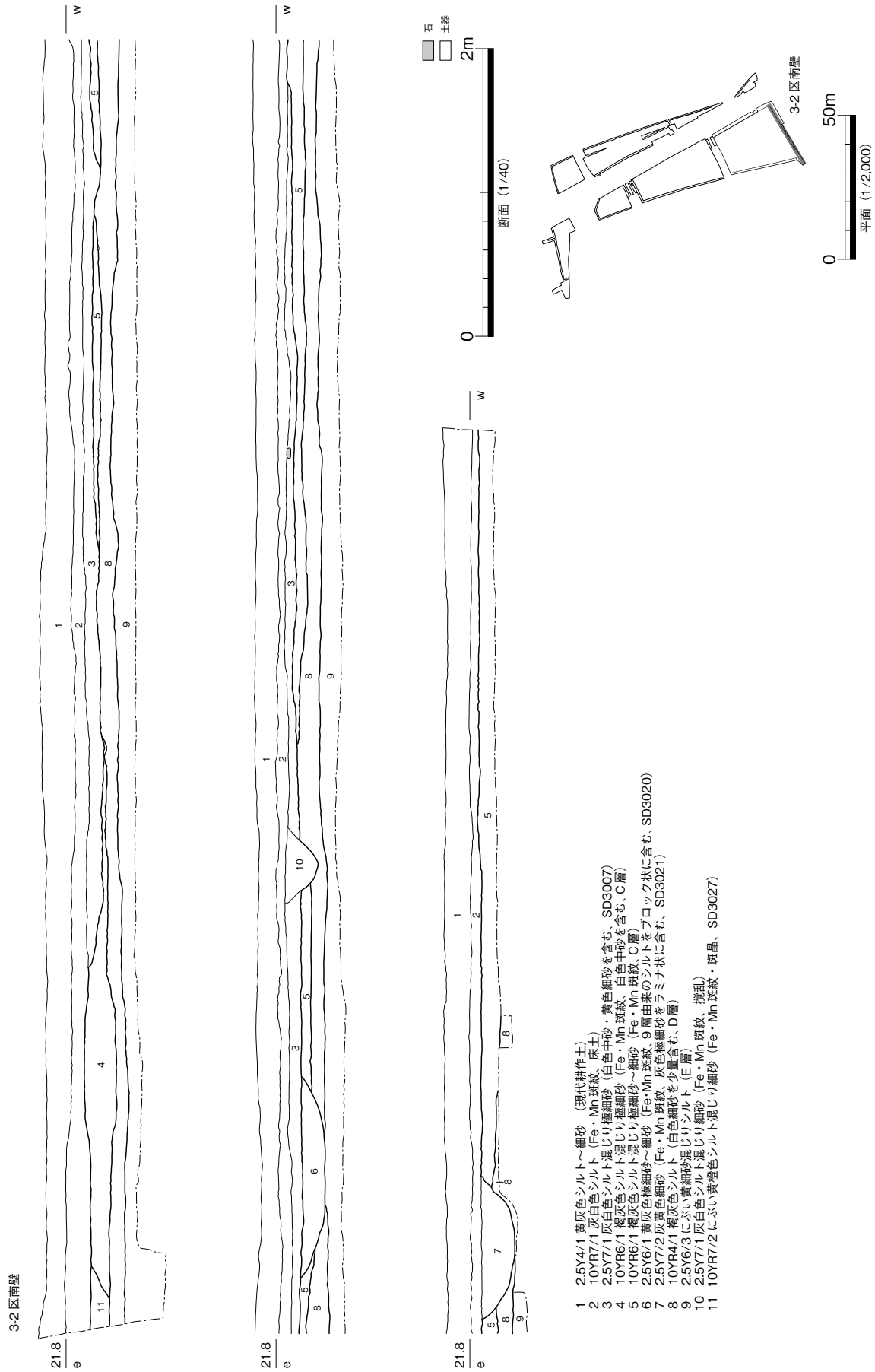
### 4・5 区（第 23～30 図）

4・5 区は 1～3 区の南側に位置する調査区である。現地表面の標高は 22.28 m 前後である。本調査区では、4 区北東、東、南、西、5 区東、南、西の各壁面において、層序の記録を作成した。



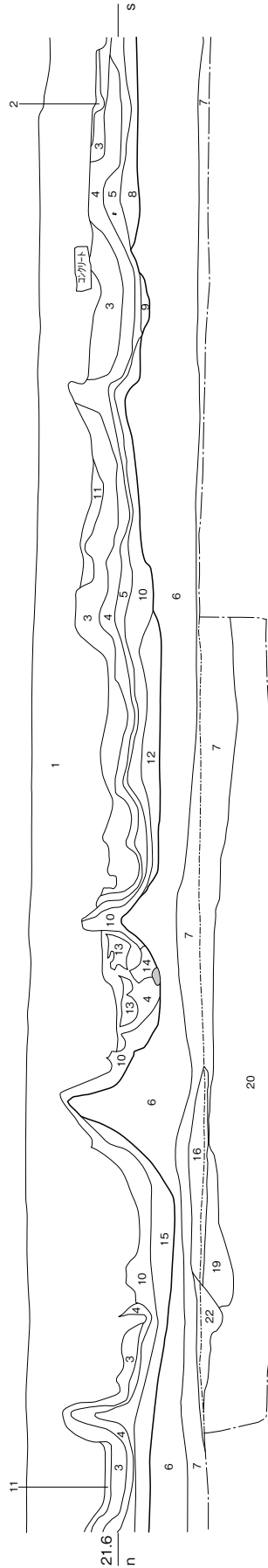
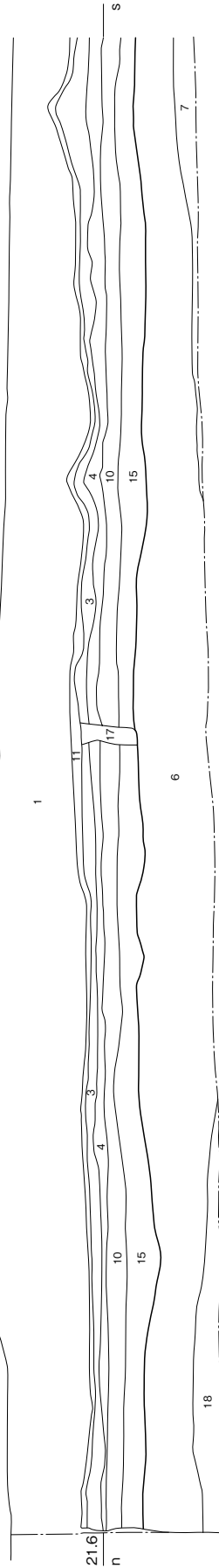


第21図 3-2区西壁土層断面図

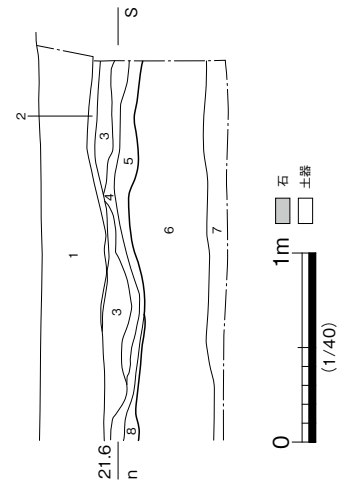


第22図 3-2 区南壁土層断面図

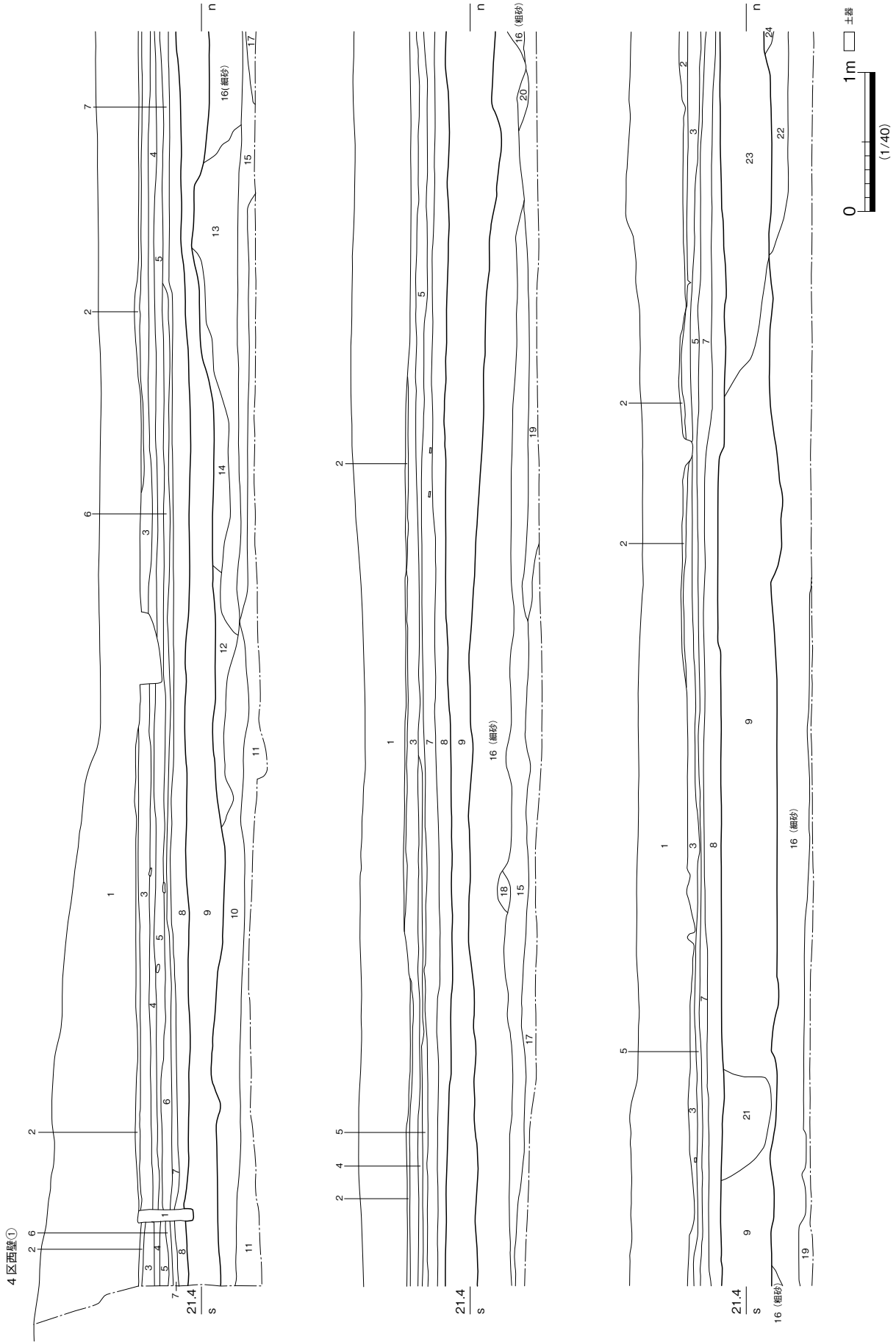
4区東壁断面図



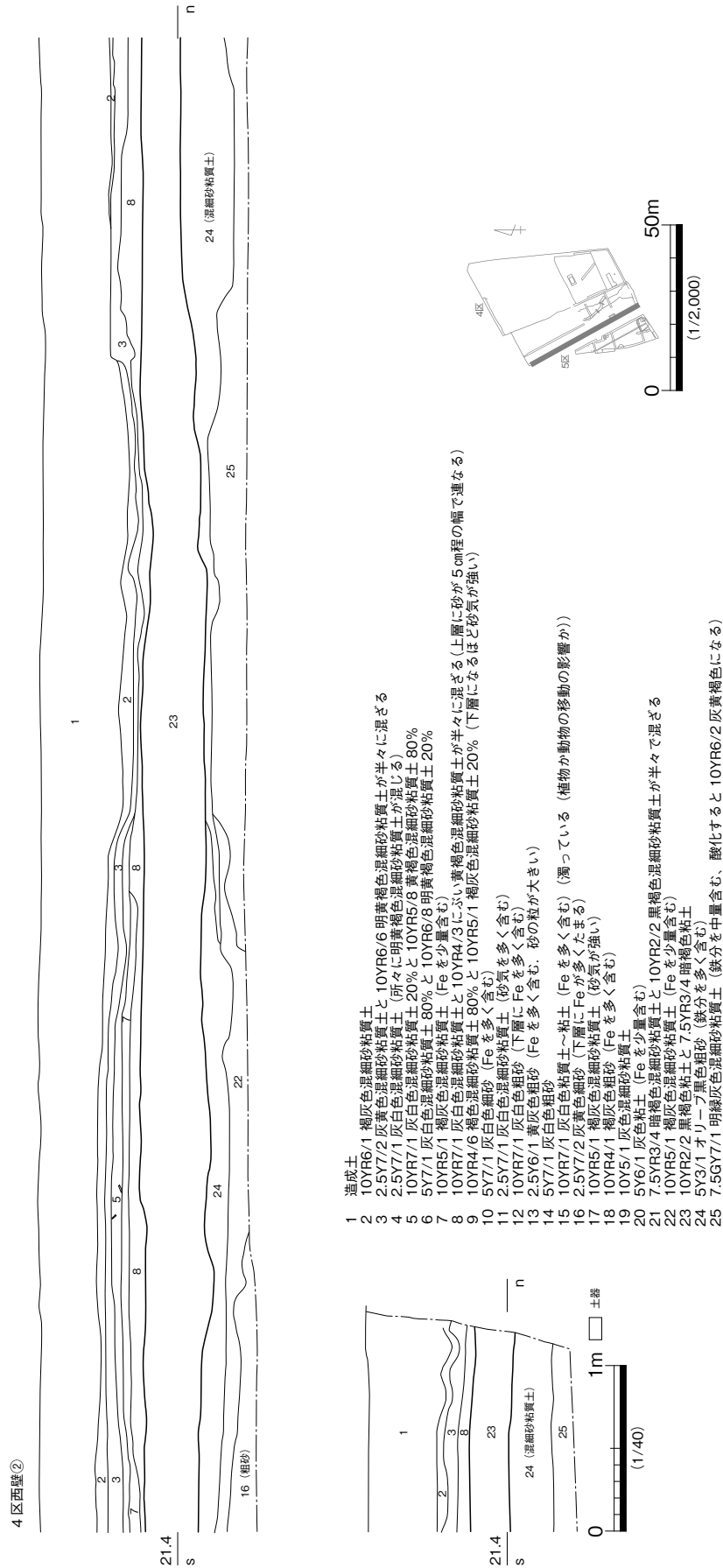
- 造成土
- 1 7.5YR3/4 暗褐色混細砂粘質土
  - 2 10YR7/1 灰白色混細砂粘質土
  - 3 2.5Y6/2 灰黄色混細砂粘質土と10YR5/8 黄褐色混細砂粘質土 (半々に混ざる)
  - 4 2.5Y4/1 黄灰色混細砂粘質土 (Mnを多く含む)
  - 5 10YR4/6 褐色粘土と10YR6/1 褐灰色混細砂粘質土 (半々に混ざる。Mnを少量含む)
  - 6 5Y6/1 灰色細砂
  - 7 10YR6/1 褐灰色混細砂粘質土 (Mnを少量含む)
  - 8 10YR5/1 褐色粘質土
  - 9 10YR6/1 褐灰色混細砂粘質土 (Fe, Mnを含む。径~2mm以下の礫を多く含む)
  - 10 2.5Y6/1 黄灰色混細砂粘質土
  - 11 7.5YR4/1 褐灰色混細砂粘質土
  - 12 10YR4/6 褐色粘土と10YR6/1 褐灰色混細砂粘質土 (半々に混ざる。Mnを多く含む)
  - 13 2.5Y5/1 黄灰色混細砂粘質土と10YR7/6 明黄褐色混細砂粘質土 (マーブル状に埋没)
  - 14 攪乱 (もみ殻がつまる)
  - 15 10YR2/3 黒褐色粘質土
  - 16 5Y4/4 暗オリーブ色粗砂
  - 17 攪乱 (もみ殻がつまる)
  - 18 2.5Y4/1 黄灰色粘質土
  - 19 5Y5/3 灰オリーブ色粗砂
  - 20 2.5Y5/1 黄灰色細砂 (部分的に帯状に粗砂が混じる)
  - 22 2.5Y8/1 灰白色細砂



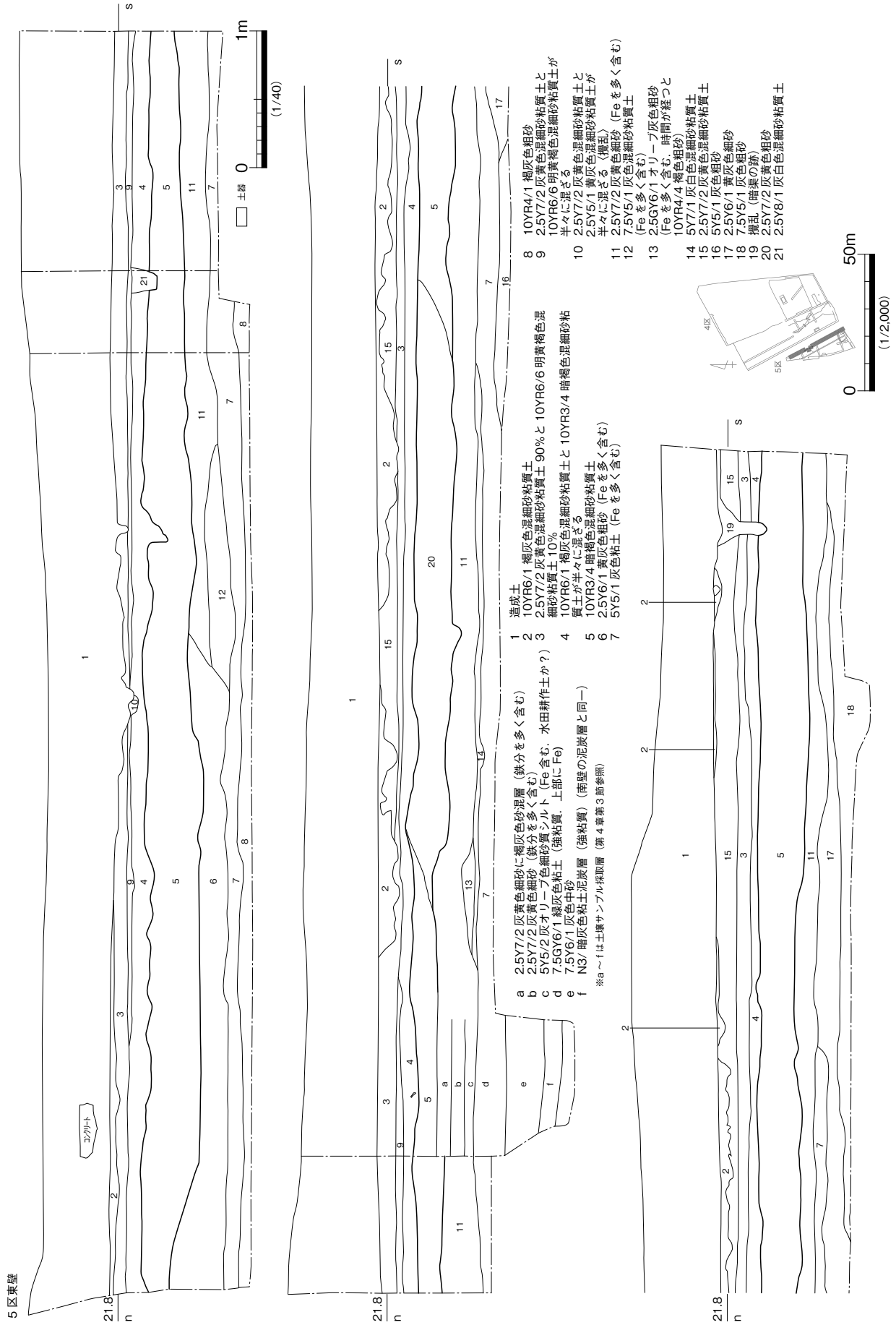
第23図 4区東壁土層断面図



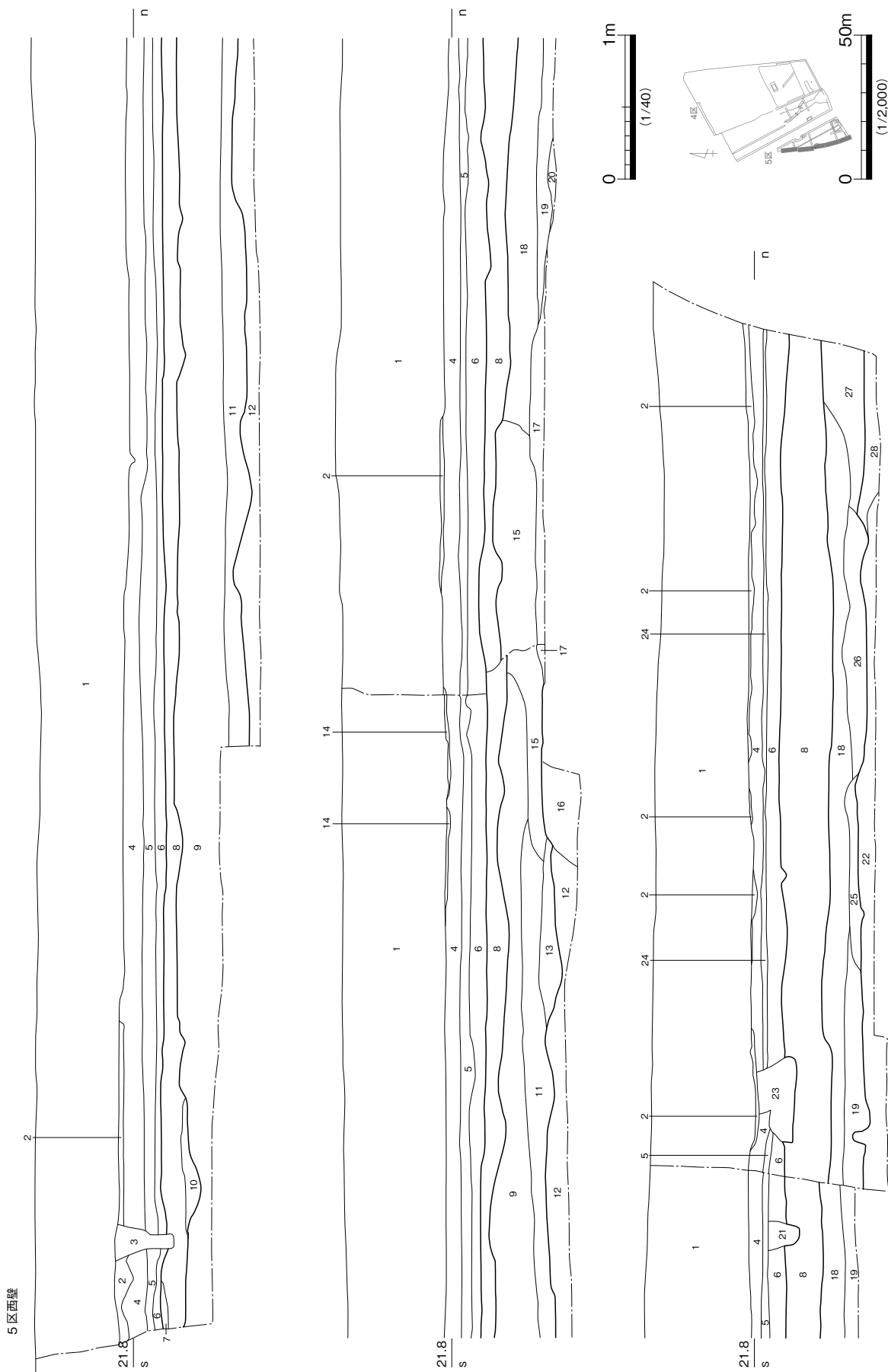
第24図 4区西壁土層断面図1



第25図 4区西壁土層断面図2



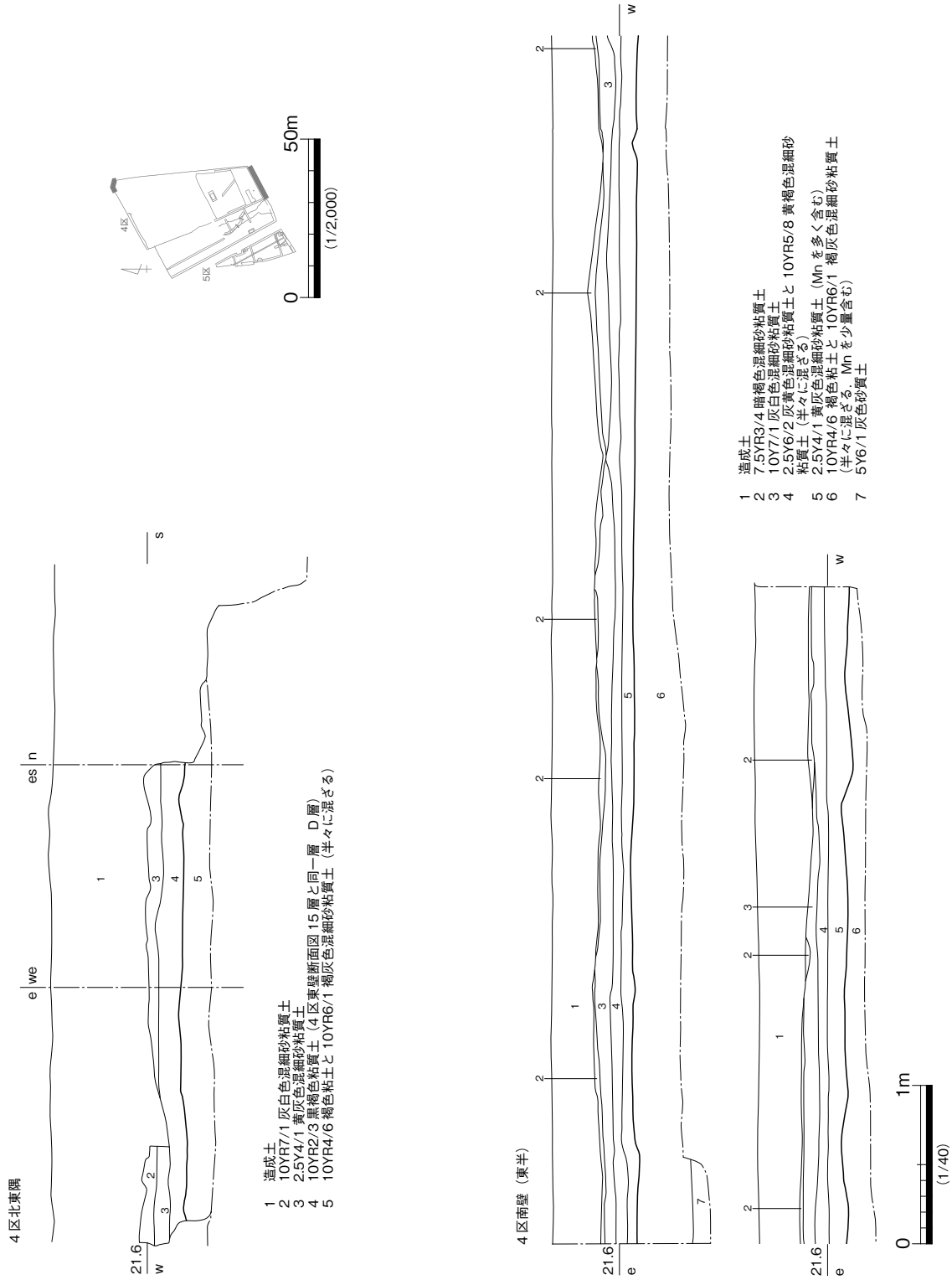
第26図 5区東壁土層断面図



第27図 5区西壁土層断面図

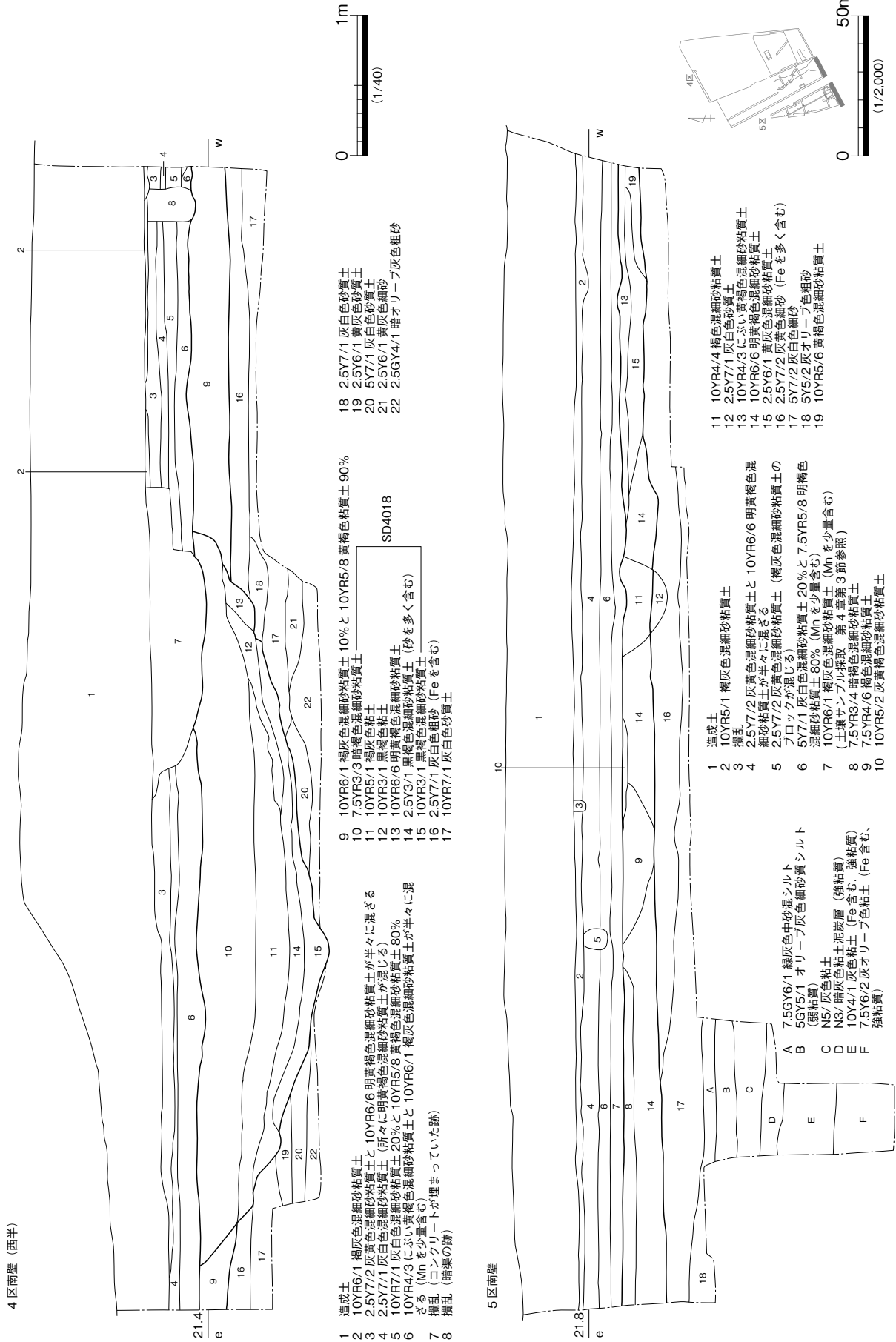
- |  |                                 |  |
|--|---------------------------------|--|
| 1 造成土  | 10 2.5Y6/1 黄灰色砂質土（径～5mmの石を多く含む） | 21 2.5Y8/1 灰白色混細砂粘質土（SP5006）                       |
| 2 10YR5/1 褐灰色混細砂粘質土  | 11 5Y7/1 灰白色混細砂粘質土（Feを多く含む）     | 22 5Y5/1 灰色粗砂                                      |
| 3 攪乱（暗渠の跡）   | 12 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色粗砂           | 23 攪乱  |
| 4 2.5Y7/2 灰黄色混細砂粘質土と<br>10YR6/6 明黄褐色混細砂粘質土が半々に混ざる          | 13 5Y6/1 灰色細砂                   | 24 10YR6/8 明黄褐色混細砂粘質土 80% と<br>5Y7/1 灰白色混細砂粘質土 20% |
| 5 5Y7/1 灰白色混細砂粘質土 20% と<br>7.5YR5/8 明褐色混細砂粘質土 80%（Mnを少量含む） | 14 10YR4/4 褐色混細砂粘質土             | 25 5Y5/1 灰色砂質土（Feを多く含む）                            |
| 6 10YR6/1 褐灰色混細砂粘質土（Mnを少量含む）                               | 15 10YR6/1 褐灰色粗砂                | 26 10YR7/1 灰白色粘土（Feを多く含む）                          |
| 7 10YR4/3 にぶい黄褐色混細砂粘質土                                     | 16 2.5Y7/1 灰白色細砂                | 27 10YR8/1 灰白色砂質土（Feを多く含む）                         |
| 8 10YR3/4 暗褐色混細砂粘質土  | 17 5G6/1 緑灰色混細砂粘質土（Feを多く含む）     | 28 10YR6/1 褐灰色粘土                                   |
| 9 2.5Y7/2 灰黄色混細砂粘質土（Feを多く含む）                               | 18 2.5Y7/2 灰黄色細砂                |  |
|  | 19 2.5Y7/1 灰白色粘土（Feを多く含む）       |  |
|  | 20 10YR5/1 褐灰色粗砂                |  |

第 28 図 5 区西壁土層断面図（土層注記）



第 29 図 4 区北東隅・南壁（東半）土層断面図





第30図 4 区南壁 (西半)、5 区南壁土層断面図

4区では、造成土(1層)下で褐灰、灰白、灰黄、黄灰色などの細砂が混じった粘質土層の水平堆積(B層:第23図4区東壁2～5、10、11、15層、第24・25図4区西壁2～8層、第29図4区南壁東半部2～5層、第30図4区南壁西半部2～5層)、5区では造成土(1層)下で褐灰、灰白、灰黄、黄灰色などの細砂が混じった粘質土層の水平堆積(B層:第26図5区東壁2～4・9・15層、第27・28図5区西壁2・4～6・14・24層、第30図5区南壁2・4～7層)が認められた。4区の中でも1～3区に近い北東隅では、1-1区などで第2遺構面として調査を行った黒褐色粘質土層(D層:第29図4区北東隅4層)が確認されたが、北東隅から西側、南側ともに攪乱を受けており4区内では1～3区で確認された層の連続性を確認することができなかった。なお、攪乱中より土師質土器足釜の脚部など中世の遺物の出土が認められる。

上記の理由により、以下で呼称する遺構面は1～3区で確認された堆積の遺構面とは異なる遺構面である。検出順に従って上層から第I遺構面、第II遺構面と呼称する。4区では、上記の層の直下に、褐色と褐灰色の土が混ざって堆積した層(D層相当か:第23図4区東壁6層、第24・25図4区西壁9層、第29図4区南壁東半部6層、第30図4区南壁西半部9層)が堆積しており、溝SD4018を検出したため、第I遺構面として調査を実施した。本遺構面は、4区の東壁付近ではコミュニティセンター建設に伴う攪乱のため上面が破壊されており本来の標高は不明だが、その他の部分では概ね標高21.5m前後で一定していた。

5区では、暗褐色、にぶい黄褐色、明黄褐色混細砂粘質土もしくは灰黄色粗砂(D層相当か:第26図5区東壁5・20層、第30図5区南壁13・14層)が第I遺構面に相当する。遺構面の上面には、若干の起伏が認められるものの、標高21.58m前後で概ね一定していた。この遺構面では溝や少量のピットを検出したのみである。

第I遺構面のベースとなる層を掘り下げると、4区では灰白、灰黄色細砂、もしくは粗砂(E層相当か:第24・25図4区西壁10・12～14・16層、第30図4区南壁西半部16層)上面で、溝SD5014を検出した。検出した遺構はSD5014のみであるが、本遺構面を第II遺構面として調査を実施した。本遺構面上面も若干の起伏が認められるものの、標高21.3m前後で概ね一定しており、本遺構面も耕地化による削奪を顕著に被っている可能性が高い。

5区では4区第II遺構面に相当する層として、灰白、灰黄色の細砂や粗砂もしくは混細砂粘質土(E層相当か:第26図5区東壁6・11層、第27・28図5区西壁9・15・18層、第30図5区南壁16・17層)の水平堆積が確認された。本遺構面上面も若干の起伏が認められるものの、標高21.3m前後で概ね一定しており、本遺構面も耕地化による削奪を顕著に被っている可能性が高い。

本遺構面の標高は、調査区北端で21.36m前後、南端で21.28m前後をそれぞれ測り、緩やかに南に傾斜して検出された。(溝上)

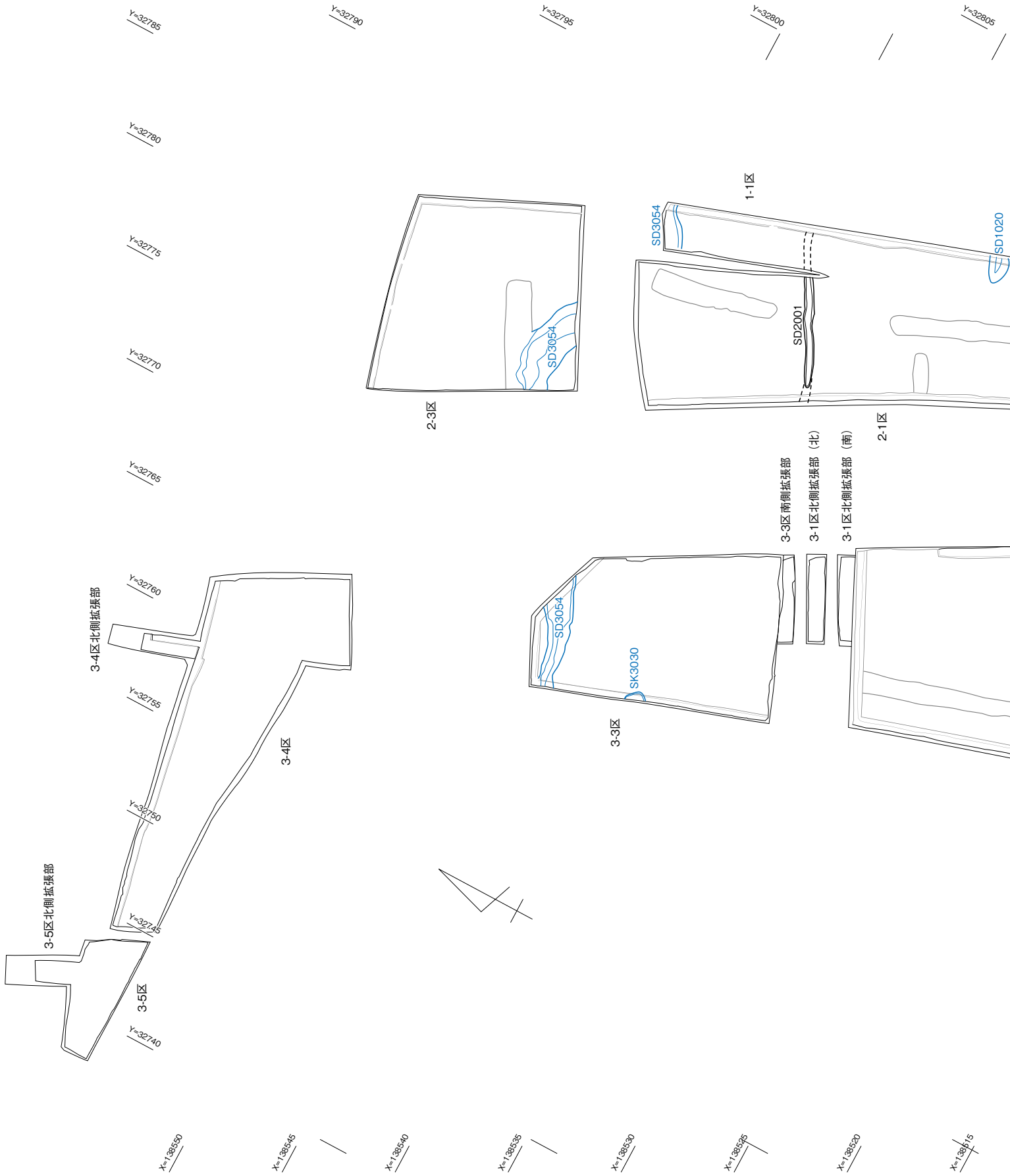
### 第3節 1～3区の調査

#### 1 弥生時代後期以前の遺構

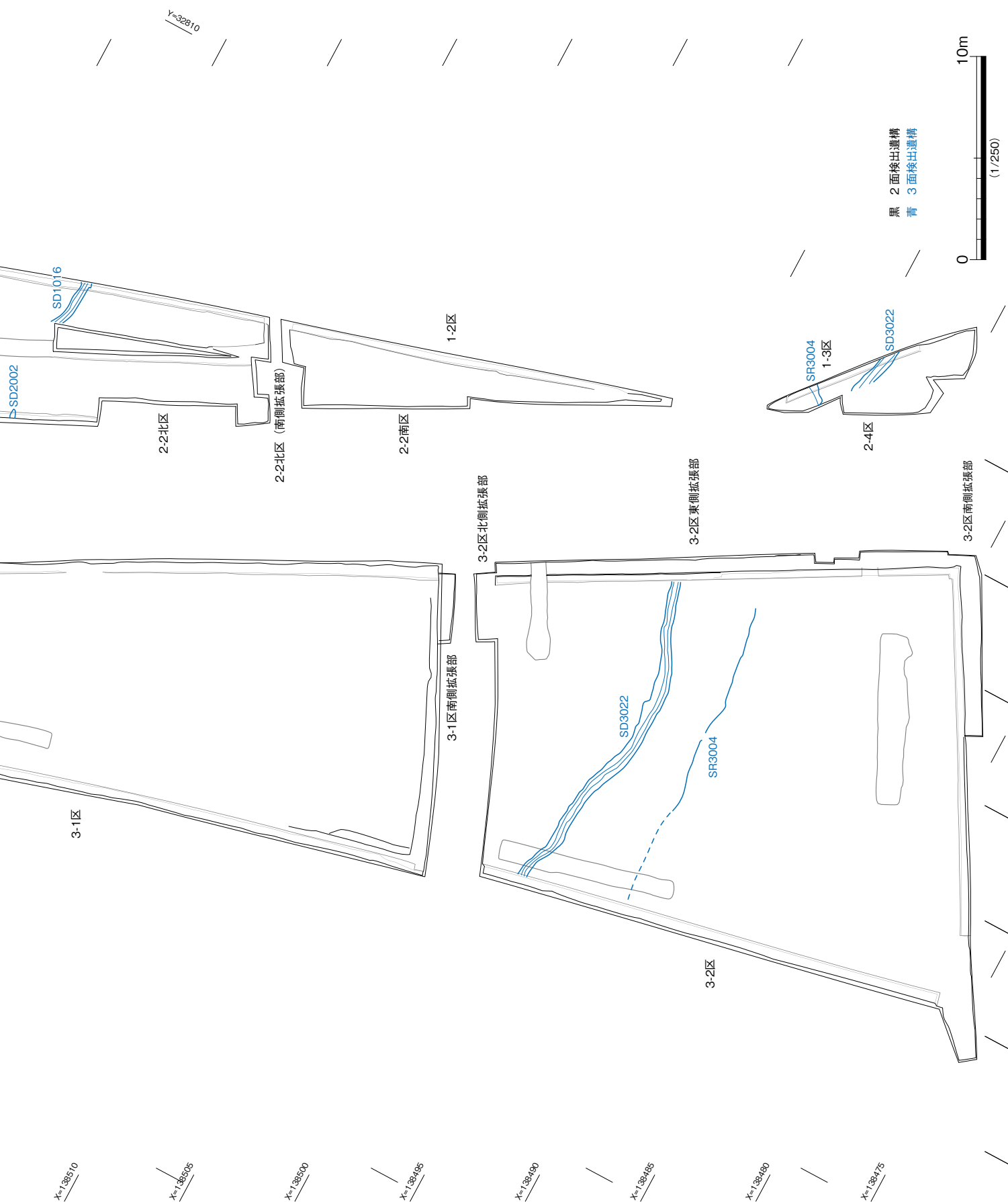
##### ①土坑

##### 3-3区 SK3030 (第32図)

3-3区第2遺構面中央部西壁沿いで検出した土坑である。長軸1.02m以上、短軸0.4m以上、残存深0.16mをそれぞれ測り、平面形の全形は不詳、断面形は浅い逆台形状を呈する。埋土は褐灰色砂質シルトの



第 31 図 1 ~ 3



区遺構配置図（弥生時代後期以前）

単層であった。

遺物は出土しておらず、検出面より弥生時代後期以前に位置付けられるものの、詳細な時期を特定することはできない。(溝上)

②溝

1-1 区 SD1016 (第 33 図)

1-1 区第 3 遺構面中央部で、やや南に弧を描いて配された東西溝である。隣接する 2-1・3-1 区で延長溝は確認していない。検出面幅 0.44 m 前後、残存深 0.10 m 前後、断面形は浅い皿状を呈する。調査範囲が限られるため、流下方向は不明である。埋土は褐灰色細砂の単層であった。

遺物は出土しておらず、第 3 遺構面で検出したことから、弥生時代後期以前の遺構と考えられるが、詳細な時期を特定することは困難である。(蔵本)

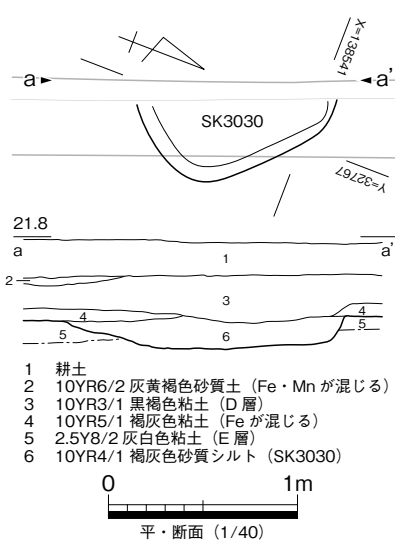
1-1 区 SD1020 (第 34 図)

1-1 区第 3 遺構面中央部で検出した東西溝とみられる遺構である。西端は調査区内で途切れ、延長 1.27 m を検出したのみである。検出面幅 0.95 m 前後、残存深 0.30 m 前後、断面形は U 字状を呈する。調査範囲が限られるため、流下方向は不明である。また埋土は、上面に堆積した D 層の黒褐色粘質シルトと分層されておらず、調査成果より溝の埋没と包含層の形成が連続していたと考えられる。

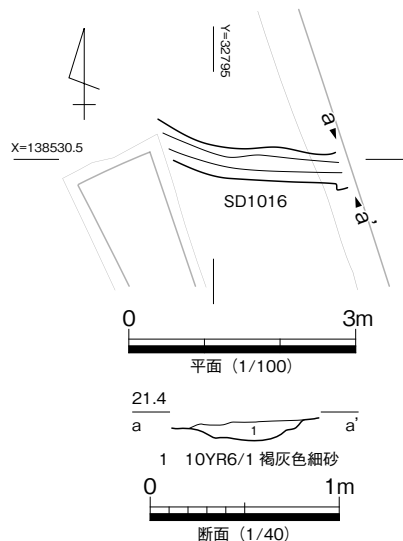
遺物は出土しておらず、第 3 遺構面で検出したことから、弥生時代後期以前の遺構と考えられるが、詳細な時期を特定することは困難である。(蔵本)

2-1 区 SD2001 (第 35 図)

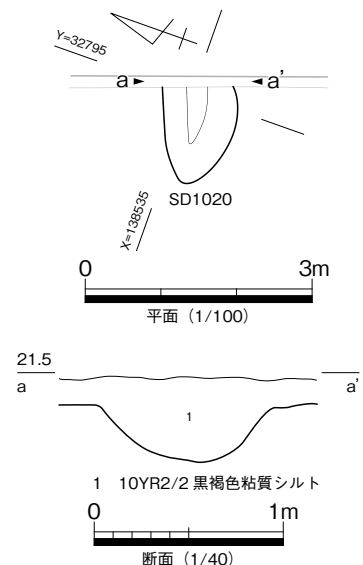
2-1 区第 2 遺構面で検出した東西溝である。東西両端は調査区外へ延長し、西側の 3-1 区第 2 遺構面で延長溝は検出していない。検出面幅 0.42 m 前後、残存深 0.12 m 前後、断面形は浅い皿状を呈する。流路方向は N 62.1° E に配される。溝底面の標高は、2-1 区西端で 21.36 m 前後を測るが、1-1 区では平・断面の詳細な記録がなく、流下方向は特定できない。埋土は、褐灰色粘土ないし粘質シルトの単層であった。



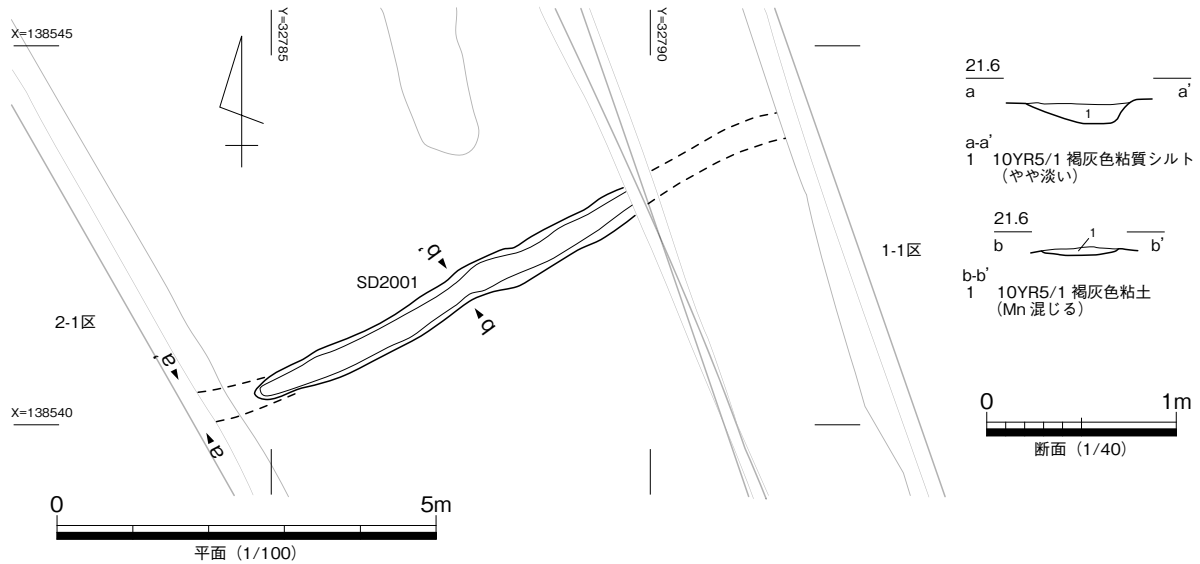
第 32 図 3-3 区 SK3030  
平・断面図



第 33 図 1-1 区 SD1016  
平・断面図



第 34 図 1-1 区 SD1020  
平・断面図



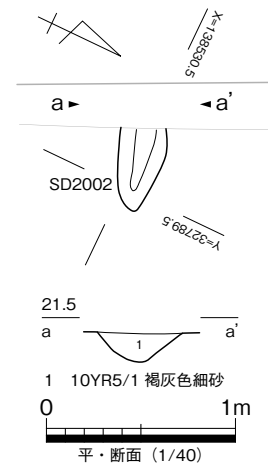
第35図 2-1区 SD2001 平・断面図

遺物は出土しておらず、第2遺構面で検出したことから、弥生時代後期以前の遺構と考えられるが、詳細な時期を特定することは困難である。(蔵本)

### 2-1区 SD2002 (第36図)

2-1区第3遺構面南半部で検出した遺構である。東端は調査区内で途切れ、延長0.43mを検出したのみである。検出面幅0.24m前後、残存深0.16m前後、断面形はU字状を呈する。調査範囲が限られるため、流下方向は不明である。埋土は褐灰色細砂の単層であった。

遺物は出土しておらず、第3遺構面で検出したことから、弥生時代後期以前の遺構と考えられるが、詳細な時期を特定することは困難である。(蔵本)



第36図 2-1区 SD2002 平・断面図

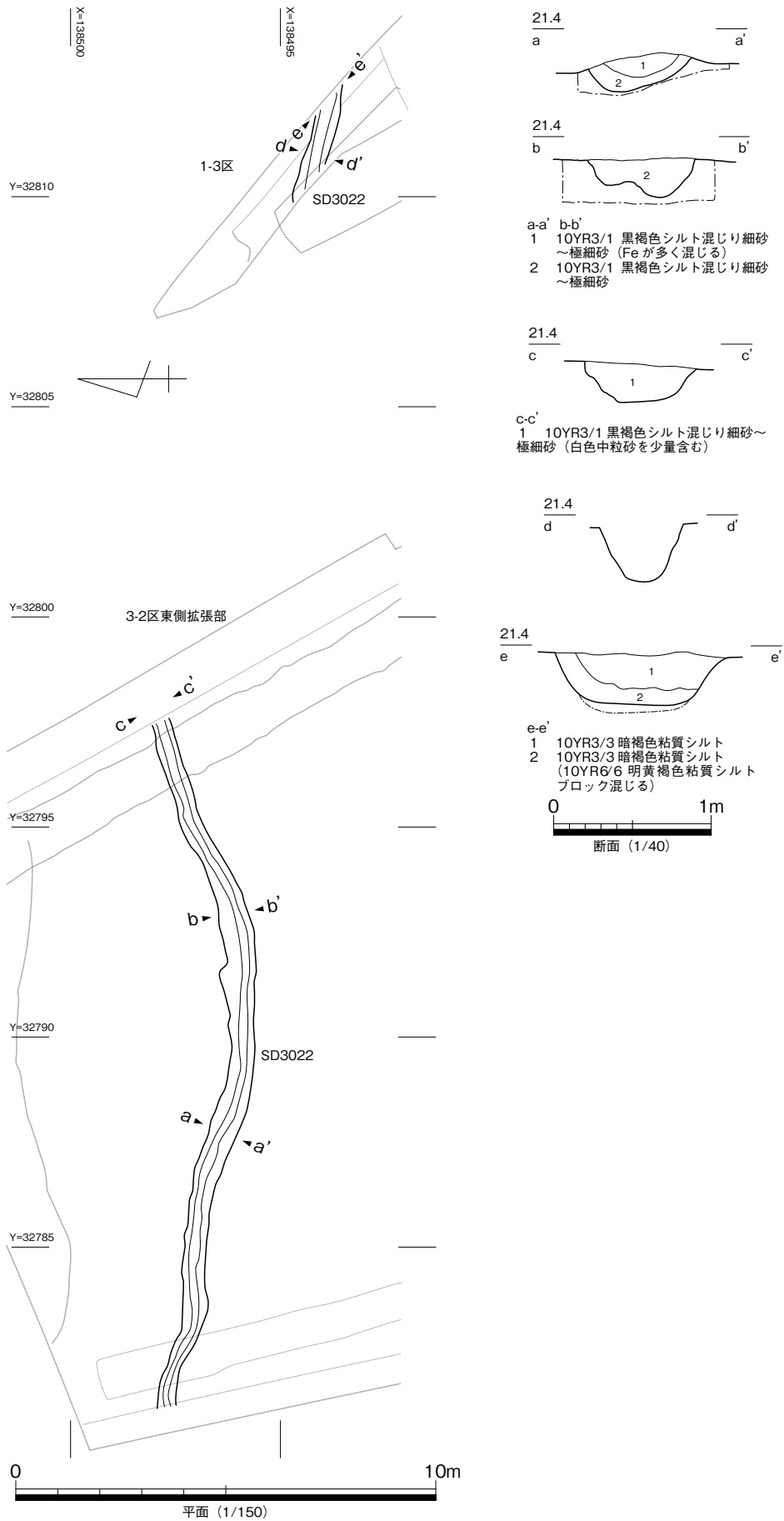
### 1-3・3-2区 SD3022 (第37図)

1-3・3-2区第3遺構面北半部で検出した東西溝である。両端は調査区外へ延長し、隣接する2-4区で延長溝は確認していない。検出面幅0.52m前後、残存深0.34m前後、断面形は整った逆台形状を呈する。流路方向はN 77.74°Wに配され、周辺の地割の方向とは合致しない。調査範囲が限られるため、流下方向は不明である。埋土は2層に分層され、褐色系粘質シルトが堆積していた。上位層は下位層上面を削奪して堆積しており、改修の可能性が考えられる。

遺物は出土しておらず、第3遺構面で検出したことから、弥生時代後期以前の遺構と考えられるが、詳細な時期を特定することは困難である。(蔵本)

### 1-1・2-3・3-3区 SD3054 (第38図)

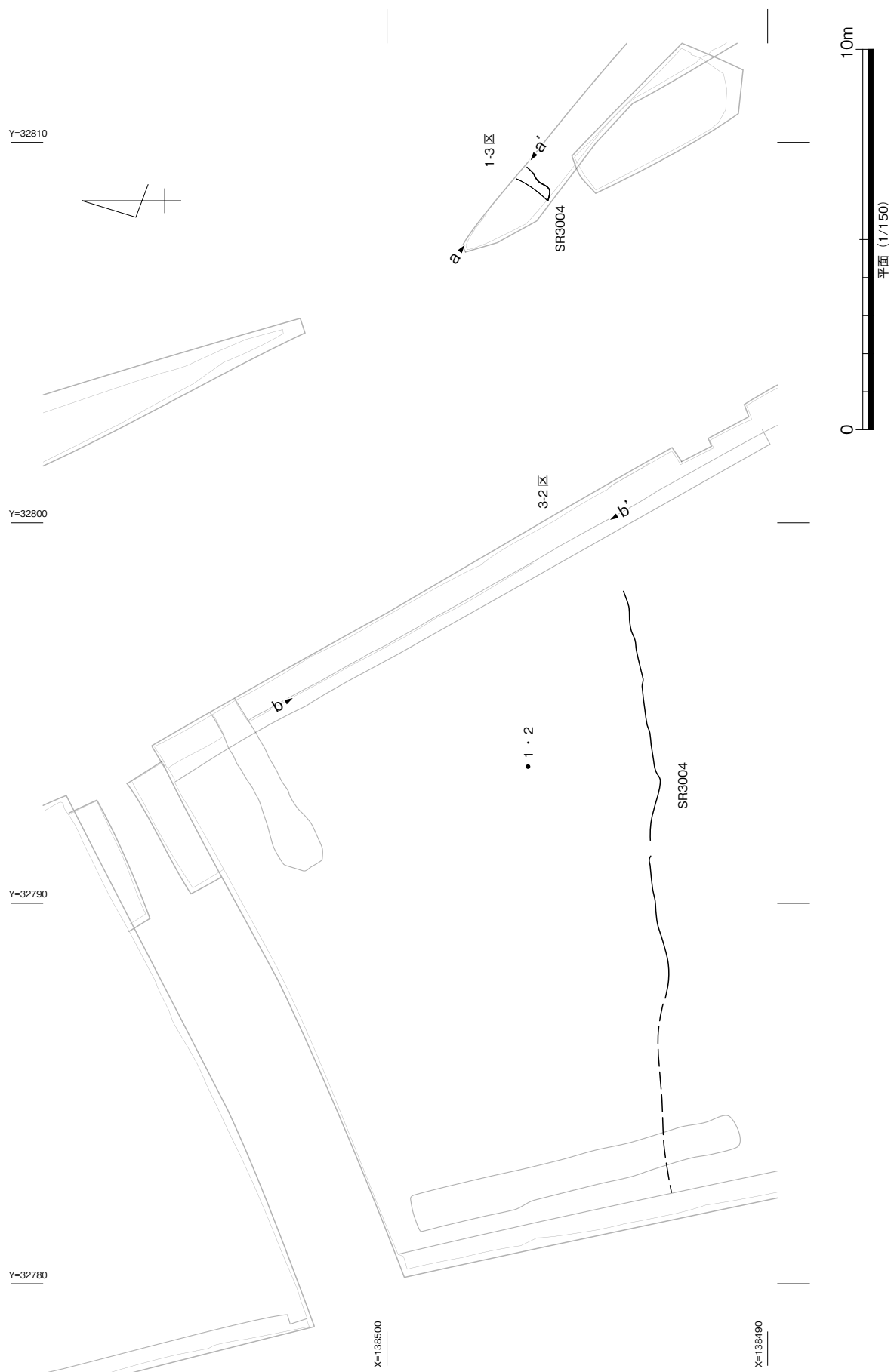
1-1区では第3遺構面、2-3区・3-3区では第2遺構面で検出した3条の溝を、遺構の規模や流路方向、埋土等より判断し、一連の遺構として報告する。遺構の連続から、1-1・2-3区第3遺構面と3-3区第2



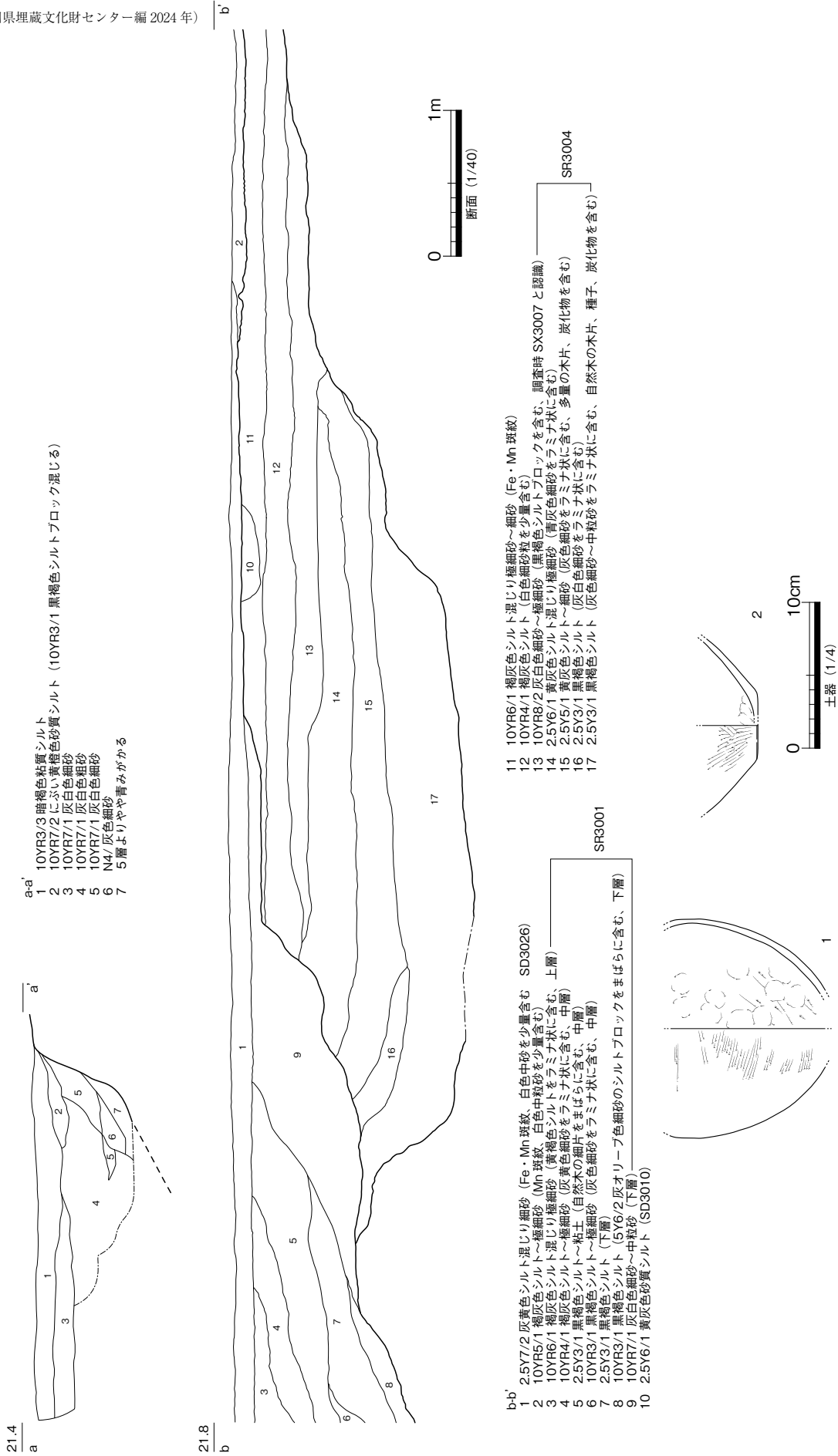
第37図 1-3・3-2区 SD3022 平・断面図







第 39 図 1-3・3-2 区 SR3004 平面図



第 40 図 1-3・3-2 区 SR3004 断面図、出土遺物

遺構面が相当する遺構面であることが確認できる。3-3区より緩やかに蛇行しながら東へ延び、2-3区で南へクランクして、1-1区北端部を東へ延長する溝として復元する。3-3区の東西溝は、検出面幅0.89～1.44 m、残存深0.16～0.32 m、断面形は逆台形状ないし皿状を呈する。底面の標高は、3-3区西端で21.16 m前後、2-3区で20.92 m前後をそれぞれ測り、高低差より東へ流下していた可能性を想定する。埋土は、記録位置により大きな相違を認めるが、概ね1～5層に細分され、下位には溝機能時の堆積層である灰色系細～粗砂が、上位に溝廃棄後の自然堆積層と思われる褐灰色粘土が水平堆積していた。おそらくは緩急のある流水下で堆積した後、徐々に埋没・平準化したと考える。

遺物は出土していないが、第3遺構面で検出したことから、弥生時代後期以前に位置付けることは確実であるが、詳細な時期を特定することはできない。(蔵本)

### ③自然河川

#### 1-3・3-2区 SR3004 (第39・40図)

1-3区第3遺構面から3-2区第3遺構面において検出した、東西流する自然河川である。北岸はSR3001に切られて消失しており、幅は推定で8 m以上、残存深約1.3 mを測る。埋土は記録位置により大きく相違するが、下位は細砂をラミナ状に含む黒褐色シルト、上位は灰色系細砂により埋没する。

遺物は3-2区での埋土最上層にあたる13層中で2点のみ出土した。1は弥生土器壺の体部片である。内外面ともに磨滅が著しいが、外面にわずかにハケ目が認められる。2は弥生土器壺の底部片で、平底の底部から体部が丸みをもって立ち上がる。外面には上下方向のミガキがわずかに認められる。胎土の共通性、出土位置から1と同一個体の可能性もあるが、直接の接合はできなかった。

出土遺物が極めて少なく、詳細な埋没時期の比定は困難だが、SR3001との重複関係、最上層出土の1・2から、弥生時代後期後半までに埋没したものとする。(益崎)

## 2 古墳時代～古代の遺構

### ①溝

#### 1-1・2-1区 SD1005 (第42～44図)

1-1区から3-1区北拡張部において第1遺構面で検出した東西溝で、東西両端は調査区外へ延長する。3-1区では、現代の構造物によって狭小な範囲の調査にとどまったが、掘り方の北肩の一部を検出することができた。以下の記述は主に1・2区の調査所見に基づく。なお、SB1002と重複し、溝底面で柱穴を確認したが、出土遺物の点からSB1002より先行することは間違いない。また、3区ではSD3042やSD3029等より先行する。検出面幅5.5 m前後、残存深0.98 m前後、断面形は緩やかな逆台形状ないしU字状を呈する。埋土は15層前後に細分され、大きく3層に大別する。1-1区東壁にあたるa-a'断面と2-1区b-b'断面では堆積状況が大きく異なるため、b-b'図をもとに以下記述する。上層(第43図b-b'断面1～5層)は、中層埋没後の溝上面の窪地を埋める堆積層で、一部流水下堆積を認めるが、基本的には溝機能停止後の自然堆積層と考える。また溝開削後に、南北両岸が雨水等により削奪されて生じた浅い窪地に自然堆積した土壌を含む。したがって上述した検出面幅は、窪地部分を含めたものであり、本来の溝幅は3.2 m前後に復元される。中層(第43図b-b'断面6～8・11層)は、後述する下層上面を一部削奪して堆積していることから、下層溝埋没後の改修溝の可能性を想定する。上位に灰色系砂質シルト、下位に改修溝機能時の堆積層である、灰白色粗砂ないし細砂がレンズ状に堆積する。下層(第43

図 b-b' 断面 9・10・12～14 層) は、灰色系細砂ないし粗砂を主体とし、最下層に黒褐色粘質シルトがレンズ状に堆積する。溝開削後は一時的に滞水下の低湿地状を呈し、後に緩急のある流手下で埋没したことが想像される。

遺物は、図示した以外に弥生土器や古式土師器の壺や甕、高杯、鉢、小型丸底土器、須恵器壺等の小片がコンテナ半箱程度出土した。3～9は古式土師器小形鉢。3・4は、外反して開く小さな口縁部を有する。3の底部は、ケズリ調整により丸く仕上げる。7は、丸底の浅い皿状を呈する。9は、強い指オサエにより成形された粗製の鉢。底部は尖底状を呈する。10～14は小型丸底壺。10・11は、口縁部は小さく外反し、体部は球胴に近く、底部は丸底である。13は、口縁部は内湾気味に小さく開き、体部はやや張りの強い扁球状を呈する。14は粗製の小型丸底土器。口縁部は内湾気味に直立する。15・16は、小形鉢もしくは小型丸底土器の体～底部片。いずれも底部は凸面底を呈する。以上の小型土器群のうち、3・7・15・16は、調整や胎土、焼成等が近似し、同一の工房で製作された可能性が考えられる。17・18・19・20は弥生土器甕。17の口縁端部は、上方へ小さく摘まみ上げる。胎土中に黒雲母粒を含み、他地域からの搬入品の可能性が高い。弥生時代終末期前後に位置付けられる。19は口縁外面に2条の凹線を施す。弥生時代後期前半に位置付けられる。20は平底を呈する底部片。21は布留系の古式土師器甕である。口縁部はやや外反気味に外上方へ開き、体部最大径は中央よりやや下方にあり、底部は丸底である。体部内面は頸部付近までケズリ調整を施す。22は緩やかに外反して開く弥生土器広口壺。口縁部は上下に小さく拡張して、端面に2条の凹線を施す。23・24は古式土師器高杯。23は椀形杯部片。脚部との接合は円盤充填法である。24は、杯上半部がやや内湾気味に開き、下半部との境に鈍い段を認める。脚部は円柱状を呈し、内面はケズリ調整が施される。裾部は低い円盤状を呈する。25は完形に近く復元される古式土師器二重口縁壺。体部はほぼ球胴で、底部は丸底である。口頸部の形態に畿内的な特徴を認めるが、頸部や体部の成・整形には、在地系の手法を認める。26は須恵器の底部片。内面が磨滅することから鉢の可能性を想定する。中世前半の所産であり、他の出土遺物と時期が大きく異なることから、混入資料と考える。

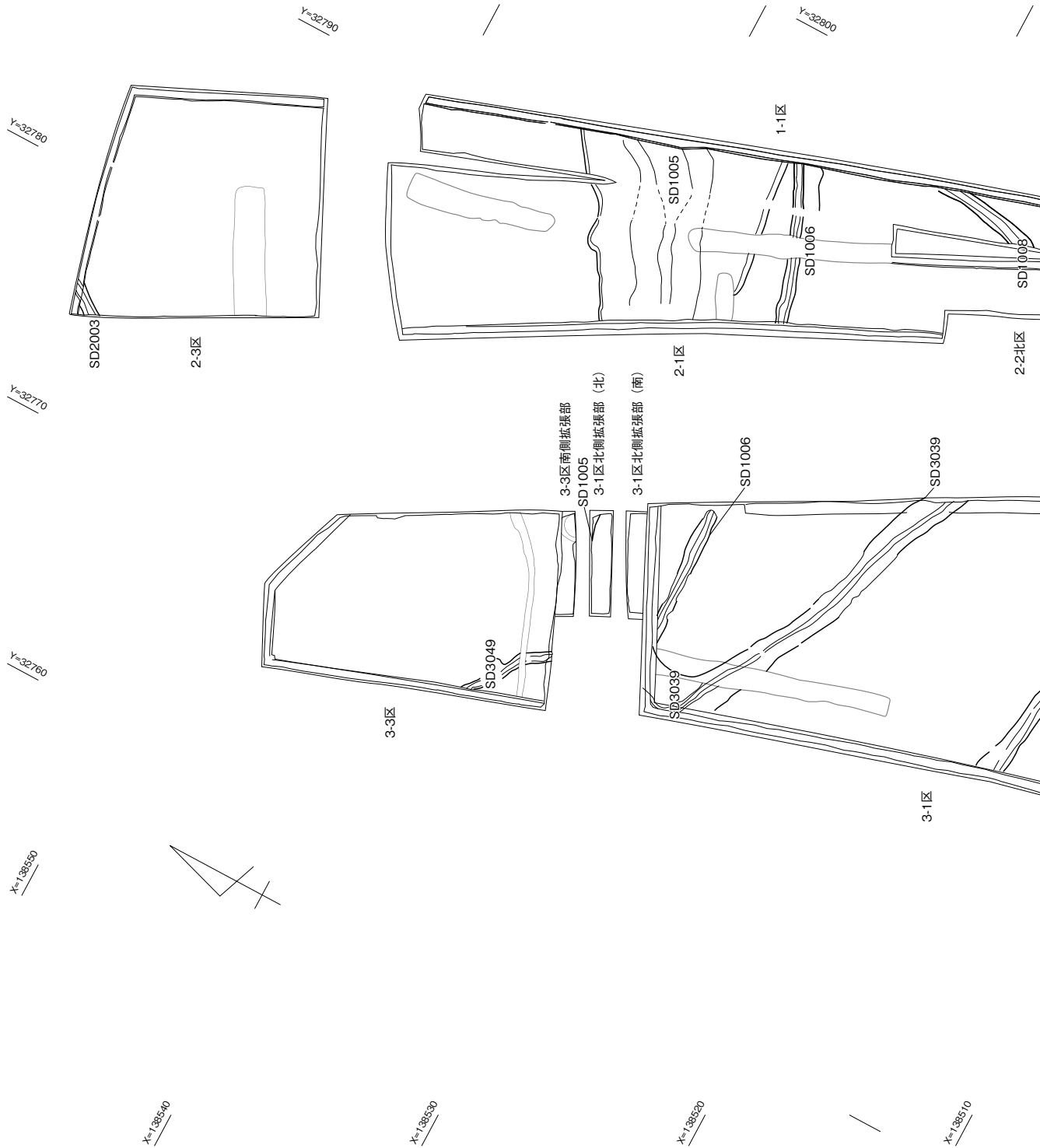
遺構の時期は、出土遺物より、古墳時代前期前半期の埋没の可能性を想定する。(蔵本)

#### 1-1・2-1・3-1 区 SD1006 (第 45 図)

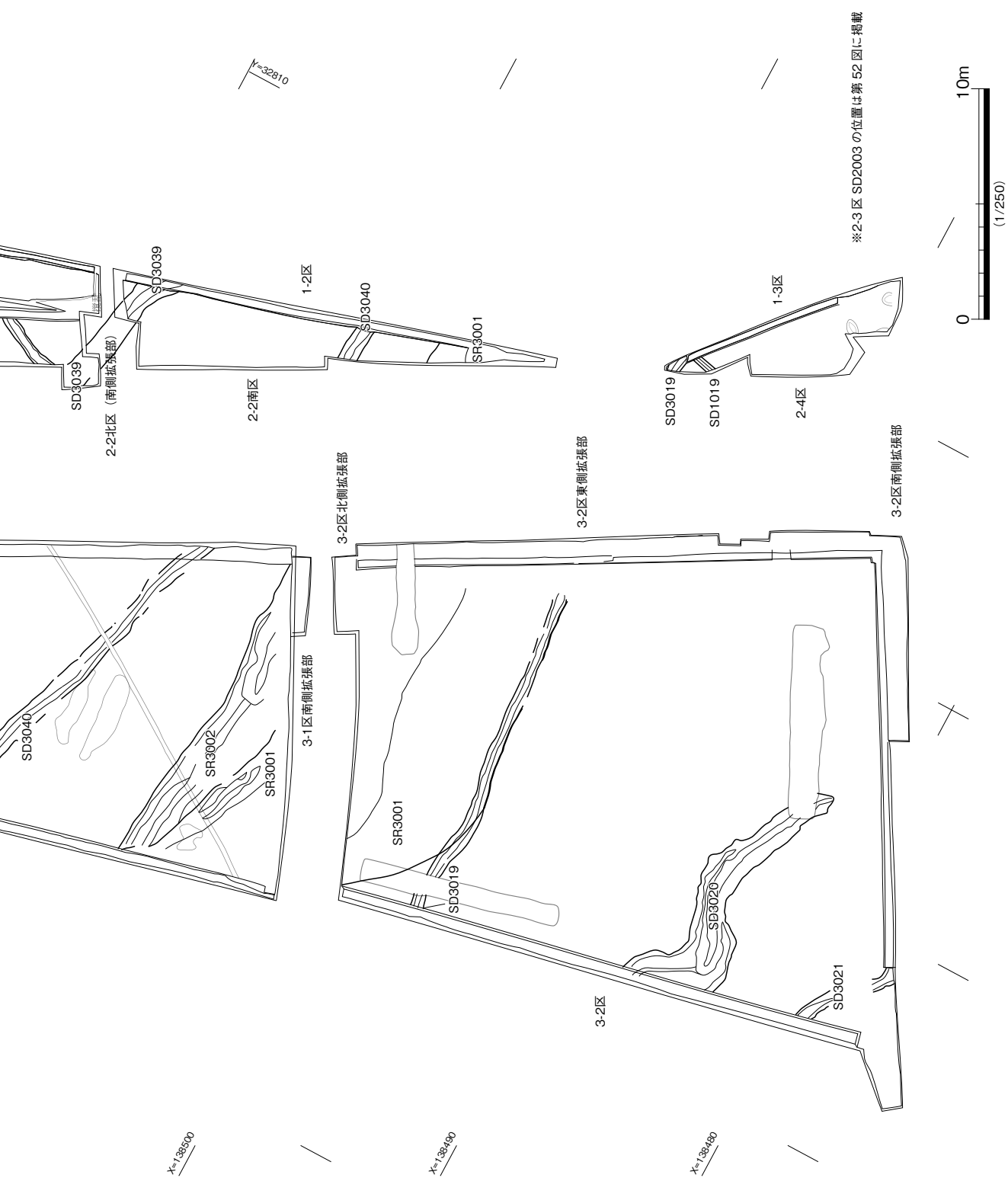
1-1・2-1 区第 1 遺構面と 3-1 区第 1 遺構面で検出した溝状遺構を、遺構の規模や流路方向、埋土等より判断し、一連の遺構として報告する。溝は、緩やかに南に弧を描いて東西に配される。検出面幅 0.41～0.58 m、残存深 0.11～0.24 m 前後、断面形は概ね皿状を呈する。溝底面の標高は、3-1 区北端で 21.41 m 前後、2-1 区西端で 21.50 m 前後、1-1 区東端で 21.44 m 前後をそれぞれ測り、溝底面は起伏が認められ、流下方向は特定できない。埋土は、記録位置により相違を認めるが、1～3 層に細分され、灰色系ないし褐色系細砂が概ね水平堆積していた。

遺物は、図示した以外に弥生土器甕等の体部片や器種不詳の土器小片が 10 点程度出土した。27は古式土師器小形鉢。口縁部は緩やかに外反して開く。28は、弥生土器甕。胎土中に角閃石細粒を多量に含み、高松平野からの搬入資料である。弥生時代終末期に位置付けられる。29は古式土師器甕の底部片。底部は丸底。30は土師質土器皿。溝の形状や他の出土遺物より、詳細な時期は不明であるが中世の所産であり、混入の可能性を想定する。

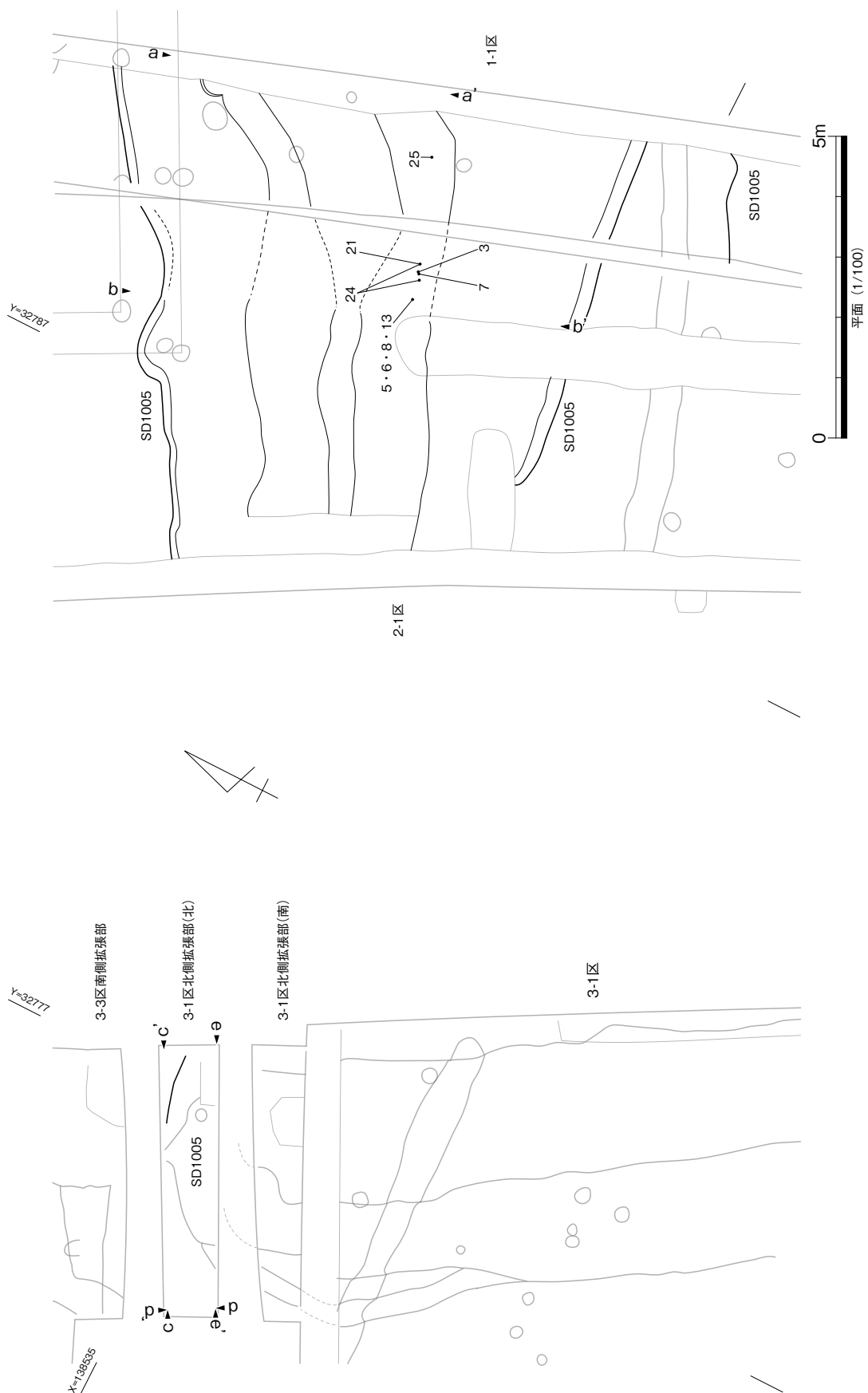
遺構の時期は、遺構検出面、流路方向、出土遺物を考え併せ、SD1005と同様古墳時代前期前半頃と



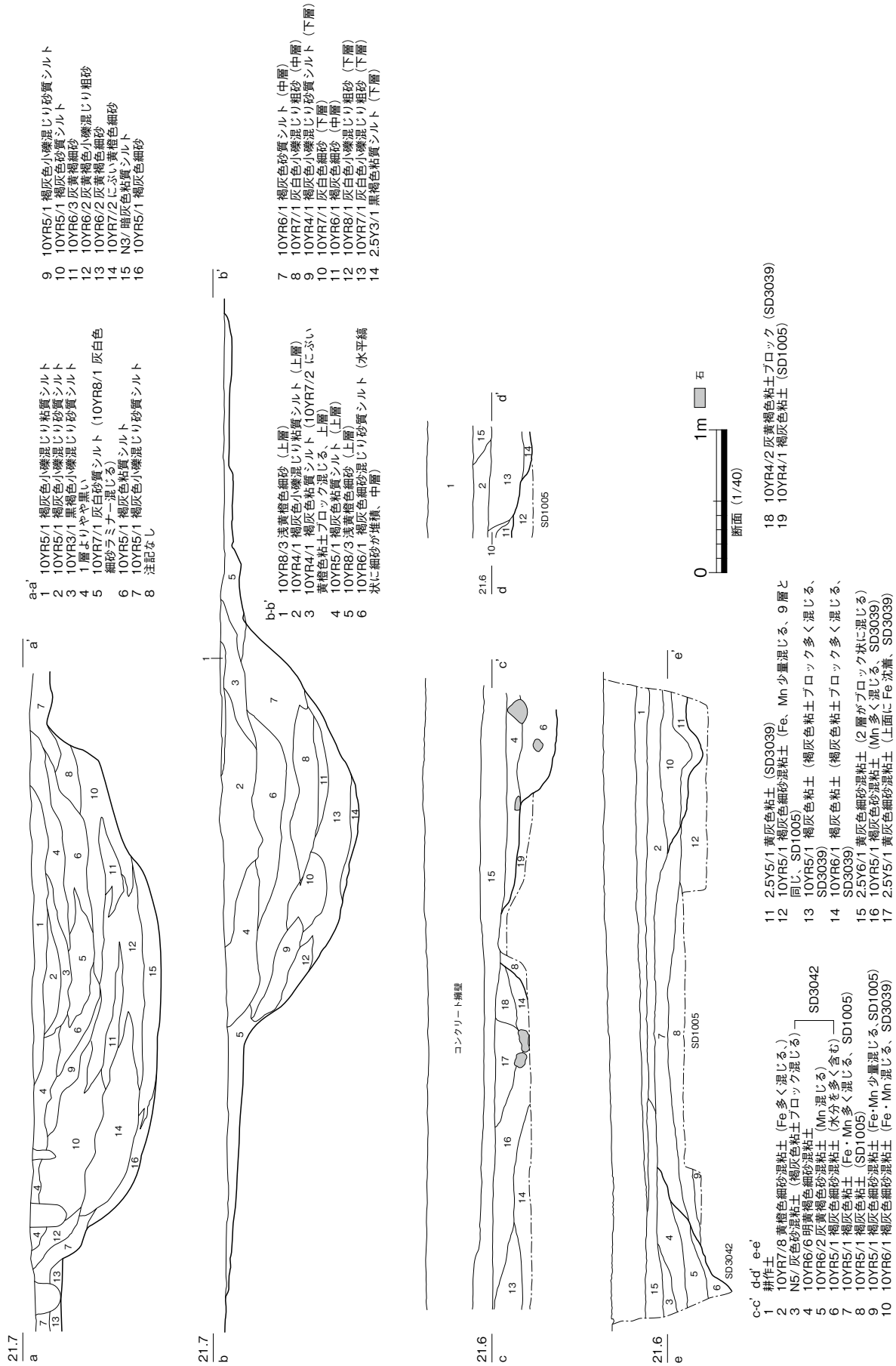
第41図 1～3区遺構



配置図 (古墳時代～古代)

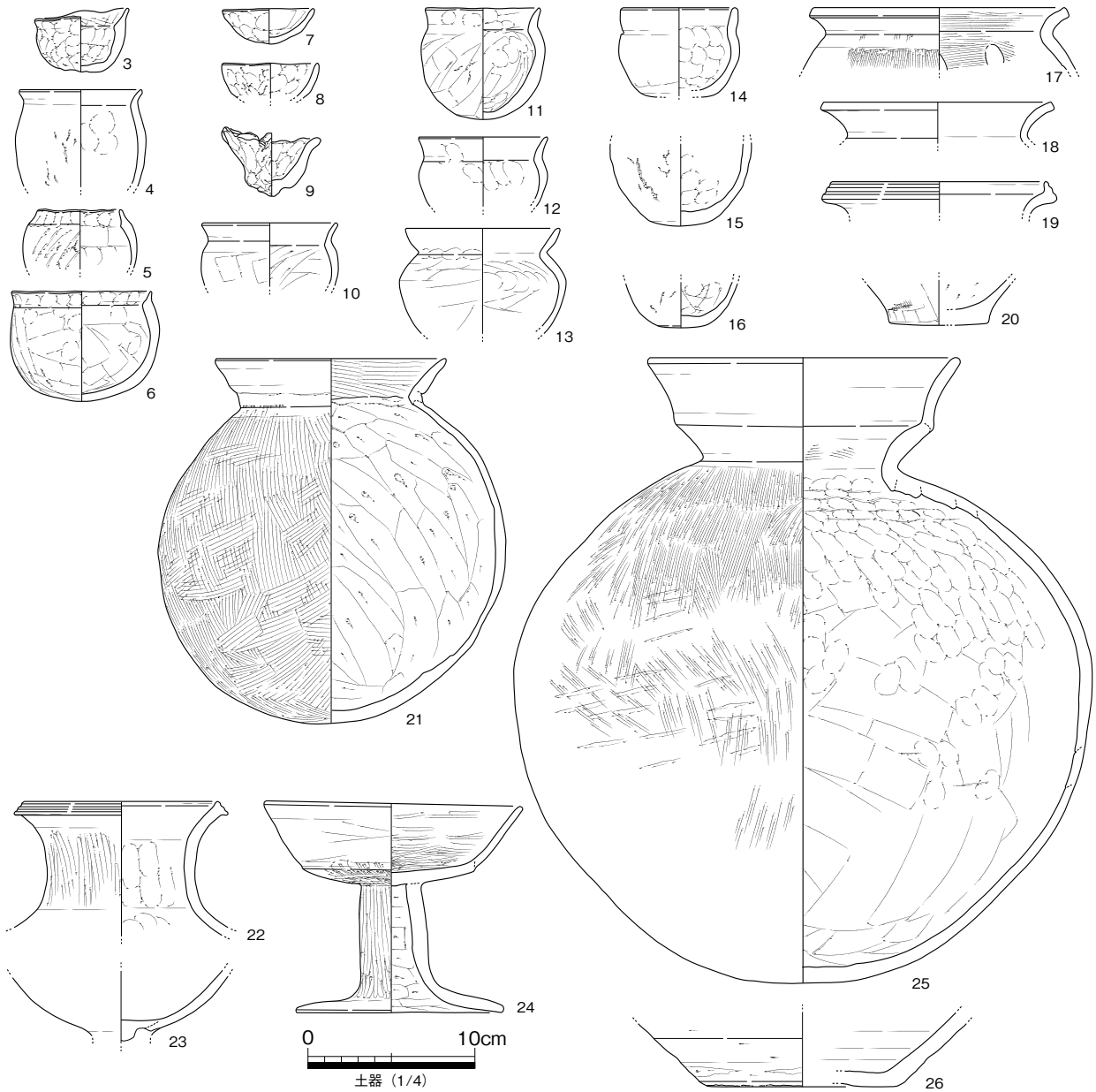


第 42 図 1-1・2-1 区 SD1005 平面図



第 43 図 1-1・2-1 区 SD1005 断面図



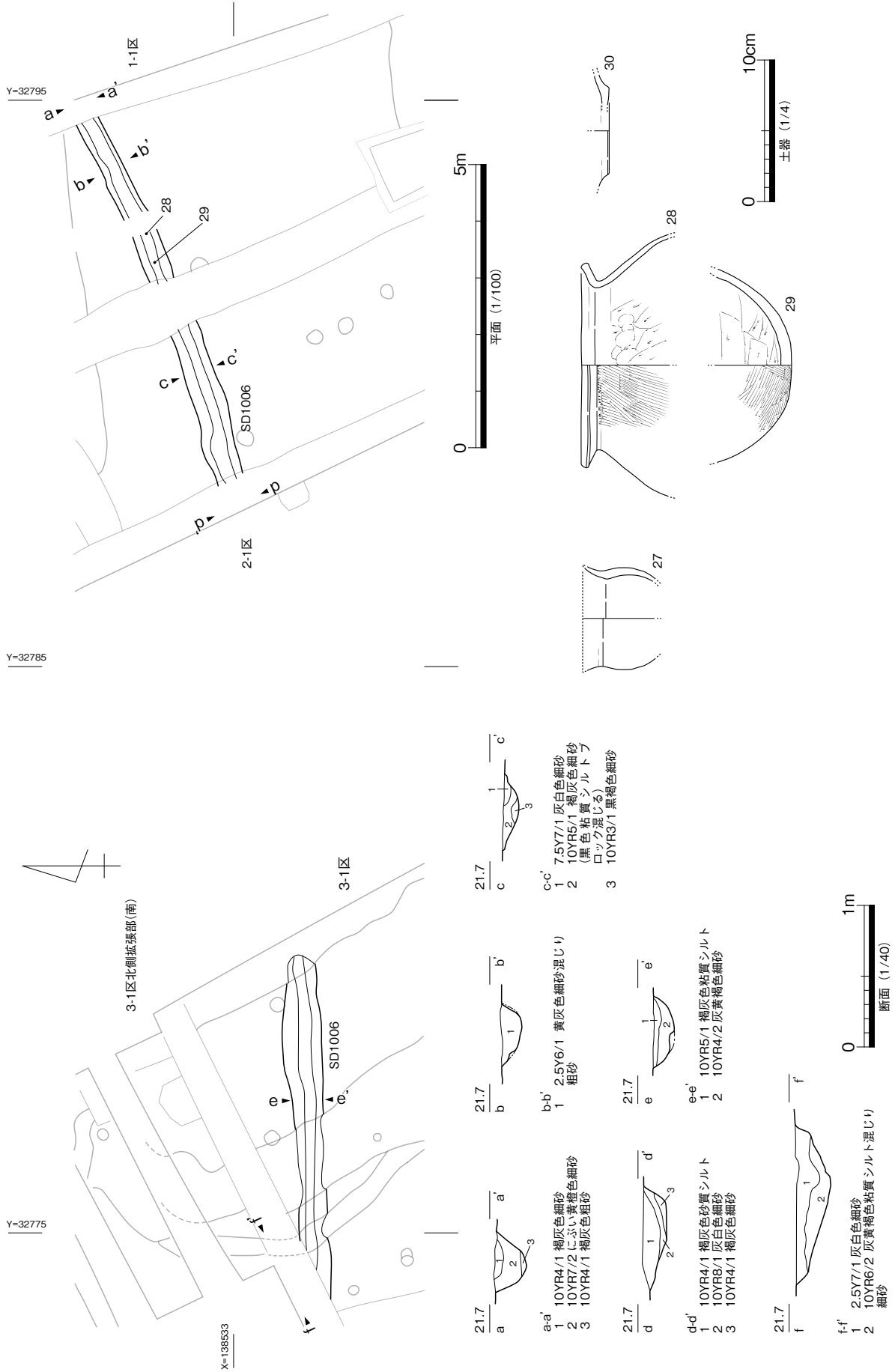


第44図 1-1・2-1区 SD1005 出土遺物

考えられる。(蔵本)

1-1・2-2 北区 SD1008 (第46図)

1-1・2-2 北区第1遺構面で検出した南北溝で、やや南東に弧を描いて配される。南北両端は調査区外へ延長し、3区で延長溝は確認していない。重複関係よりSD1007より先行し、また2-2 北区南側拡張部で延長が確認されず、したがってSD3039より先行する可能性が考えられる。検出面幅0.44～0.61 m、残存深0.16 m前後、断面形は皿状ないし逆台形状を呈する。流路方向は溝底面の標高は、2-2 区西端で21.36 m前後を、1-1 区東端で21.48 m前後をそれぞれ測り、高低差より南西へ流下していた可能性が考えられる。埋土は、記録位置により相違し、1ないし3層に細分され、主に灰色系のシルトや粗砂が堆積していた。遺物は、土師質土器皿等の小片5～6点が出土したのみである。



第45図 1-1・2-1・3-1区 SD1006 平・断面図、出土遺物

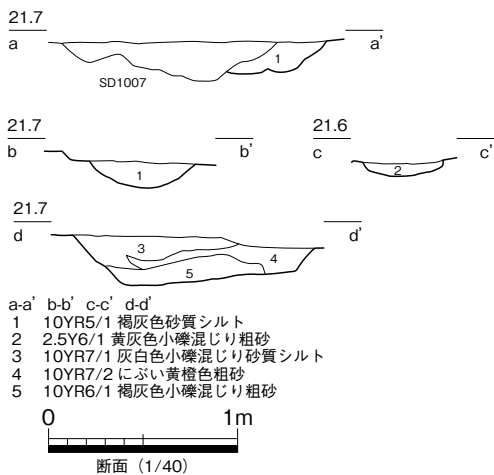
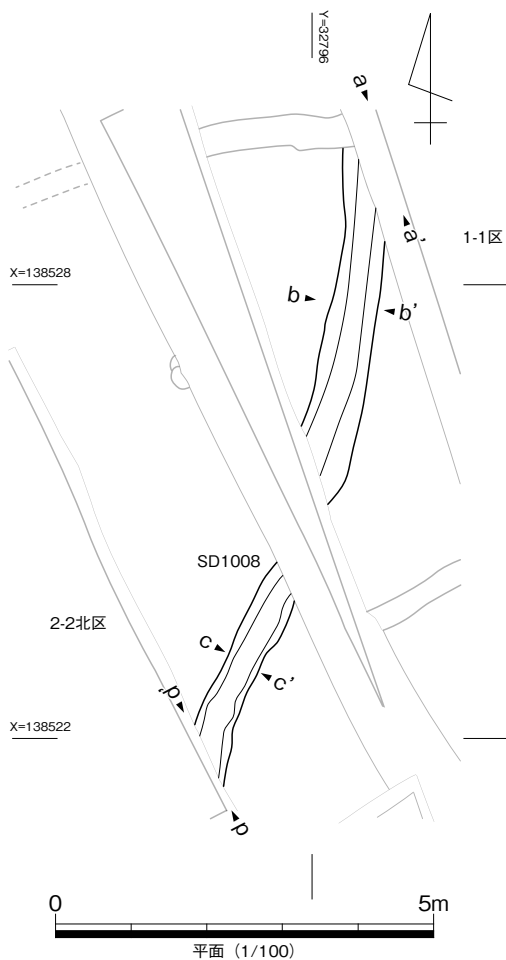
遺構の時期は明らかではないが、第1遺構面で検出したこと、SD3039に先行すること、流路方向から古代以前に遡ると考えられるが、詳細な時期を特定することは困難である。(蔵本)

### 1-3区 SD1019 (第47図)

1-3区第1遺構面北端部で検出した南北溝である。南北両端は調査区外へ延長し、南西側の3-2区で延長溝は確認していない。重複関係からSD3019より後出する。検出面幅0.33m前後、残存深0.25m前後、断面形はU字状を呈する。流路方向はN 13.73° Eに配され、周辺の地割の方向とは合致しない。流路

底面の標高は、1-3区東端で21.34m前後を測る。調査範囲が限られるため、流下方向は特定できない。埋土は黒褐色粘質シルトの単層であった。

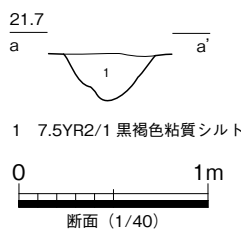
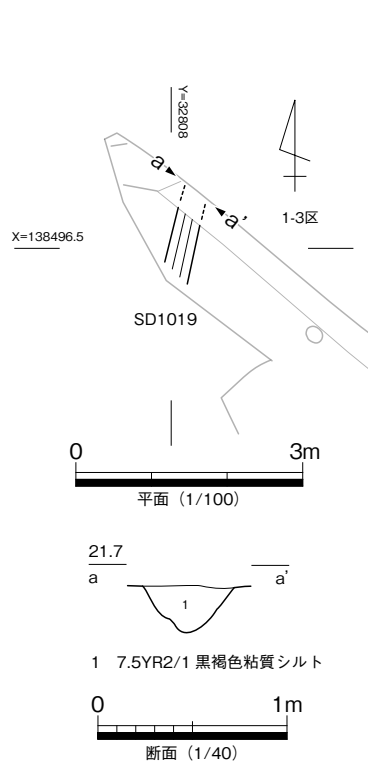
遺物は出土していない。溝の流路方向は、条里型地割の方向と合致せず、その点を重視すれば、古代以前に遡ると考えられるが、詳細な時期を特定することは困難である。(蔵本)



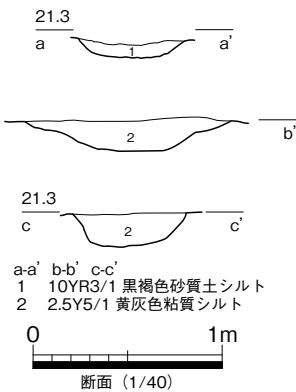
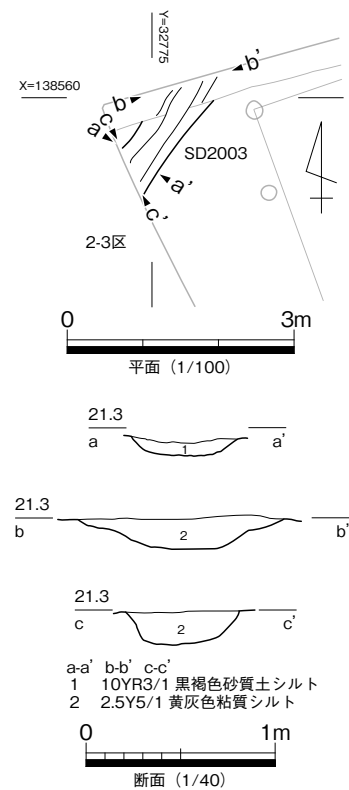
第46図 1-1・2-2北区 SD1008  
平・断面図

### 2-3区 SD2003 (第48図)

2-3区第1遺構面北西隅で検出した直線溝である。南北両端は調査区外へ延長し、約1.4mを調査したにとどまる。市道西側の3区では、相当する延長溝は確認していない。検出面幅0.5m前後、残存深0.09m前後、断面形は浅い皿状を呈する。流路方向はN 33.22° Eに配され、周辺の条里型



第47図 1-3区 SD1019  
平・断面図



第48図 2-3区 SD2003  
平・断面図

地割の方向とは合致しない。溝底面の標高は21.11 m前後で一定し、流下方向は不明である。埋土は黒褐色砂質シルトまたは黄灰色粘質シルトの単層であった。

遺物は出土しておらず、流路方向が条里型地割の方向と合致しないことから、地割施工前の古代以前の溝の可能性が高いと判断されるが、より詳細な時期を特定することは困難である。(蔵本)

### 1-3・3-2区 SD3019 (第49図)

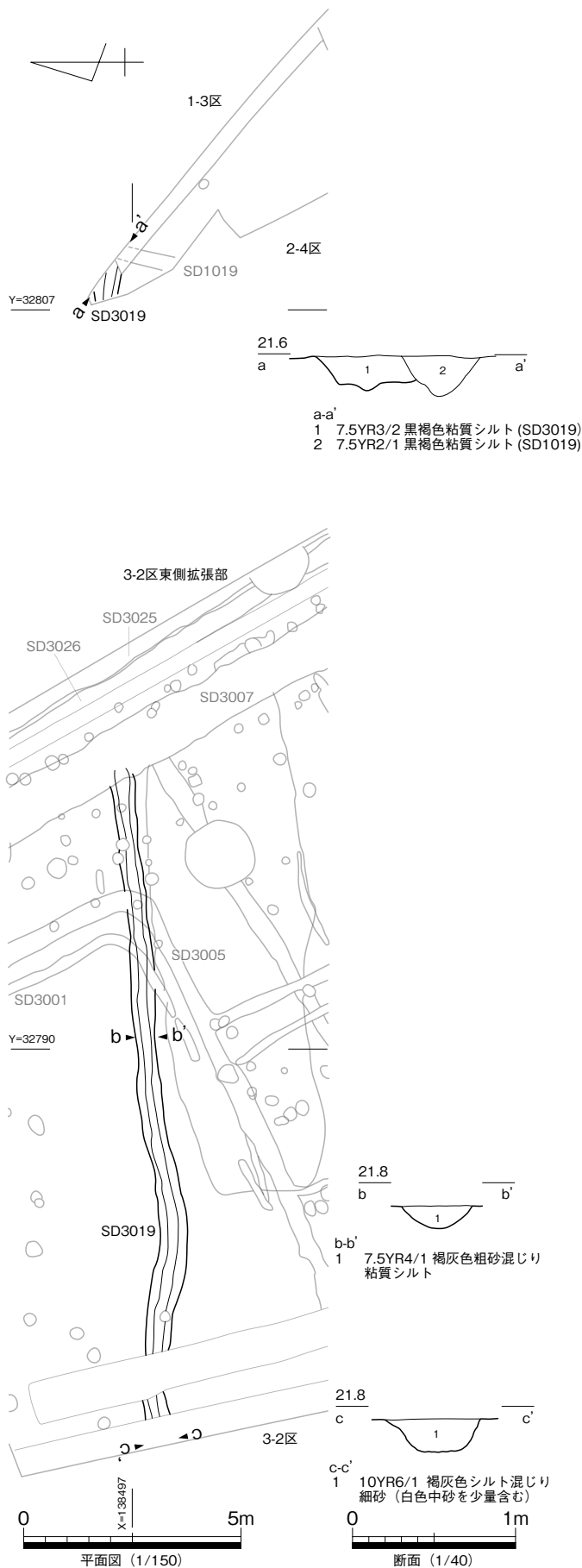
1-3区第1遺構面と3-2区第1遺構面で検出した溝状遺構を、遺構の規模や流路方向等より判断し、一連の遺構として報告する。1-3区北端から3-2区北半を東西走し、両端は調査区外へ延長する。やや蛇行しつつも、概ね正方位に配される。重複関係より、柱穴群やSD1019、SD3001、SD3005、SD3025、SD3026より先行する。検出面幅0.40～0.53 m、残存深0.2 m前後、断面形は概ね逆台形状ないしU字状を呈する。底面の標高は3-2区で21.52 m前後、1-3区東端で21.38 m前後をそれぞれ測り、高低差より東へ流下していたと考えられる。埋土は単層で、褐灰色細砂や粘質シルトが堆積していた。

遺物は、器種不詳の土器小片1点が出土したのみである。溝の流路方向は、条里型地割の方向と合致せず、その点を重視すれば、古代以前に遡ると考えられるが、詳細な時期を特定することは困難である。(蔵本)

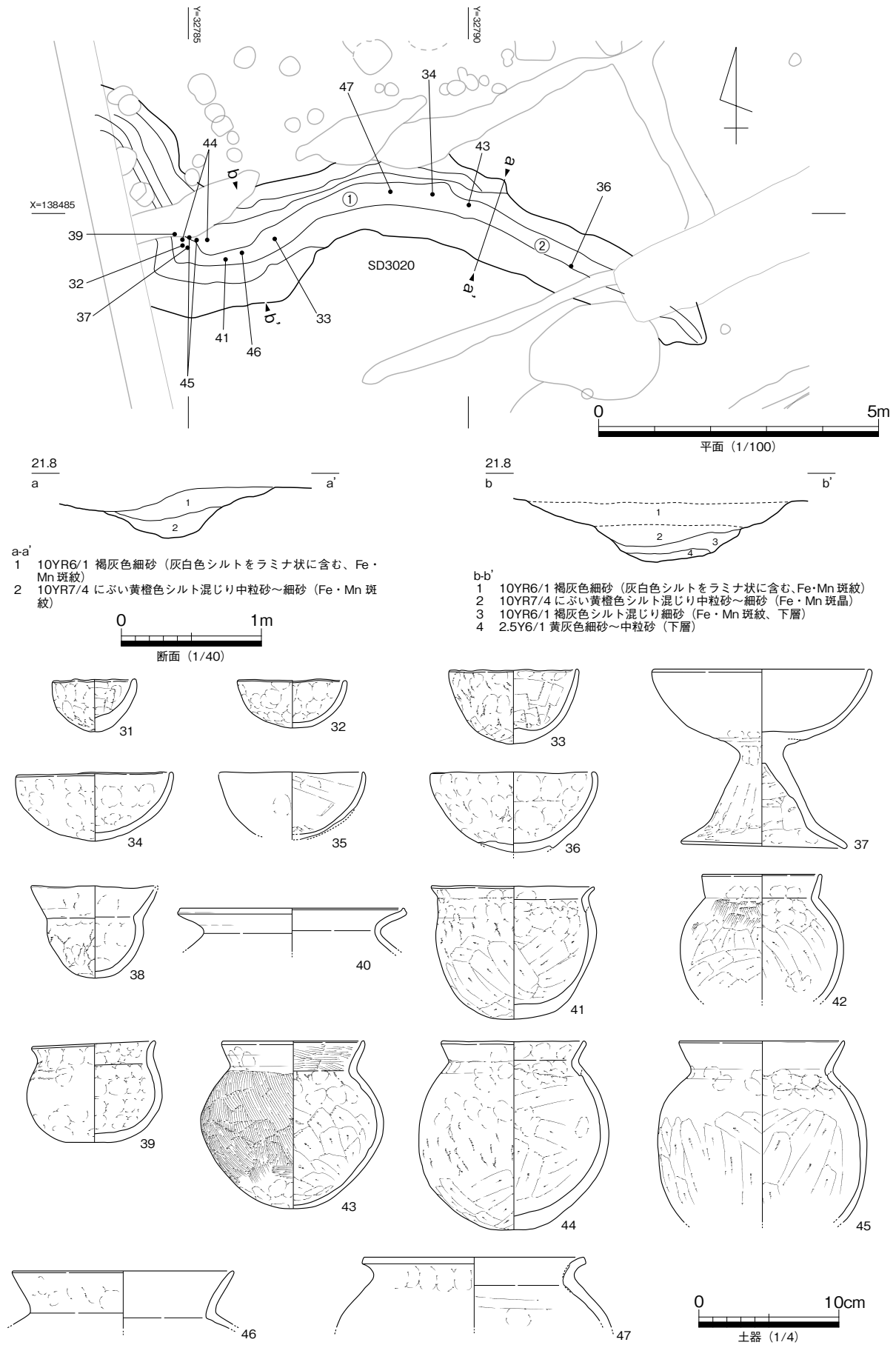
### 3-2区 SD3020 (第50図)

3-2区第1遺構面南西部で検出した溝である。流路方向は大きく蛇行を繰り返しながら、概ね南-北西方向となる。南側は市道下を経て4区方向へ、西側は西側隣接地の水田下へと延長する。

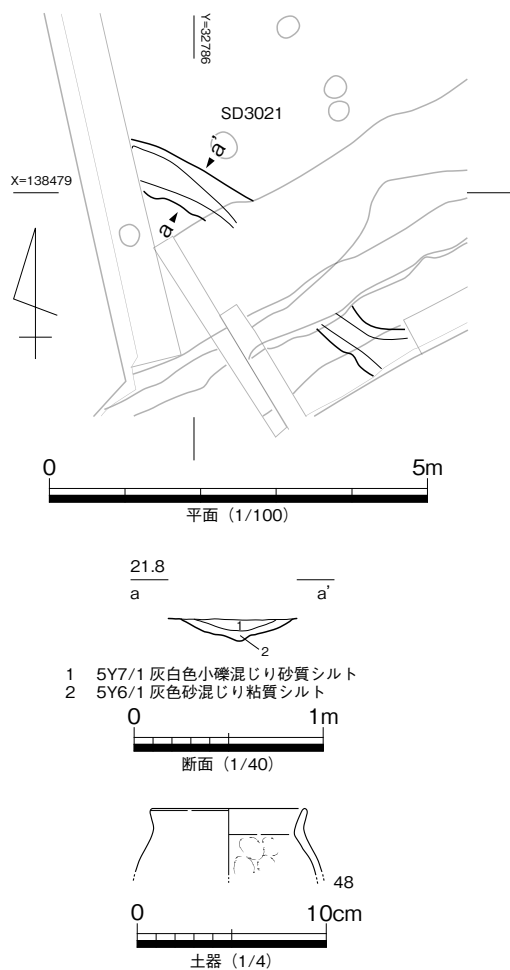
重複関係から、SD3005・SD3011・SD3016・



第49図 1-3・3-2区 SD3019 平・断面図



第50図 3-2区 SD3020 平・断面図、出土遺物



第 51 図 3-2 区 SD3021 平・断面図、出土遺物

重複関係から、SD3013・SD3014 に先行する。

最大幅 0.61m、最小幅 0.45m、深さ 0.12～0.23m を測り、断面形は皿形となる。底面標高は測定箇所により大きく差があるが、南壁で 21.5m、a-a' 断面で 21.4 m、西壁で 21.5m とほぼ一定である。埋土は上下 2 層に細分でき、上層は灰白色のシルトを主体に細粒砂・少量の礫が混じる。下層は上層と同質の灰白色シルト主体だが、上層と比較してシルトがちで粘性が強い。

遺物は 48 のほか、器種特定不能な土師器細片が認められる。48 は下層出土の土師器甕である。磨滅が著しく、内外面ともに調整は判然としない。口縁部の形状から、古墳時代前期と推定した。

詳細な時期の比定は出土遺物の少なさから困難だが、流路方向が条里方向と一致しない点、48 から、古墳時代の遺構とした。(益崎)

### 1-2・2-2・3-1 区 SD3039 (第 52～54 図)

1-2・2-2 北区第 1 遺構面と 3-1 区第 1 遺構面、3-1 区北側拡張区(北)第 1 遺構面で検出した溝を、規模や流路方向等より判断し、一連の遺構として報告する。1-2・2-2 区から 3-1 区にかけて平面 L 字状に配された溝で、1-2、2-2、3-1 区で検出した東西溝の東端は調査区外へ延長し、3-1 北拡張区(北)で検出した南北溝の北端は、2-1・2-3 区で延長溝が確認されておらず、おそらくは遺構面の削奪により滅失

SX3003 に先行する。

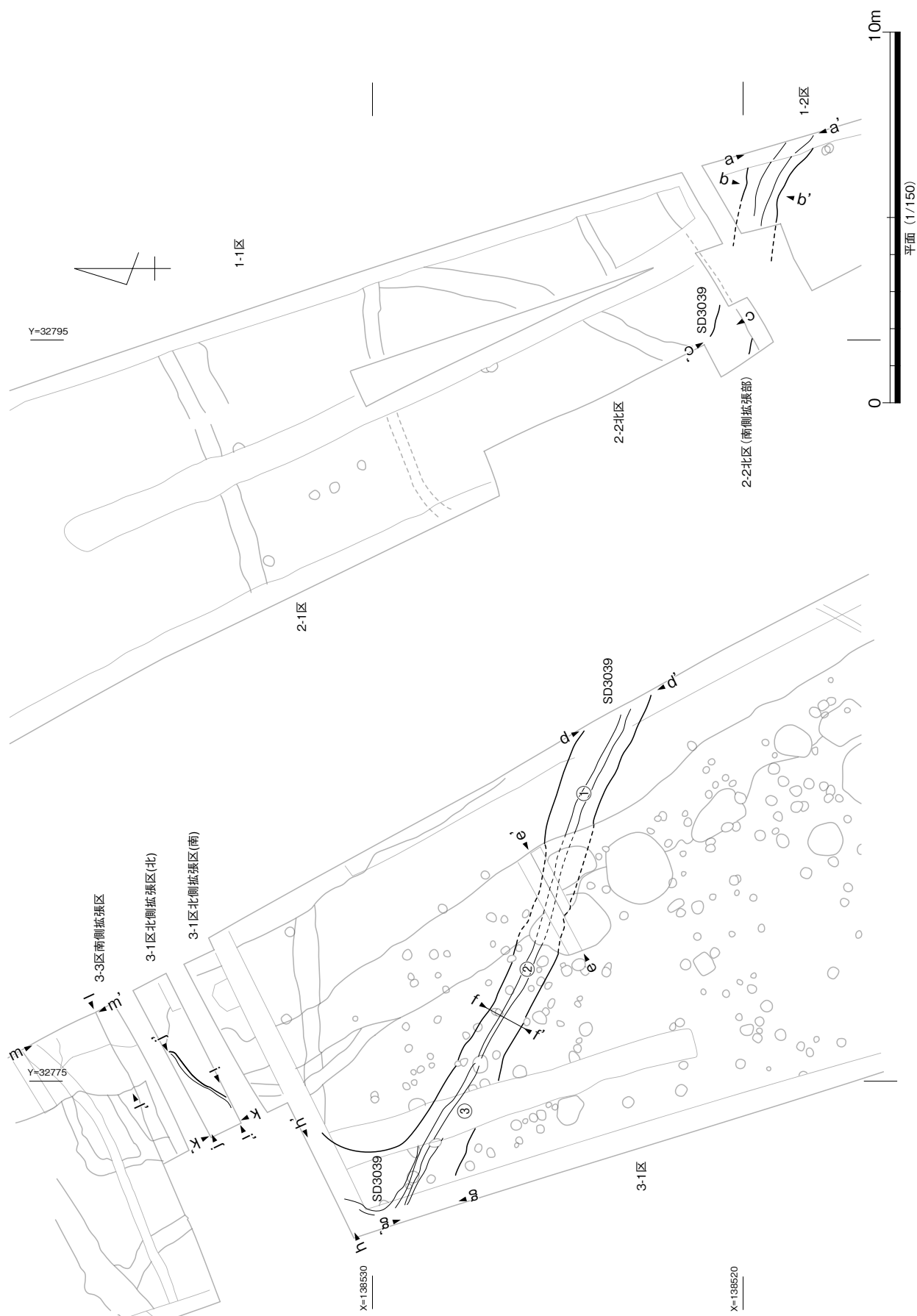
最大幅 3.12m、最小幅 0.98m、深さ 0.36～0.43m を測り、断面形は皿形から逆台形となる。底面標高は測定箇所により大きく差があるが、西壁で 21.2m、a-a' 断面で 21.1m を測り、周辺地形を踏まえると北西から南東方向に流下する可能性がある。埋土は褐灰色～黄灰色の細砂～中粒砂を主体とし、各層中に明瞭なラミナが認められる。

遺物は図示のほか、器種特定不能な土師器細片が出土した。31～36 は粗製の土師器小形鉢である。37 は土師器高杯。杯部下位に明瞭な段は認められず、径の小さい脚接合部から脚柱部はやや膨らみながら屈曲点を経て裾部は短く開く。38～47 は土師器甕および壺である。41・42・44・45 の胴下半部には、内外面ともにヘラケズリが認められる。

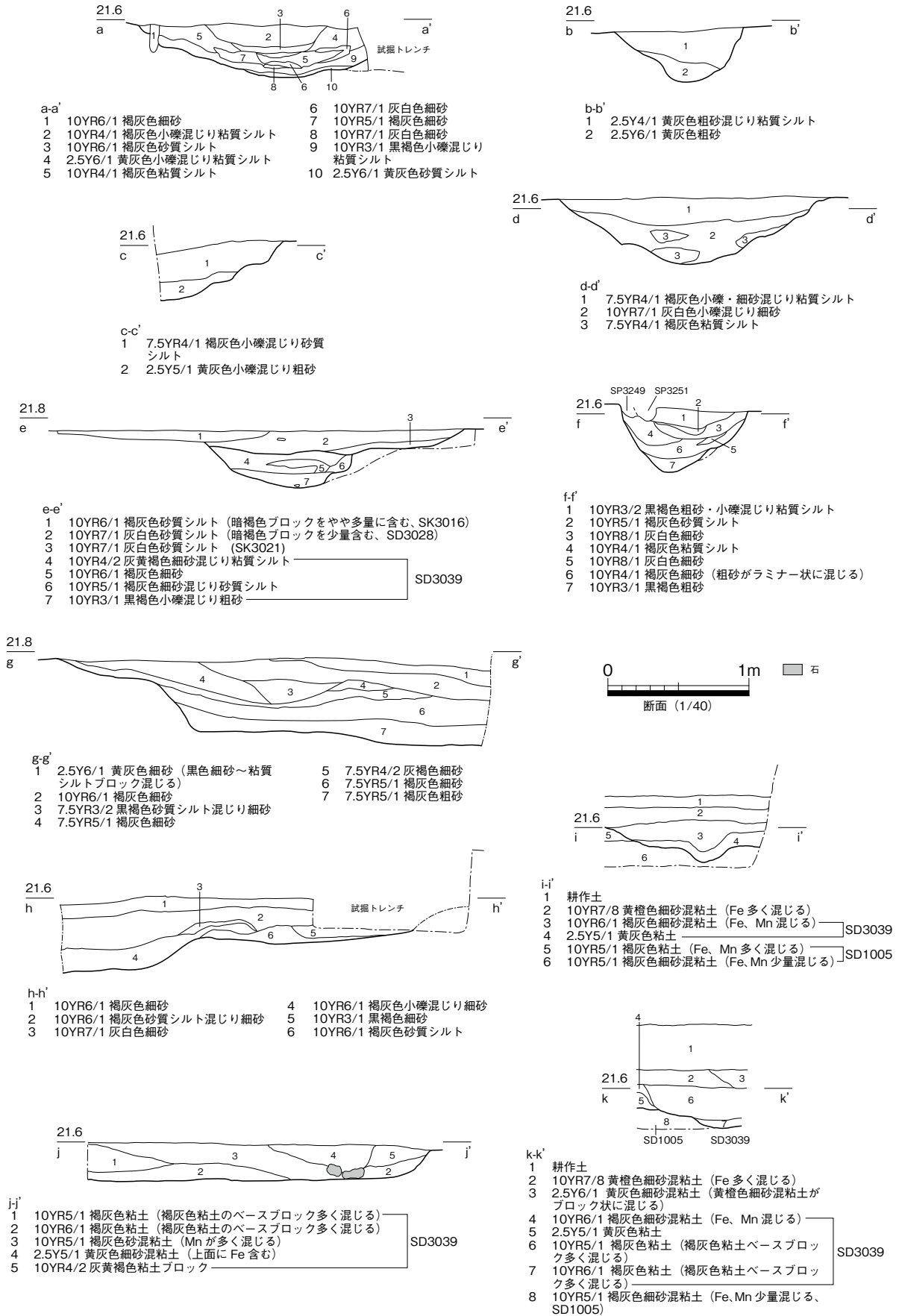
38～47 から、古墳時代前期を中心とした時期に位置付けられる。(益崎)

### 3-2 区 SD3021 (第 51 図)

3-2 区第 1 遺構面南西端部で検出した溝である。緩く蛇行しつつ、流路方向は北西－南東方向となる。SD3020 と同様に、南側は市道下を経て 4 区方向へ延長し、西側は西側隣接地の水田へと延長する。

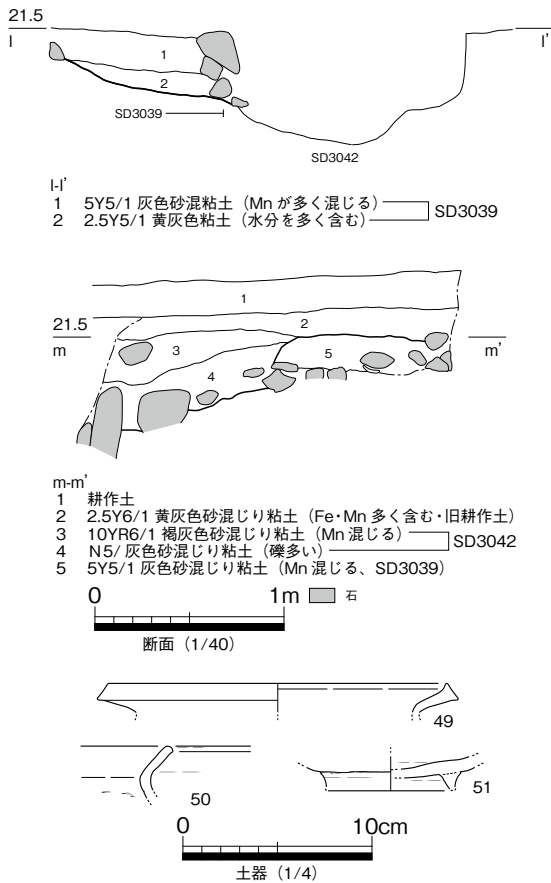


第52図 1-2・2-2・3-1区 SD3039 平面図



第 53 図 1-2・2-2・3-1 区 SD3039 断面図 1





第54図 1-2・2-2・3-1区 SD3039 断面図2  
・出土遺物

した可能性が高い。調査区北半部をL字状に区画する、区画溝の可能性を考える。なお、3-1北拡張区(北)で検出した南北溝部分は、当初は隣接する別の溝と同じ遺構番号を付して掘り下げており、遺物が混在した可能性がある。東西溝の延長31m以上、南北溝約7mを調査した。重複関係より、柱穴群やSK3016、SK3021、SD3028、SD3041、SD3042より先行する。検出面幅1.05～1.42m、残存深0.40m前後、断面形はU字状や逆台形状等を呈し、記録位置により一定しない。溝底面の標高は、3-1区西端で21.34m前後、3-1区東端で21.22m前後、1-2区東端で21.19m前後をそれぞれ測り、高低差より東へ流下していたと考えられる。埋土は2～9層に細分され、記録位置により精粗があり、また一部に改修溝の可能性のある堆積層も認められるが、溝全域で確認された訳でもなく詳細は不明である。下位層には主に灰色系細～粗砂が堆積し、溝機能時の堆積層と考えられる。

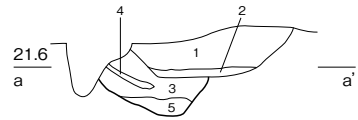
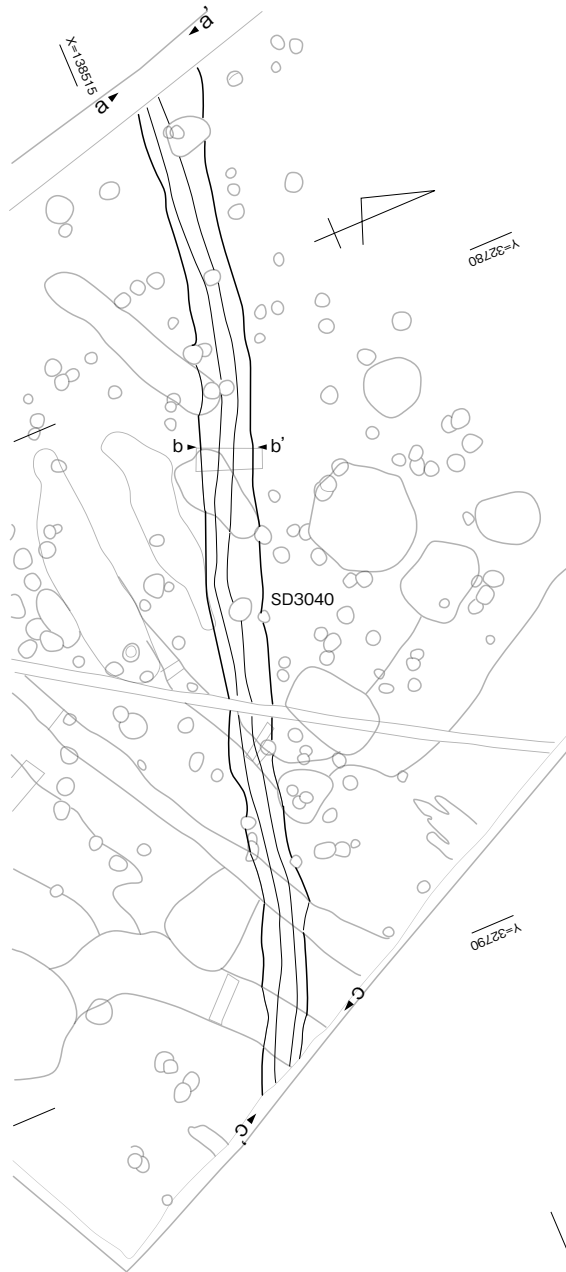
遺物は、図示した以外に土師質土器の小片、器種不詳の土器小片が出土した。49・50は弥生土器甕口縁部。49は口縁部をツマミ上げている。50は全体に磨滅が激しい。51は土師質土器碗。器表面に鉄分が沈着し調整等の観察は困難だが、199などと同様の杯形碗とみられ中世前半の所産である。

遺構の時期は、第1遺構面で検出したこと、溝の流路方向から古墳時代以降古代以前と考えられる。遺物はいずれも混入と考えられる。(蔵本)

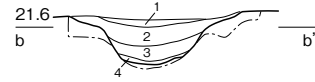
#### 1-2・3-1区 SD3040 (第55図)

1-2区第1遺構面で検出した溝と3-1区第1遺構面で検出した溝を、遺構の規模や流路方向、埋土等より判断し、一連の遺構として報告する。1-2区から3-1区にかけて、やや蛇行しながら東西走る直線溝である。東西両端は調査区外に延長し、約27.5mを調査した。SD3039の南約9.1mを並走し、流路方向より両溝が有機的な関係にあることが想像される。重複関係より、柱穴群やSK3014、SD3030、SD3031、SD3033、SD3036より先行する。検出面幅0.77～0.87m前後、残存深0.16m前後、断面形は皿状を呈する。流路方向は概ねN79.63°Wに配される。溝底面の標高は21.38m前後を測り、1-2区と3-1区部分の溝底面の標高に大きな差は認められないことから、流下方向を特定することは困難と判断した。埋土は2層に細分され、灰色系シルトがレンズ状に堆積していた。遺物は、掲載遺物の他は、器種不詳の土器小片がわずかに出土したのみである。52は土師質土器の杯。全体を回転ナデで調整する。佐藤編年中世II-1～3期の幅で捉えられ、混入と考えられる。

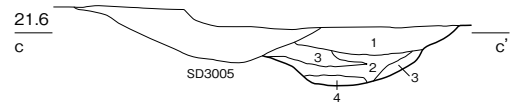
遺構の時期は流路方向から古代以前と考えられるが、詳細な時期は不明である。(蔵本)



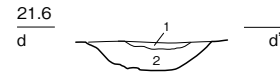
- a-a'
- 1 5Y6/1 灰色細砂
  - 2 5Y6/1 灰色粗砂
  - 3 10YR4/1 褐灰色粘質シルト
  - 4 10YR5/1 褐灰色粗砂
  - 5 10YR6/1 褐灰色粗砂
- SD3040



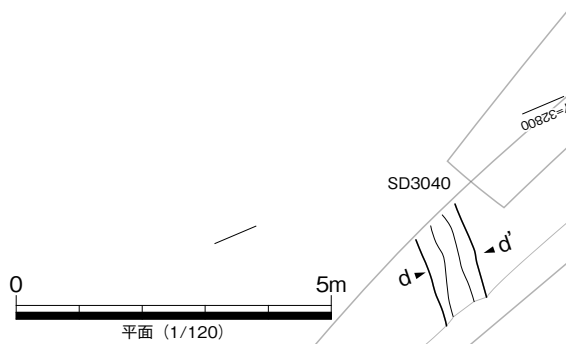
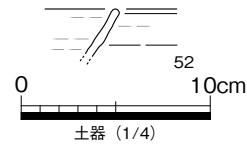
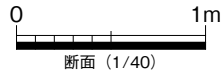
- b-b'
- 1 10YR5/2 灰黄褐色粗砂・小礫混じり砂質シルト
  - 2 10YR5/1 褐灰色細砂
  - 3 10YR6/1 褐灰色細砂
  - 4 10YR8/1 灰白色粘質シルト



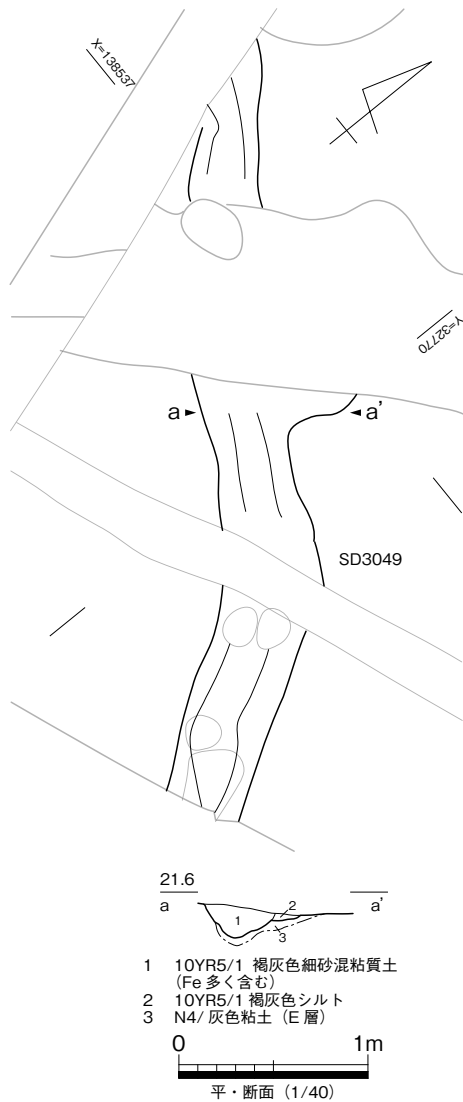
- c-c'
- 1 10YR4/1 褐灰色小礫混じり粘質シルト (上部に Mn 粒多く含む)
  - 2 10YR7/1 灰白色細砂
  - 3 10YR4/1 褐灰色粘質シルト
  - 4 10YR4/1 褐灰色粘質シルト (にぶい黄橙色粘質シルトブロックが混じる)



- d-d'
- 1 5Y7/1 灰白色砂質シルト
  - 2 2.5Y4/1 黄灰色粗砂混じり粘質シルト



第 55 図 1-2・3-1 区 SD3040 平・断面図、出土遺物



第56図 3-3区 SD3049  
平・断面図

### 3-3区 SD3049 (第56図)

3-3区南西部で検出した溝である。西端と南端は遺構外へ延長し、隣接する調査区では確認できていない。重複関係よりSD1001、SP3646に先行する溝である。検出面幅0.4～0.7m、残存深0.18mをそれぞれ測り、断面形は浅いU字状を呈する。溝底面の標高は北端部で21.06m前後、南端部で21.02m前後をそれぞれ測り、高低差より南へ流下していた可能性が高い。埋土は褐灰色シルト～粘質土が堆積している。

遺物は図示していないが、土師質土器の小片が出土しているのみである。遺物も乏しく、切り合い関係と流路方向より古代以前に位置付けられる可能性が高いものの詳細な時期を特定することは困難である。(溝上)

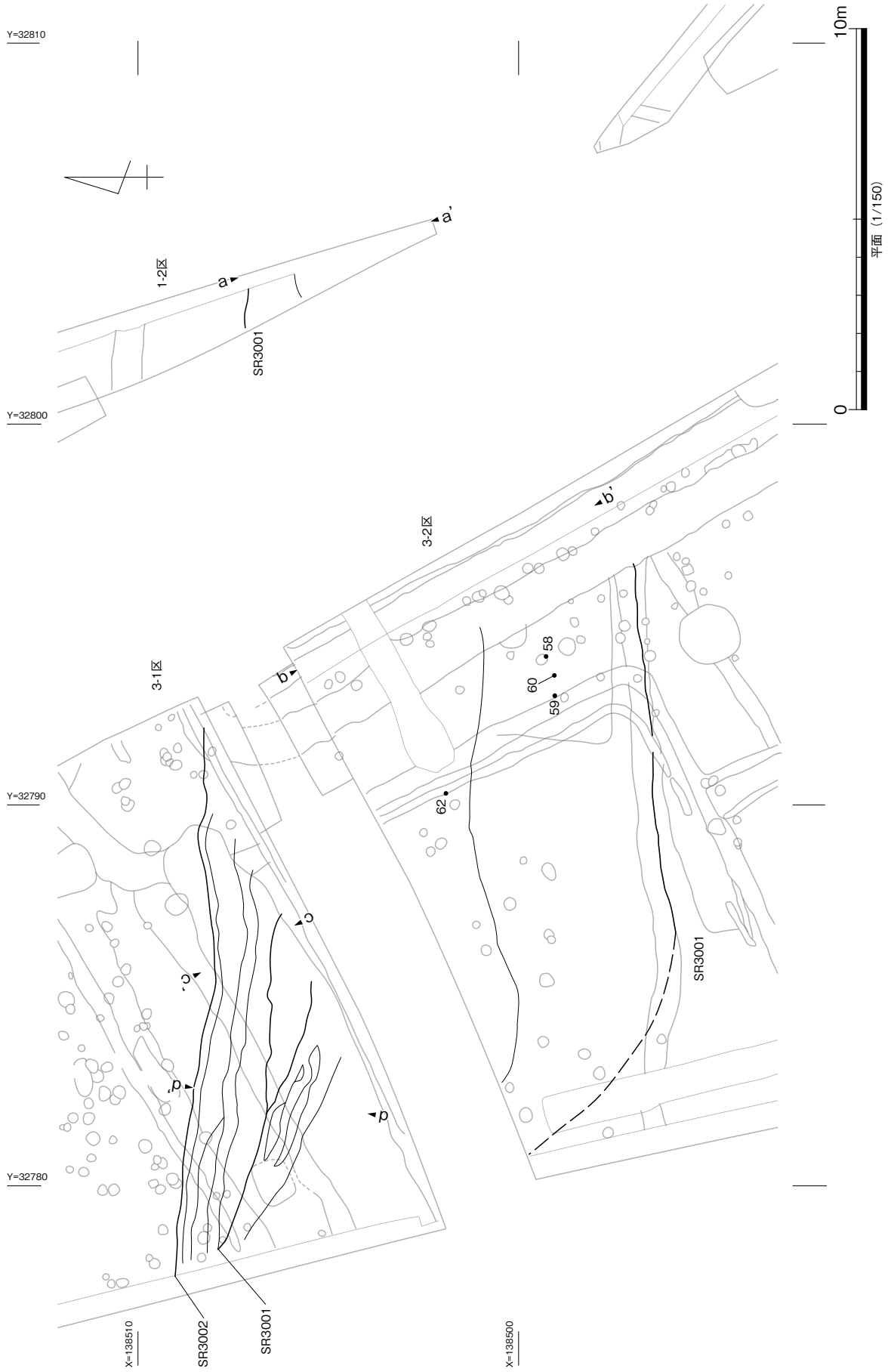
### ②自然河川

#### 1-2・3-1・3-2区 SR3001 (第57～59図)

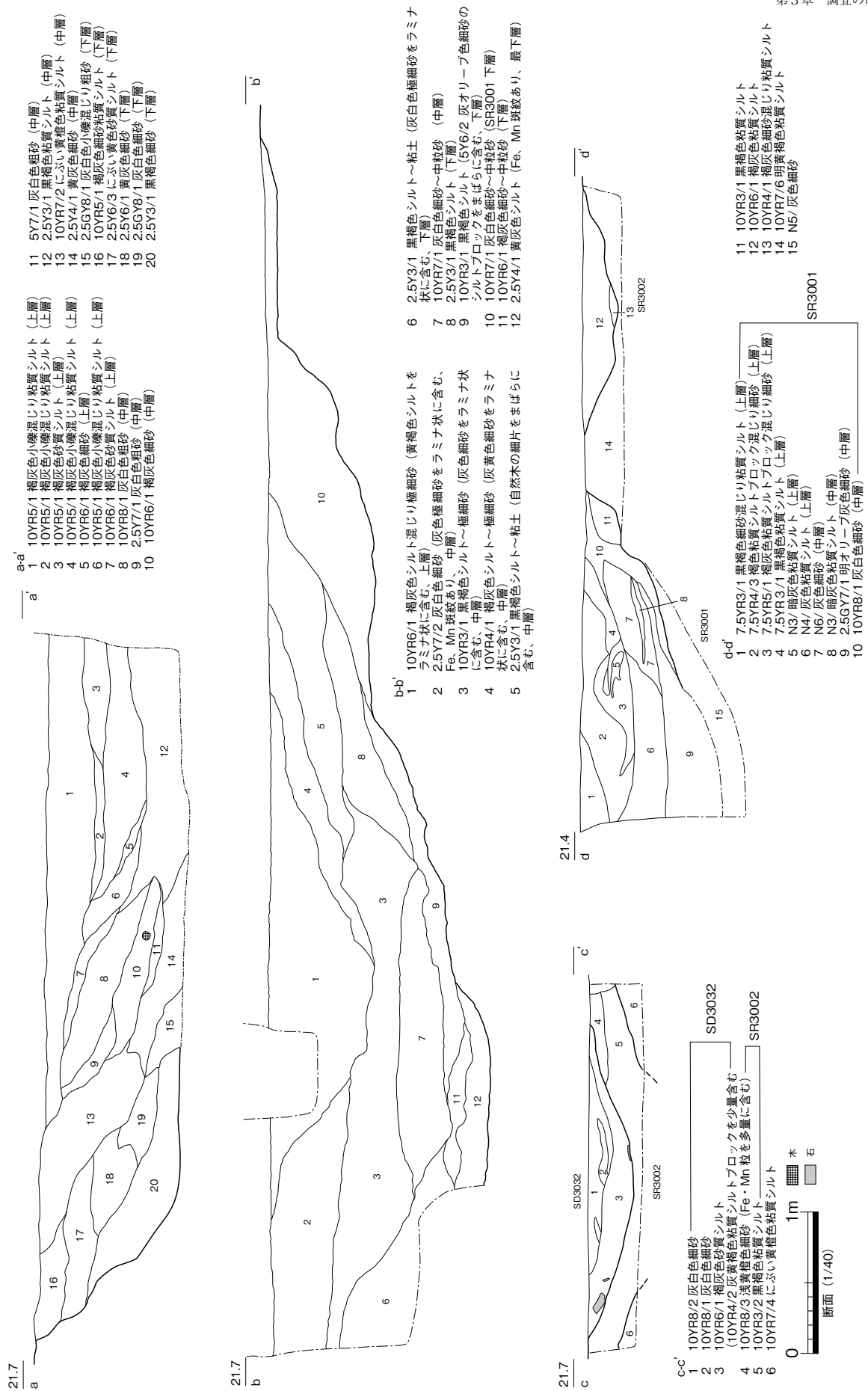
3-1・3-2区第1遺構面から1-2区第1遺構面南端に東西走する自然河川で、東西両端は調査区外へ延長する。重複関係より、柱穴群やSK3023、SD3001、SD3005、SD3007、SD3025、SD3026、SD3030、SD3032、SD3037より先行し、SR3002より後出する。検出面幅5.4m前後、残存深1.16m以上、断面形はやや歪な逆台形を呈するとみられる。流路底面の標高は、記録位置により最大0.4m前後の起伏が認められ、流下方向を特定することが困難だが、遺跡北側を東へ流下する大東川の旧流路だとすれば、流下方向は東であった可能性が高い。埋土は1区と3区で相違するものの、概ね褐色

系ないし灰色系のシルト及び細～粗砂がラミナ堆積し、基本的に上方級化が観察される。また、1-2区東壁(第10図)での堆積状況から、本流路は4～5条以上の小流路単位(上層～最下層)に細分され、検出面幅内で若干流路位置を変更しながら、埋没が進行したことが考えられる。

遺物は、図示した以外に弥生土器や古式土師器の甕や鉢等の小片が40～50点と近世焼締陶器播鉢の小片1点、木製品3点が出土した。53は上層より出土した土師器壺である。形状から古墳時代と推定できるが、中層出土遺物の年代観と矛盾しており、混入の可能性はある。54～57は中層出土遺物である。55～57は用途不明の木製品である。55は板状の木製品で、図下方は厚さ0.8～1cm程に薄く削り出す。何らかの部材と考えられるが、器種の特定には至らない。56は板材の図下端部を、鉄製の斧状工具で両切刃状に削り出す。出土位置が近接しており、加工痕も類似することから、55と同一製品の別部材の可能性はある。57は板材の先端部のみを表面側から杭状に削り出す。58～61は下層出土遺物である。58～60は土師器高杯である。いずれも口縁部は直線的に外反し、脚柱部はわずかに膨らみをもち、脚裾部は屈曲して短く開く。いずれもほぼ完形で他の同一遺構内出土遺物と比べて磨滅も少なく、出土位置付近から投棄された可能性が想定される。61は土師器小型丸底壺の口縁部片である。器表面の剥落

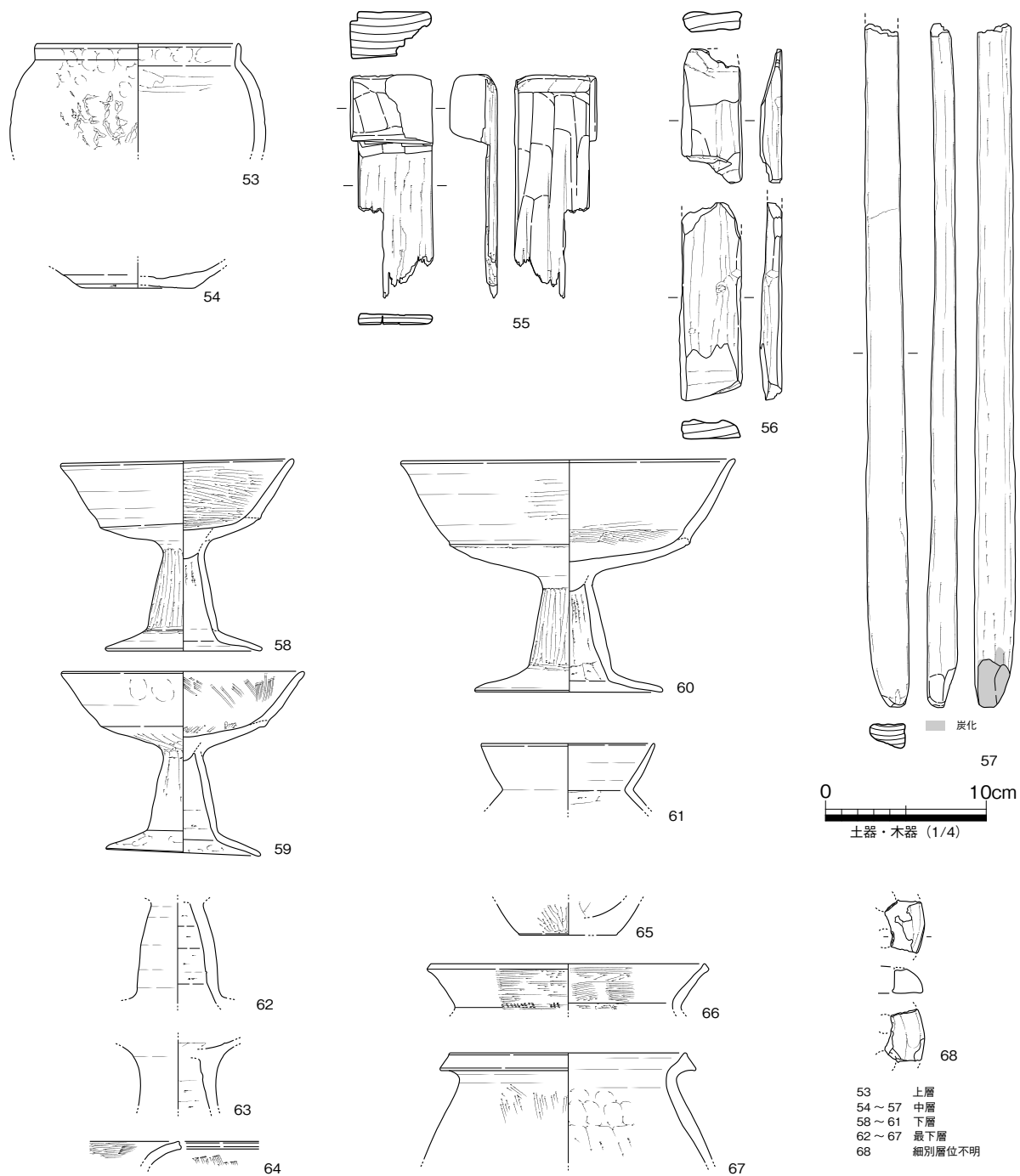


第57図 1-2・3-1・3-2区 SR3001 SR3002 平面図



第58図 1-2・3-1・3-2区 SR3001 SR3002 断面図

により、調整は判然としない。62～67は最下層出土遺物である。62・63はいずれも磨滅の著しい小片で全形不明だが、土師器高杯の脚部片として図化した。62は脚柱部にやや強い膨らみをもつ。64は土師器壺のまたは甕の口縁部片か。65は弥生土器甕の底部片。体部は平底の底部より丸みをもって立ち上げる。66は土師器甕の口縁部片。口縁部はくの字状に外反し、口縁端部内面は上方に肥厚する。67は弥生土器甕の口縁部片である。口縁端部は上下に拡張する。口縁端面の凹線の有無は、磨滅と剥落により判別できない。内外面ともに磨滅が著しく調整は判然としないが、わずかにハケ目状の線状痕が認められる。68は、径約8cmに復元される半球形状の土製品である。形状は紡錘車に近似するが、復元径は通有の紡錘車より大きく、残存部に2孔の上部より穿った径1cm程度の円孔が確認され、用途は不明



第59図 1-2・3-1・3-2区 SR3001 出土遺物

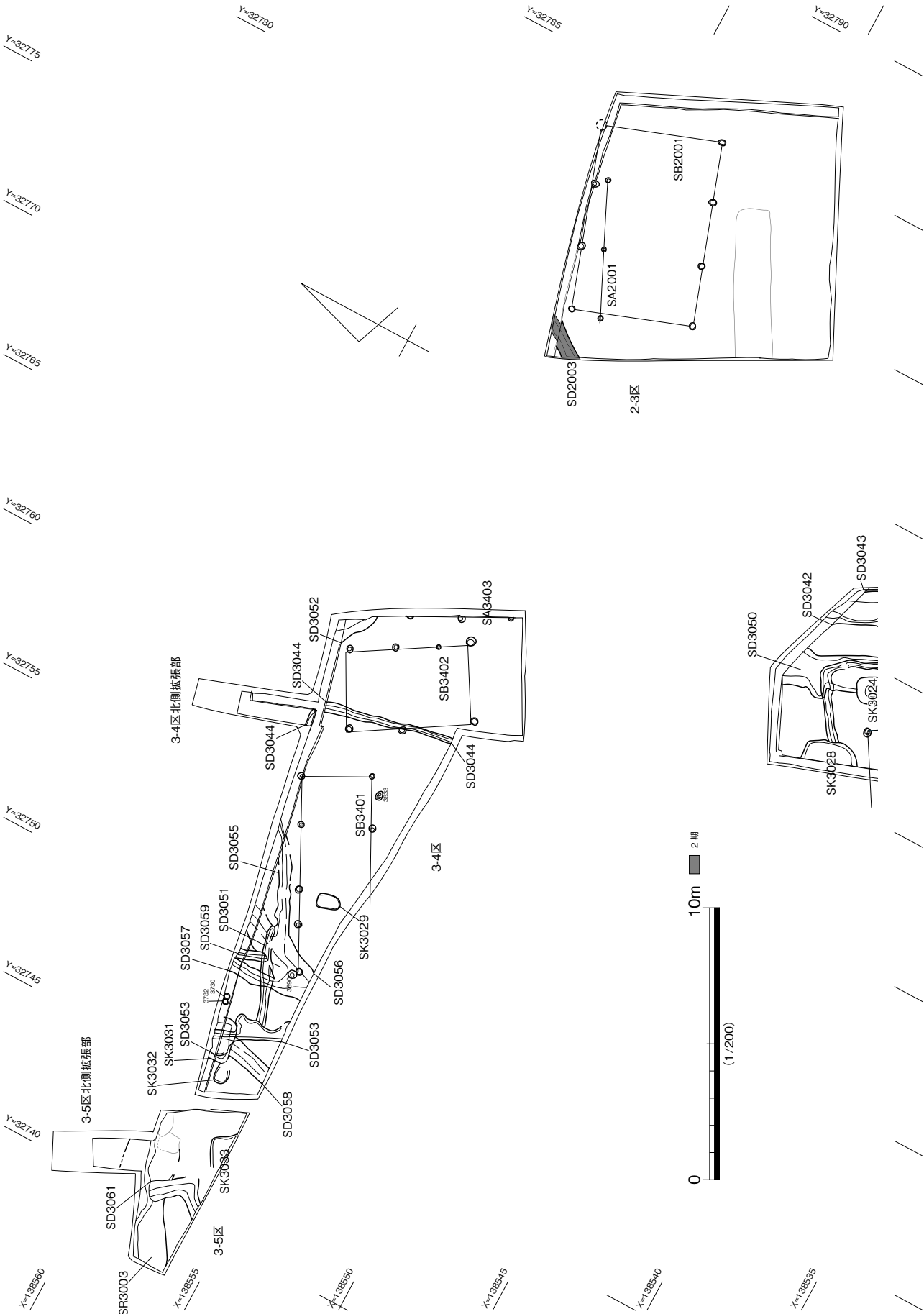
である。胎土中に角閃石や雲母細粒を含み、高松平野中央部もしくは丸亀平野西部地域からの搬入品の可能性がある。

1点のみ出土した近世陶器片は混入の可能性が高く、SR3004との重複関係と他の遺物より弥生時代後期後半から古墳時代にかけて徐々に埋没が進行し、後述の鉄鉢形須恵器鉢(127)の存在から最終埋没は8～9世紀代前後と理解した。(蔵本・益崎)

### 3-1 区 SR3002 (第 57・58 図)

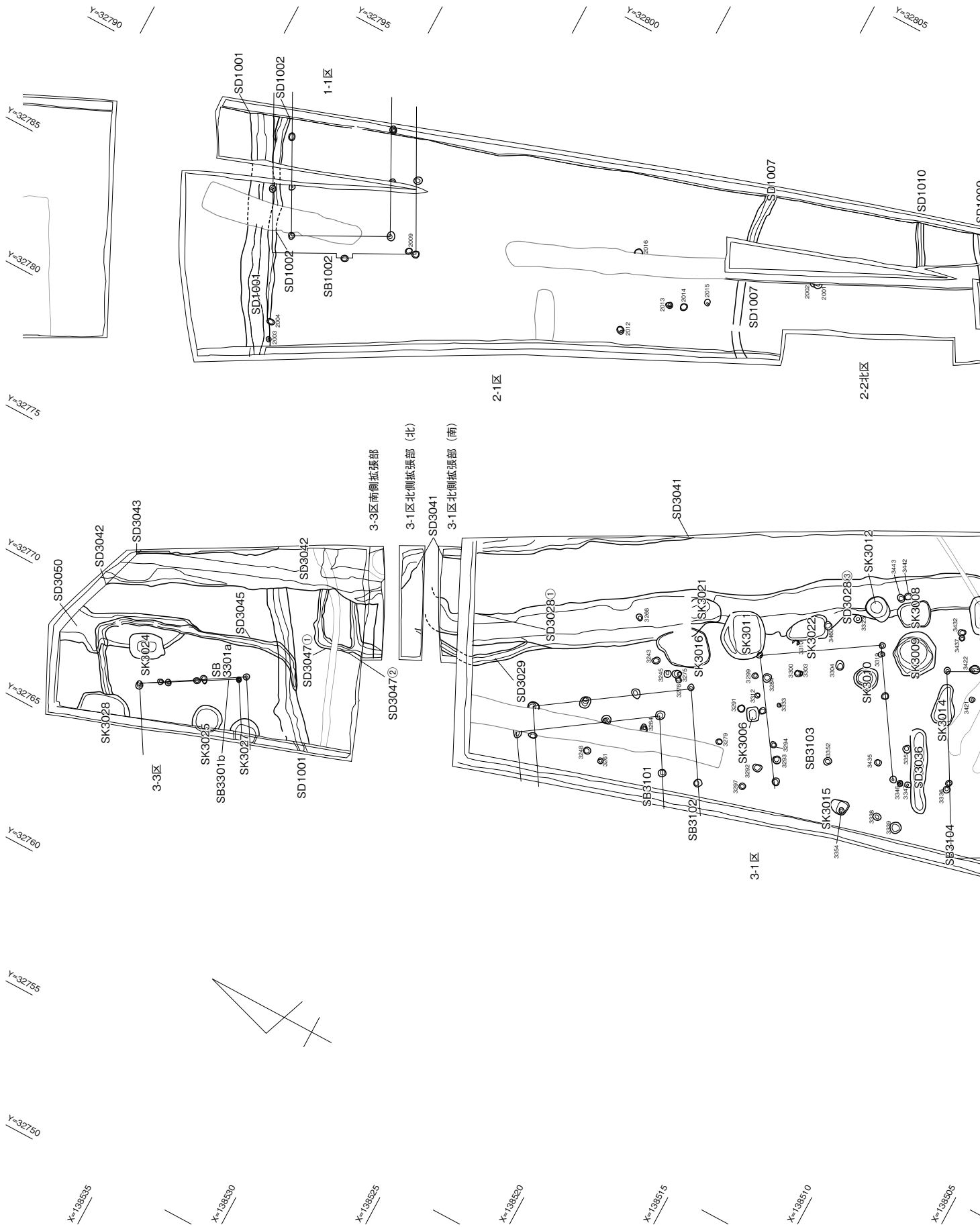
3-1 区南端で検出した東西流する自然河川である。大部分がSR3001に切られ、調査区内西側では流路の大部分が消失する。幅は推定で2.6 m以上、残存深はc-c'断面で推定0.6 m以上を測る。埋土は記録位置により相違するが、下位に褐灰色～黒褐色のシルト、上位には西半部で黄橙色系細砂が認められる。

遺物は出土せず詳細な時期の比定は困難だが、SR3001との重複関係から、古墳時代前期以前に埋没したものと推定できる。(益崎)

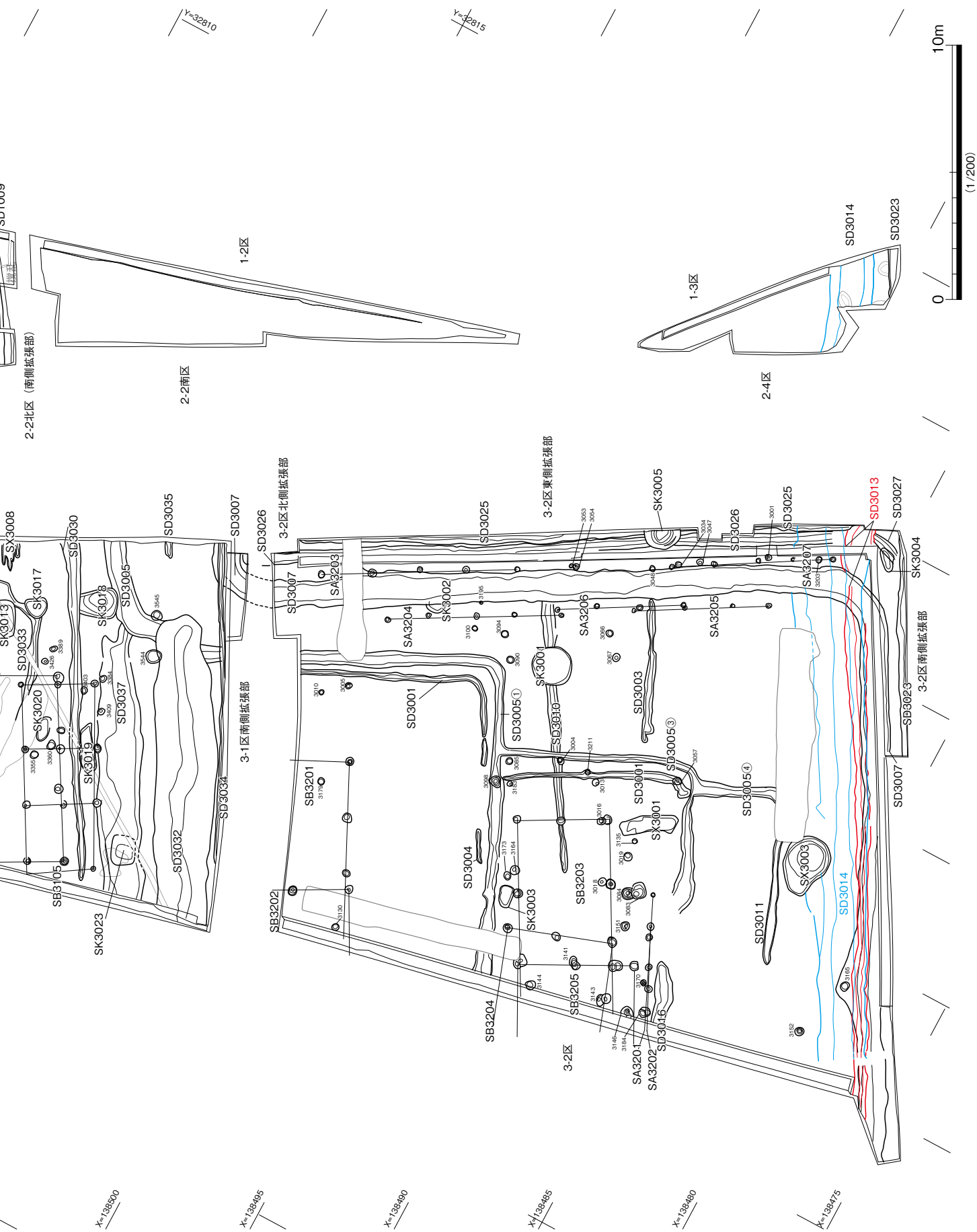


第60図 2・3区遺構配置図（中世以降）1





第61図 1~3区



遺構配置図 (中世以降) 2

### 3 中世以降の遺構・遺物

#### ①掘立柱建物・柵列

##### 1-1・2-1 区 SB1002 (第 62 図)

1-1・2-1 区北半部で検出した掘立柱建物である。複数年度にまたがり調査したため、調査時には建物としての復元には至らず、図上で梁行 1 間 (3.90 m)、桁行 2 間 (3.92 m) 以上、床面積 15.29㎡以上の東西棟の側柱建物として復元した。梁行の柱間は桁行と比して長く、柱穴の規模から柱材も細身 (径 0.1m 程度) と考えられることから、本来は梁行 2 間であった可能性が高い。また図に示したように、北東隅柱等の一部の柱穴を欠くものの、その他の柱穴は身舎の柱配置と整合性が高く配されることから、少なくとも北・西・東の 3 面に庇を伴う可能性が想定される。重複関係や出土遺物の点から、SD1001、SD1002、SD1005 より後出する。建物主軸は N 62.19° E に配され、概ね丸亀平野の条里型地割の方向と合致する。身舎の柱穴は、長径 0.25 ~ 0.34 m の略円ないし楕円形を呈し、残存深 0.16 ~ 0.35 m、断面形は箱形ないし逆台形状を呈する。また、柱通りはよく揃うが、桁行方向の柱間間隔は 1.95 ~ 2.16 m と一定せず、柱穴底面の標高は、21.25 ~ 21.35 m と若干の高低差を認める。なお、各柱穴に柱痕は認められず、根石等も出土していない。

遺物は、図示した以外に、SP1017 と SP2017 より器種不詳の土器小片 1 点が、SP1016 より器種不詳の土師質土器小片 2 点がそれぞれ出土したのみである。69 は SP2008 より出土した土師質土器碗である。外面には回転ミガキ、内面には分割ミガキを施す。出土遺物より、佐藤編年中世 I-3 期に位置付けられる。(蔵本)

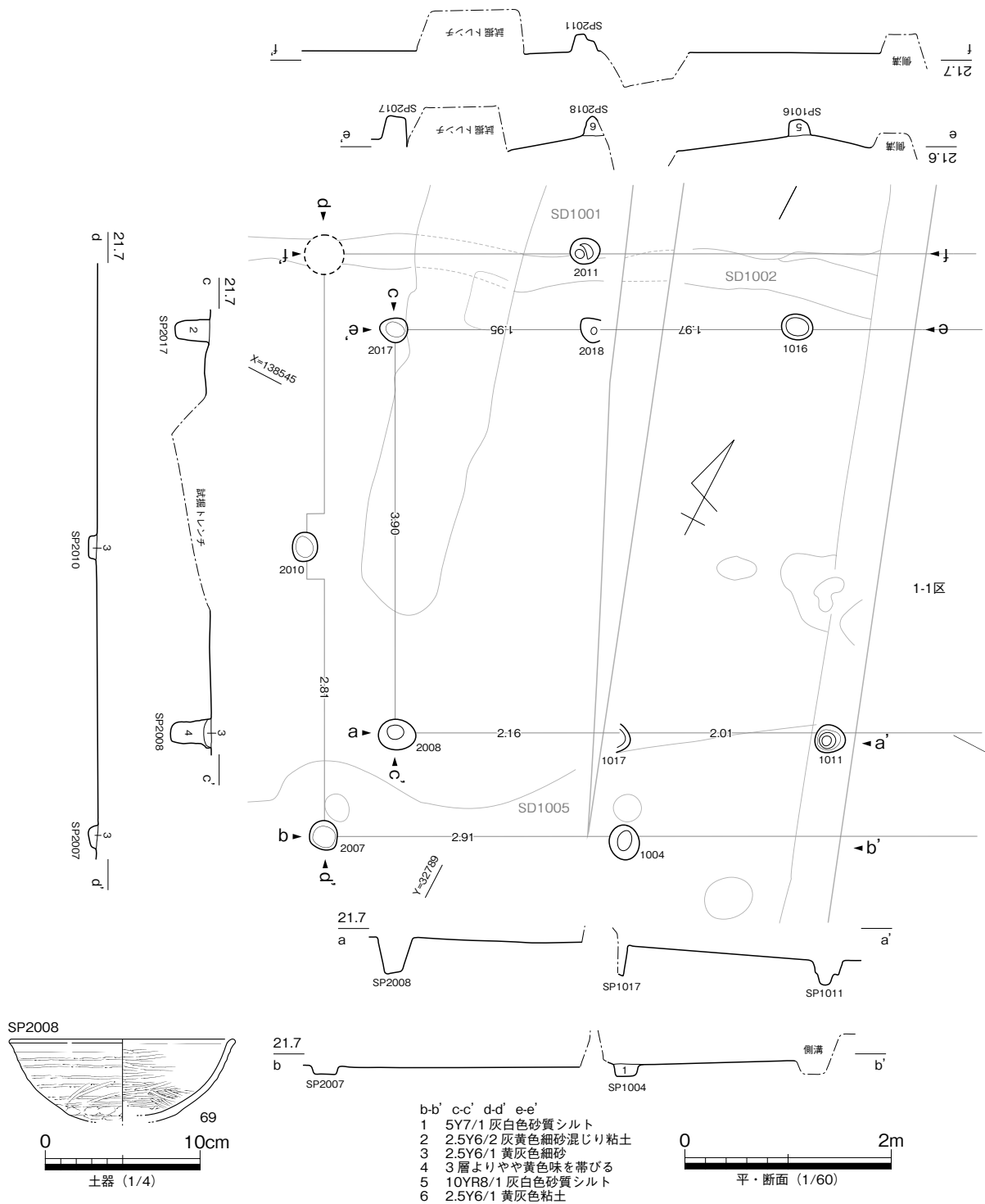
##### 2-3 区 SB2001 (第 63 図)

2-3 区北端部で検出した掘立柱建物である。調査時には柱列として調査していたが、図上で梁行 1 間 (4.48 m)、桁行 3 間 (6.86 m)、床面積 30.73㎡の東西棟の側柱建物として復元した。梁行の柱間は桁行と比して長く、本来は梁行 2 間であった可能性が高い。建物主軸は N 70.97° W を測り、周辺の地割の方向とは合致しない。柱穴は、長径 0.21 ~ 0.28 m の略円ないし楕円形を呈し、残存深 0.12 ~ 0.26 m、断面形は箱形ないし逆台形状を呈する。SP2032、SP2033、SP2044、SP2048 の各柱穴において、径 0.1 ~ 0.16 m の柱痕を確認した。柱通りはよく揃う。柱穴底面の標高は、21.02 ~ 21.16 m と若干の高低差を認める。

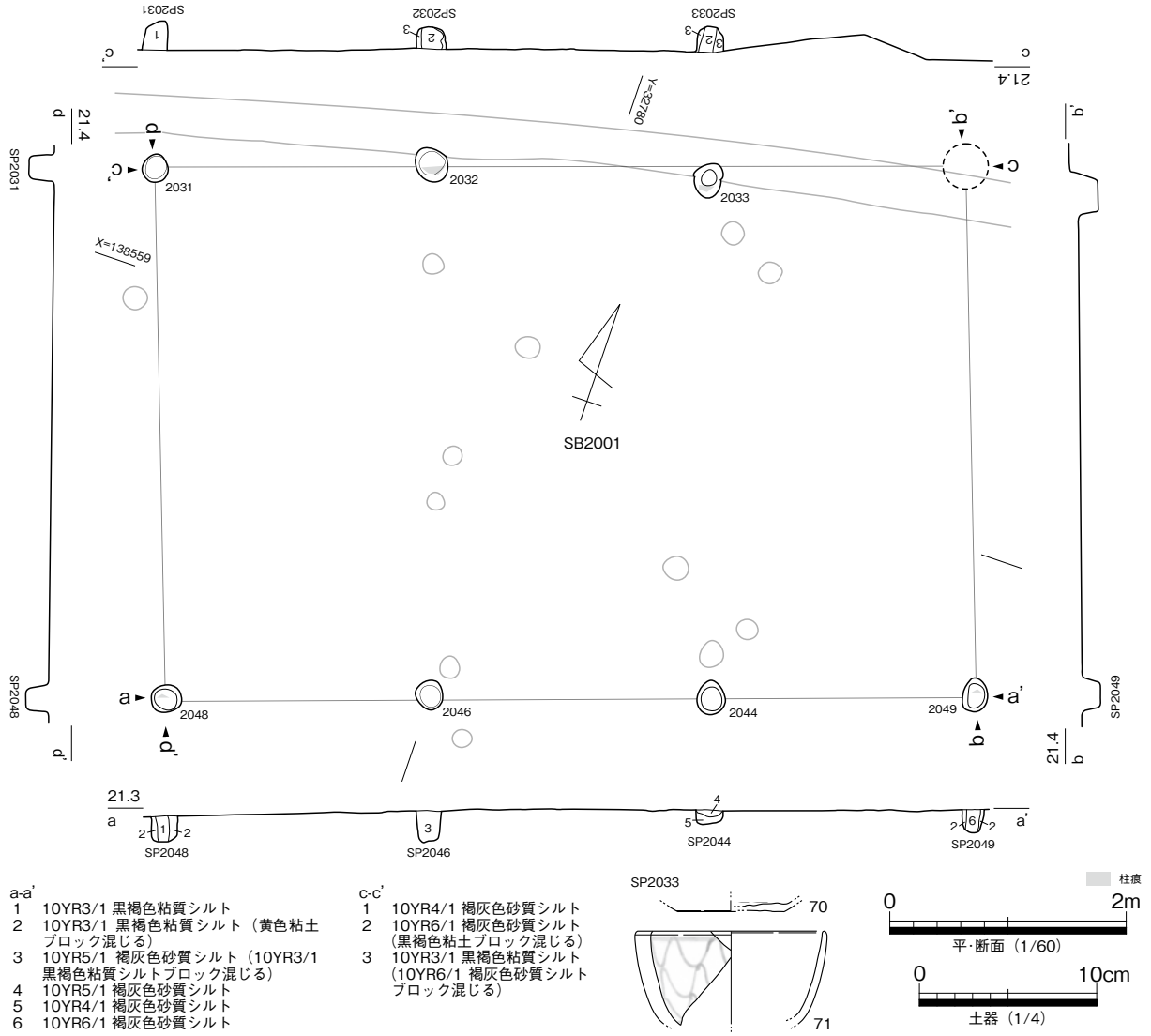
遺物は、図示した以外に SP2031 と SP2049 より器種不詳の土器小片 1 点、SP2046 より土師質土器足釜の底部とみられる土器小片 1 点、SP2044 より土師質土器皿とみられる土器小片 1 点が、それぞれ出土したのみである。70・71 は SP2033 より出土した。70 は土師質土器皿。底部は回転ヘラ切りである。71 は SP2033 より出土した肥前系染付磁器碗で、外面に緩やかな曲線の網目文を描く。肥前系染付磁器碗より、本建物は 17 世紀後半 (野上 2000) に位置付けておく。(蔵本)

##### 2-3 区 SA2001 (第 64 図)

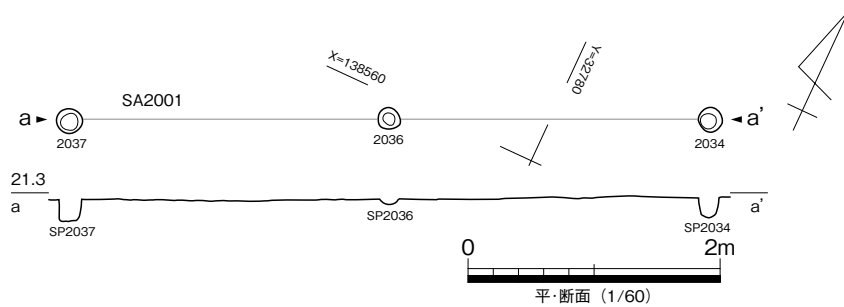
2-3 区北部で検出した柵列である。2 間分を検出した。検出長 5.10m、柱間は 2.55m、主軸方位は N65.0° E である。柱穴は円形で、直径 0.16 ~ 0.20m、残存深 0.05 ~ 0.26m である。SB2001 と重複する位置にあるが、柱穴に切り合い関係はなく、SB2001 との前後関係は不明である。出土遺物は、SP3034 から時期不明の土器小片が出土したのみである。(蔵本)



第62図 1-1・2-1区SB1002 平・断面図、出土遺物



第 63 図 2-3 区 SB2001 平・断面図、出土遺物

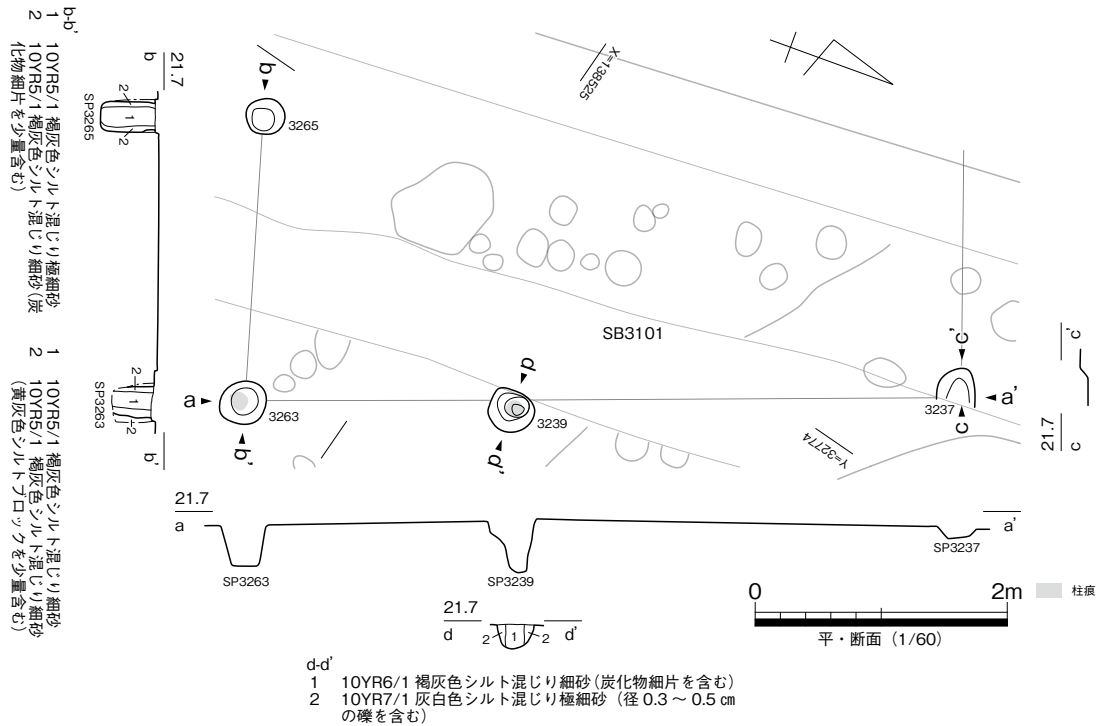


第 64 図 2-3 区 SA2001 平・断面図

### 3-1 区 SB3101 (第 65 図)

3-1 区北部で検出した掘立柱建物で、西半部は調査区外へ延長するため、全形は不詳である。本書作成時に図上で復元した。一部を除き柱穴埋土は不明である。梁行 1 間 (2.25 m) 以上、桁行 2 間 (5.73 m)、床面積 12.89㎡以上、主軸方向 N 34.83° W をそれぞれ測る側柱建物として復元する。主軸方位は概ね条里型地割に合致する。柱穴掘り方は、径 0.25 ~ 0.39 m の楕円形を呈し、底面の標高 21.17 ~ 21.47 m、残存深 0.3 ~ 0.45 m をそれぞれ測る。

遺物は SP3037 より器種不詳の土師質土器片が出土したのみである。後述する SB3102 との重複関係より、SB3102 より古いものの近接した時期の遺構の可能性を想定する。(溝上)

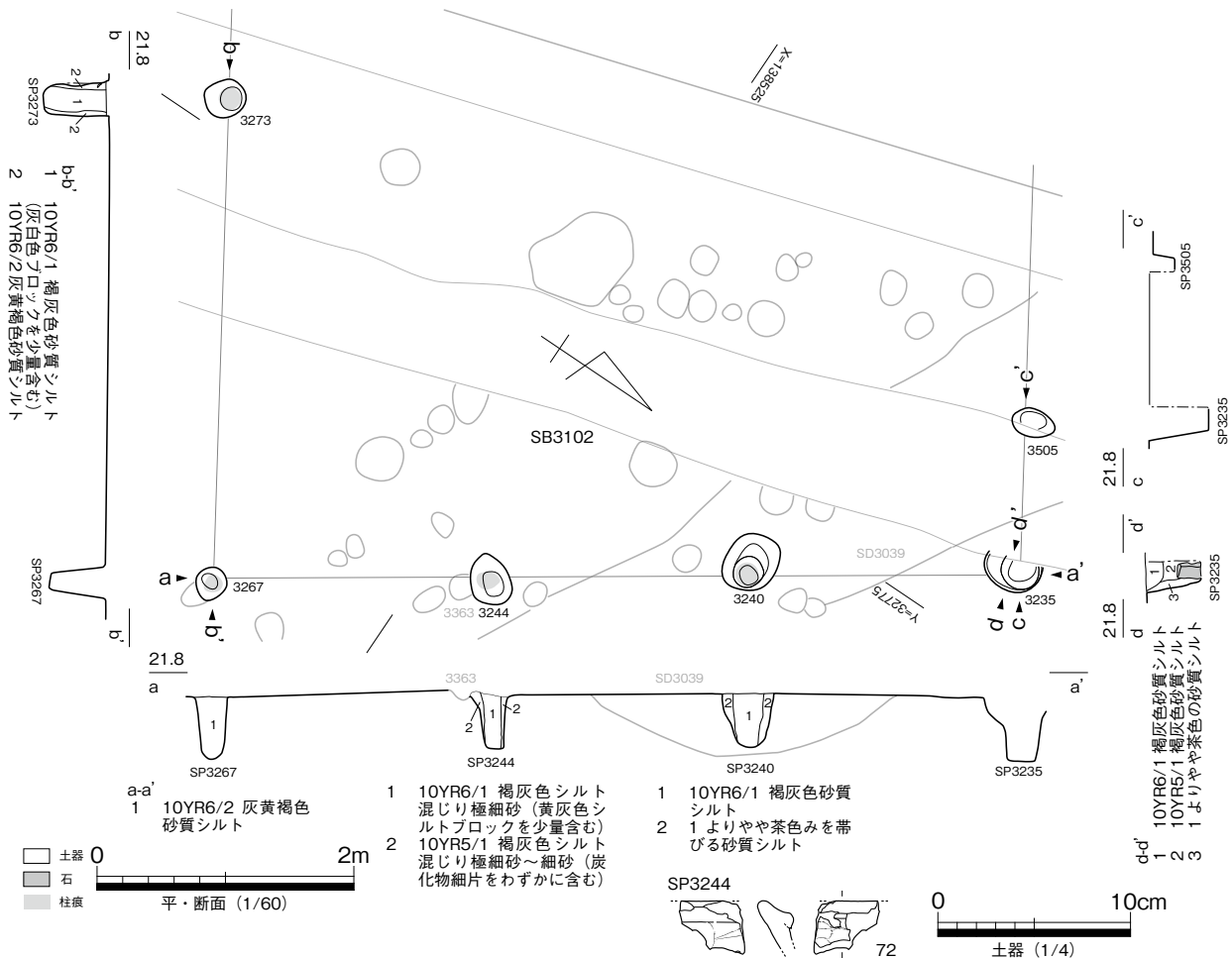


### 3-1 区 SB3102 (第 66 図)

3-1 区北部で検出した掘立柱建物で、西半部は調査区外へ延長するため、全形は不詳である。SB3101 と重複する。本書作成時に図上で復元した。一部を除き柱穴埋土は不明である。

梁行 1 間 (3.76 m) 以上、桁行 3 間 (6.34 m)、床面積 23.84㎡以上、主軸方向 N 34.31° W をそれぞれ測る側柱建物として復元する。主軸方位は概ね条里型地割と合致する。梁行 1 間以上として復元したが、SP3235 の西側に SP3505 のように間柱の可能性がある柱穴があり、3.76 m の間に間柱がある梁行が 2 間もしくは 3 間の建物の可能性がある。柱穴掘り方は、径 0.26 ~ 0.47 m の楕円形を呈し、底面の標高 21.09 ~ 21.18 m、残存深 0.4 ~ 0.5 m をそれぞれ測る。SP3235 の断面図において石を検出した記録はあるものの、石材、形状についての記録はない。

遺物は SP3235、SP3240、SP3244、SP3273 の各柱穴より、器種不詳の土師質土器の小片が少量出土した。72 は SP3244 から出土した土師質土器の把手付鍋口縁部片。口縁部はナデ、体部外面はナデ、内面はナデ後板ナデで調整する。第 5 章第 5 節でまとめた C 期 (I - IV 型式) に相当し中世後期の所産である。把手付鍋の年代観を建物の上限年代と想定する。(溝上)



第66図 3-1区 SB3102 平・断面図、出土遺物

### 3-1区 SB3103 (第67図)

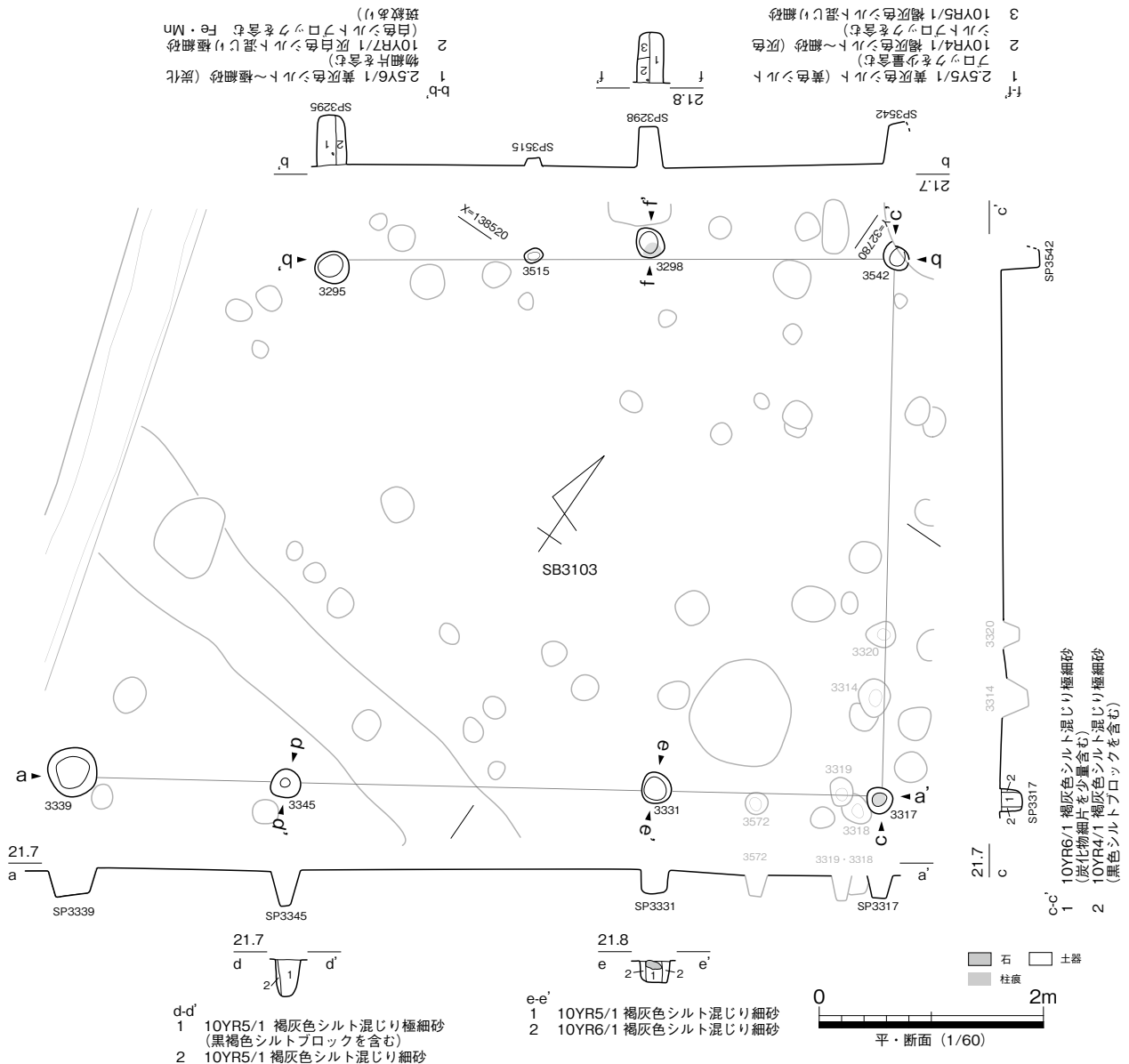
3-1区中央部で検出した掘立柱建物である。本書作成時に図上で復元した。一部を除き柱穴埋土は不明である。梁行1間(4.79m)、桁行3間(7.14m)、床面積23.78㎡以上、主軸方向N31.75°Wをそれぞれ測る側柱建物として復元する。主軸方位は概ね条里型地割と合致する。柱穴掘り方は、径0.23～0.27mの円ないし楕円形を呈し、底面の標高21.16～21.41m、残存深0.2～0.45mをそれぞれ測る。

遺物は、SP3295、SP3298、SP3331、SP3317の各柱穴より、器種不詳の土師質土器小片、土師質土器皿が少量出土した。SK3011にSB3103を構成する柱穴の一部が切られることから、中世後期の可能性を指摘できるが、詳細な時期を決定することは困難である。(溝上)

### 3-1区 SB3104 (第68図)

3-1区南部で検出した掘立柱建物で、本建物も本書を作成時に図上で復元した。SP3381の対になる北辺の柱穴と北西隅柱を欠き、一部を除き柱穴埋土は不明である。梁行3間(3.55m)、桁行3間(7.25m)、床面積25.74㎡、主軸方向N59.57°Eをそれぞれ測る側柱建物として復元する。柱穴掘り方は、径0.27～0.4mの円ないし楕円形を呈し、底面の標高21.11～21.55m、残存深0.1～0.5mをそれぞれ測る。柱間間隔は一定せず、整った矩形を呈し、柱通りも概ね揃う。

遺物はSP3356、SP3380、SP3401の各柱穴より、器種不詳の土師質土器小片、土師質土器皿が少量



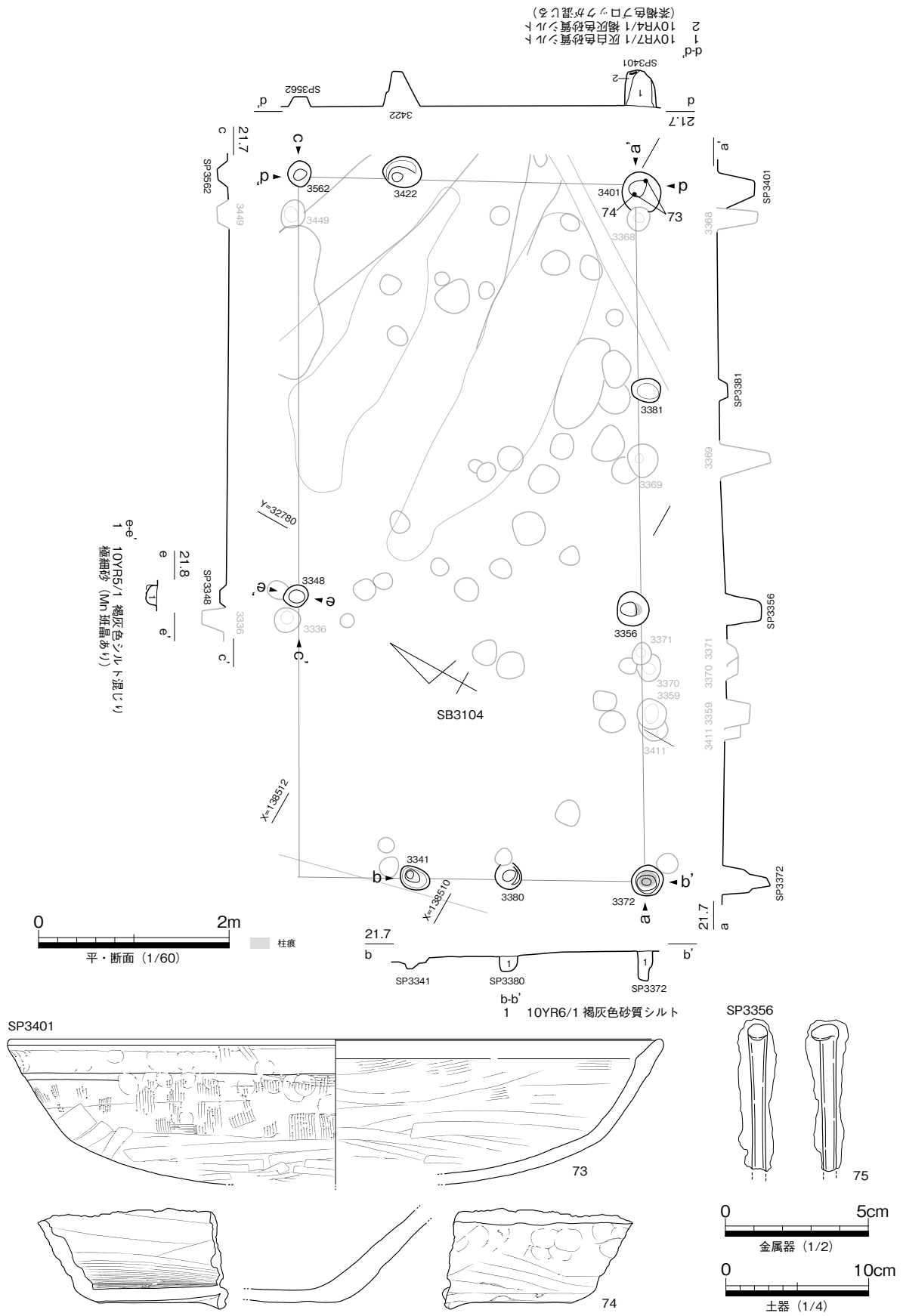
第67図 3-1区SB3103平・断面図

出土した。73・74はSP3401で出土した土師質土器。73は鍋。体部外面は指オサエ後縦方向に板ナデや横方向のハケを施す。体部内面は指ナデ、口縁部はヨコナデ、底部は板ナデである。土器の調整順としては、全体的な指オサエ後、体部内外面や口縁部を調整し、最後に底部内外面の板ナデを施している。74は火鉢。外面は指オサエやナデで、内面はナデやハケ目で調整する。内面には煤が付着する。足がついていた部分は欠損している。75は和釘。SP3356より出土した。いずれも近世前期(17世紀)に位置付けられ、建物の上限の年代を示していると考えられる。(溝上)

### 3-1区SB3105 (第69図)

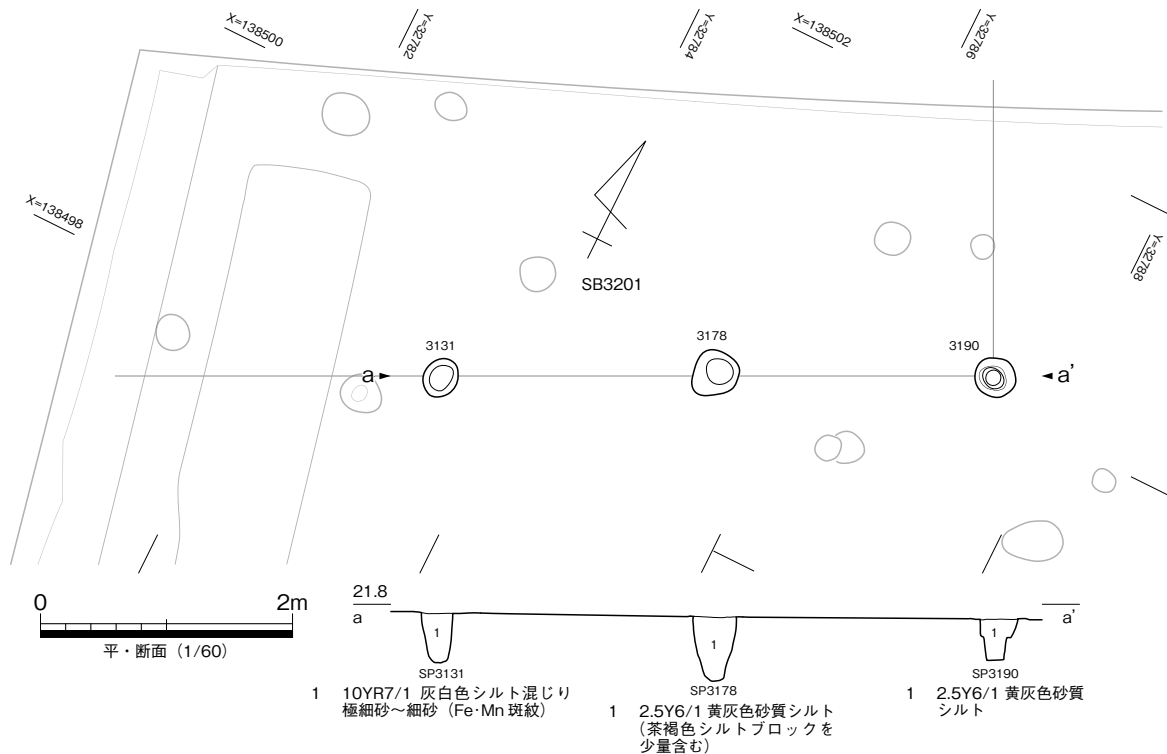
3-1区南部で検出した掘立柱建物で、本建物も本書を作成時に図上で復元した。北西隅柱を欠き、ほとんどの柱穴埋土は不明である。東辺中央の間柱の重複関係より、SB3104より後出する建物である。梁行2間(2.95m)、桁行3間(7.29m)、床面積21.5㎡、主軸方向N62.54°Eをそれぞれ測る総柱建物と





第 68 図 3-1 区 SB3104 平・断面図、出土遺物





第70図 3-2区 SB3201 平・断面図

SB3104 の建物の上限年代である 17 世紀以降の可能性を想定する。(溝上)

### 3-2 区 SB3201 (第70図)

3-2 区北西隅部で検出した掘立柱建物である。調査時には建物として認識されておらず、図上で梁行 1 間 (2.02 m 以上) 以上、桁行 3 間 (4.30 m) 以上、床面積 15.23m<sup>2</sup> 以上の東西棟の側柱建物として復元した。重複関係から SR3001 に後出するのは明らかだが、後述の SB3202 との先後関係は不明である。

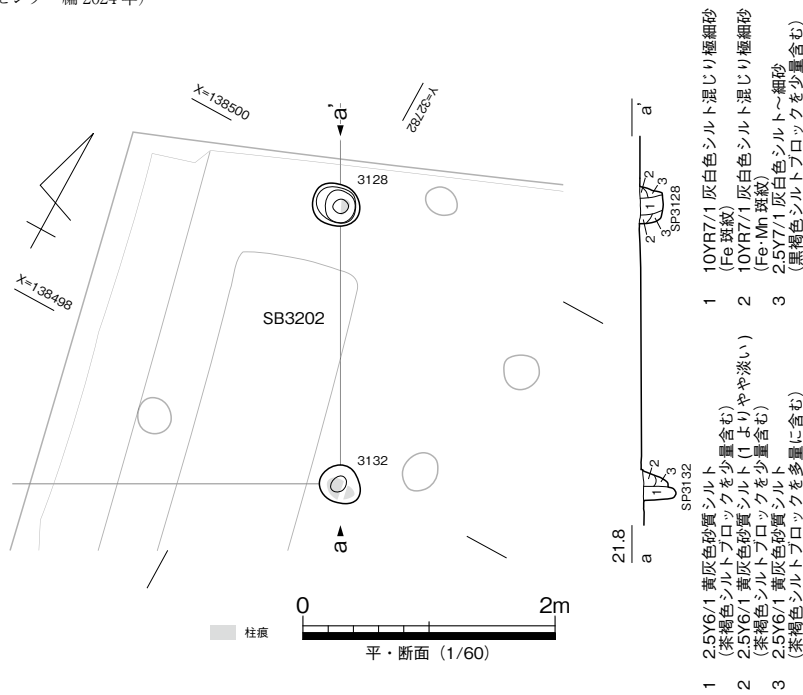
建物主軸は N 63.56° E に配され、概ね丸亀平野の条里型地割の方向と合致する。柱穴は、径 0.23～0.34m の略円形を呈し、残存深 0.33～0.5m、断面形は逆台形ないし U 字形を呈する。SP3190 において、径 0.12～0.16 m の柱痕を確認した。柱穴底面の標高は、21.2～21.35 m と若干の高低差が認められる。そのほかの柱穴に柱痕は認められず、根石等の出土もない。埋土は灰白色～黄灰色のシルト～細砂で、土質は中世後半～近世の遺物が出土した柱穴と共通する。

遺物は出土せず詳細な時期の比定は困難であるが、埋土から中世後期以降の建物と推定される。(益崎)

### 3-2 区 SB3202 (第71図)

3-2 区北西隅部で検出した掘立柱建物である。調査時には建物として認識されていないが、各柱穴埋土の類似から掘立柱建物の可能性を想定し、図上で復元した。梁行 1 間 (2.22 m) 以上、桁行 1 間 (2.27 m 以上) 以上、床面積 6.25m<sup>2</sup> 以上と推定されるが、検出範囲は建物南東隅部の柱穴 2 基のみであり、詳細な建物規模の特定はできない。重複関係から SR3001 に後出するが、SB3201 との先後関係は不明である。

建物主軸は N 61.04° E に配され、概ね丸亀平野の条里型地割の方向と合致する。柱穴は、長径 0.24～0.29 m の略円形を呈し、残存深 0.18～0.26 m、断面形は逆台形ないし U 字形を呈する。SP3128・SP3132 とともに、



第 71 図 3-2 区 SB3202 平・断面図

径 0.12 ～ 0.16 m の柱痕を確認した。柱穴底面の標高は、21.45 ～ 21.55 m と若干の高低差が認められる。根石等の出土はなく、SP3132 では底部に柱材の沈下痕跡が認められる。

遺物は出土せず建物時期の特定は困難であるが、建物主軸が条里型地割と合致すること、SB3201 と重複することから、中世以降と理解した。(益崎)

### 3-2 区 SB3203 (第 72 図)

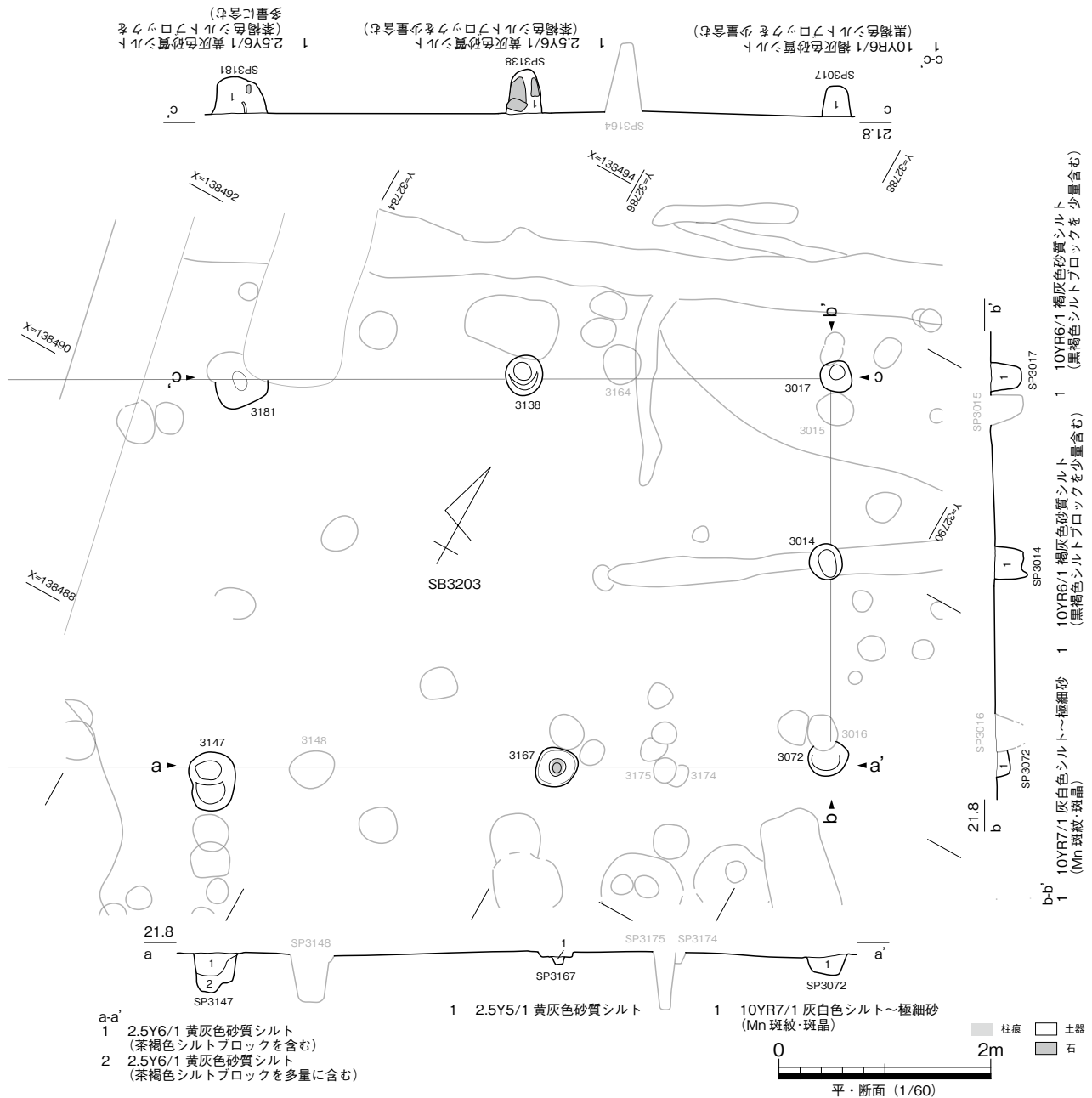
3-2 区中央部西寄りで検出した掘立柱建物である。調査時には建物として認識されておらず、図上で梁行 2 間 (3.60 m)、桁行 3 間 (5.80 m) 以上、床面積 27.21m<sup>2</sup>以上の東西棟の側柱建物として復元した。SP3147 南側に埋土の類似する複数の小柱穴が認められ、南面に庇を伴う可能性が考えられるが、SP3167・SP3172 南側は複数の土坑・性格不明遺構が重複しており、庇の有無を判断できない。重複関係から、SD3010・SB3205 に後出する。また、復元した建物は SB3204 と重複するが、柱穴の切り合いは認められず先後関係は不明である。

建物主軸は N 60.76° E に配され、概ね丸亀平野の条里型地割の方向と合致する。柱穴は、径 0.27 ～ 0.52m の略円形を呈し、残存深 0.20 ～ 0.41m、断面形は逆台形ないし U 字形を呈する。SP3167 以外のいずれの柱穴にも明確な柱痕は認められず、根石等の出土もない。柱穴底面の標高は、21.3 ～ 21.5 m と高低差が認められる。埋土は灰白色～黄灰色のシルト～細砂主体で、土質は中世後半～近世の遺物が出土した柱穴と共通する。

遺物は出土せず詳細な時期の比定は困難であるが、埋土の類似性から中世以降の建物と推定される。(益崎)

### 3-2 区 SB3204 (第 73 図)

3-2 区中央部西壁付近で検出した掘立柱建物である。調査時には建物として認識されておらず、図上で梁行 2 間 (4.20 m)、桁行 1 間 (2.26 m) 以上、床面積 12.60m<sup>2</sup>以上の側柱建物として復元した。重複関



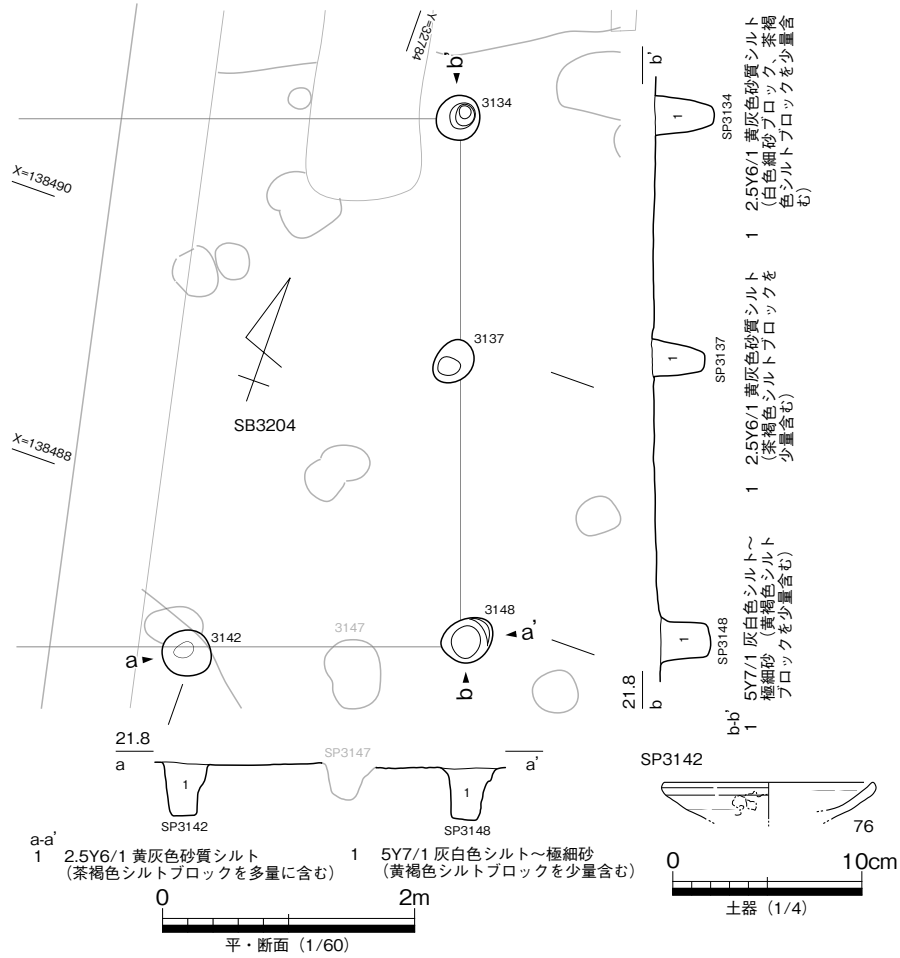
第 72 図 3-2 区 SB3203 平・断面図

係から SD3020 に後出する。また、復元した建物は SB3203・SB3205 と重複するが、柱穴の切り合いは認められず先後関係は不明である。

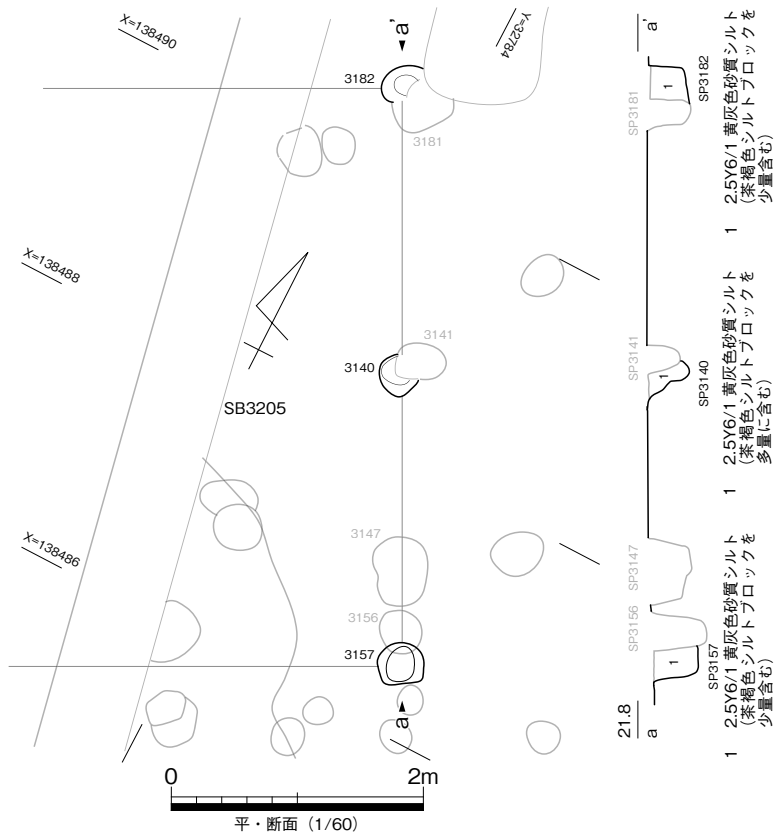
建物主軸は N 70.49° E に配され、概ね丸亀平野の条里型地割の方向と合致する。柱穴は、径 0.30～0.39m の略円形を呈し、残存深 0.42～0.48m、断面形は逆台形状を呈する。いずれの柱穴にも明確な柱痕は認められず、根石等も出土していない。柱穴底面の標高は、概ね 21.2 m 前後で一定である。

遺物は図示のほか、土師質土器と考えられる細片が認められる。76 は肥前系陶器皿の口縁部片である。口縁部形態から、高松城跡様相 1～3 の幅で捉えられる。

出土遺物が小片 1 点のみであり、建物時期の絞り込みは困難であるが、76 の年代観から 17 世紀前半以降に位置付けたい。(益崎)



第73図 3-2区SB3204平・断面図、出土遺物

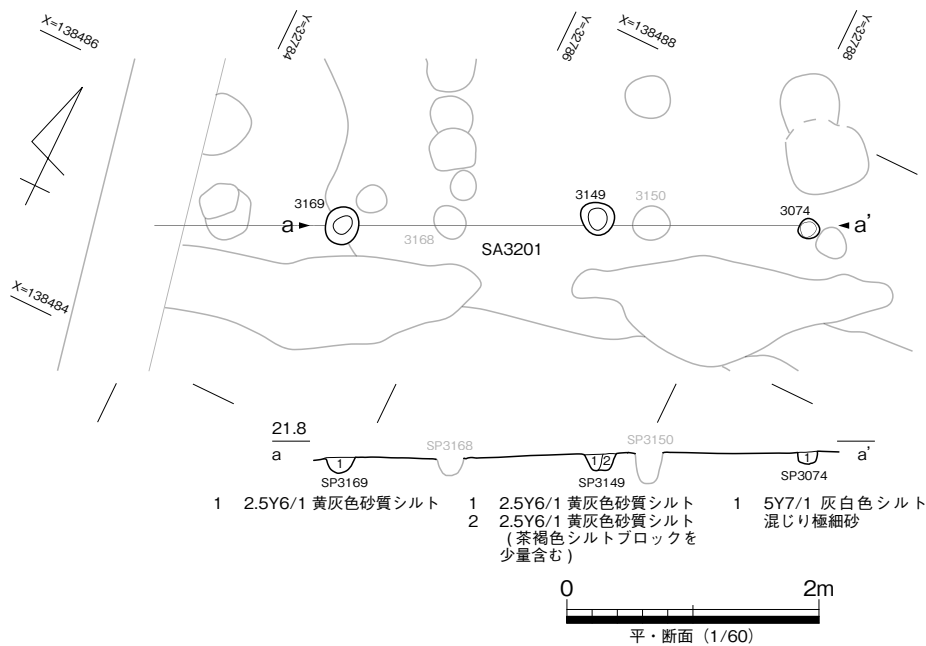


第74図 3-2区SB3205平・断面図

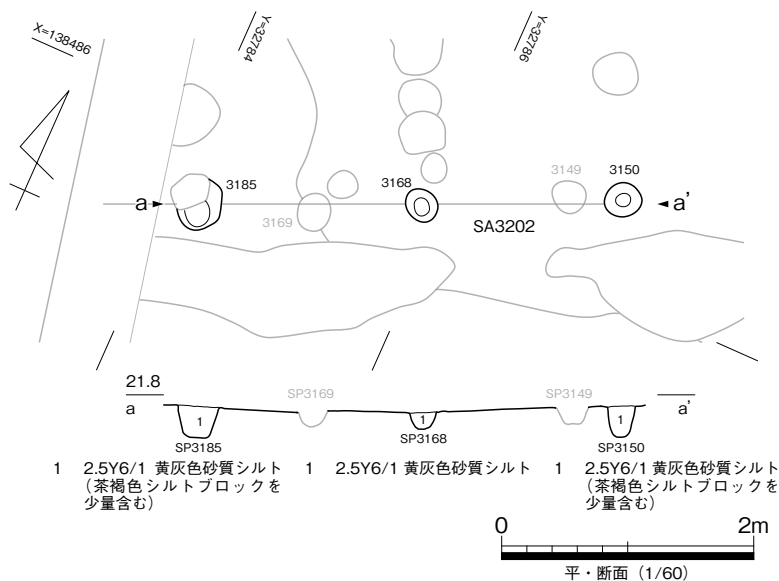
3-2区 SB3205 (第74図)

3-2区中央部西壁付近で検出した掘立柱建物である。調査時には建物として認識されておらず、図上で梁行2間(4.54m)、桁行1間(2.13m)以上、床面積12.56㎡以上の側柱建物として復元した。重複関係からSB3203に先行する。また、復元した建物はSB3204と重複するが、柱穴の切り合いは認められず先後関係は不明である。

建物主軸はN 63.23° Eに配され、概ね丸亀平野の条里型地割の方向と合致する。柱穴は、いずれも他の柱穴と切り合うために正確な規模は不明だが、少なくとも径0.3m以上の略円形と考えられる。残存深0.32～0.35m、断面形は逆台形ないしU字形を呈する。いずれの柱穴にも明確な柱痕は認められず、根石等の出土もない。柱穴底面の標高は、概ね21.4m前後で一定である。埋土は灰白色～黄灰色のシルト～細砂主体で、土質は中世後半～近世の遺物が出土した柱穴と共通する。



第75図 3-2区 SA3201 平・断面図



第76図 3-2区 SA3202 平・断面図

遺物は出土しておらず、建物時期の特定は困難である。建物主軸が条里型地割と合致すること、埋土の類似から中世後期以降の建物と推定される。(益崎)

### 3-2 区 SA3201 (第 75 図)

3-2 区中央部西側で検出した柱穴列である。調査時には個別の柱穴として認識されているが、柵列の可能性を想定し図上で復元した。SB3203・SB3204・SB3205 の周囲を区画する SD3005・SD3016 に並行しており、屋敷地の区画施設の可能性がある。

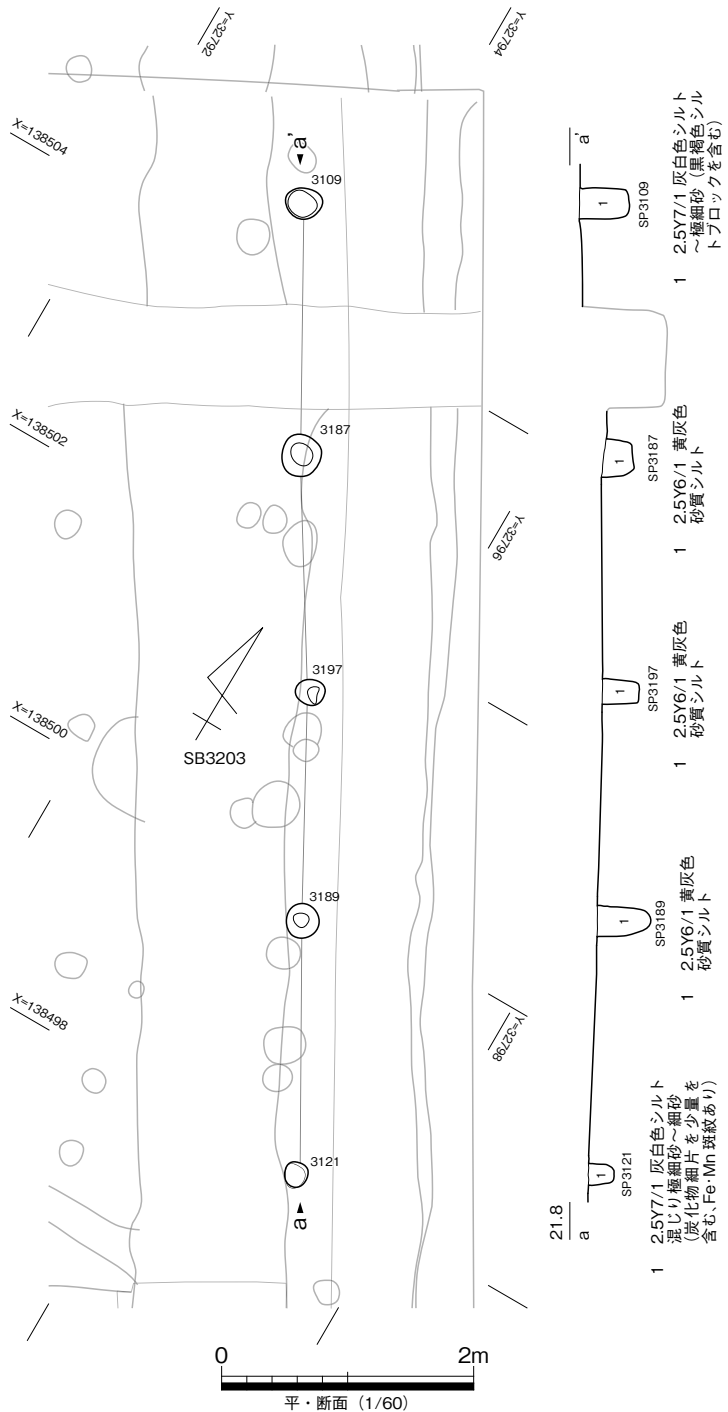
主軸方向は N 63.68° E で、条里型地割の方向に概ね合致する。柱間間隔は推定で 1.69 ~ 2.03 m を測る。柱穴は径 0.16 ~ 0.25m の略円形を呈し、残存深は 0.09 ~ 0.13m と極めて浅く、上部は大きく削奪されているとみられる。埋土はいずれも黄灰色～灰白色シルトで、底部の標高は 21.5 m と概ね一定である。SD3001・SD3005 に並行して東へ延長する可能性が考えられるが、対応する柱穴は認められない。

遺物は出土せず詳細な時期を特定することは困難であるが、SD3005・SD3016 との位置関係から中世以降の遺構と推定した。(益崎)

### 3-2 区 SA3202 (第 76 図)

3-2 区中央部西側で検出した柱穴列である。調査時には個別の柱穴として認識されているが、柵列の可能性を想定し図上で復元した。SA3201 と重複するが、柱穴の切り合いはなく、先後関係は不明である。SA3201 同様に屋敷地の区画施設の可能性がある。

主軸方向は N 65.76° E で、条里型地割の方向に概ね合致する。柱間間隔は推定で 1.59 ~ 1.79 m を測る。柱穴は径 0.22 ~ 0.32m の略円形を呈し、残存深は 0.14 ~ 0.25m と浅い。埋土はいずれも黄灰色シルトを主体に、茶褐色シルトをブロック状に含む。SD3005・SD3016 に並行して東へ延長する可能性が考えられるが、対応する柱穴は認



第 77 図 3-2 区 SA3203 平・断面図



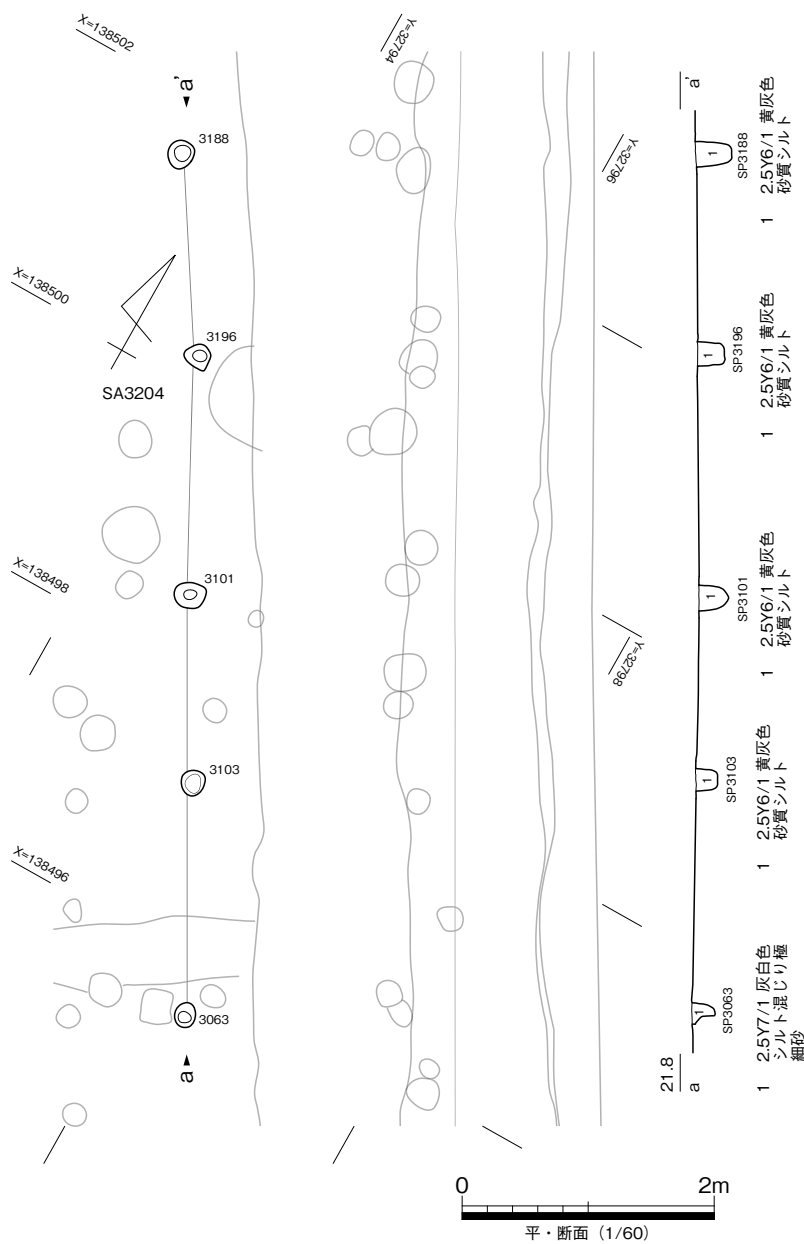
められない。

遺物は出土せず詳細な時期を特定することは困難であるが、SA3201と同様に中世以降の遺構とした。  
(益崎)

### 3-2区 SA3203 (第77図)

3-2区北東部で検出した柱穴列である。調査時には個別の柱穴として認識されているが、柵列の可能性を想定し図上で復元した。SD3007・SD3026に並行しており、上部の削平を考慮すれば、大部分がSD3007と重複すると考えられる。SD3007との先後関係は不明だが、調査時の掘削順序から推定すれば、SD3007に先行する可能性がある。

主軸方向はN 28.22° Wで、条里型地割の方向に概ね合致する。柱間隔は1.79～2.01mと一定しないが、柱穴底面の標高は21.3m前後で概ね一定である。柱穴は、径0.17～0.31mの略円形を呈し、残



第78図 3-2区 SA3204 平・断面図

存深は 0.21 ~ 0.42 m と浅い。SD3007・SD3026 に並行して南へ延長すると考えられ、SA3207 と連続する可能性があるが、両柱穴列間に対応する柱穴は認められない。

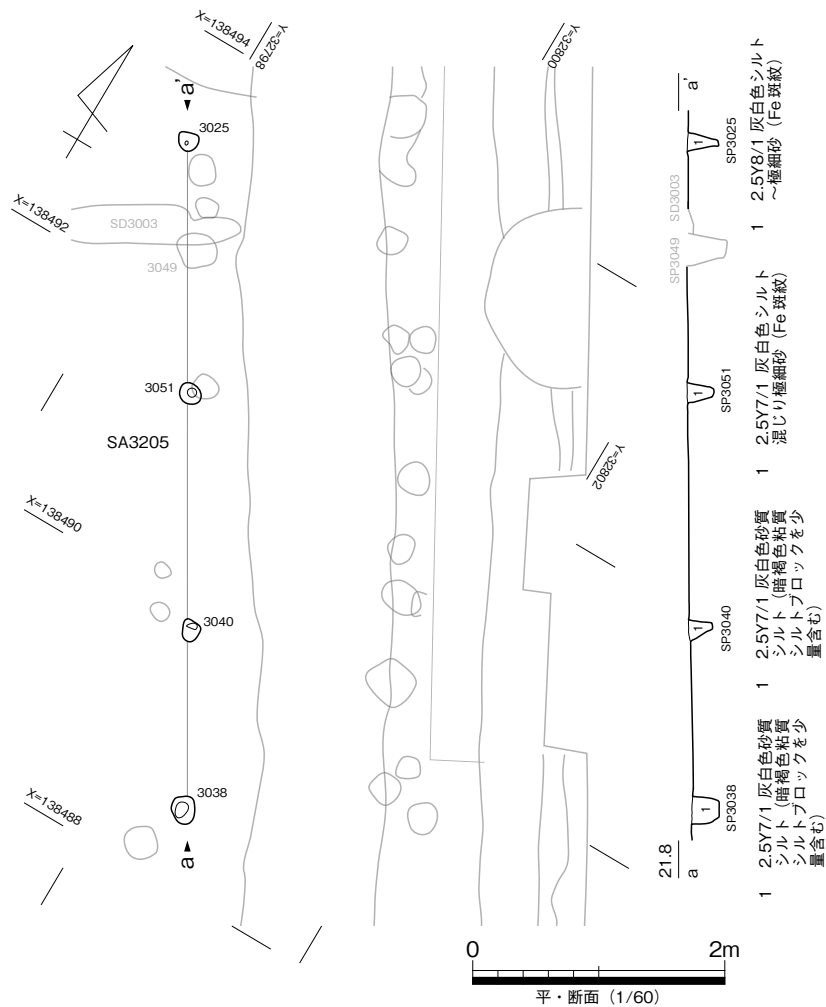
遺物は出土せず、詳細な時期の特定は困難だが、SD3007 との重複関係から中世後期の遺構と推定した。  
(益崎)

### 3-2 区 SA3204 (第 78 図)

3-2 区北東部で検出した柱穴列である。調査時には個別の柱穴として認識されているが、埋土の類似性から柵列の可能性を想定し図上で復元した。SD3007 との先後関係は不明だが、SD3007 西側に並行しており、同時期の区画施設の可能性があると考えられる。

主軸方向は N 28.93° W で、条里型地割の方向に概ね合致する。柱間隔は 1.51 ~ 1.86 m と一定しないが、柱穴底面の標高は 21.4 m 前後で概ね一定である。柱穴は、径 0.17 ~ 0.19m の略円形を呈し、残存深は 0.19 ~ 0.29m と浅い。SD3007 に並行して南へ延長すると考えられ、SA3205 と連続する可能性があるが、SP3063-SP3025 間に対応する柱穴は認められない。

遺物は出土せず詳細な時期の特定は困難だが、SD3007 との位置関係から近世前期の遺構と推定した。  
(益崎)



第 79 図 3-2 区 SA3205 平・断面図

### 3-2区 SA3205 (第79図)

3-2区中央部東側で検出した柱穴列である。調査時には個別の柱穴として認識されているが、埋土の類似性から柵列の可能性を想定し図上で復元した。SD3007 との先後関係は不明だが、SD3007 西側に並行しており、同時期の区画施設の可能性がある。

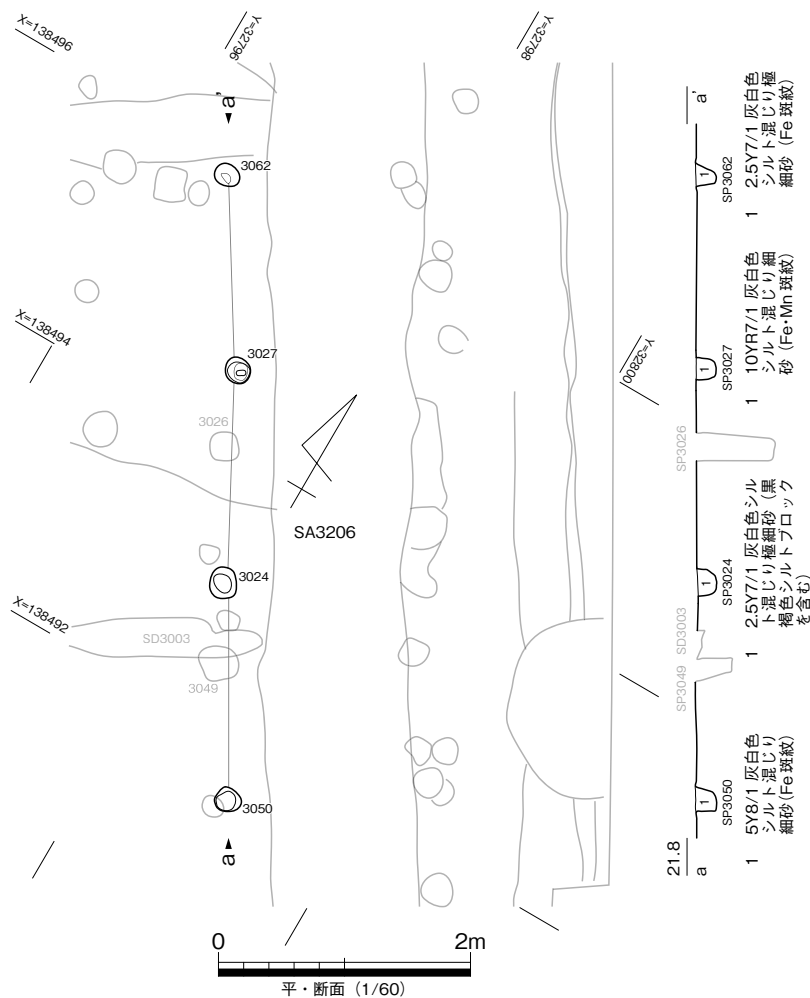
主軸方向はN 29.94° W で、条里型地割の方向に概ね合致する。柱間間隔は1.47～1.98 mと一定しないが、柱穴底面の標高は21.45 m前後と概ね一定である。柱穴は径0.16～0.23mの略円形を呈し、残存深は0.18～0.22mと浅い。埋土はいずれも灰白色砂質シルトを主体に、少量の暗褐色シルトブロックを含む。SD3007 に並行して北へ延長すると考えられ、SA3205 と連続する可能性がある。

遺物は出土せず詳細な時期の特定は困難だが、SD3007・SD3026 との位置関係から近世前期の遺構と推定した。(益崎)

### 3-2区 SA3206 (第80図)

3-2区北東部で検出した柱穴列である。調査時には個別の柱穴として認識されているが、埋土の類似性から柵列の可能性を想定し図上で復元した。SA3204・SA3205 と同様にSD3007 西側に並行しており、同時期の区画施設の可能性があると考えられる。

主軸方向はN 30.01° W で、条里型地割の方向に概ね合致する。柱間間隔は1.47～1.98 mと一定しない

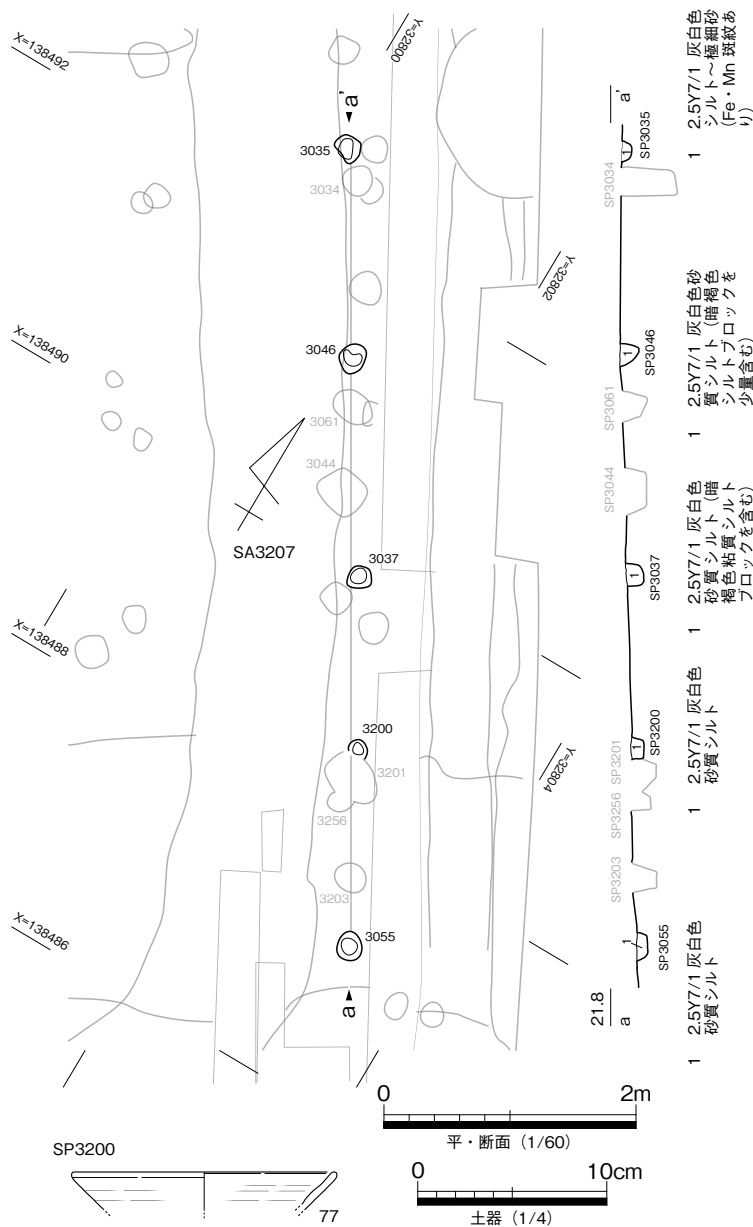


いが、柱穴底面の標高は 21.5 ~ 21.6 m と概ね一定である。柱穴は、径 0.17 ~ 0.22m の略円形を呈し、残存深は 0.15 ~ 0.16m と極めて浅い。SD3007 に並行して南北へ延長すると考えられるが、SA3204・SA3205 とは主軸方向がやや異なり、一連の柵列とは考え難い。

遺物は出土せず、詳細な時期の特定は困難だが、SD3007 との位置関係から近世前期の遺構と推定した。(益崎)

### 3-2 区 SA3207 (第 81 図)

3-2 区北東部で検出した柱穴列である。調査時には個別の柱穴として認識されているが、埋土の類似性から柵列の可能性を想定し図上で復元した。SD3007・SD3026 に並行しており、上部の削平を考慮すれば、大部分が SD3007 と重複すると考えられる。SD3007 との先後関係は不明だが、調査時の掘削順序から推定すれば、SD3007 に先行すると理解できる。また、南端は SD3014 と重複しており、SD3014



第 81 図 3-2 区 SA3207 平・断面図、出土遺物

に後出することがわかる。

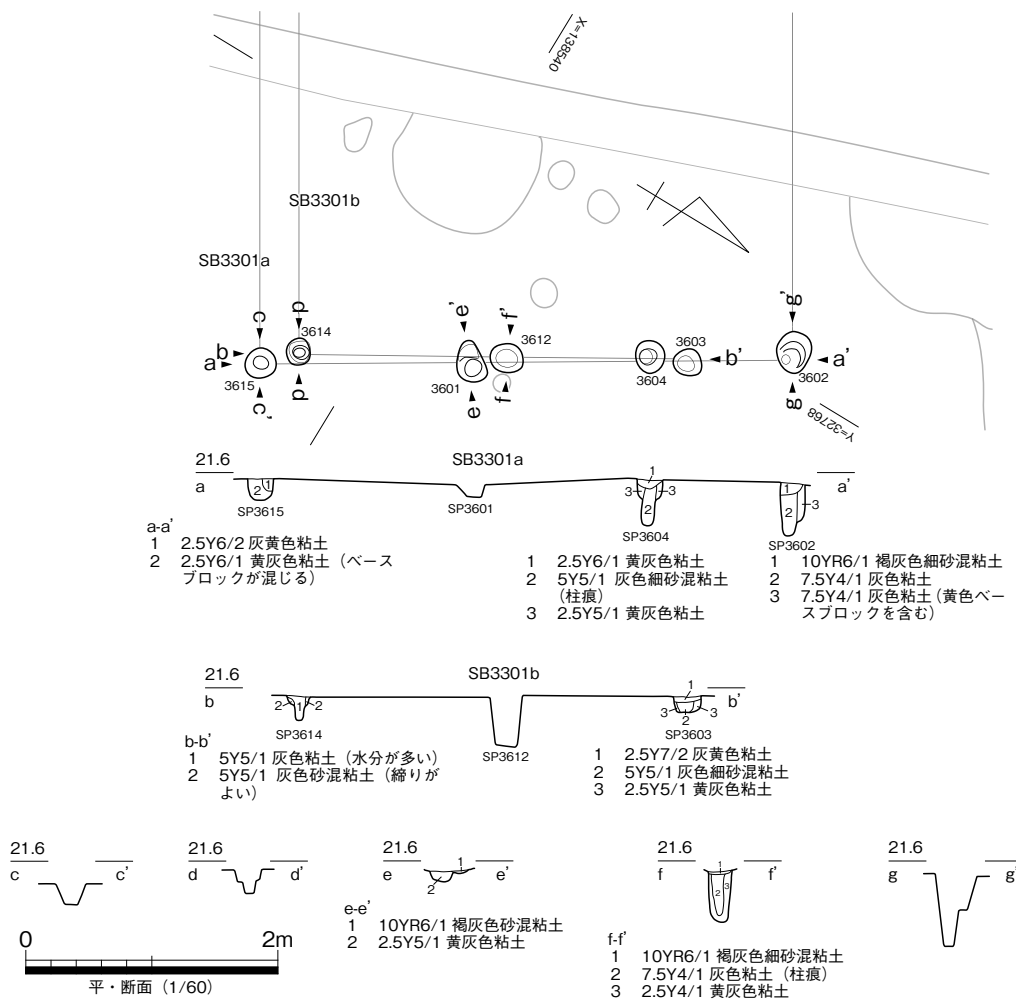
主軸方向はN 30.94° Wで、条里型地割の方向に概ね合致する。柱間隔は1.66 mと概ね一定である。柱穴は、径0.17～0.22mの略円形を呈し、残存深は0.08～0.15mと浅い。SD3007・SD3026に並行して南へ延長すると考えられ、SA3203と連続する可能性があるが、両柱穴列間に対応する柱穴は認められない。

遺物は、SP3200より土師質土器杯の口縁部片(77)が出土した。口径は推定14cm前後、体部の外傾度はやや強いと考えられる。形態から佐藤編年II-1～2期(12世紀後葉～13世紀初頭)と考えられるが、重複するSD3014埋土からの混入の可能性もあり、SA3207の時期を特定するには至らない。SD3014との重複、SD3007との位置関係から中世後期～近世前期の遺構と推定した。(益崎)

### 3-3区 SB3301 (第82図)

3-3区中央部で検出した掘立柱建物である。本書作成時に図上で復元した。東側柱列以外を検出できず、柵列の可能性も残るが、柵列とした場合には区画の意図が不明瞭なため、建物遺構として報告する。

SB3301aは南北4.19m、主軸方向N31.41° Wを測る。柱穴掘り方は、径0.22～0.32mの円ないし楕円形を呈し、床面の標高20.9～21.4m、残存深0.1～0.45mをそれぞれ測る。



第82図 3-3区 SB3301 平・断面図

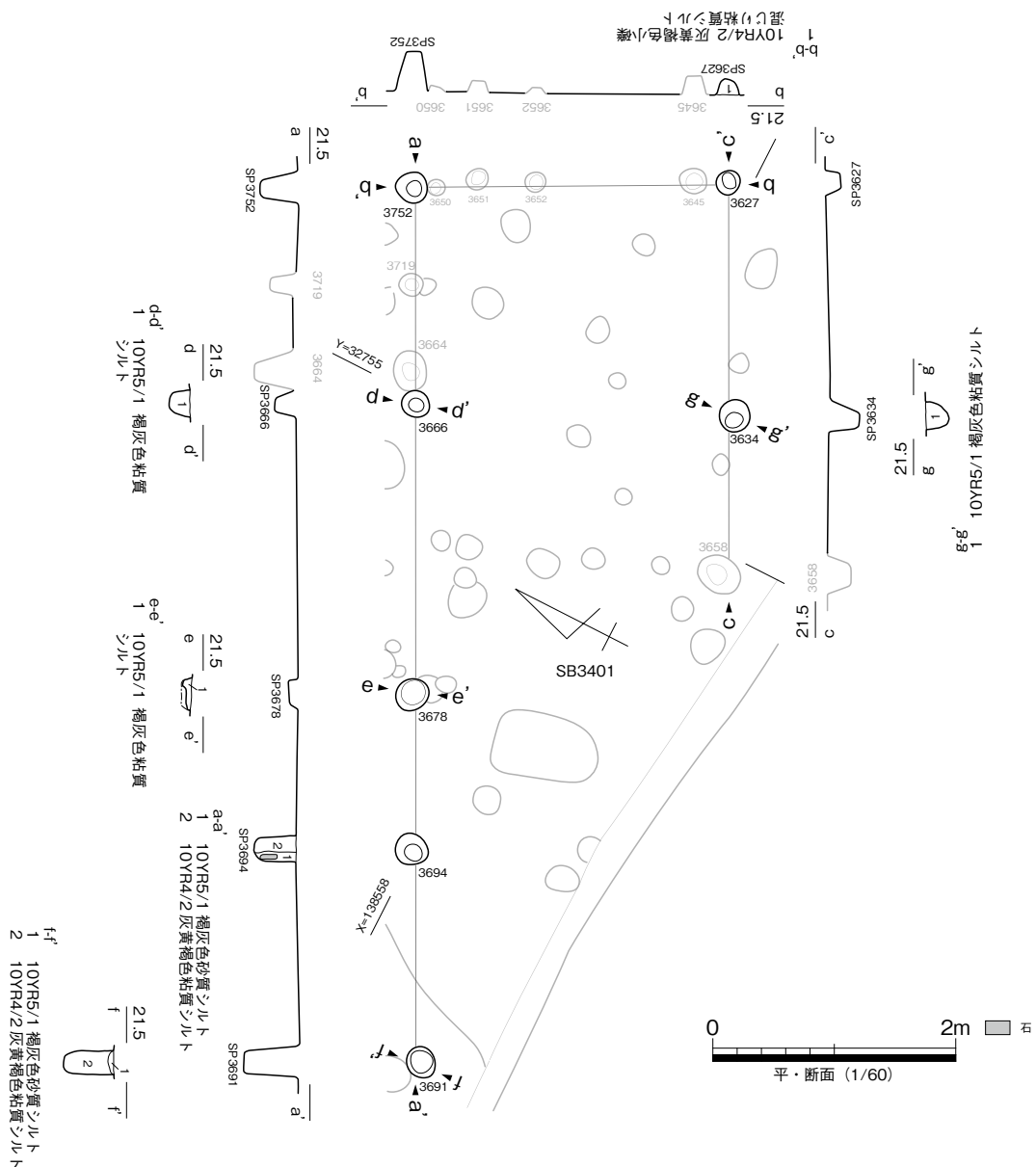
SB3301bは南北3.07mを測る。柱穴の掘り方は、径0.22～0.24mの円形を呈し、底面の標高は21.34～21.39m、残存深0.15～0.4mをそれぞれ測る。

遺物はSP3602、SP3603、SP3604、SP3615の各柱穴より、器種不詳の土師質土器小片、土師質土器皿、土師質土器の播鉢体部片が少量出土した。出土遺物は乏しいが、概ね条里型地割の方向を示すため中世の遺構として報告する。(溝上)

### 3-4区 SB3401 (第83図)

3-4区中央部で検出した掘立柱建物である。本建物も本書を作成時に図上で復元した。南辺の桁行は調査区外に延長すると考える。梁行1間(2.6m)、桁行4間(7.72m)以上、床面積20.01㎡以上、主軸方向N28.38°Wを測る側柱建物として復元する。柱穴の掘り方は径0.21～0.29mの円ないし楕円形で、底面の標高20.94～21.31m、残存深0.08～0.45mをそれぞれ測る。

遺物はどの柱穴からも出土していない。SB3401を構成するSP3691がSD3056より後出すること、概



第83図 3-4区 SB3401 平・断面図

ね条里型地割に合致することから、中世以降の可能性を指摘できるが詳細な時期決定は困難である。(溝上)

### 3-4区 SB3402 (第84図)

3-4区東部で検出した掘立柱建物で、本建物も本書を作成時に図上で復元した。一部を除き柱穴埋土は不明である。梁行1間(2.94m)、桁行3間(4.64m)、床面積13.64㎡、主軸方向N 31.14° Wをそれぞれ測る側柱建物として復元する。柱穴の掘り方は径0.17~0.31mの円形で、底面の標高20.99~21.24m、残存深0.1~0.4mをそれぞれ測る。柱穴間隔は一定せず、床面は整った矩形を呈するが、一部柱通りが揃わない。

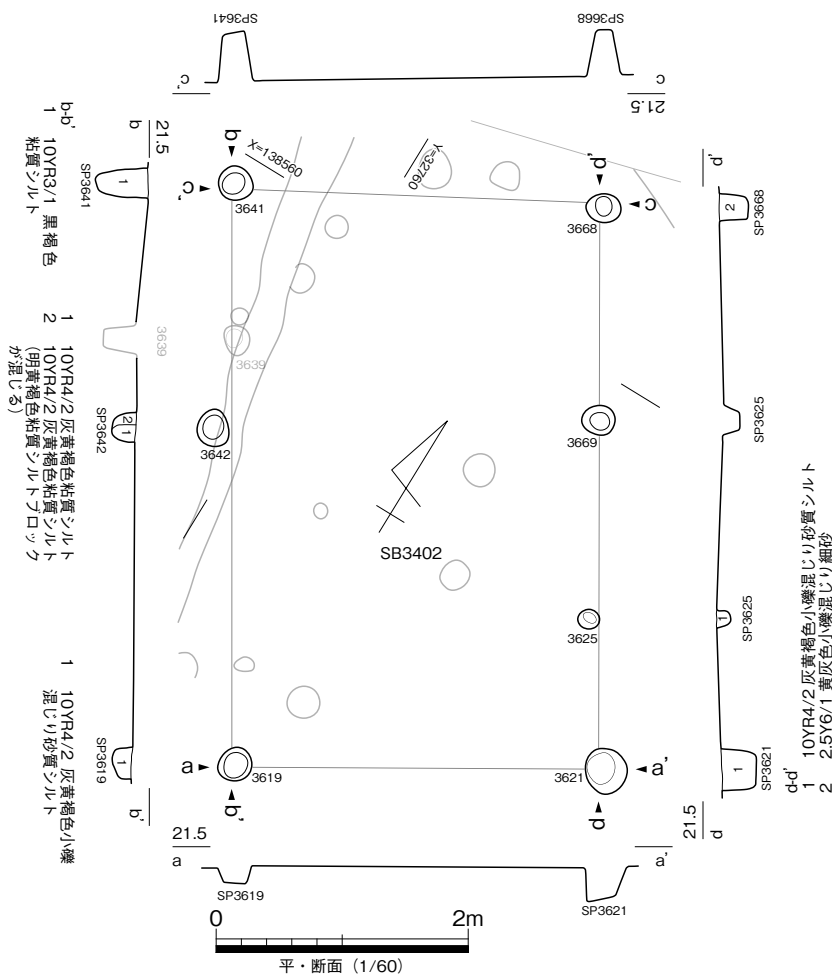
遺物はSP3619、SP3621、SP3641の各柱穴より、器種不詳の土師質土器が少量出土した。SB3402を構成するSP3642がSD3044より先行することから近世以前と考えられるが、詳細な時期決定は困難である。(溝上)

### 3-4区 SA3403 (第85図)

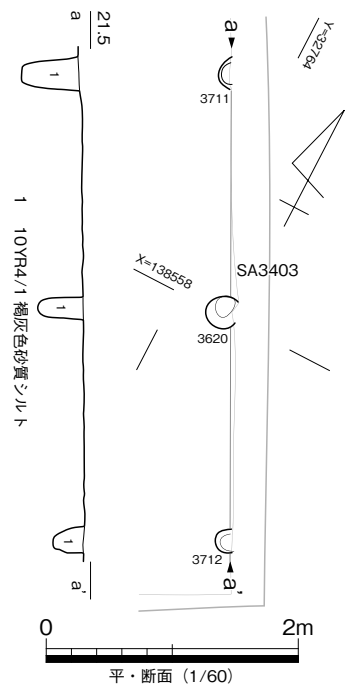
3-4区東端で検出した南北延長3.73mの柵列である。SB3402に伴う柵列の可能性が想定できるが、柱穴が3穴しか検出されていないため断定はできない。主軸方向はN 27.36° Wである。柱間間隔は1.83mと1.9mであり、柱通りも概ね揃う。柱穴の半分が調査区外へ延長すると考えられ、平面に記録されている柱穴の長軸は0.19~0.26mである。残存深は0.12~0.4mである。

遺物はSP3620、SP3711の

遺物はSP3620、SP3711の



第84図 3-4区 SB3402 平・断面図



第85図 3-4区 SA3403 平・断面図

各柱穴より、器種不詳の土師質土器が少量出土した。条里型地割の方向に合致することより、中世以降と考えられるが、詳細な時期決定は困難である。(溝上)

②土坑

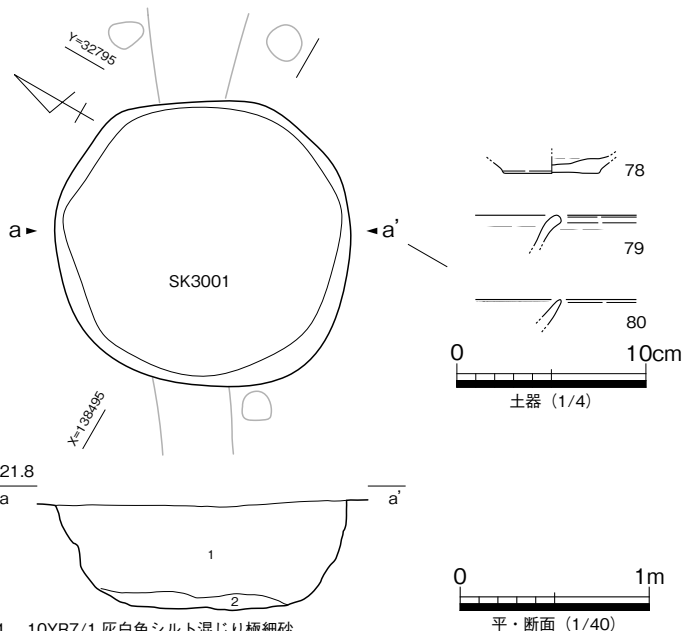
3-2 区 SK3001 (第 86 図)

3-2 区中央部で検出した土坑である。重複関係から、SD3010 に後出する。

平面プランは東西 1.50m、南北 1.56m の円形を呈し、残存深は 0.54m、断面形は概ね逆台形状である。埋土は 2 層に細分される。いずれも耕作土由来と考えられる黒褐色シルトをブロック状に含み、人為的に埋め戻された可能性が高い。

遺物は 78～80 のほか、土師質土器細片が少量出土した。78 は土師質土器皿の底部片で、切り離し技法は回転ヘラ切りである。79 は中世後半期の中国製青磁碗の口縁部片、80 は近世の施釉陶器碗の口縁部片で、口縁端部の釉を剥いでいる。いずれも 1cm 程度の細片のために時期の比定は困難である。

遺構の開削・埋没時期の特定は困難だが、埋土中への耕作土の混入から、近世後期以降とした。(益崎)



- 1 10YR7/1 灰白色シルト混じり極細砂 (黒褐色シルトブロック、径 0.1～0.5cm の礫を少量含む)
- 2 7.5Y5/1 灰色シルト (黒褐色シルトブロックを少量含む)

第 86 図 3-2 区 SK3001 平・断面図、出土遺物

3-2 区 SK3002 (第 87 図)

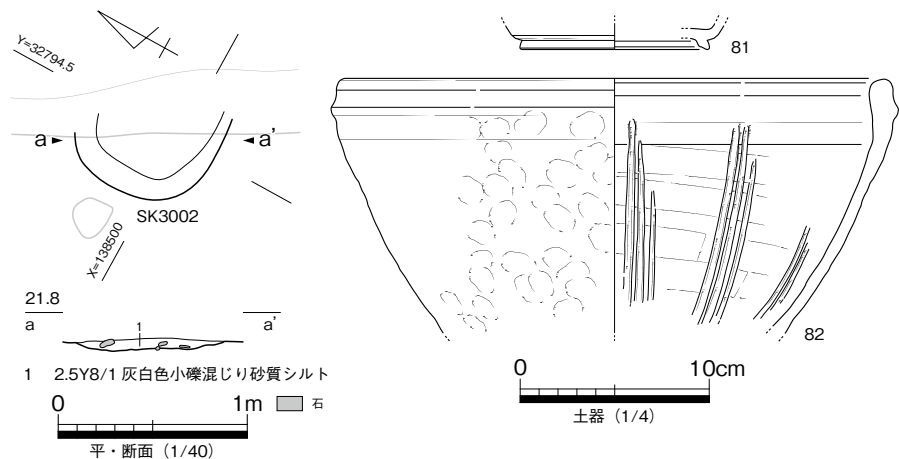
3-2 区北東部で検出した土坑である。重複関係から、SR3001 に後出し、SD3007 に先行する。

規模は南北 0.79m 以上を測り、東西は SD3007 による破壊のために不明である。残存深は 0.07m と極めて浅い。

遺物は、81・82 の 2 点を図示した。

81 は須恵器杯の底部片である。重複する SR3001 埋土等からの混入の可能性がある。82 は土師質土器播鉢である。口縁部は強い指ナデによりわずかに内傾し、端部は丸くなる。本書編年の D 期 (V 型式) に相当する。

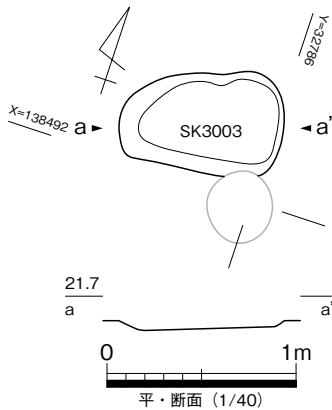
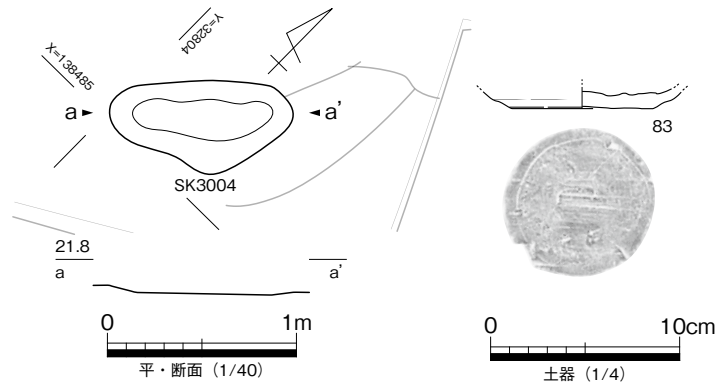
詳細な時期の比定は困難だが、82 の編年観と SD3007 との重複か



- 1 2.5Y8/1 灰白色小礫混じり砂質シルト

第 87 図 3-2 区 SK3002 平・断面図、出土遺物



第88図 3-2区 SK3003  
平・断面図

第89図 3-2区 SK3004 平・断面図、出土遺物

ら、近世前期の遺構とした。(益崎)

### 3-2区 SK3003 (第88図)

3-2区中央部で検出した土坑である。重複関係から、SP3138に先行する。

平面プランは東西0.86m、南北0.52mの楕円形状を呈し、残存深は0.05mと極めて浅い。埋土は調査時の断面図に土層注記が欠落しており詳細は不明だが、調査時の写真を見る限り灰白色系のシルト～細砂と考えられ、周辺の柱穴群の埋土と類似する。

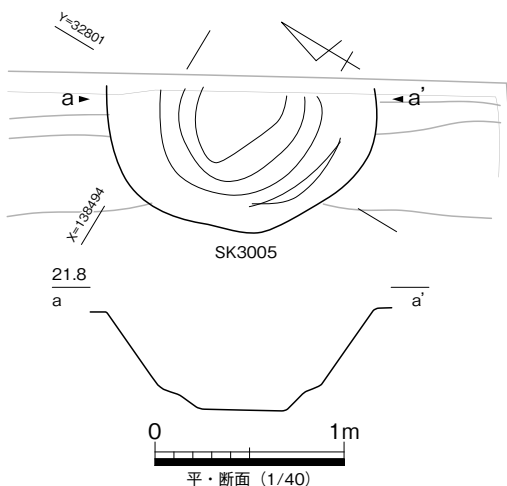
遺物は出土しておらず、詳細な時期の特定は困難だが、埋土の特徴から中世後半期～近世前半期に位置付けたい。(益崎)

### 3-2区 SK3004 (第89図)

3-2区南東隅部で検出した土坑である。重複関係から、SD3027に後出する。

平面プランは長軸0.97m、短軸0.24mの楕円形状を呈し、残存深は0.04mと極めて浅い。埋土は調査時の断面図に土層注記が欠落しており詳細は不明だが、調査時の写真をみると、水田耕地化後の耕作土由来と考えられる黒褐色シルトブロックを含む。

遺物は土師質土器杯の底部片1点が出土した(83)。底径7.5cm、切離し技法は回転ヘラ切りで、板目圧痕が残る。佐藤編年中世Ⅱ-1～2期の所産である。遺物は底部片1点のみと少なく時期の比定は困難だが、SD3027との重複関係と埋土に耕作土を含む点から、近世後期以降とした。(益崎)



第90図 3-2区 SK3005 平・断面図

### 3-2区 SK3005 (第90図)

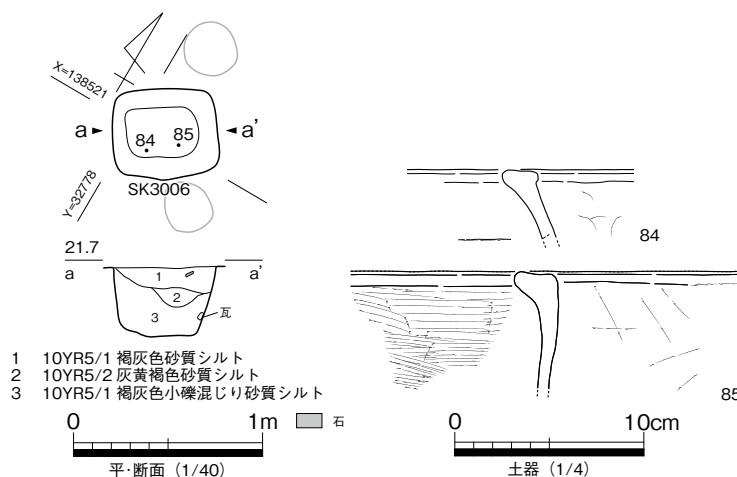
3-2区中央部東壁付近で検出した土坑である。重複関係から、SD3025・SD3027に後出する。

規模は南北1.40mを測り、東西は調査区外東側へと続くために不明である。検出部での残存深は0.58mで、断面形は概ね逆台形状である。埋土は耕作土由来と考えられる黒褐色シルトブロックを多量に含む。

遺物は出土せず詳細な時期は不明である。SD3025・SD3027 との先後関係と埋土に耕作土を含む点から、近世後期以降とした。(益崎)

### 3-1 区 SK3006 (第 91 図)

3-1 区中央部で検出した土坑である。長軸 0.56 m、短軸 0.48 m、残存深 0.36 m をそれぞれ測り、平面形は整った隅丸長方形、断面形は底面が平坦な箱型を呈する。埋土は 3 層に細分されいずれも砂質シルトが堆積している。

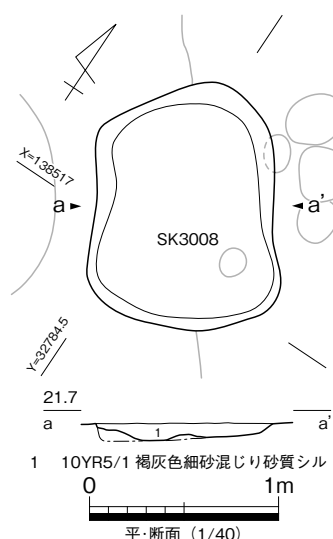


第 91 図 3-1 区 SK3006 平・断面図、出土遺物

84 は土師質土器把手付鍋。本書編年 B 期 (I-III 型式) に相当する。85 は土師質土器深鉢。外面はナデ、内面はハケで調整する。どちらも 3 層からの出土であるため、近世前期頃を上限とする。(溝上)

### 3-1 区 SK3008 (第 92 図)

3-1 区中央部やや東寄りで検出した土坑である。重複関係より SD3028 に後出する。長軸 1.28 m、短軸 0.94 m、残存深 0.1 m をそれぞれ測り、平面形はやや歪な隅丸方形、断面形は皿状を呈する。埋土は SD3028 に近似する褐灰色細砂混じり砂質シルトの単層であった。



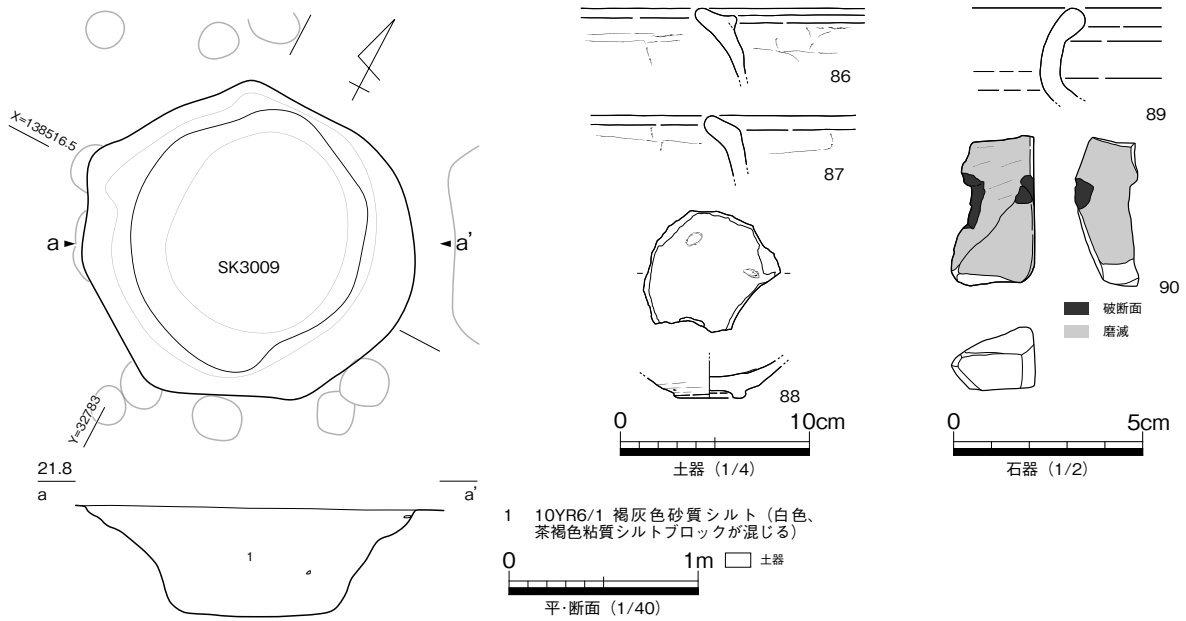
第 92 図 3-1 区 SK3008 平・断面図

遺物は図示していないが土師質土器播鉢の体部など 10 点程度出土している。SD3028 を切ることから 17 世紀以降と想定する。(溝上)

### 3-1 区 SK3009 (第 93 図)

3-1 区中央部やや南寄りで検出した土坑である。重複関係より SP3561、3578、3579、3580 より先行する。長軸 1.76 m、短軸 1.68 m、残存深 0.58 m をそれぞれ測り、平面形は歪な円形、断面形は逆台形状を呈する。埋土は褐灰色砂質シルトの単層だが、茶褐色粘質シルトブロックが混じる。

遺物は図示した以外にも、土師質土器足釜、本書編年 B 期 (I-II 型式) に相当する土師質土器把手付鍋などが 20 点程度出土した。86 は土師質土器の把手付鍋口縁部片。本書編年 B 期 (I-II 型式) に相当する。87 は土師質土器鉢。88 は肥前系陶器皿。体部内面底部には胎土目積の跡が残る。89 は備前焼の甕口縁部片。小片のため口径の復元は困難であるが、間壁編年の III 期に相当する。90 は流紋岩製の砥石。現存の断面形は概ね三角形を呈するが、うち一面は石が割れたままの状態のため本来は三角形ではなかったと推定する。2 面砥石として使用している。出土遺物は、14 世紀中葉～17 世紀前半代の年代を示すが、86・87・89 は小片であり、遺存状況が良好な 88 が示す 17 世紀前半が遺構の埋没年代として適当と考える。(溝上)



第93図 3-1区SK3009平・断面図、出土遺物

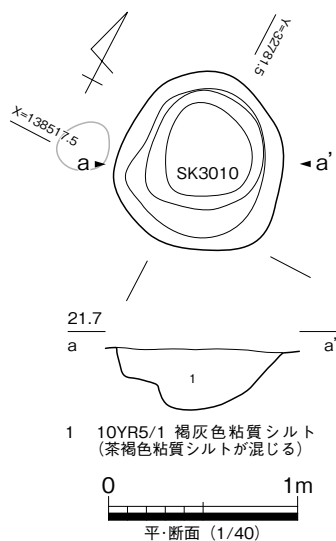
3-1区SK3010 (第94図)

3-1区中央部で検出した土坑である。長軸0.94m、短軸0.88m、残存深0.32mをそれぞれ測り、平面形は概ね円形、断面形は一部がへこんだ丸底状を呈する。埋土は褐灰色粘質シルトの単層で茶褐色粘質シルトが混じる。

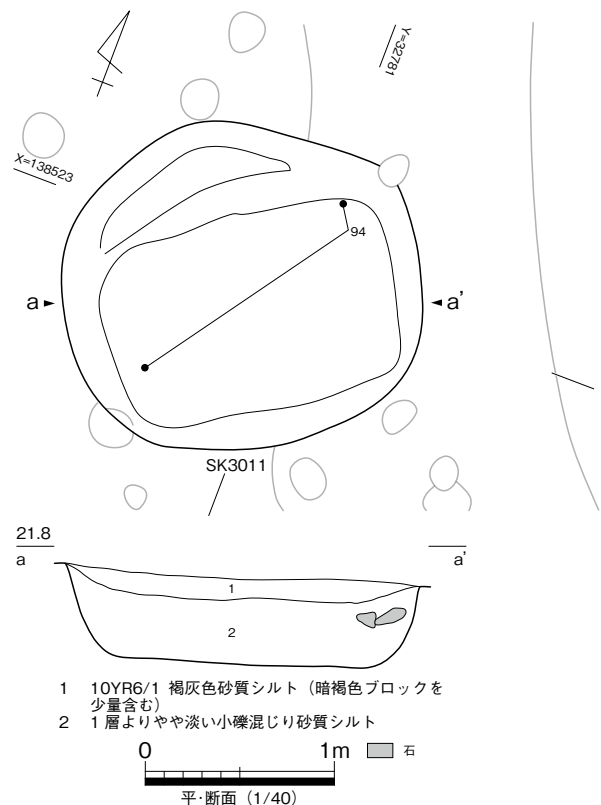
遺物は図示していないが器種不詳の土師質土器口縁部片などが10点程度出土している。出土遺物より時期を特定することは困難であるが、埋土がSK3009に近似することから近接した時期に埋め戻しが行われたと想定する。(溝上)

3-1区SK3011 (第95・96図)

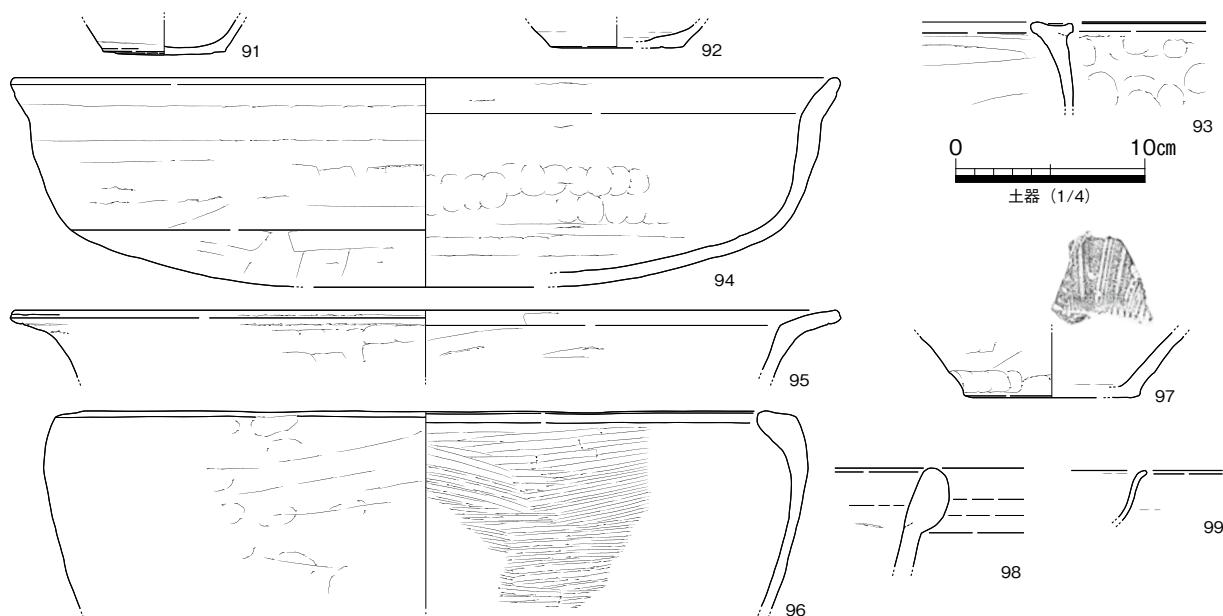
3-1区中央部やや北よりで検出した土坑である。重複関係よりSP3542に後出し、SD3028、SP3488に先行する。長軸1.9m、短軸1.74m、



第94図 3-1区SK3010平・断面図



第95図 3-1区SK3011平・断面図



第96図 3-1区 SK3011 出土遺物

残存深0.44 mをそれぞれ測り、平面形は隅丸方形、断面形は箱型を呈する。埋土は2層に細分されており、上層では暗褐色ブロックを含む褐灰色砂質シルト、下層では上層よりやや淡い褐灰色砂質シルトが堆積している。上層の土にベース層のブロックを含んでいることから下層上部の浅い皿状に窪んだ部分を人為的に埋めた可能性が考えられる。

遺物は図示した以外にも、本書編年B期(1-II型式)とD期(1-V型式)に相当する土師質土器把手付鍋、備前焼の底部などが60点程度出土している。91は土師質土器杯。底部外面は回転ヘラ切り。佐藤編年の中世II-5期に相当する。92は古代須恵器杯の底部。底部は回転ヘラ切り。93は土師質土器把手付鍋。体部外面に煤が付着する。本書編年B期(1-III型式)に相当する。94・95は土師質土器鍋。96は土師質土器火鉢。口縁部～体部の内外面に煤が付着している。97は土師質土器播鉢の底部。98は備前焼甕の口縁部片。99は白磁端反皿の口縁部片。土坑の底部付近から94が出土していることから、17世紀前半頃に埋め戻しが行われたと考える。(溝上)

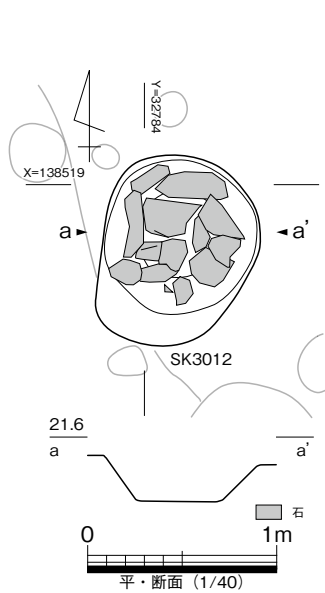
### 3-1区 SK3012 (第97図)

3-1区中央部やや東寄りで検出した土坑である。重複関係よりSD3028に後出する。長軸1.0 m、短軸0.82 m、残存深0.22 mをそれぞれ測り、平面形は歪な隅丸方形、断面形は逆台形状を呈する。埋土はSK3012の土層断面図、堆積状況を示す記録がないため層の堆積状態、埋土は不明である。土坑の中で亜角礫状の石を複数検出している。石はいずれも0.2 m以上の大きさがある。

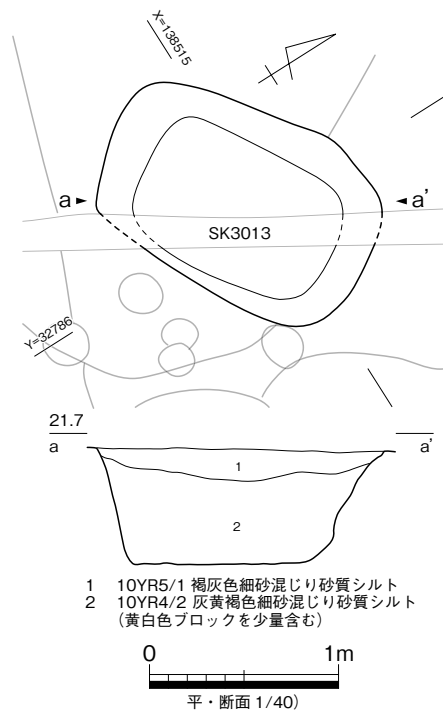
遺物は図示していないが、本書編年A期(I型式)に相当する土師質土器把手付鍋などが数点出土している。出土遺物より14世紀以降の可能性が指摘されるのみで、詳細な時期を特定することは困難である。(溝上)

### 3-1区 SK3013 (第98図)

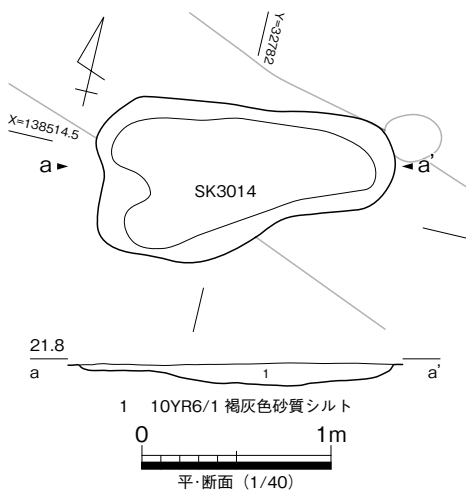
3-1区の中央部からやや南東寄りで検出した土坑である。重複関係よりSD3028に後出する。長軸1.5



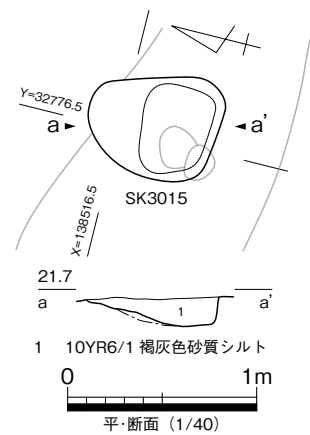
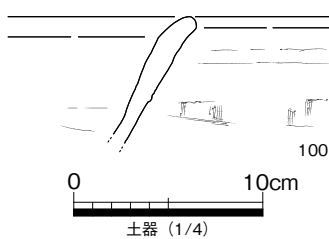
第97図 3-1区 SK3012  
平・断面図



第98図 3-1区 SK3013  
平・断面図



第99図 3-1区 SK3014  
平・断面図、出土遺物



第100図 3-1区 SK3015  
平・断面図

3-1区 SK3015 (第100図)

3-1区西側で検出した土坑である。重複関係より SD3040、SP3354、SP3574 に後出する。長軸 0.68 m、短軸 0.6 m、残存深 0.14 m をそれぞれ測り、平面形は隅丸三角形、断面形は底面が平坦な逆台形状を呈する。埋土は褐灰色砂質シルトの単層であった。

遺物は図示していないが、器種不詳の土師質土器片などが少量出土している。埋土が中世以降の他の

m、短軸 1.0 m、残存深 0.6 m をそれぞれ測り、平面形は隅丸方形、断面形は概ね逆台形を呈する。埋土は 2 層に細分されており、上層には褐灰色細砂混じり砂質シルト、下層には灰黄褐色細砂混じり砂質シルトが堆積する。上層の埋土は SD3028、SD3033 の埋土と相似している。

遺物は図示していないが、土師質土器播鉢体部片・足釜脚部などが 20 点程度出土している。出土遺物と切り合いの関係より近世前期 (17 世紀中葉) 以降と考えられる。(溝上)

3-1区 SK3014 (第99図)

3-1区中央部やや南寄りで検出した土坑である。重複関係より SD3040、SP3449 に後出する。長軸 1.54 m、短軸 0.86 m、残存深 0.12 m をそれぞれ測り、平面形は歪な隅丸三角形、断面形は皿状を呈する。埋土は褐灰色砂質シルトの単層であった。

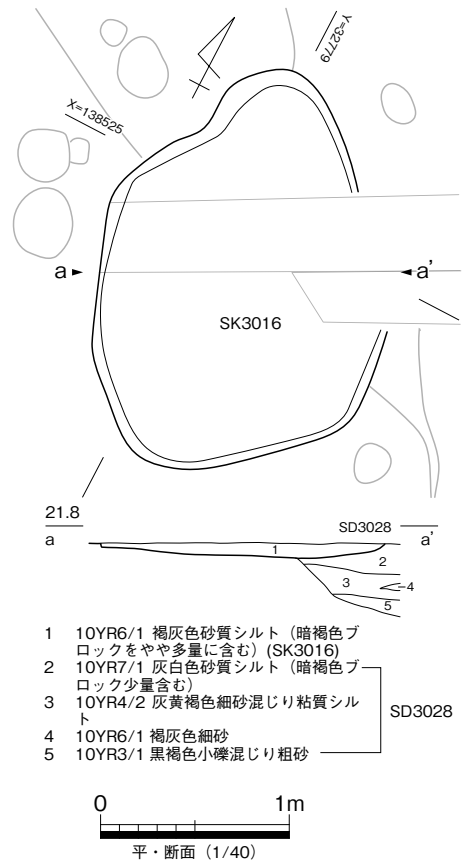
遺物は図示した以外にも、施釉陶器の口縁部片、土師質土器の細片などが 10 点程度出土している。100 は土師質土器鍋。口縁部は外傾せず、口縁部は内外ともにナデで調整する。出土遺物より 17 世紀前半頃の遺構と考える。(溝上)

遺構と酷似することから当該期の遺構として報告する。(溝上)

### 3-1 区 SK3016 (第 101 図)

3-1 区中央部やや北寄りで見出した土坑である。重複関係より SD3028、SD3039 に後出する。長軸 2.0 m、短軸 1.56 m、残存深 0.06 m をそれぞれ測り、平面形は歪な円形、断面形は皿状を呈する。埋土は褐灰色砂質シルトの単層。埋土中にベース層のブロックを多く含むことから、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物は図示していないが、土師質土器足釜脚部などが少量出土している。SD3028 との切り合い関係から、17 世紀中葉以降の可能性が指摘できる。(溝上)

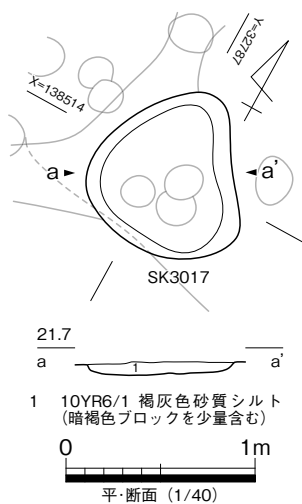


第 101 図 3-1 区 SK3016 平・断面図

### 3-1 区 SK3017 (第 102 図)

3-1 区南部で見出した土坑である。重複関係より SD3033 より後出し、SP3547、SP3548、SP3549 より先行する。長軸 0.88m、短軸 0.8 m、残存深 0.06 m をそれぞれ測り、平面形は不定形、断面形は浅い皿型を呈する。埋土は暗褐色ブロックを含む褐灰色砂質シルトの単層であった。

遺物は図示していないが、土師質土器片が少量出土している。SD3028、SD3033 との切り合い関係から、17 世紀の遺構の可能性が指摘できる。(溝上)

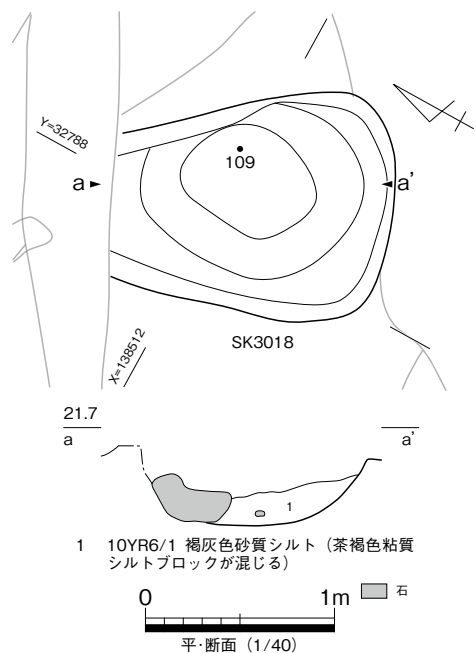


第 102 図 3-1 区 SK3017 平・断面図

### 3-1 区 SK3018 (第 103 ~ 105 図)

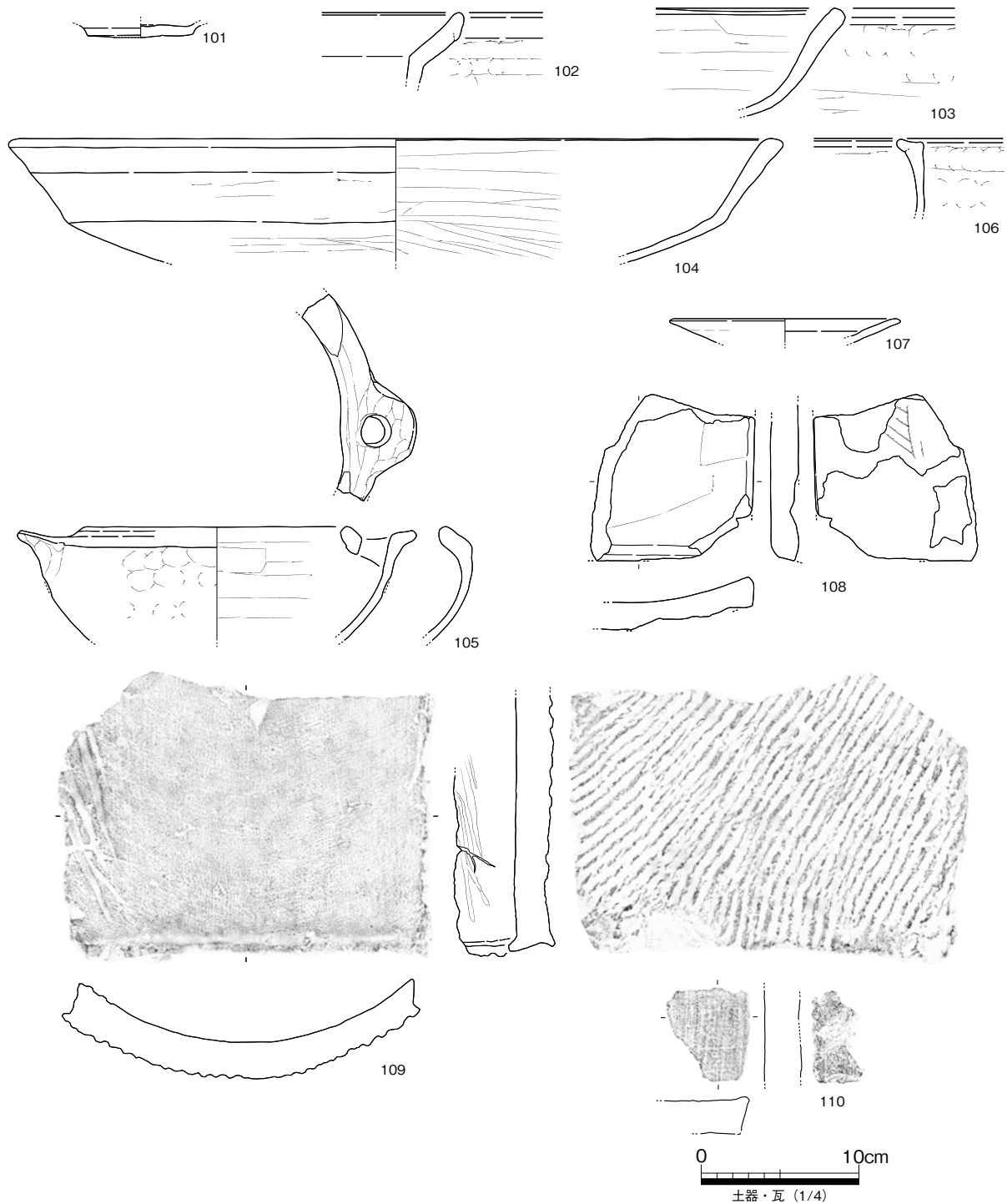
3-1 区南部で見出した土坑である。重複関係より SD3030 に先行する土坑のため、土坑の北部を SD3030 に切られる。重複関係より SD3005 より後出する。長軸 1.5 m 以上、短軸 1.2 m、残存深 0.18 m、平面形はやや歪な隅丸形状、断面形は浅い U 字形を呈する。埋土はベース層のブロック土を含む褐灰色砂質シルトが堆積し、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物は図示した以外にも、土師質土器足釜、備前焼、播鉢などが 40 点程度出土している。101 は古代の土師器杯底部。102 は古代の土師器甕で

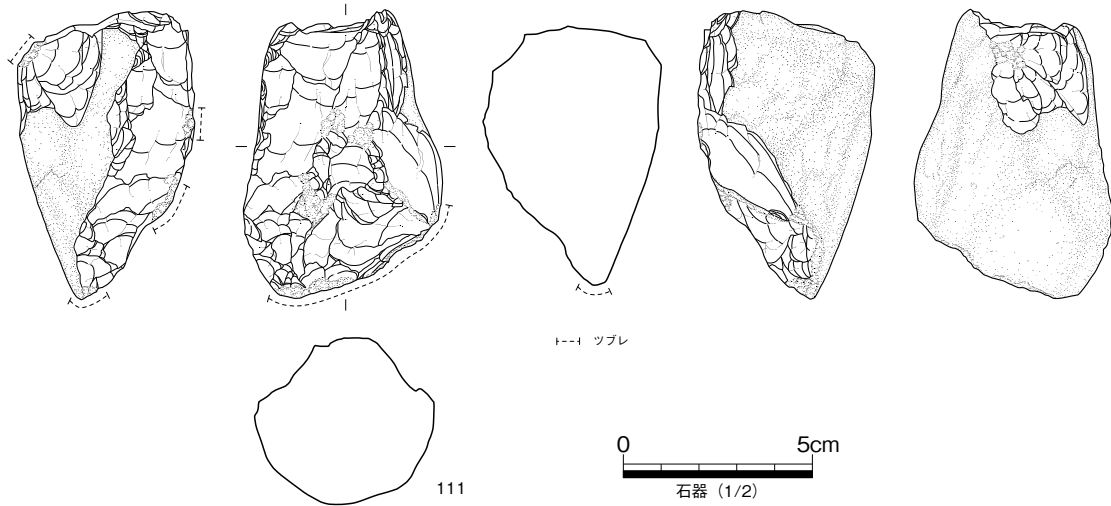


第 103 図 3-1 区 SK3018 平・断面図

口縁部に明確な屈曲点を持ち、大きく外傾する。103・104は土師質土器焙烙。口縁部に屈曲点がなく、大きく外傾せず僅かに外傾するのみである。粗質の胎土中に金雲母を多量に含む。胎土・形態の特徴から、岡本系の焙烙である。105・106は土師質土器把手付鍋。105の外面は煤に覆われている。本書編年のD期(1-IV型式)に相当する。106は本書編年のB期(1-Ⅲ型式)に相当する。107は肥前系陶器皿。内外面に施釉するが、外面の底部付近は無釉である。108～110は平瓦。108は近世瓦で磨滅が激しく調整は確認しにくい。凸面と凹面に糸切り痕(コビキA)が認められる。凹面狭端部は面切される。109は古代末～中世前半の瓦で、凸面は縄目で凹面は布目で調整する。110は中世前半の瓦で、やや甘い表



第104図 3-1区SK3018出土遺物1



第105図 3-1区SK3018出土遺物2

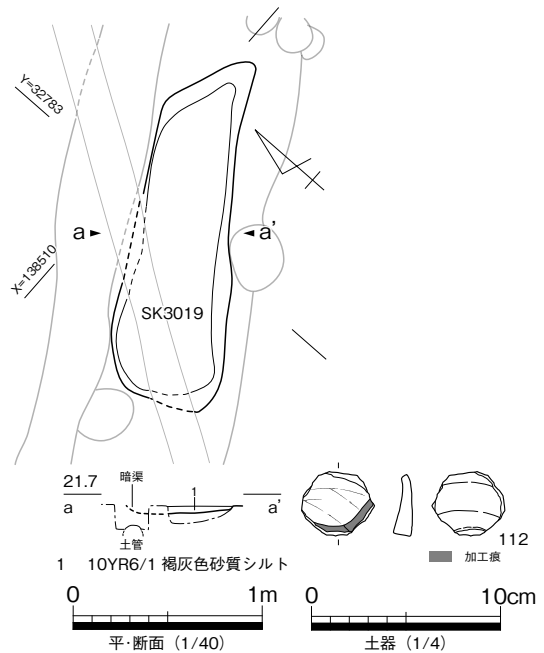
面は燻されている。凸面に叩き目、凹面に布目が残る。111は石英の垂円礫を利用した火打石として図示した。打ち欠いた稜線部に、火打石として使用した際の敲打痕が認められるが、敲打痕はあまり顕著ではない。このほかに263、270が出土している。これらはSD3028との接合資料であり、SD3028で報告している。

出土遺物は、古代後半(9～10世紀)の101・102、中世前半の109・110を除き、高松城跡様相1～3の幅で捉えられるため、遺構埋没の年代を示しているとみてよからう。(溝上)

### 3-1区SK3019 (第106図)

3-1区南部で検出した土坑である。重複関係より一部をSD3030に切られるように見えるが、後世に作られた暗渠が重複部分の上部を通ることで攪乱され、詳細を知ることにはできない。重複関係よりSP3416より先行する。長軸1.88m、短軸0.6m、残存深0.04mをそれぞれ測り、平面形は隅丸方形、断面形は皿状を呈する。埋土は褐灰色砂質シルトの単層であった。

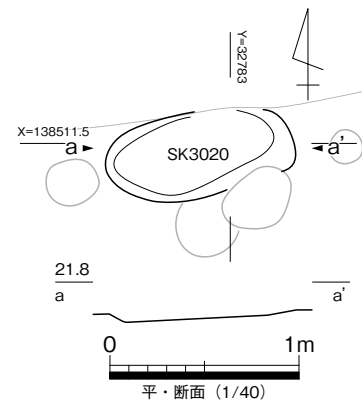
遺物は図示した以外にも、土師質土器の細片が少量出土している。112は用途不明の土製品である。須恵器片を丸く加工している。SD3030に先行する遺構であるSK3018と埋土が近似することから、同時代の遺構と考える。(溝上)



第106図 3-1区SK3019  
平・断面図、出土遺物

### 3-1区SK3020 (第107図)

3-1区南部で検出した土坑である。重複関係より、SP3536より後出



第107図 3-1区SK3020  
断面図



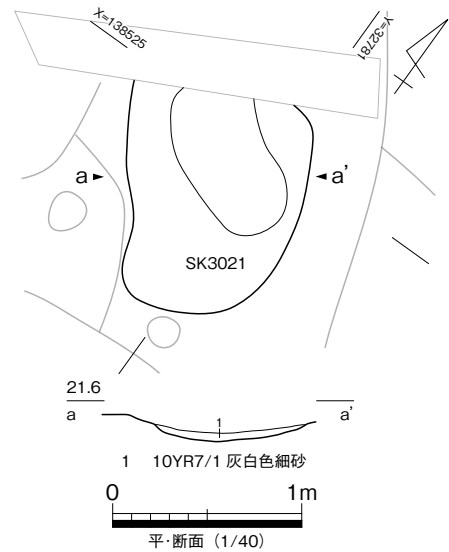
し、SP3415より先行する。長軸1.0 m、短軸0.6 m、残存深0.04 mをそれぞれ測り、平面形は楕円形状、断面形は逆台形状を呈する。

遺物は図示していないが、土師質土器片が少量出土している。出土遺物も年代決定が困難であるため、詳細な時期を特定することはできない。(溝上)

3-1区 SK3021 (第108図)

3-1区やや北寄りで見出した土坑である。土坑の上部はSD3028によって削奪されている。長軸1.18 m以上、短軸0.96 m、残存深0.04 mをそれぞれ測り、平面形は歪な隅丸方形、断面形は皿状を呈する。埋土は灰白色細砂の単層であった。

遺物は図示していないが、土師質土器の杯口縁部片などが少量出土している。出土遺物と切り合い関係より、中世の遺構であると想定する。(溝上)

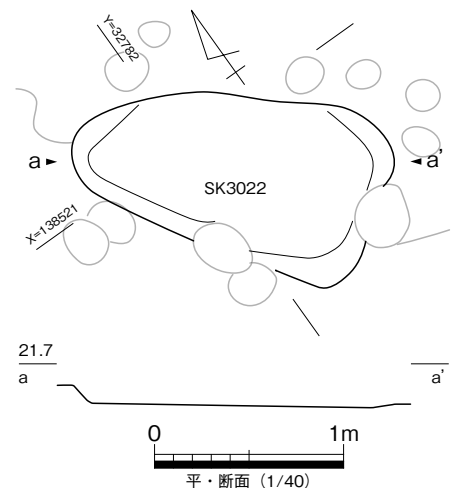


第108図 3-1区 SK3021 平・断面図

3-1区 SK3022 (第109図)

3-1区中央部で見出した土坑である。重複関係からSD3028より先行し、SP3460、SP3490、SP3491より後出する。長軸1.7 m、短軸0.96 m、残存深0.1 mをそれぞれ測り、平面形は東西に長い楕円形状、断面形は逆台形状を呈する。

遺物は出土していない。SD3028に先行することから中世後期以前の可能性が指摘されるのみで、詳細な時期を決定することは困難である。(溝上)

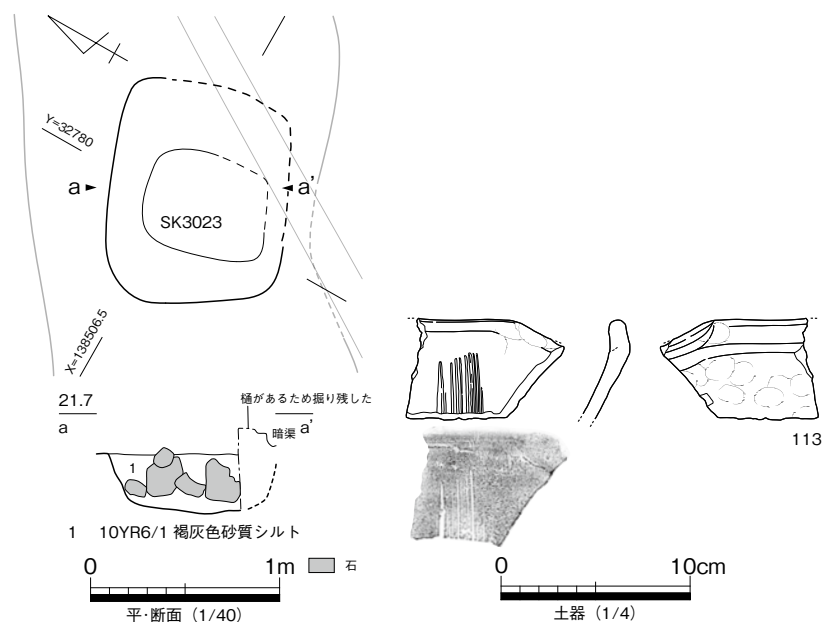


第109図 3-1区 SK3022 平・断面図

3-1区 SK3023 (第110図)

3-1区南部で見出した土坑である。遺構の南部は後世の暗渠によって破壊されている。長軸1.16 m以上、短軸0.94 m以上、残存深0.3mをそれぞれ測り、平面形は隅丸方形、断面形は底面が平坦な逆台形状を呈する。埋土は褐灰色砂質シルトの単層で、0.1～0.2 mの石が多数検出された。

遺物は図示していないが、土師質土器の細片が少量出土



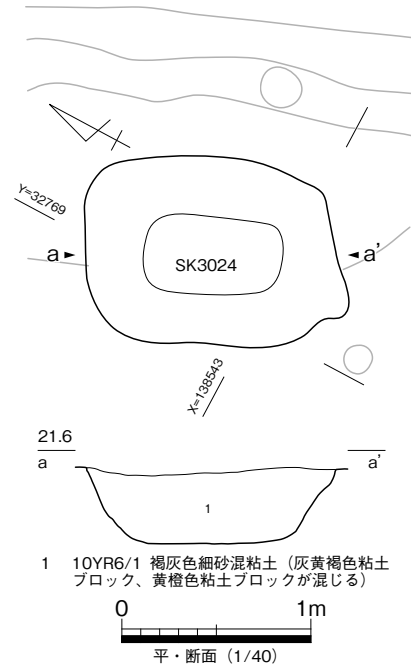
第110図 3-1区 SK3023 平・断面図、出土遺物

している。SD3037を掘削後に、SK3023を検出したため、SK3023の遺物がSD3037に混入している可能性も考えられる。113は土師質土器播鉢。口縁部に片口を作る。本書編年D期(V型式)に相当する。遺構の時期は出土遺物より、17世紀前半と考えられる。(溝上)

### 3-3区 SK3024 (第111図)

3-3区北部で検出した土坑である。重複関係からSD3050より後出する。長軸1.34m、短軸1.0m、残存深0.38mをそれぞれ測り、平面形はやや歪な隅丸方形、断面形は逆台形状を呈する。埋土は褐灰色細砂混粘土の単層。埋土中には灰黄褐色粘土、黄橙色粘土のブロックが混じる。

遺物は土師質土器片、播鉢の体部片など10点程度出土している。出土遺物より時期を特定することは困難だが、SD3050との切り合い関係から中世後期～近世前期の遺構と考える。(溝上)

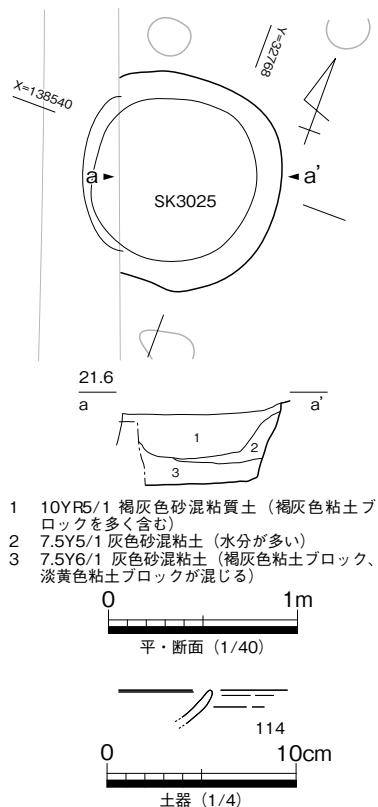


第111図 3-1区 SK3024 平・断面図

### 3-3区 SK3025 (第112図)

3-3区中央部西壁沿いで検出した土坑である。土坑の西側は調査区外へ延長するため、土坑の全形は検出できていない。長軸1.16m、短軸0.88m以上、残存深0.36mをそれぞれ測り平面形は円形、断面形は逆台形状を呈する。埋土は3層に細分され、2層で検出された水分を多く含む灰色砂混粘土を除きいずれもベース層のブロック土を含むことから、人為的に埋め戻された可能性がある。

遺物は土師質土器細片が少量出土している。114は肥前系陶器皿の口縁部片。出土遺物より埋め戻しの時期を17世紀と想定する。(溝上)



第112図 3-3区 SK3025 平・断面図、出土遺物

### 3-3区 SK3027 (第113図)

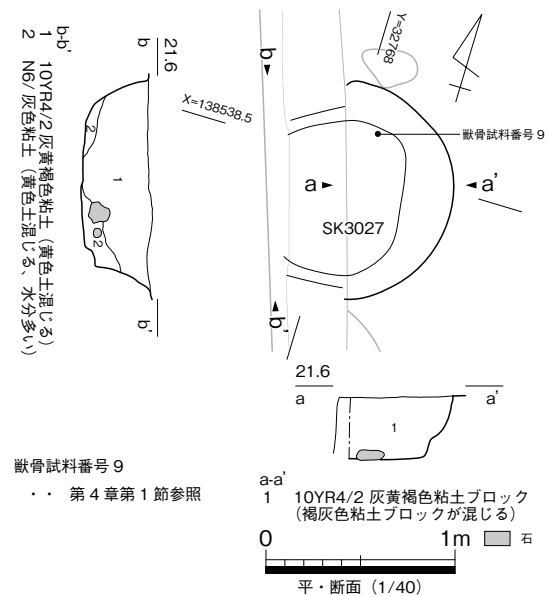
3-3区中央部西壁沿いで検出した土坑である。遺構の西側は調査区外へ延長するため、土坑の全形は検出できていない。長軸1.16m、短軸0.56m以上、残存深0.32mをそれぞれ測り、平面形は円形、断面形は逆台形状を呈する。埋土中にはベース層のブロック土を含むことから、人為的に埋め戻された可能性がある。

遺物は図示していないが、土師質土器片、本書編年D期(V型式)に相当する土師質土器把手付鍋などが少量出土したほか、ウマの上腕骨(第4章第1節参照)が出土している。形状からSK3025と類似する性格が想定され、近接した時期に埋め戻しが行われたと考える。(溝上)

3-3区 SK3028 (第114図)

3-3区北部、西壁沿いで検出した土坑である。遺構の西側は調査区外へ延長するため、土坑の全形は検出できていない。重複関係よりSD3045に後出する。長軸2.1m、短軸0.76m以上をそれぞれ測る。残存深は西壁で0.4mの堆積が確認できる。平面形は隅丸方形を呈すると想定され、断面形は皿状を呈する。埋土は3層に細分されている。最下層は水分を多く含む灰色細砂混粘土だが、上層、中層はベース層のブロック土を含むことから人為的に埋め戻された可能性がある。

遺物は土師質土器片、陶器片などが少量出土している。SK3025、SK3027と形状は似ていないものの検出場所から類似する性格が想定され、これらと近接した時期に埋め戻しが行われた可能性がある。(溝上)



第113図 3-3区 SK3027 平・断面図

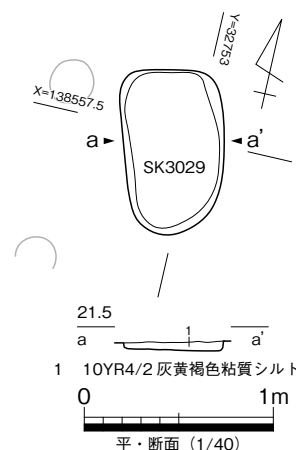
3-4区 SK3029 (第115図)

3-4区中央部で検出した土坑である。長軸0.86m、短軸0.54m、残存深0.04mをそれぞれ測り、平面形はやや歪な隅丸方形、断面形は浅い逆台形状を呈する。埋土は灰黄褐色粘質シルトの単層であった。遺物は出土しておらず、詳細な時期を特定することはできない。(溝上)

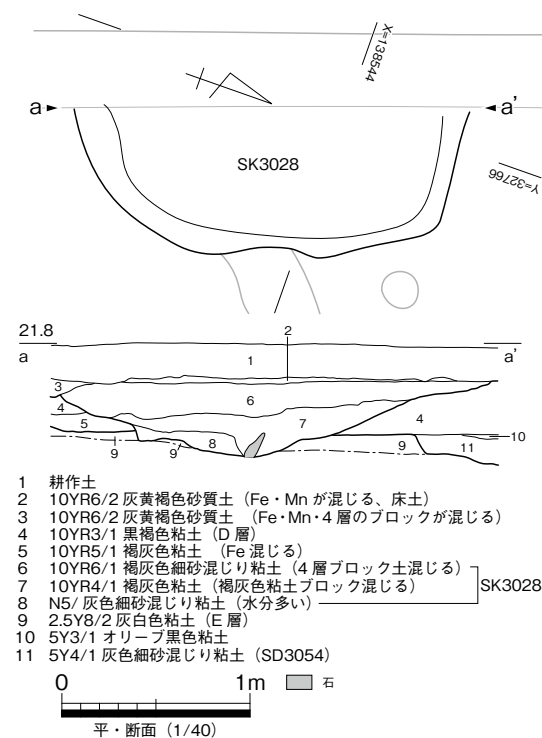
3-4区 SK3031 (第116図)

3-4区西部北壁沿いで検出した土坑である。遺構北部は調査区外へ延長し、土坑の全形は不明である。重複関係よりSD3053、SP3706・3748・3760に先行し、SP3749、SD3058より後出する。長軸1.62m、短軸0.64m以上、残存深0.46m前後をそれぞれ測り、平面形は隅丸方形を呈すると想定されるが不詳である。断面形は逆台形状を呈する。埋土は3層に細分されているが、褐灰色砂質土または砂質シルトが堆積し、黄色粘土ブロックの多寡によって分層が行われている。

遺物は土師質土器足釜などが50点程度出土している。115・116は土師質土器皿。115の底部はヘラ切り、底部付近に明確



第115図 3-4区 SK3029 平・断面図



第114図 3-3区 SK3028 平・断面図

な屈曲点を持つ。佐藤編年中世Ⅱ-1～2期(12世紀後半～13世紀前葉)に相当し、この年代の遺構と考えられる。(溝上)

### 3-4区 SK3032 (第117図)

3-4区西部で検出した土坑である。重複関係よりSP3695、SP3749、SK3031に先行する。長軸0.7m以上、短軸0.52m、残存深0.06mをそれぞれ測り、平面形は隅丸方形状、断面形は浅い逆台形状を呈する。埋土は黄色粘土ブロックを含む褐灰色粘質シルトの単層であった。

遺物は出土部位不明の土師質土器、須恵器などが少量出土している。切り合い関係から、13世紀以前の可能性が指摘されるのみで、詳細な時期を特定することはできない。(溝上)

### 3-5区 SK3033 (第118図)

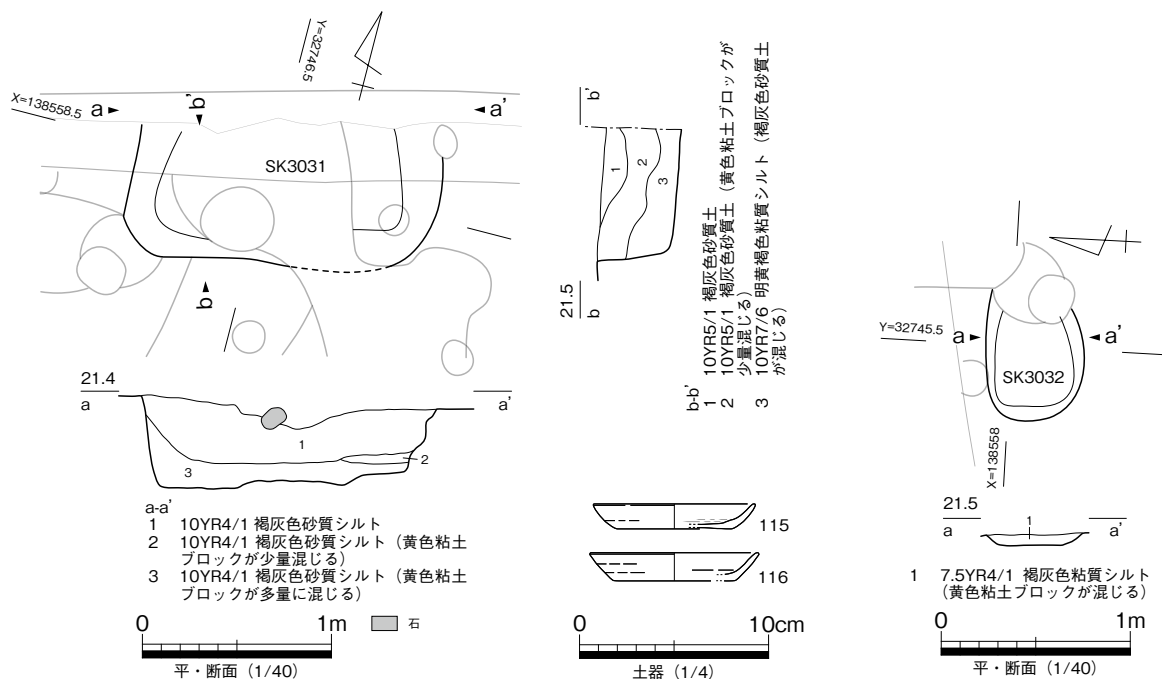
3-5区南壁沿いで検出した土坑である。南側は調査区外へ延長し、西側は暗渠に切られる。重複関係よりSP3762、SP3763に先行する。長軸1.4m以上、短軸0.7m以上、残存深0.18～0.28mをそれぞれ測り、平面形は不詳である。断面形は箱型を呈する。埋土は黄色粘土ブロックを含む褐灰色粘質シルトの単層であった。

遺物は図示した以外にも、本書編年B期(Ⅱ型式)に相当する土師質土器把手付鍋、同じくD期(V型式)に相当する土師質土器挿鉢を含む土師質土器片などが10点程度出土している。117は中世前半の土師質土器の皿口縁部片。118は土師質土器の把手付鍋。内外面とも指オサエ後ナデで調整する。本書編年のC期(Ⅰ-Ⅳ型式)に相当する。出土遺物より、中世後期の遺構と考える。(溝上)

## ③性格不明遺構

### 3-2区 SX3001 (第119図)

3-2区中央部西側で検出した土坑状遺構である。平面プランは長軸2.32m、短軸0.61mの長方形状を



第116図 3-4区 SK3031 平・断面図、出土遺物

第117図 3-4区 SK3032 平・断面図

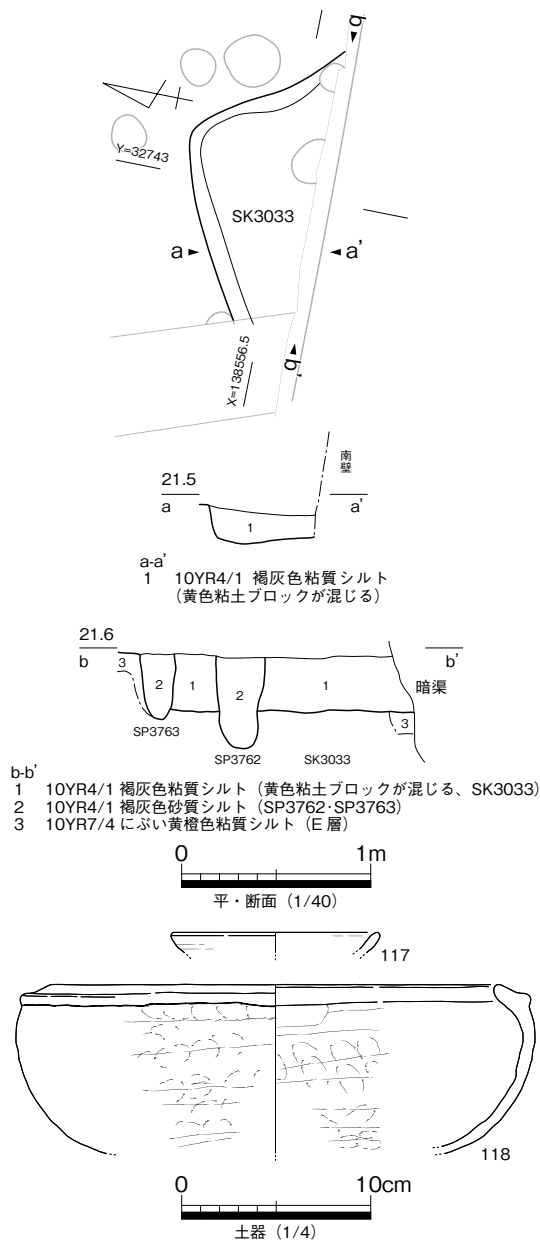
呈し、残存深は0.42m、断面形は逆台形状である。埋土は耕作土由来と考えられる黒褐色シルトブロックを多量に含み、周辺の耕地化後に埋め戻された可能性が高い。

119は埋土中より出土した中世前半期の土師質土器杯の底部片である。小片のために体部以上の形態は不明だが、底部にはわずかにヘラ切りの痕跡が認められる。そのほか、埋土中より径約40cm、長さ1.5mの丸太材が出土した。両端面には鋸状工具による切断痕が残り、側面には洋丸釘が打ち付けられる。

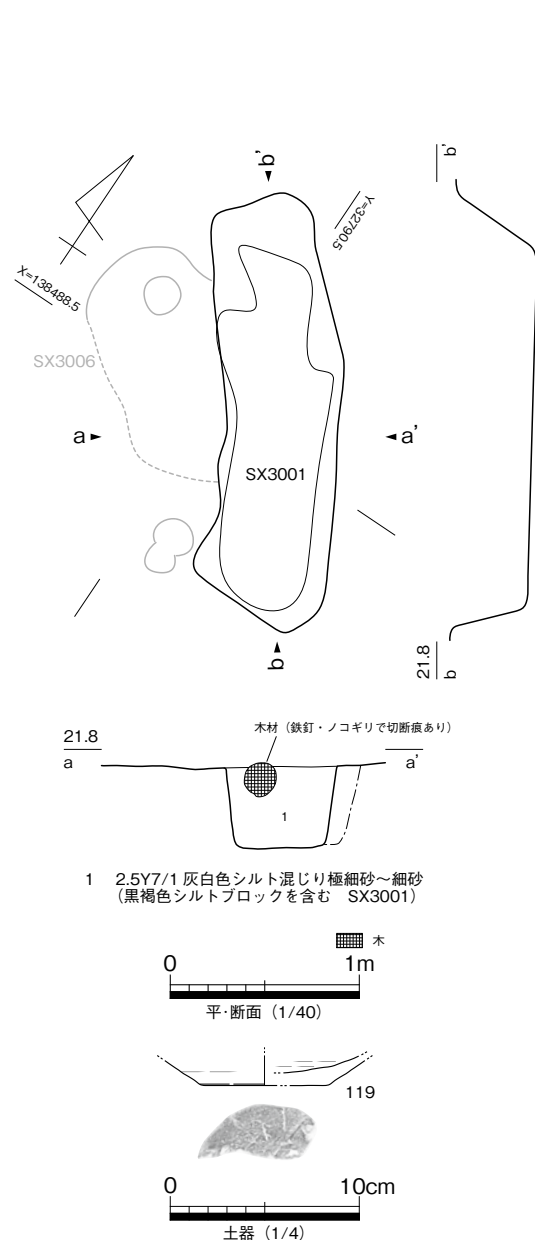
埋土中に耕作土ブロックを多量に含む点、丸太材に打ち込まれた洋丸釘から、近代以降の遺構と理解する。(益崎)

### 3-2区 SX3003 (第120図)

3-2区南部で検出した土坑状遺構である。平面プランは長軸2.36m、短軸1.54mの楕円形状を呈し、残存深は0.64m、断面形は逆台形状である。埋土は2層に細分され、上層には耕作土由来と考えられる黒褐色シルトブロックを含むことから、人為的に埋め戻された可能性が高い。2層には、拳大から人頭



第118図 3-5区 SK3033 平・断面図、出土遺物

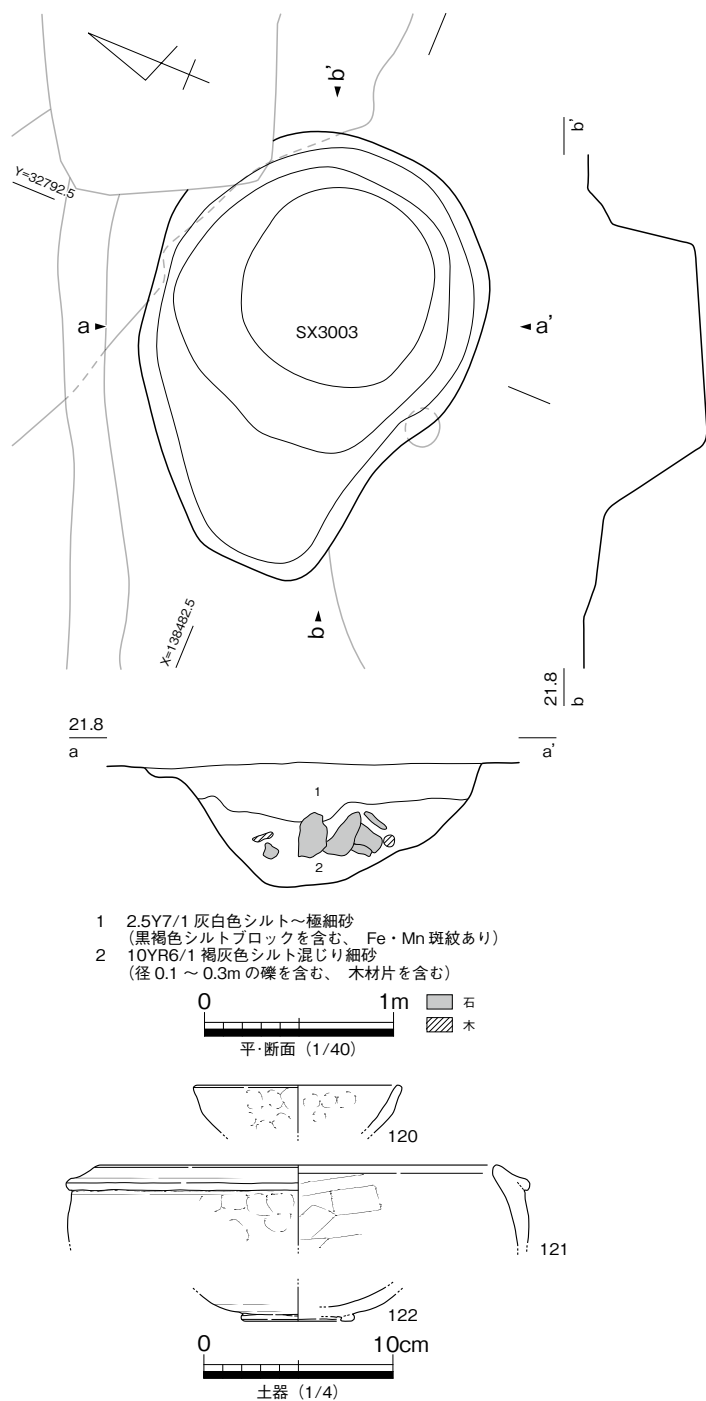


第119図 3-2区 SX3001 平・断面図、出土遺物

大の礫石、木材片を多量に含む。

遺物は、120～122のほか、土師質土器細片、凝灰岩製の五輪塔地輪が出土した。120は土師器小形鉢の口縁部片。古墳時代前期と考えられ、混入と考えられる。121は土師質土器足釜の口縁部～底部片である。口縁端部は丸く、鋳部は短く小さい。122は十瓶山窯系須恵器碗の底部片である。内外面ともに磨滅し、調整は判別できない。高台高は3mm程度と低く、貼付けは粗雑である。

古墳時代から近世前期までの遺物を含むが、埋土に耕作土ブロックを含む点から、近世後期以降に埋め戻されたものと理解した。(益崎)

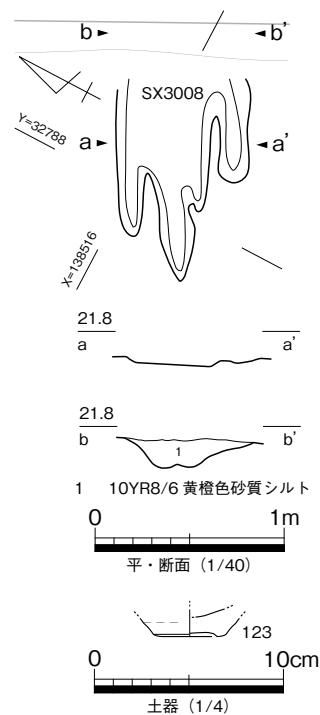


第120図 3-2区 SX3003 平・断面図、出土遺物

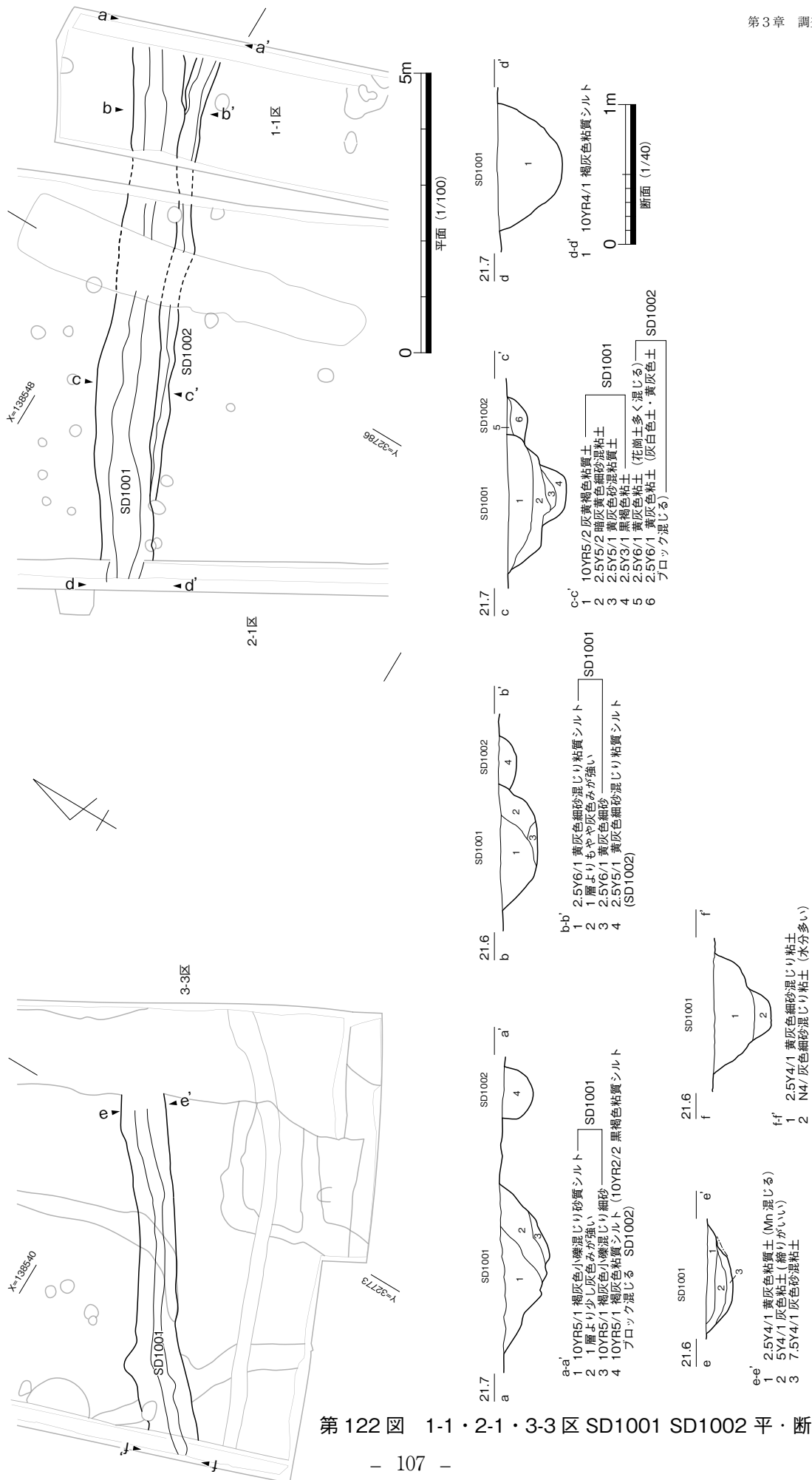
### 3-1区 SX3008 (第121図)

3-1区中央部東壁沿いで検出した。東側は調査区外へ延長するとみられ、全形は不明である。検出形は不定形を呈する。南北長0.7m、東西長1.1m、残存深0.04m前後をそれぞれ測り、断面形は概ね皿状を呈する。埋土は単層で黄橙色砂質シルトが堆積している。

遺物は図示した以外に、土師質土器の小片が出土している。123は肥前系陶器皿の底部片。出土遺物より17世紀前半頃の遺構と考える。(溝上)



第121図 3-2区 SX3008 平・断面図、出土遺物



第122図 1-1・2-1・3-3区 SD1001 SD1002 平・断面図

④溝

1-1・2-1・3-3区 SD1001 (第122図)

1-1区・2-1区で検出した溝と3-3区で検出した溝を、遺構の規模や流路方向、埋土等より判断し、一連の遺構として報告する。遺構の重複関係より、SB1002とSD3042より先行する。検出面幅0.88～0.98m前後、残存深0.27～0.46m、断面形は逆台形状ないし皿状を呈する。流路方向はN 62.63° E前後に配され、丸亀平野の条里型地割の方向と概ね合致する。溝底面の標高は、3-3区西端部で21.18m前後、3-3区東端部で21.34m前後、2-1区西端部で21.22m前後、1-1区東端部で21.31m前後をそれぞれ測り、流路底面は計測位置により起伏に富み、高低差より流下方向を特定することはできなかった。埋土は1～4層に細分され、記録位置により顕著な差異を認める。一部に溝底面に溝機能時の細砂の堆積を認めるが、大半は改修等により削奪され、溝廃絶後の主に灰黄色系粘土により穏やかに埋没・平準化したものとする。

遺物は、図示していないが、弥生土器甕等の小片6点が出土した。流路方向が条里型地割の方向と概ね合致することから、出土した遺物は混入の可能性が高いと判断される。したがって、流路方向から中世以降に所属する可能性が考えられるが、詳細な時期を特定することは困難である。(蔵本)

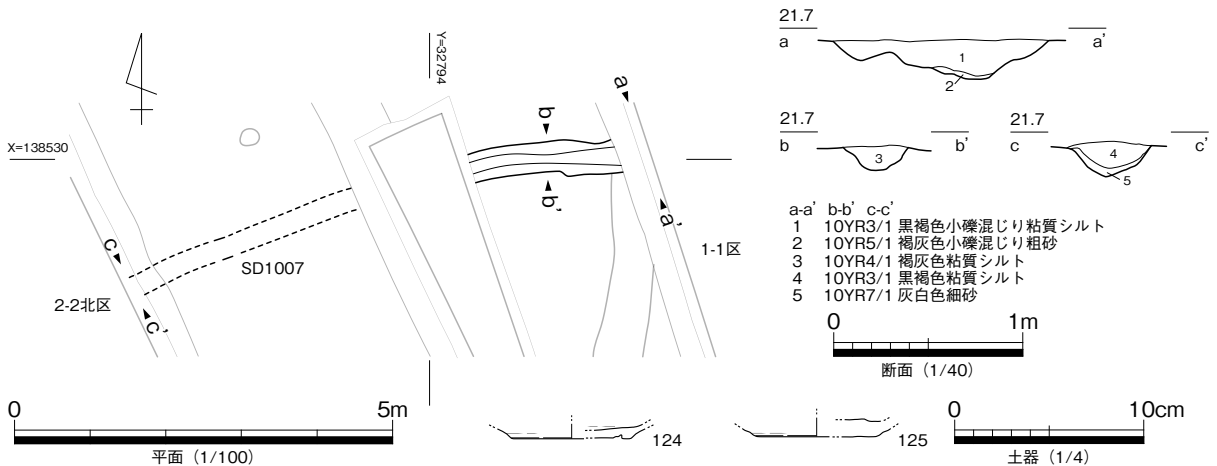
1-1区 SD1002 (第122図)

1-1区北端部で検出した東西溝で、上述したSD1001の南側に配される。東端は調査区外へ延長し、西端はSD1001に攪乱され途切れるが、西側の3区で延長溝は確認していない。流路方向がSD1001と近似することから、SD1001の前身溝と考えられる。検出面幅0.41m前後、残存深0.15m前後、断面形はU字状を呈する。確認できる溝底面の標高は、西端部で21.46m前後、東端部で21.42m前後をそれぞれ測り、高低差より東へ流下していた可能性が高い。埋土は2層に細分され、黄灰色粘土が概ね水平堆積し、埋土中にはベース層由来とみられるブロック土が多量に含まれることから、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

遺物は出土しておらず、時期を特定することは困難である。SD1001の前身溝と考えられることから、SD1001に近接した時期に位置付けられると考える。(蔵本)

1-1・2-2区 SD1007 (第123図)

1-1・2-2区で検出した東西溝で、2区では平面の検出に至らず、2-1区西壁での断面観察により、その



第123図 1-1・2-2区 SD1007 平・断面図、出土遺物



存在を確認した。重複関係より SD1008 より後出する。緩やかに北に弧を描いて配されるとみられ、東西両端は調査区外へ延長し、西側の3区で延長溝は確認していない。検出面幅 0.38 m 前後、残存深 0.13 m 前後、断面形は皿状を呈する。溝底面の標高は、2-1 区西端で 21.6 m 前後、1-1 区東端で 21.4 m 前後をそれぞれ測り、高低差より東へ流下していた可能性が高い。埋土は、褐灰色粘質シルトの単層であった。

遺物は、図示した以外に器種不詳の土師質土器細片 1 点が出土したのみである。124 は、土師質土器皿で 125 は土師質土器杯であり、佐藤編年中世 II-1 ~ 2 期と考えられる。

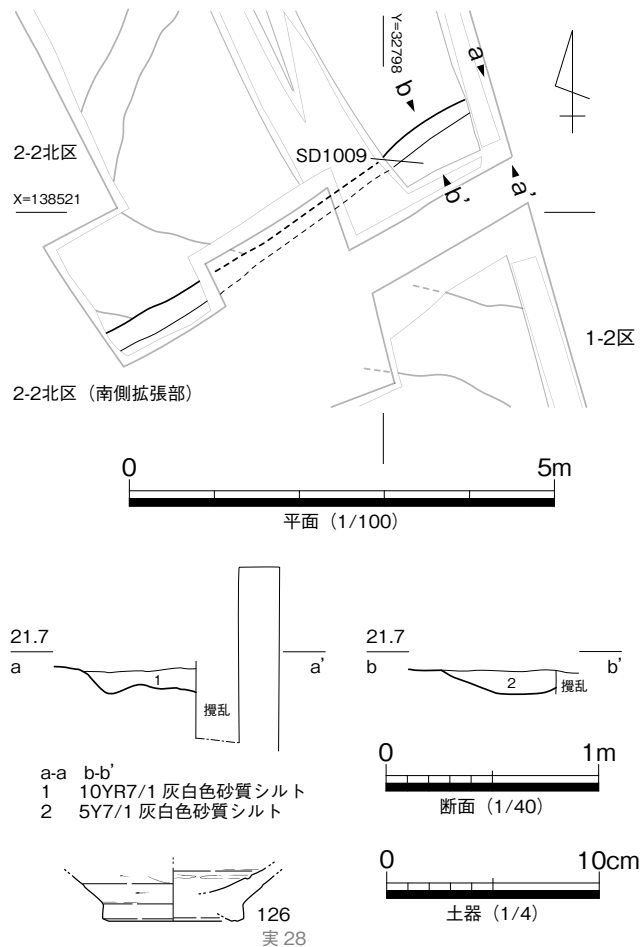
遺構の時期は、124 により 13 世紀代頃と考えられる。(蔵本)

#### 1-1・2-2 区 SD1009 (第 124 図)

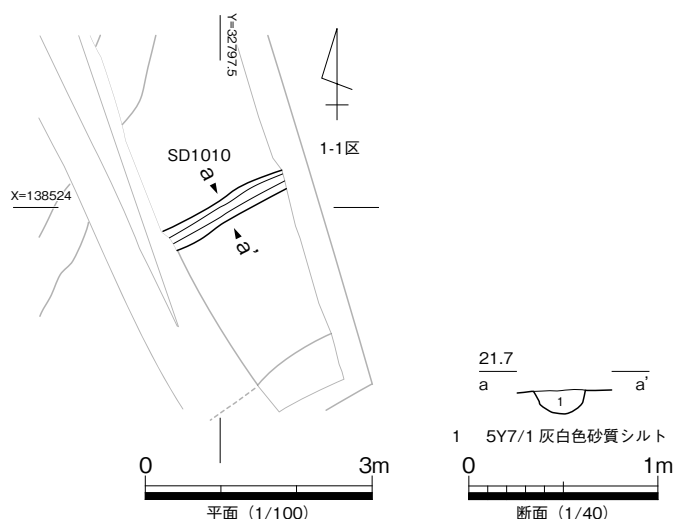
1-1・2-2 北区南側拡張部で検出した東西直線溝で、東西両端は調査区外へ延長し、3 区で延長溝は確認していない。また、調査区内では北側掘り方を検出したのみで、南側掘り方は調査区外へ延長し、溝の全形は不詳である。重複関係から SD3039 より後出する。検出面幅 0.6 m 以上、残存深 0.12 m 前後、断面形は皿状を呈する。流路方向は N 58.81° E に配され、丸亀平野の条里型地割の方向と概ね合致する。溝底面の標高は 21.50 m 前後で一定し、流下方向を特定することは困難であった。埋土は、灰白色砂質シルトの単層であった。

遺物は、図示した以外に土師質土器皿や杯等の小片 6 点と瓦質土器細片 1 点が出土したのみである。126 は白磁碗。内面見込みに段と沈線が施され、体部下端から高台は無釉となる。体部上半以上を欠損するが、高台や底部の調整等より、大宰府分類(山本 2000)の碗Ⅳ類に分類される。

遺構の時期は、出土遺物より 11 世紀後半 ~ 12 世紀前半と考えられる。(蔵本)



第 124 図 1-1・2-2 区 SD1009 平・断面図、出土遺物

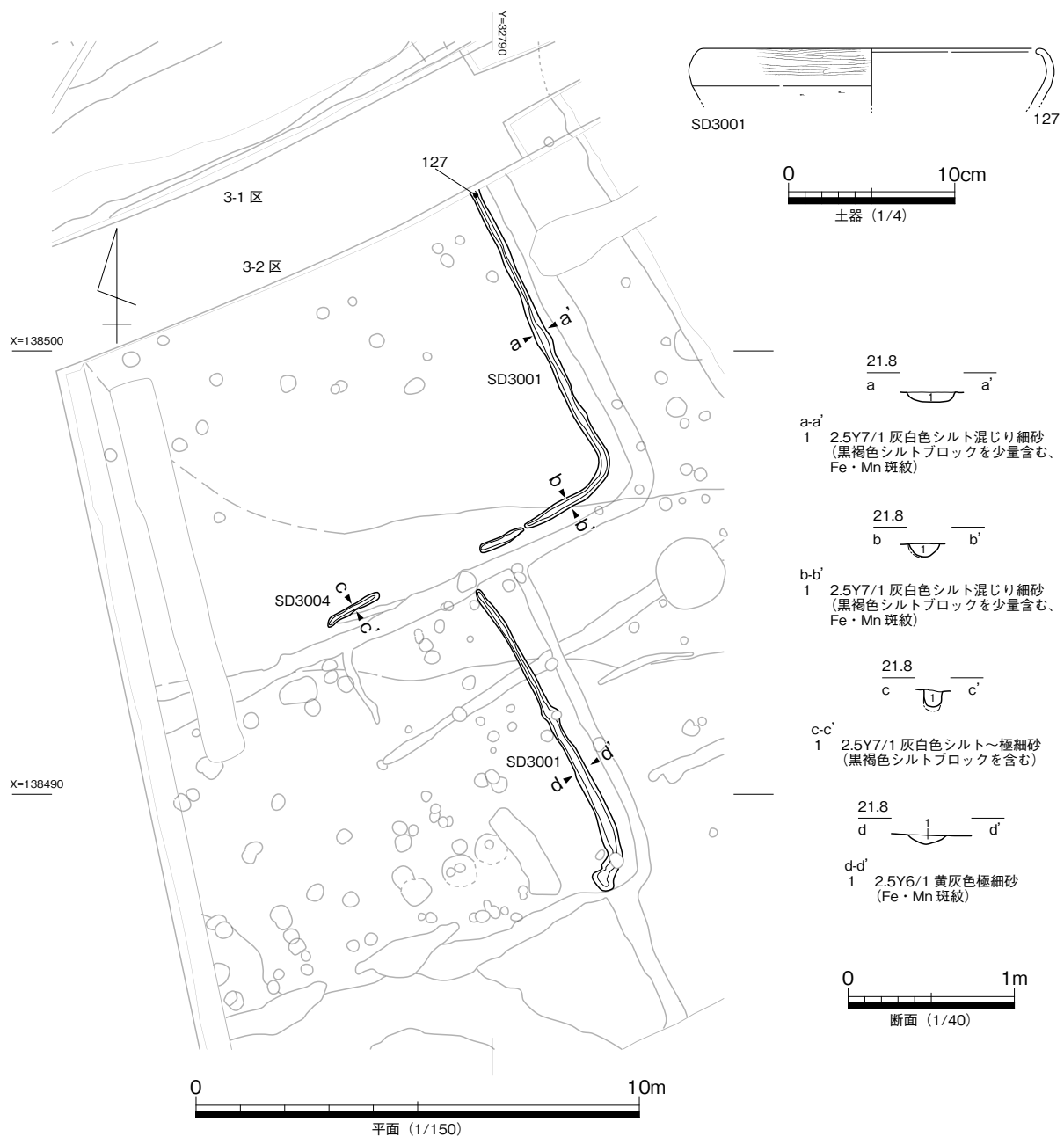


第 125 図 1-1 区 SD1010 平・断面図

1-1 区 SD1010 (第 125 図)

1-1 区南端付近で検出した東西溝で、東は調査区外へ延長し、隣接する 2-2 北区で延長溝は検出していない。また、調査区壁面に遺構埋土の記録がなく、検出面は不詳だが、検出レベルより帰属する遺構と考える。検出面幅 0.30 m 前後、残存深 0.12 m 前後、断面形は U 字状を呈する。流路方向は N 61.41° E に配され、丸亀平野の条里型地割の方向と概ね合致する。溝底面の標高は、東端部で 20.09 m 前後を、西端部で 20.13 m 前後をそれぞれ測り、高低差より東へ流下していた可能性が考えられる。埋土は、灰白色砂質シルトの単層であった。

遺物は出土していない。流路方向が条里型地割の方向と概ね合致することから、古代以降の可能性が考えられ、より詳細な時期についての特定は困難である。(蔵本)



第 126 図 3-2 区 SD3001 SD3004 平・断面図、出土遺物

## 3-2区 SD3001・SD3004 (第126図)

3-2区中央～北側で検出した溝である。埋土は灰白色シルト～細砂を主体に少量の黄灰色細砂をラミナ状に含む。調査時には個別の遺構として理解しているが、埋土の特徴が共通することから、同一遺構と判断した。周辺の条里型地割に概ね平行し、SD3001はSB3203～3205の周辺を区画するようにクランク状に屈曲し、SD3004はその内部を細分する。

重複関係からSR3001・SR3004・SD3010に後出し、SP3057・SP3211に先行する。

最大幅0.29m、最小幅0.11m、深さ0.06～0.13mを測り、断面形は皿形～U字形となる。深度が極めて浅く、後世の削平により遺構上部が消失した可能性が高い。溝底面の標高は計測位置により異なり、流下方向の推定は困難である。黄灰色細砂をラミナ状に含む埋土から、一定深度までは流水下での自然堆積により埋没したものと考えられる。

遺物は、図示した以外に土師質土器と推定される細片が数点出土したのみである。127は須恵器鉢である。口縁部が内湾する特徴から、いわゆる鉄鉢形須恵器鉢と考えられる。SR3001との重複箇所の溝底から出土しており、SR3001埋土からの混入の可能性はある。

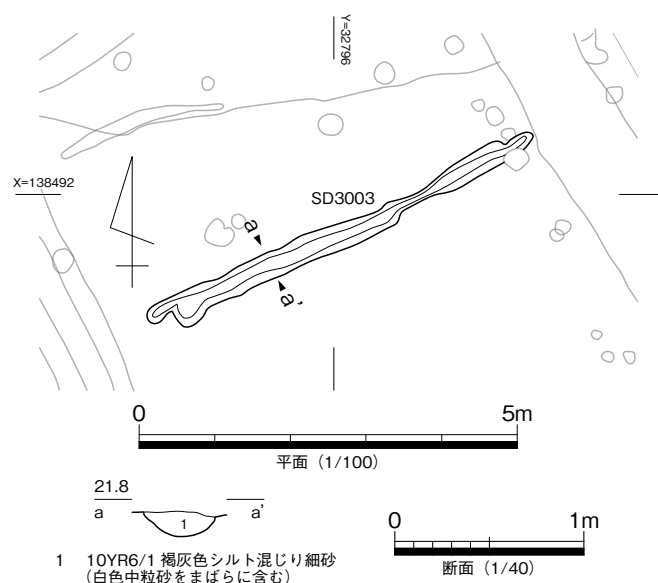
上記の出土状況から遺物による遺構時期の比定は困難だが、流路方向が条里型地割に合致すること、SD3005と近接しほぼ平行する流形から、中世後半から近世前期と推定した。(益崎)

## 3-2区 SD3003 (第127図)

3-2区中央部東側で検出した東西直線溝である。流路方向はN 56.96° Eを測り、概ね丸亀平野の条里型地割に平行する。3-2区中央部で消失しており、以西の状況は不明である。

重複関係から、SD3007・SP3049に先行することがわかる。最大幅0.5m、最小幅0.2m、残存深は最大で0.14mを測り、断面形は皿形～逆台形となる。底部の標高は概ね21.6m前後で一定であるが、周辺の地形を踏まえると西から東の流方向となる可能性が高い。

埋土中から遺物の出土はなく詳細な時期の比定は困難であるが、条里型地割に平行すること、SD3007との重複関係から中世の遺構と推定した。(益崎)

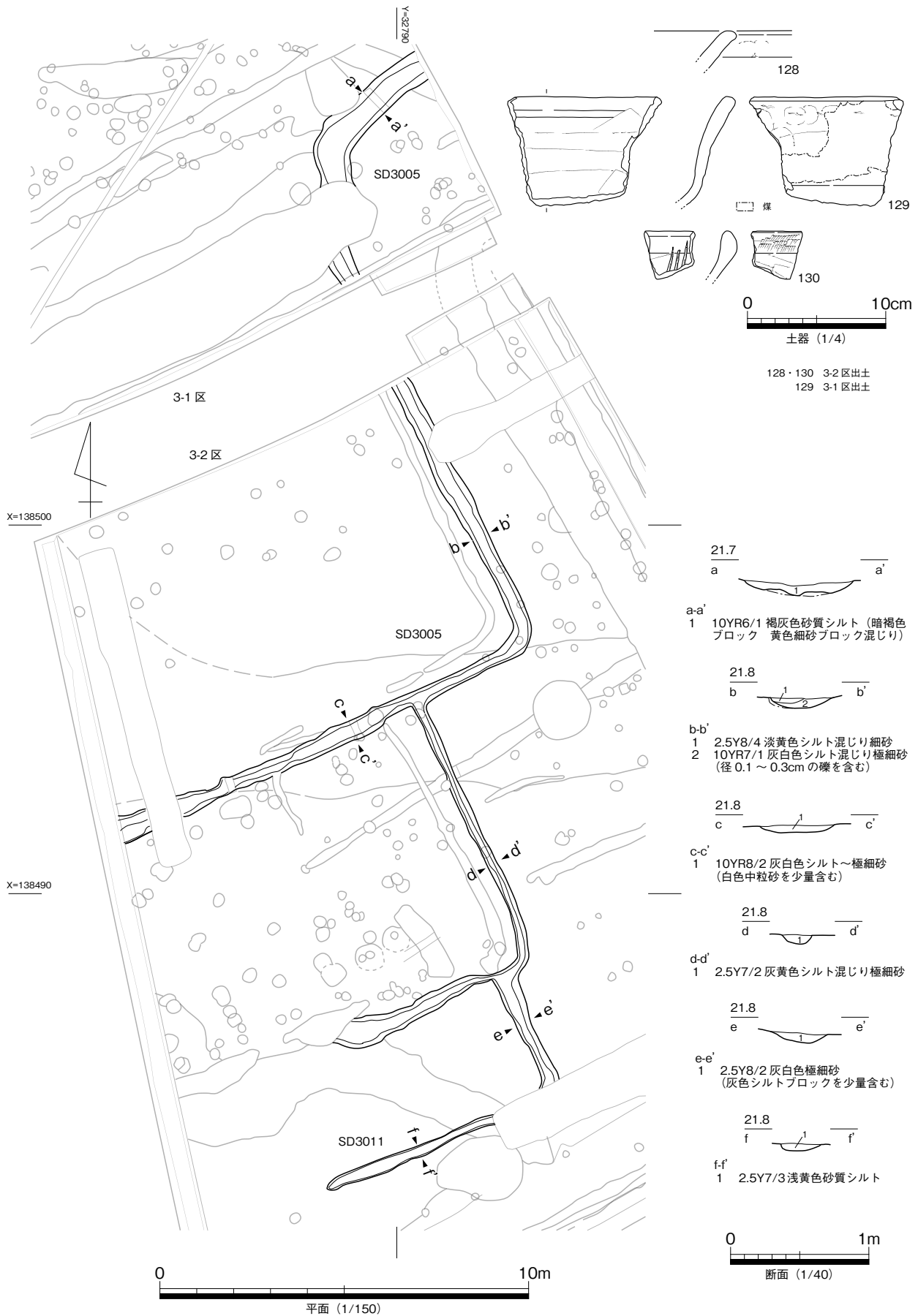


第127図 3-2区 SD3003 平・断面図

## 3-1・3-2区 SD3005・SD3011 (第128図)

3-1区南東端から3-2区で検出した溝である。調査時には個別の遺構として理解したが、位置関係から同一遺構と判断した。周辺の条里型地割に平行し、ほぼ直角のクランク状の屈曲と分岐を繰り返しながら、SB3203～3205の周辺を区画するように流れる。

重複関係から、SR3001・SR3004・SD3010・SD3020に後出し、SP3058・SP3004・SP3086・SP3087ほか複数の柱穴に先行する。



第 128 図 3-1・3-2 区 SD3005 SD3011 平・断面図、出土遺物

最大幅 0.79m、最小幅 0.22m、深さ 0.05～0.07m を測り、断面形は皿形となる。深度が極めて浅く、後世の削平により遺構上部が消失した可能性が高い。埋土は褐灰色～灰白色のシルト～細砂を主体に黄灰色細砂を含む。土質は SD3001・SD3004 と類似するが、黄灰色細砂を多量に含む点に特徴がある。

出土遺物は 128～130 のほか、土師質土器の細片が少量認められる。128 は土師質土器焙烙の口縁部片。口縁部は体部から緩く外反する程度で屈曲せず、口縁端部は太く丸みを帯びる。外面にはほぼ全面に煤が付着する。129 は土師質土器焙烙。口縁部付近に厚みがあり、口縁部の外傾は弱い。17 世紀初頭に位置づけられる。130 は土師質土器播鉢の口縁部片である。口縁端部は丸く肥厚し、端部下に狭い端面状の緩い屈曲がみとめられる。本書編年 D 期 (V 型式) に相当する。

出土遺物はいずれも細片のために詳細な時期の特定は困難であるが、128～130 から 17～18 世紀頃に位置付けたい。(益崎)

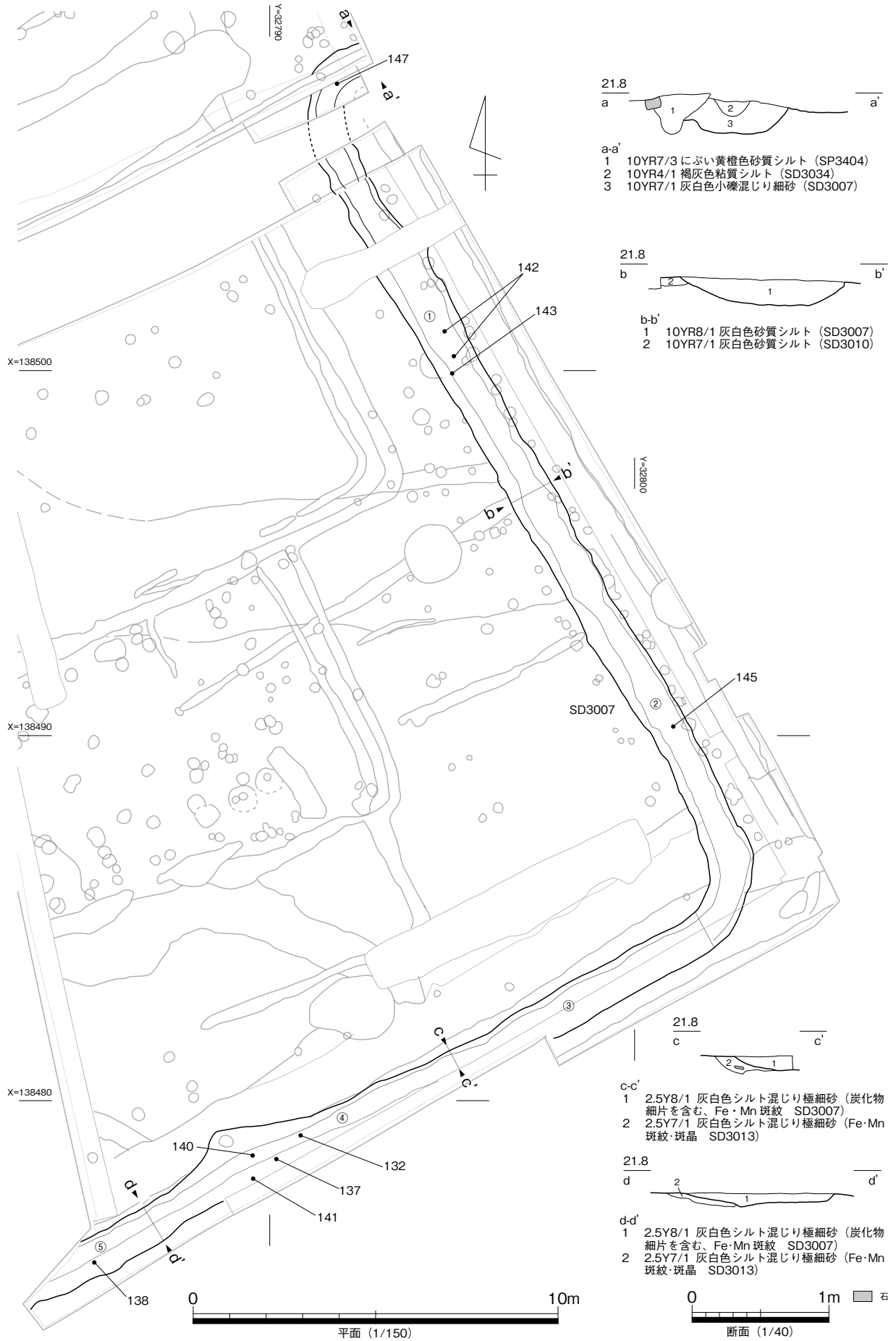
### 3-2 区 SD3007 (第 129～131 図)

3-2 区東端および南端で検出した溝である。3-2 区南東隅部で直角に屈曲し、平面プランは逆 L 字形となる。流路方向は N 30.93° W・N 59.16° E を測り、丸亀平野の条里型地割の方向に概ね合致する。北側は 3-1 区南壁で埋土を確認しているが、3-1 区内では検出できず、3-1 区南東隅部付近で再び屈曲して東へ向かうものと考えられる。

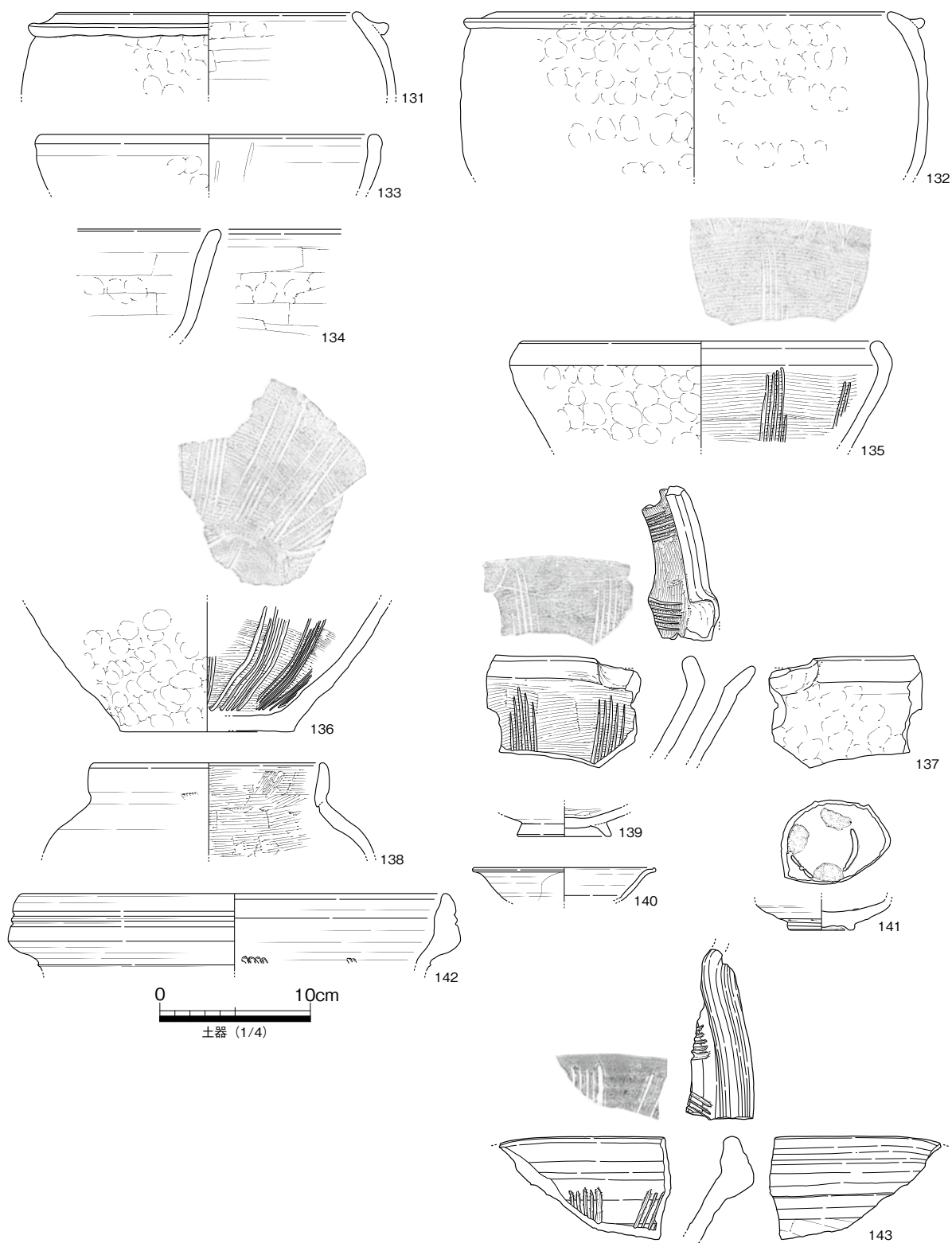
重複関係から、SR3001・SR3004・SD3010・SD3013・SD3014 に後出する。そのほか多数の柱穴との重複が認められるが、調査時の記録情報の不足から、先後は判然としない。調査時の SD3007 と重複柱穴群との掘削順序から推定すると、柱穴の大部分が SD3007 に先行すると考えられる。

最大幅 1.10m、最小幅 0.90m、深さ 0.11～0.26m を測り、断面形は皿形となる。残存深度が浅く、後世の削平により遺構上部が消失した可能性が高い。底面の標高は 3-2 区北壁で 21.5 m、南東部で 21.55 m、西壁で 21.6 m を測り、流方向は南西から北東方向と推定できる。埋土は灰白色細粒砂を主体とし、底部付近はややシルトがちで炭化物細片を含む。

遺構の深度は浅いものの、遺物出土量は比較的豊富である。図示した 131～147 のほか、土師質土器・陶器の細片、動物遺存体、木片等が認められる。131・132 は土師質土器足釜である。いずれも口縁端部に面を持たず、鏝部は短く小さい。131 は内面に板ナデが認められるが、132 は内外面ともに無調整である。133 は内外面ともに磨滅が著しいが、内面上部にわずかにスリ目様の線状痕が認められ、播鉢と理解した。本書編年 D 期 (V 型式) に相当する。134 は土師質土器焙烙の口縁部片。135～137 は土師質土器播鉢である。135・137 は口縁端部が丸く、口縁から 2cm ほどを内傾させる。135 は本書編年 D 期 (V 型式)、137 は本書編年 D 期 (IV 型式) に相当する。138 は土師器壺か。磨滅が著しいが、内外面ともわずかにハケ目状の痕跡が認められる。139 は十瓶山産須恵器椀の底部片である。高台高約 1cm、高台径は一部欠損するが 6cm 前後と推定できる。内外面ともに磨滅するが、内面にはわずかに板ナデ様の痕跡が認められる。140 は肥前系陶器溝縁皿である。141 は肥前系陶器椀で、見込みには砂目積みの痕跡が認められる。140・141 とともに高松城跡様相 3(17 世紀中葉) に位置付けられる。142・143 は備前焼播鉢の口縁部片である。厚みのある断面三角形から台形状の口縁で、口縁下内面の突起は丸みを帯びる。口縁外面の凹線は 2 条である。スリ目の状態は不明だが、乗岡編年近世 1c～2a 期に位置付けられる。144 はサヌカイトの剥片。側縁部に二次加工の痕跡が認められる。145 は X 線写真から鉄製握り鉢と理解したが、刃部を両切刃状に砥ぎ出す点に違和感が残る。146 は板状とみられる安山岩



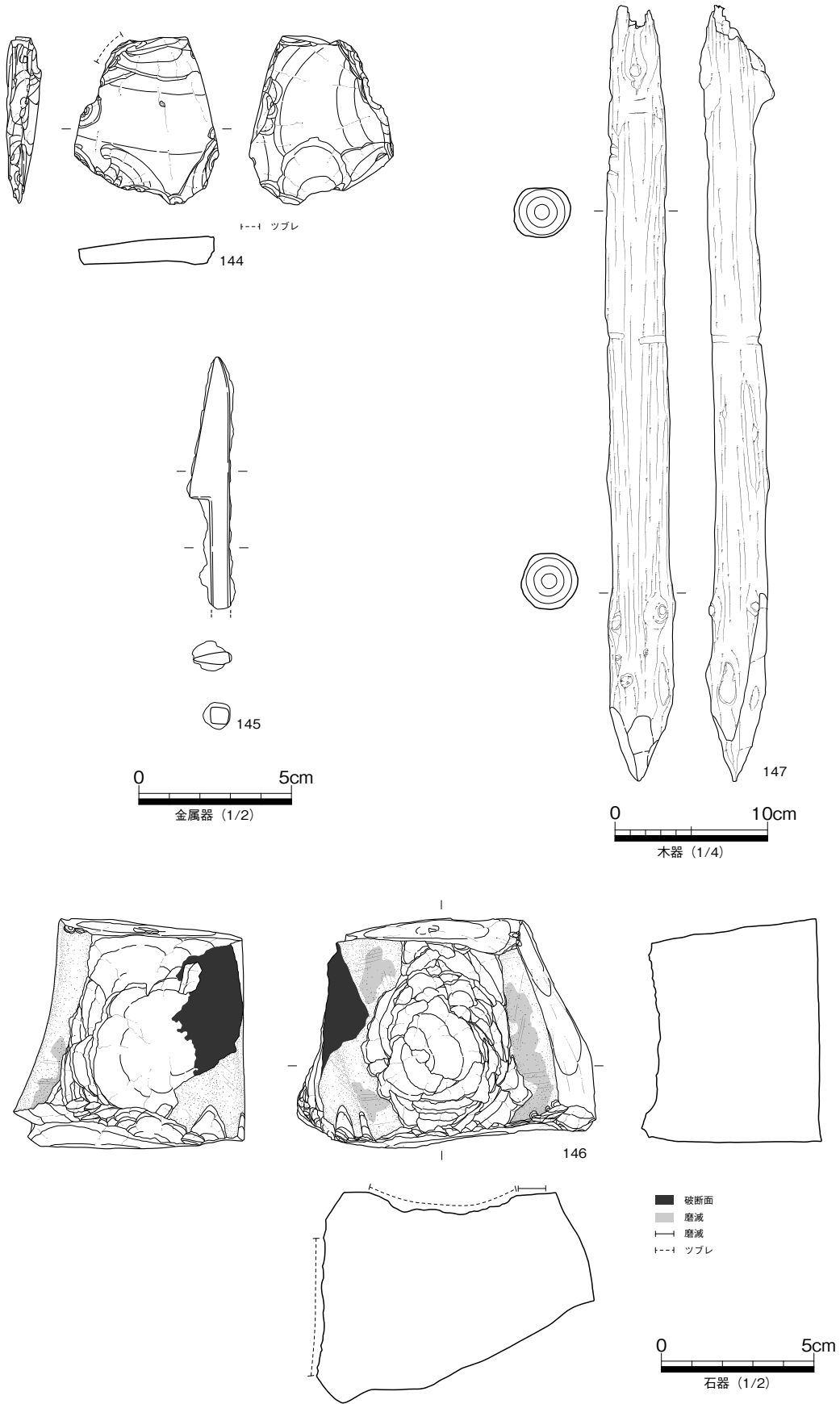
第129図 3-2区 SD3007 平・断面図



第130図 3-2区 SD3007 出土遺物 1

の自然礫を立方体状に打ち割って整え、そのうち自然面の残る2面を、叩き石として利用した可能性を考え図示した。使用面に顕著な敲打痕を認める。147はアスナロ材の木杭である。枝打ち後に樹皮を粗く剥ぎ取ったのち、先端部を4面から削り出す。

141・142・143から、17世紀中葉を中心とした時期に位置付けられる。(益崎)



第131図 3-2区 SD3007 出土遺物2



## 3-2区 SD3010 (第132図)

3-2区中央東側で検出した東西直線溝である。流路方向はN 56.96° Eを測り、概ね丸亀平野の条里型地割に平行し、東西方向に流れる。3-2区中央で削平により消失しており、以西の状況は不明である。

重複関係から、SR3004に後出し、SD3001・SD3005・SD3007・SK3001に先行することがわかる。柱穴群との先後関係は判然としないが、調査時の遺構掘削順から推定すれば、柱穴群に先行すると考えられる。

最大幅0.81m、最小幅0.26m、深さ0.05～0.06mを測り、断面形は皿形となる。底部の標高は概ね21.6m前後で一定であるが、周辺の地形を踏まえると西から東の流方向となる可能性が高い。

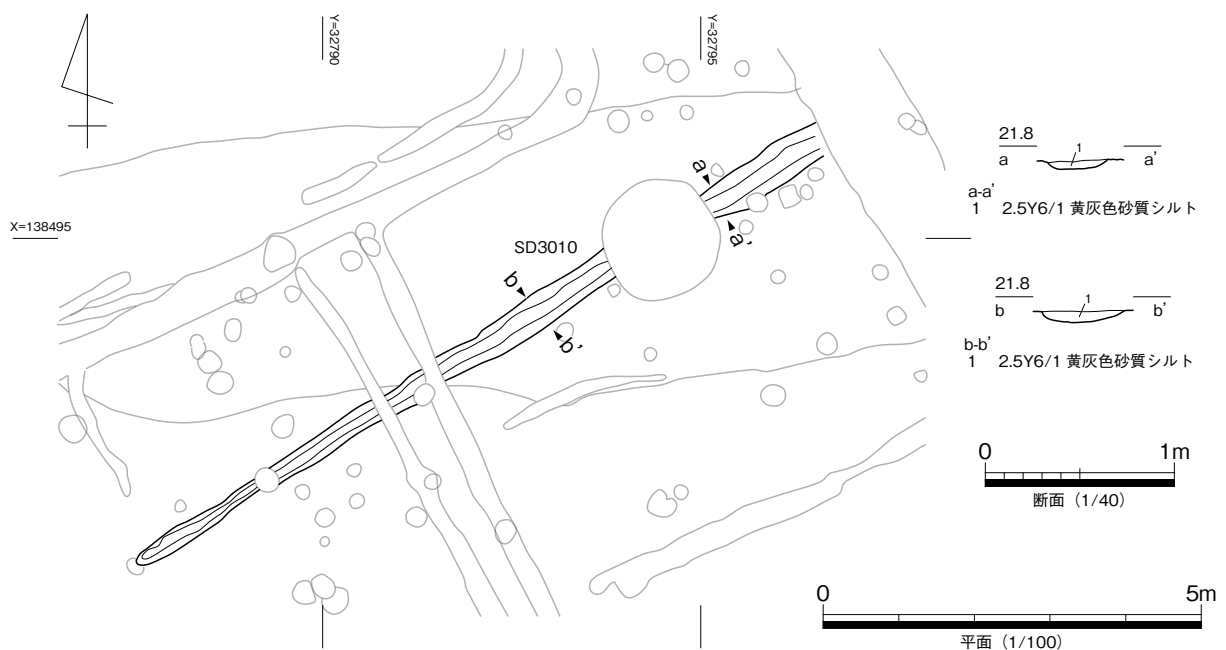
埋土中から遺物の出土はなく詳細な時期の比定は困難であるが、条里型地割に平行すること、SD3007との重複関係から中世の遺構と推定した。(益崎)

## 3-2区 SD3013 (第133・137図)

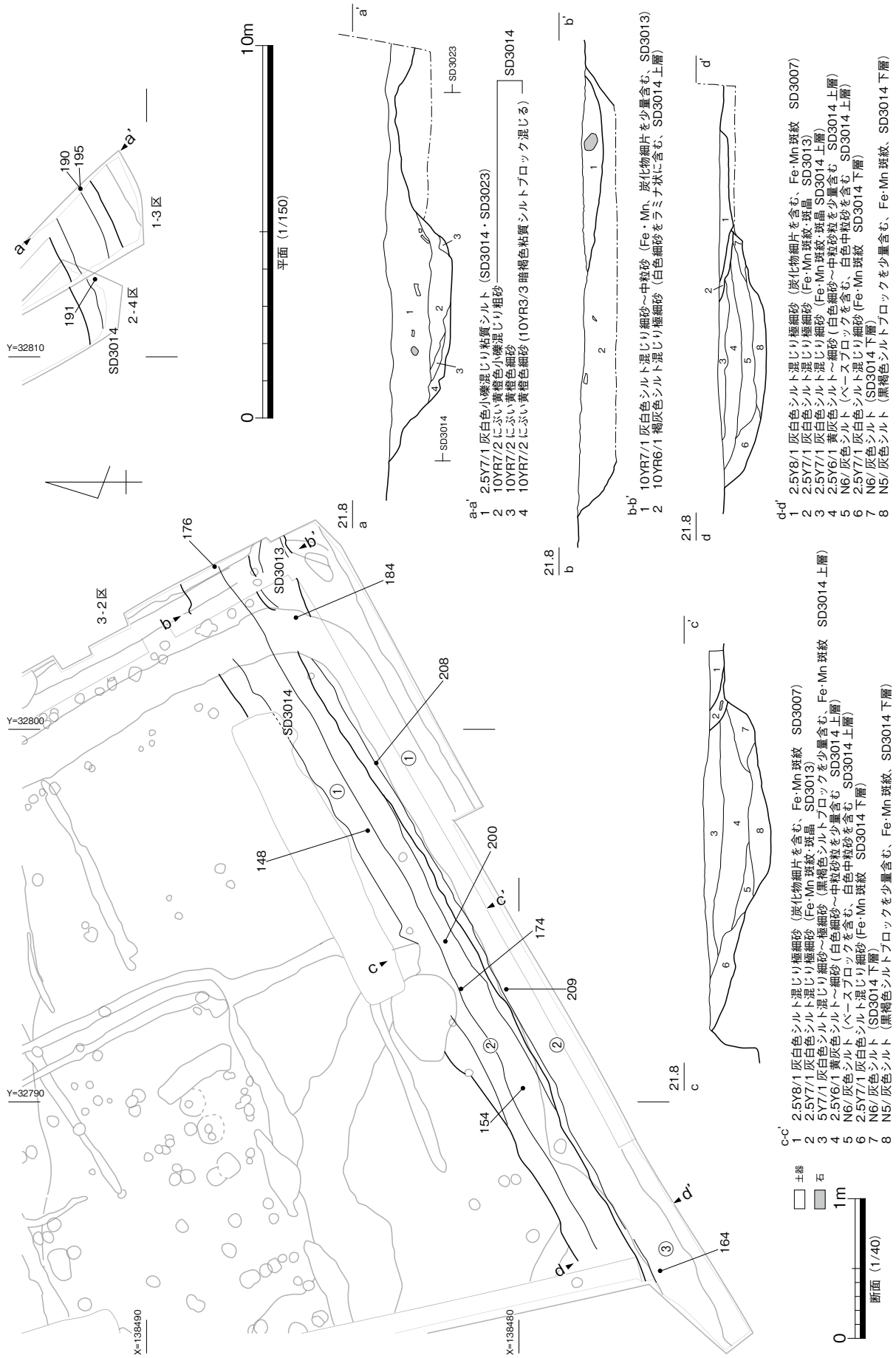
3-2区南端部付近で検出した東西直線溝である。流路方向はN 61.26° Eを測り、概ね丸亀平野の条里型地割の方向と合致し、位置関係から鶴足郡条里の坪界溝と考えられる。南北方向の市道を挟んで東に隣接する1-3区・2-4区では検出しておらず、市道下で消失または方向を変える可能性が高い。

重複関係から、SD3014・SD3025・SD3026・SD3027に後出し、SD3007に先行することがわかる。大部分が後出するSD3007により破壊されるために規模および断面形は判然としないが、東壁では幅1.40m、残存深0.14mを測り、断面形は皿形となる。溝底面の標高は西壁付近で21.5m前後、東壁で21.4m前後を測り、東へ流下していた可能性が高い。埋土は灰白色シルト～細砂を主体とし、細砂～中粒砂をラミナ状に含むことから、流水下での自然堆積と考えられる。後世の削平により遺構上部が消失した可能性が高く、最終埋没の様相は不明である。

出土遺物は204～211を図示したほか、多量の土師質土器小片が認められる。204は土師質土器皿。底部はヘラ切りで、口径7.8cmを測る。205・206は土師質土器杯である。205は体部の外傾は弱く、口径11.8cm、底径7.8cmを測る。207は土師質土器鍋。口縁部は強く屈曲して直線的に伸び、口縁端面

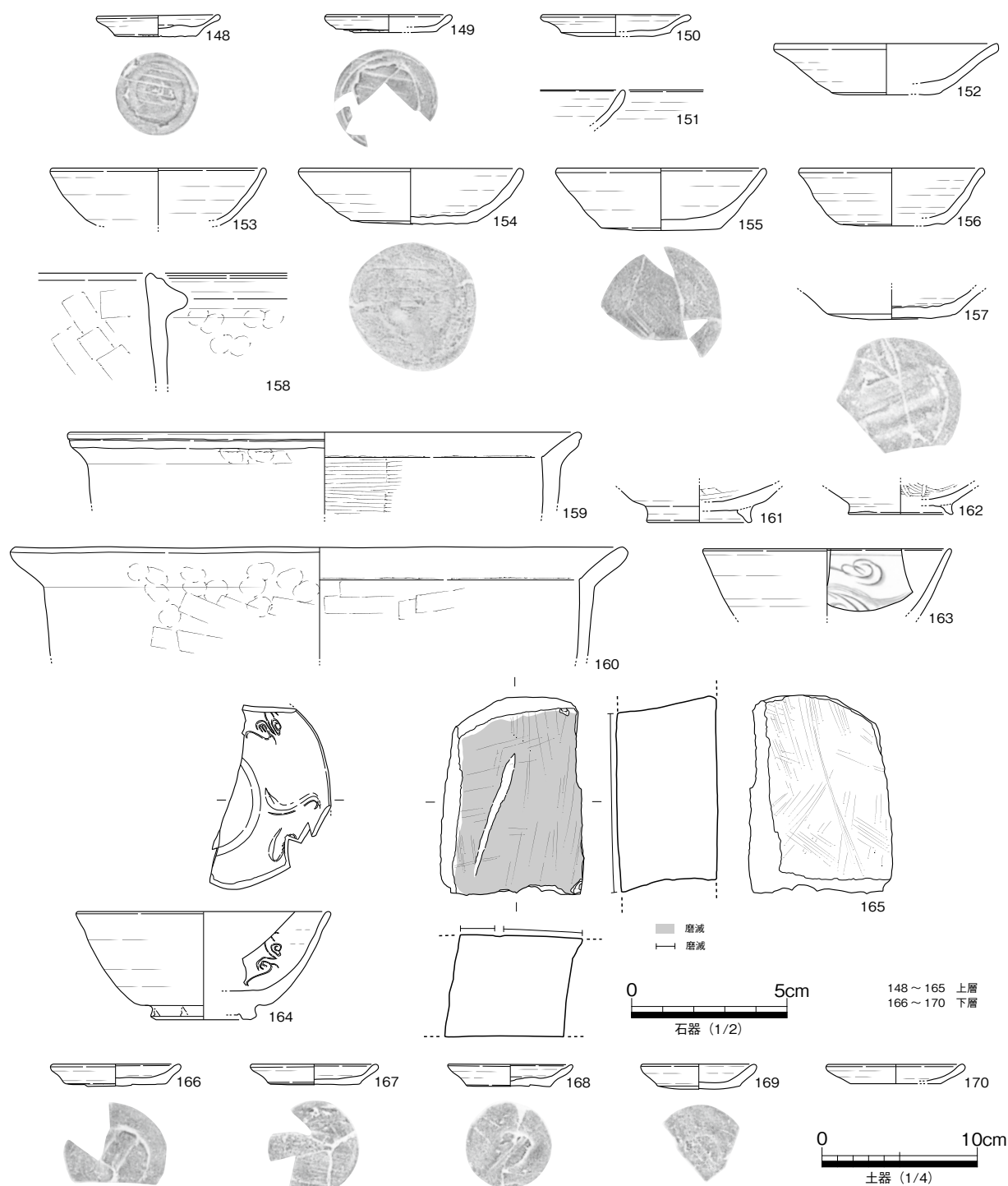


第132図 3-2区 SD3010 平・断面図



第133図 1-3・2-4・3-2区 SD3013 SD3014 平・断面図

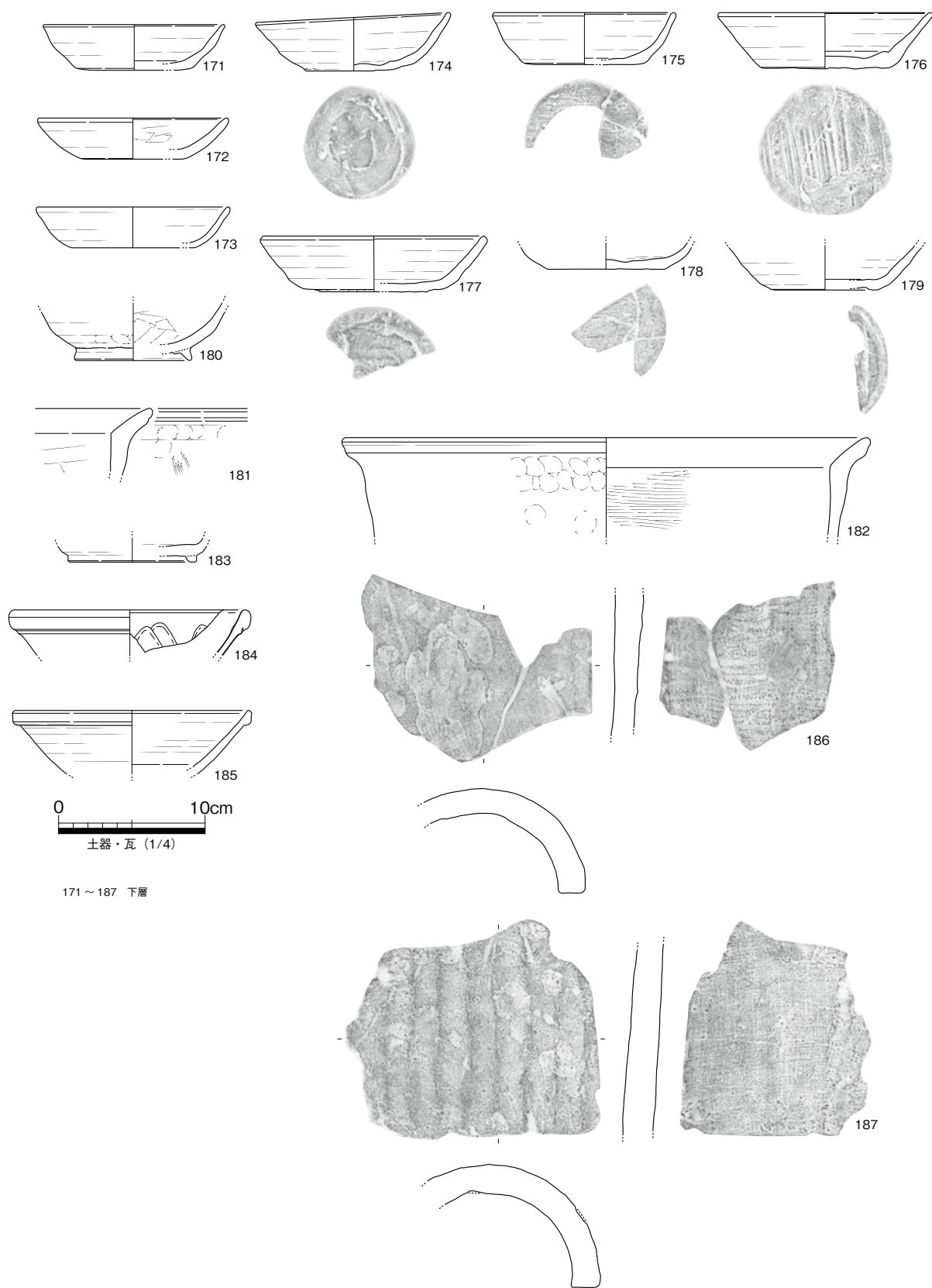
はナデ調整である。208は須恵器碗である。高台高8mm、高台径は推定で6cm前後となる。底部は回転ヘラ切りののち、高台が貼り付けられる。十瓶山系とは明らかに異なる胎土・形態であり、他地域からの搬入品の可能性がある。209は和泉型瓦器碗の底部片である。外面は指オサエのみでヘラミガキは認められず、高台は径4cm前後の略円形、断面半円形で粗雑な貼り付けである。内面は磨滅により判然としないが、見込みは粗い平行線状のヘラミガキ。尾上編年Ⅲ-3～Ⅳ-1期に位置付けられる。210は方柱状の砂岩の垂円礫を使用した叩き石で、1面のみ使用する。図上下端部は使用時に破損したとみられる。211は、板状の砂岩の広端面2面を使用した砥石である。使用後に被熱により変色し、また打



第134図 3-2区SD3014出土遺物1

ち割られている。磨滅はあまり顕著ではない。

205・208・209 から、佐藤編年中世Ⅱ-2～3期(13世紀前葉～中葉)に位置付けられる。(蔵本・益崎)



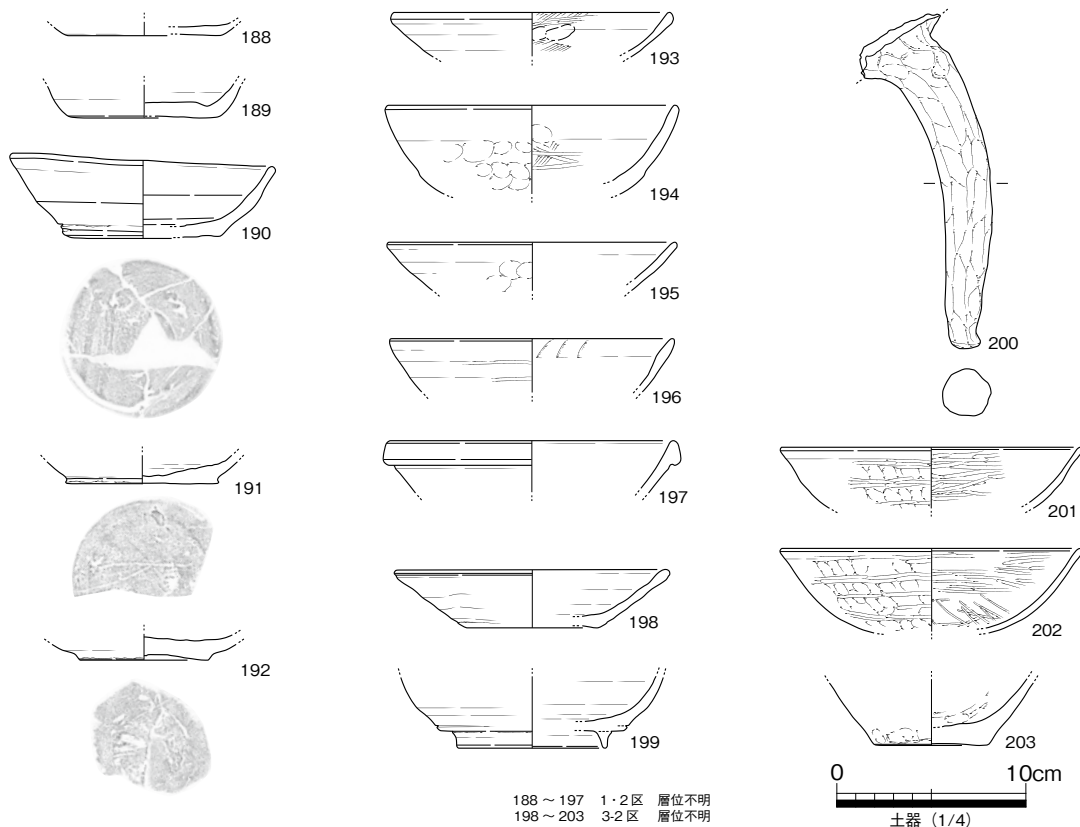
第135図 3-2区 SD3014 出土遺物2

## 1-3・2-4・3-2区 SD3014 (第133～136図)

1-3・2-4・3-2区南端部付近で検出した東西直線溝で、溝の規模や流路方向等より一連の遺構の可能性を想定する。東西両端は調査区外へ延長し、間に市道を挟むものの31.9mを調査した。重複関係から、柱穴群やSX3003、SD3007、SD3013、SD3025、SD3026より先行し、SD3020、SD3021より後出する。流路方向はSD3013と平行し、N 60.49° Eを測る。概ね丸亀平野の条里型地割の方向と合致しており、位置関係から鶴足郡条里の坪界溝と考えられる。検出面幅1.7m前後、残存深0.34～0.55m、断面形は概ね逆台形状を呈する。溝底面の標高は、2-4区東端で21.03m前後を、3-2区東端部で21.07m前後を、3-2区西端で21.31m前後をそれぞれ測り、高低差より東へ流下していた可能性が考えられる。埋土は4～6層に細分され、大きく上下2層に大別する。上層(d-d'断面3～5層)は、下層埋没後に下層の一部を削奪して、灰色系細砂やシルトがレンズ状に堆積しており、改修溝の可能性を考える。下層(d-d'断面6～8層)は、灰白色シルトないし細砂がレンズ状に堆積し、溝開削時の堆積層と考える。

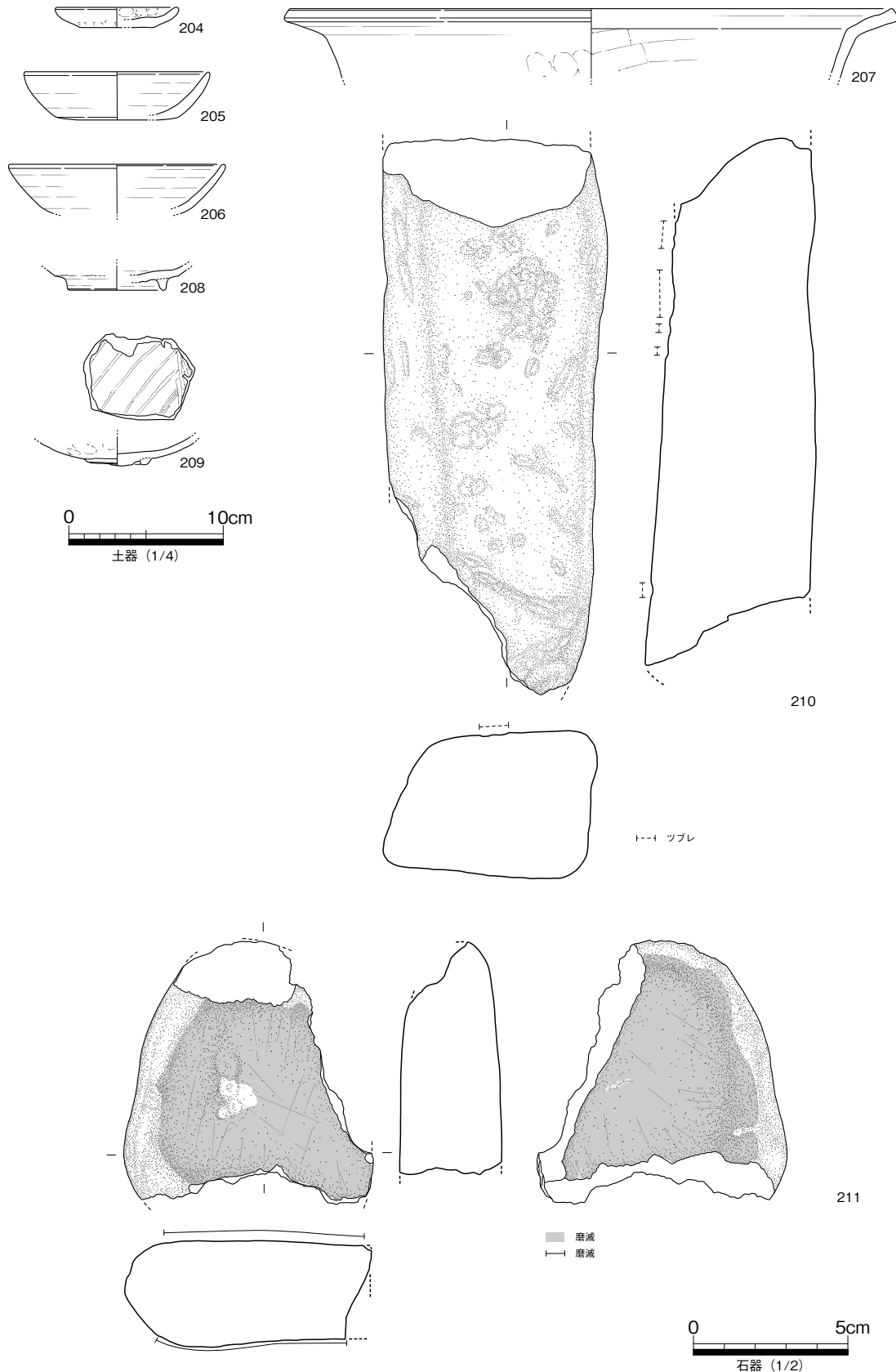
遺物は、図示した以外に土師質土器皿・杯等の小片3点や須恵器壺もしくは甕の体部小片1点等が出土したのみである。

148～165は上層出土遺物である。148～150は土師質土器皿である。いずれも底部は回転ヘラ切りで、板目圧痕が残る。佐藤編年中世I-3～II-1期に位置付けられる。151～157は土師質土器杯である。いずれも底部は回転ヘラ切りで、154・155・157には板目圧痕が認められる。いずれも直線的に外傾するが、152は比較的外傾度が強い。口径は12～14cm前後となる。佐藤編年中世II-1～2期。158は土師器羽釜。佐藤編年中世I-3期(12世紀前半)頃の所産。159・160は土師質土器鍋。口縁部は屈曲して直線的に伸び、端部は丸くなる。161は十瓶山窯系須恵器椀、162は土師質土器椀の底部片である。いずれも高台高6～8mm、高台径は6cm前後と推定できる。内外面ともに著しい磨滅により調整は不



第136図 1-3・2-4・3-2区 SD3014 出土遺物

明瞭である。163・164 は青磁椀である。いずれも外面無文、内面は片彫りの草花文か。164 の高台は断面四角形で、高台内部の削りが浅く、底部が肉厚である。大宰府分類 (山本 2000) の龍泉窯系椀 I 類に分類される。165 は板状の安山岩を使用した砥石で、図左面の 1 面のみ使用する。



第 137 図 3-2 区 SD3013 出土遺物

166～187は下層出土遺物である。166～170は土師質土器皿、171～179は土師質土器杯である。171～177は外傾度の弱い体部で、口径12～15cm、底径7.4～9.6cmを測る。いずれも底部ヘラ切りで、174～179には板目圧痕が認められる。いずれも佐藤編年中世Ⅰ-3～Ⅱ-2期の所産と考えられる。180は土師質土器椀である。181・182は土師質土器鍋。183は須恵器高台付杯の底部片。高台の貼り付け位置は底部外縁に近く、高台の外側から屈曲して体部に至る。全形は不明なもの高台の特徴から8世紀代と考えられ、混入の可能性が高い。184・185は白磁椀である。大宰府分類(山本2000)の白磁椀Ⅳ類に分類される。186・187は丸瓦片である。磨滅が著しいが凸面は叩きのちナデ、凹面は縦糸12～16本/1cmの布目痕が認められる。

188～197は1・2区SD3014出土遺物のうち、出土層位不明の遺物である。188は須恵器皿。189～192は土師質土器杯。いずれも底部は回転ヘラ切り。193は土師質土器杯。口縁端部は上方へ摘まみ上げ気味に肥厚する。194～196は土師質土器椀。194の内面にはミガキ調整が施される。197は白磁椀で、大宰府分類(山本2000)のⅣ-1類に分類される。

198～203は3-2区SD3014出土遺物のうち、出土層位不明の遺物である。198は土師質土器杯で、底部はヘラ切りとなる。199は杯状の体部に高台を貼り付けた、特徴的な形態の土師質土器椀である。底部は体部から明瞭に屈曲し、底部はヘラ切りののち、板目圧痕が認められる。200は土師質土器足釜の脚部。201・202は和泉型瓦器椀の口縁部から体部片である。体部内面は横方向のミガキ、202の見込みにはジグザグ状の平行ミガキが認められる。尾上編年Ⅱ-2～3期(12世紀中葉前後)に位置付けられる。203は弥生土器甕の底部片か。内外面ともに磨滅が著しいが、わずかにヘラケズリ様の痕跡が残る。

出土遺物から、12世紀前葉から13世紀初頭を中心とする時期に位置付けられる。上層・下層およびSD3013の出土遺物に大きな時期差は認められず、埋没と再掘削が繰り返されたものと考えられる。(蔵本・益崎)

### 3-2区SD3016(第138図)

3-2区西端中央付近で検出した溝である。西端は調査区外西側へ延長しており全形は不明だが、検出部の方向は概ね条里型地割に平行する。重複関係から、SD3020に後出することはわかるが、その他の遺構との切り合いはなく、開削時期の絞り込みには至らない。

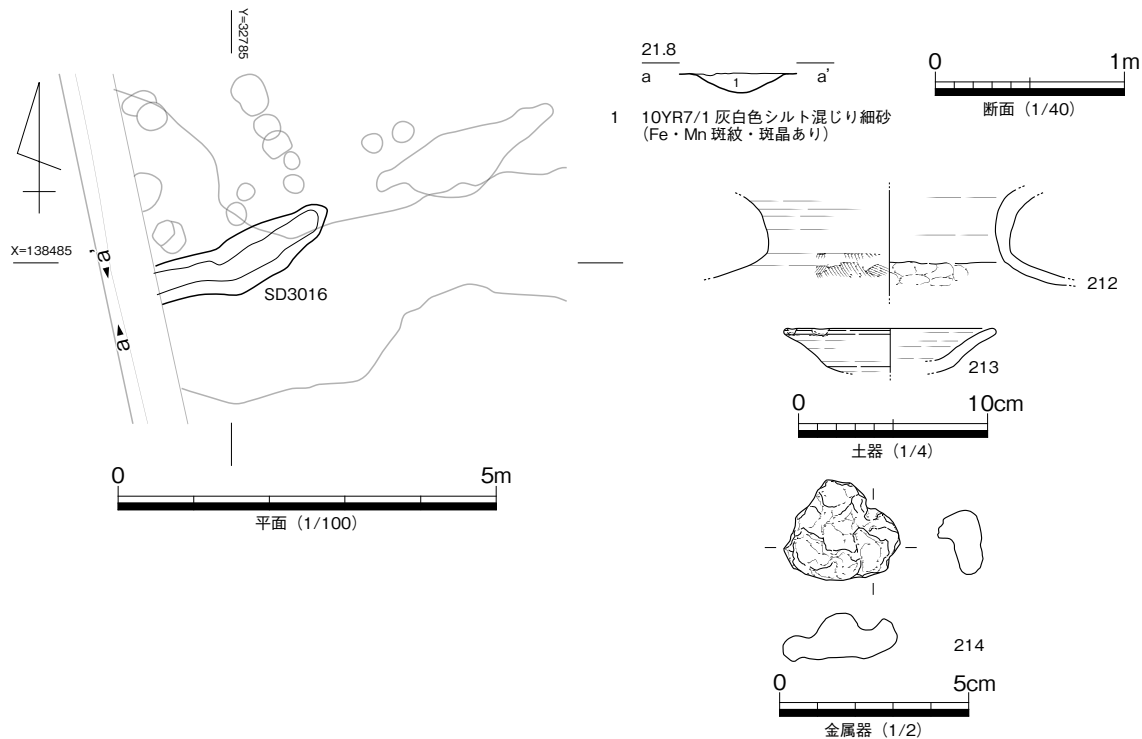
最大幅1.08m、最小幅0.45m、深さ0.10m前後を測り、断面形は皿形となる。埋土は灰白色のシルト混じり細砂で、検出写真から黄灰色細砂を多量に含むことがわかる。埋土の類似性から、3-1区SD3005・3-2区SD3005・SD3001に連続する溝の可能性が考えられる。

出土遺物は、212～214を図示した。212は土師器壺の頸部片である。古墳時代前期の遺物と考えられ、重複するSD3020からの混入の可能性が高い。213は肥前系施釉陶器皿。磨滅が著しく、外面の一部に緑色系の釉薬がわずかに残るのみである。214は形状から椀形鍛冶滓の破片として図化した。自然科学分析の結果、鑄造鉄器片の可能性が高いことが明らかになった。厚さ5mm程の板状であり、鉄鍋等の可能性が考えられる。(第4章第8節参照)

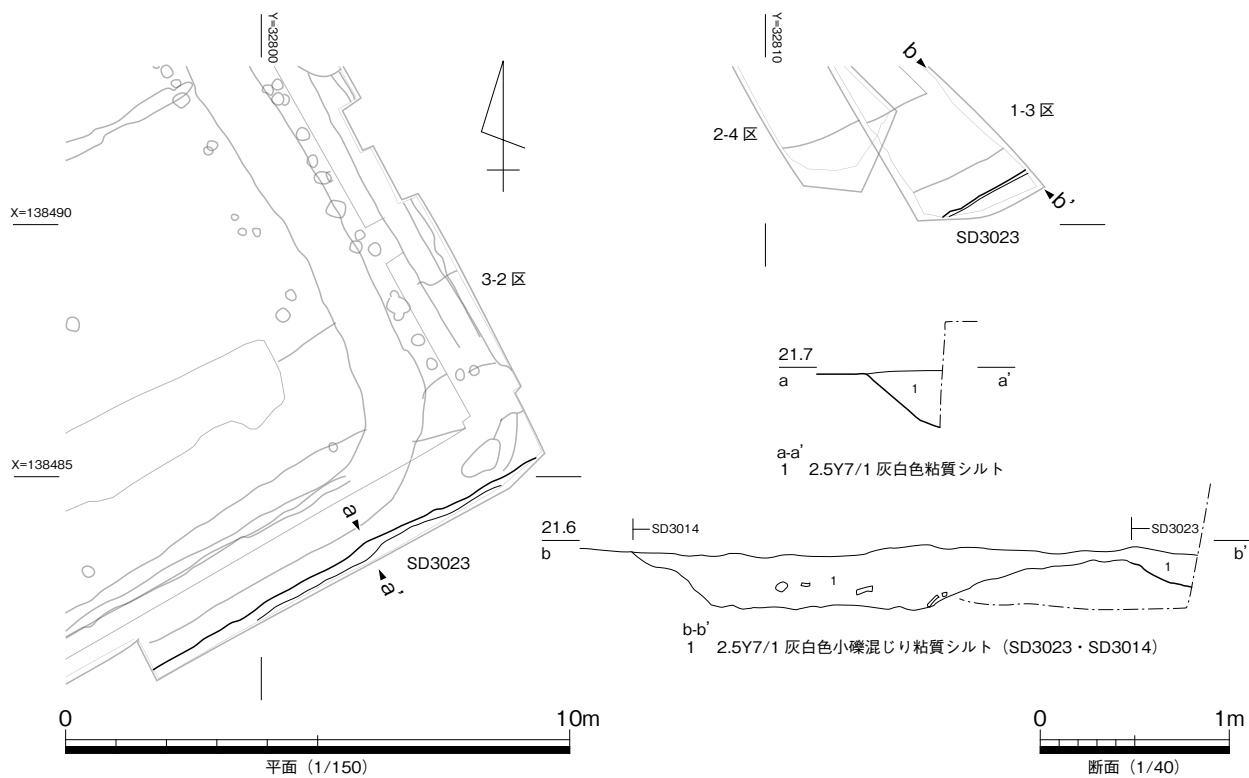
出土遺物による詳細な時期の特定は困難であるが、3-1区SD3005・3-2区SD3005・SD3011との埋土の類似性から近世前期に位置付けたい。(益崎)

1-3・3-2区 SD3023 (第139図)

1-3・3-2区南側拡張部で検出した東西直線溝で、溝の規模や流路方向等より一連の遺構の可能性を想定する。調査区内で北側掘り方を検出したのみで、南側掘り方は調査区外へ延長し、溝の全形は不詳。東西両端は調査区外へ延長し、間に市道を挟むものの19.9mを調査した。流路方向N 61.16° Eに



第138図 3-2区 SD3016 平・断面図、出土遺物



第139図 1-3・3-2区 SD3023 平・断面図



配され、概ね丸亀平野の条里型地割の方向と合致し、位置関係から鷺足郡条里の坪界溝と考えられる。検出面幅 0.3 m 以上、残存深 0.14 m 以上、断面形は皿状を呈するとみられる。埋土は本溝上面に堆積した SD3014 より連続する灰白色粘質シルトで充填されており、調査成果より SD3014 と同時期に廃絶した可能性が考えられる。

遺物は SD3023 より出土しておらず、詳細な時期を特定することは困難である。(益崎)

### 3-2 区 SD3025・SD3027 (第 140 図)

3-2 区東端で検出した南北直線溝である。調査時には個別の遺構と理解していたが、埋土の類似性から同一遺構と判断した。流路方向は N 29.72° W を測り、概ね丸亀平野の条里型地割の方向と合致する。北端は調査区北側へ延伸するが 3-1 区では検出できず、3-1 区東側の市道下へと続くものと考えられる。南端は SD3027 の平面形から、調査区南東隅部で屈曲するものと考えられ、SD3007 と平行する逆 L 字状の流路方向となる。

重複関係から SD3014 に後出し SK3004 に先行するが、SD3013 との関係は判然としない。調査時には SD3013 → SD3025・SD3027 の順で掘削されており SD3013 に先行する可能性があるが、後述の出土遺物の年代観とは矛盾する。調査時の重複関係の誤認の可能性はあるが、重複部分の遺構検出時の撮影をしておらず、検証は不能となってしまった。

SD3025 は東壁沿いで溝西岸を検出したのみであり、溝幅、深さは不明である。SD3027 は幅 0.38m、残存深 0.21m を測り、断面形は皿形となる。SD3025 も同規模の可能性が高い。

出土遺物は、215・216・222・223 のほか、土師質土器細片、瓦片が少量出土した。215 は須恵器杯の口縁片である。216 は一部に自然面の残るサヌカイトの剥片で、稜線に敲打痕が顕著にみられることから、火打石として図示した。222 は須恵器高台付杯の底部片。SR3001 等からの混入の可能性が高い。223 は備前焼播鉢の口縁部片である。厚みのある断面三角形から台形状の口縁で、口縁下内面の突起は丸みを帯びる。口縁外面の凹線は 2 条である。乗岡編年近世 4a・b 期に位置付けられる。

SD3013 との重複関係に疑問は残るが、223 の存在と SD3007 と共通する流路方向から、17 世紀頃の遺構と理解したい。(益崎)

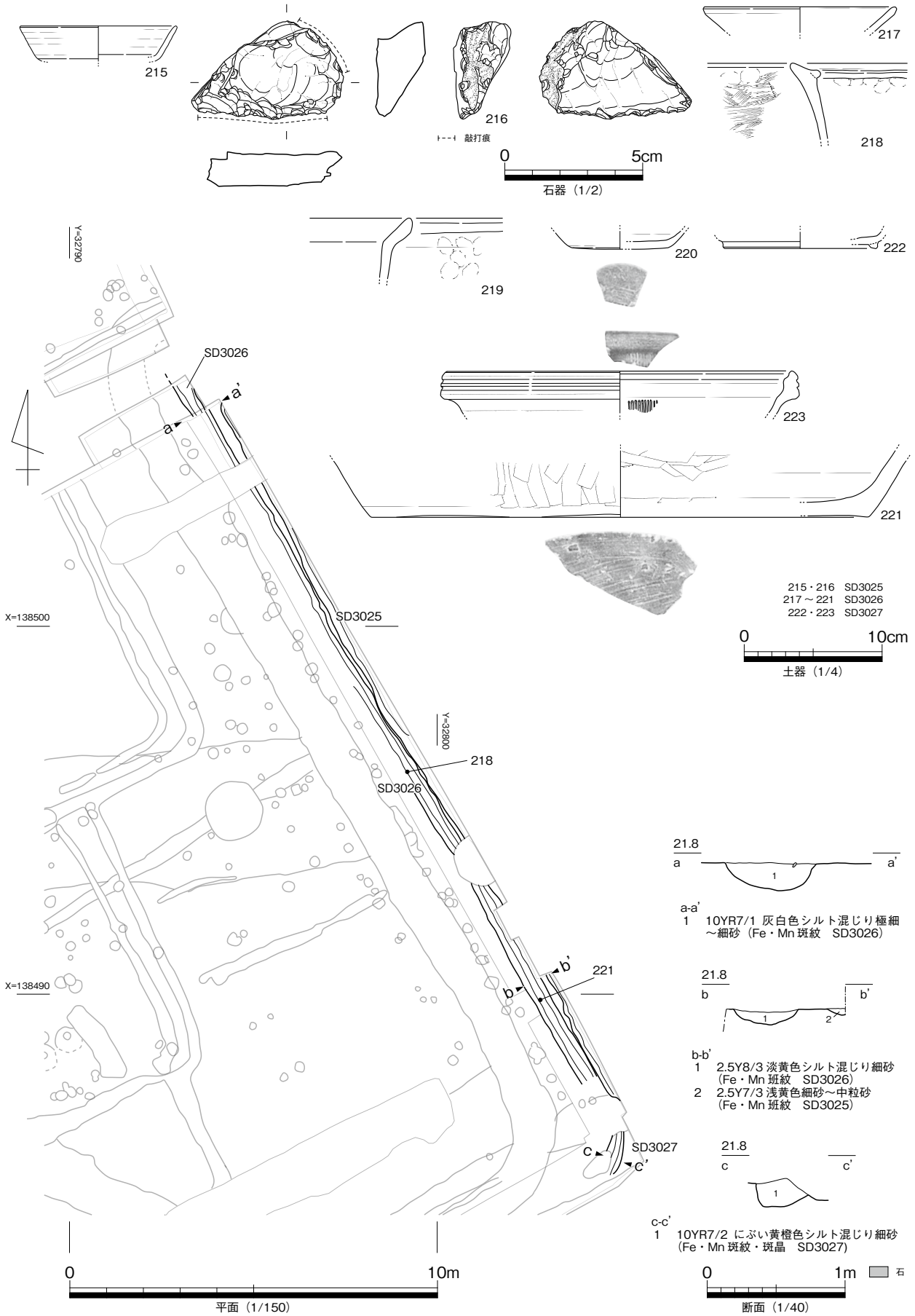
### 3-2 区 SD3026 (第 140 図)

3-2 区東端で検出した南北直線溝である。流路方向は N 32.31° W を測り、概ね丸亀平野の条里型地割の方向と合致する。北端は 3-1 区側に延伸するが、3-1 区では検出されない。南端は SD3027 に切られて消失しており、以南の状況は不明である。流路方向は N 30.39° W を測り、概ね条里型地割に平行する。

重複関係から SD3027 に先行し SD3014 に後出するが、SD3025・SD3027 と同様に SD3013 との関係は判然としない。

最大幅 0.67m、最小幅 0.47m、深さ 0.11～0.21m を測り、断面形は皿形となる。底面標高は測定箇所により大きく差があるが、周辺地形を踏まえると南から北へ流下する可能性が高い。

出土遺物は、217～221 を図化した。217 は土師質土器杯の口縁部片。218 は土師質土器足釜の口縁部片である。鏝部は短く、破断面から口縁部－体部の成形後に紐状の粘土を接合したことがわかる。219 は土師質土器鍋の口縁部片である。220 は土師質土器杯の底部片で、底部は回転ヘラ切りである。体部の大部分を欠失しており、体部－口縁部の形状は不明である。221 は備前焼甕の底部片で、体部・



第 140 図 3-2 区 SD3025 SD3026 SD3027 平・断面図

底部外面に板ナデ調整が施される。

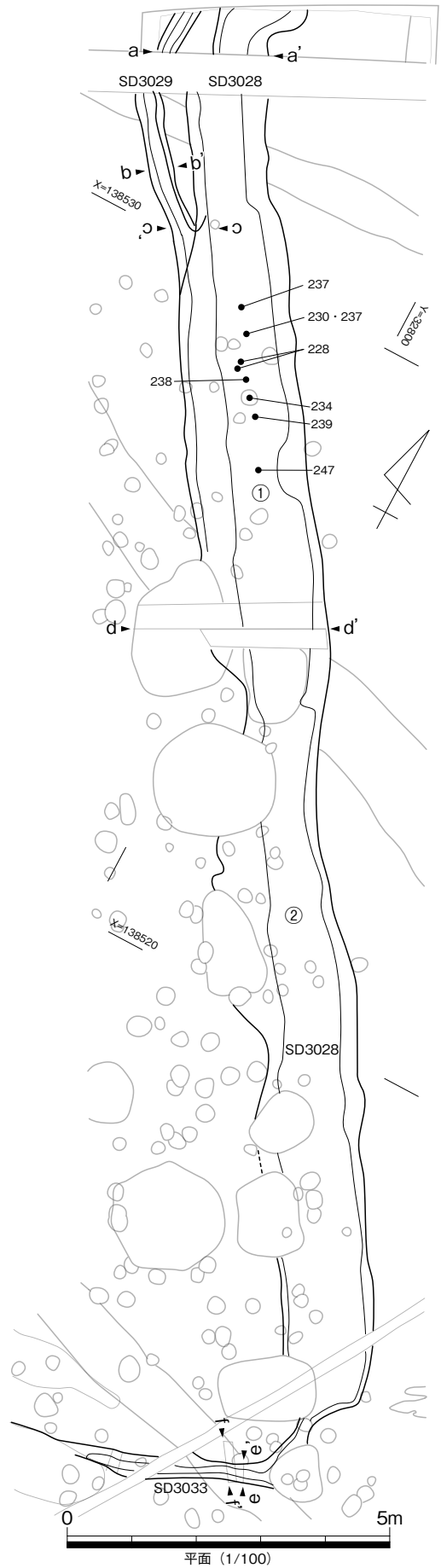
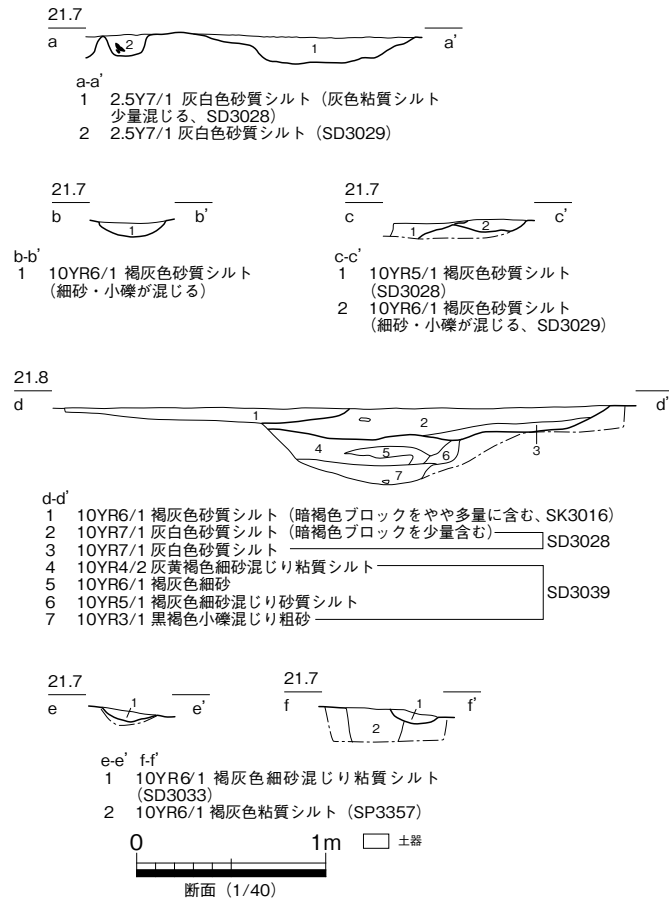
調査時に重複関係を十分に把握できなかったため詳細な開削・埋没年代の特定は困難であるが、出土遺物の年代観を重視し、中世後期の遺構と考えたい。(益崎)

### 3-1 区 SD3028・SD3033 (第 141 ~ 144 図)

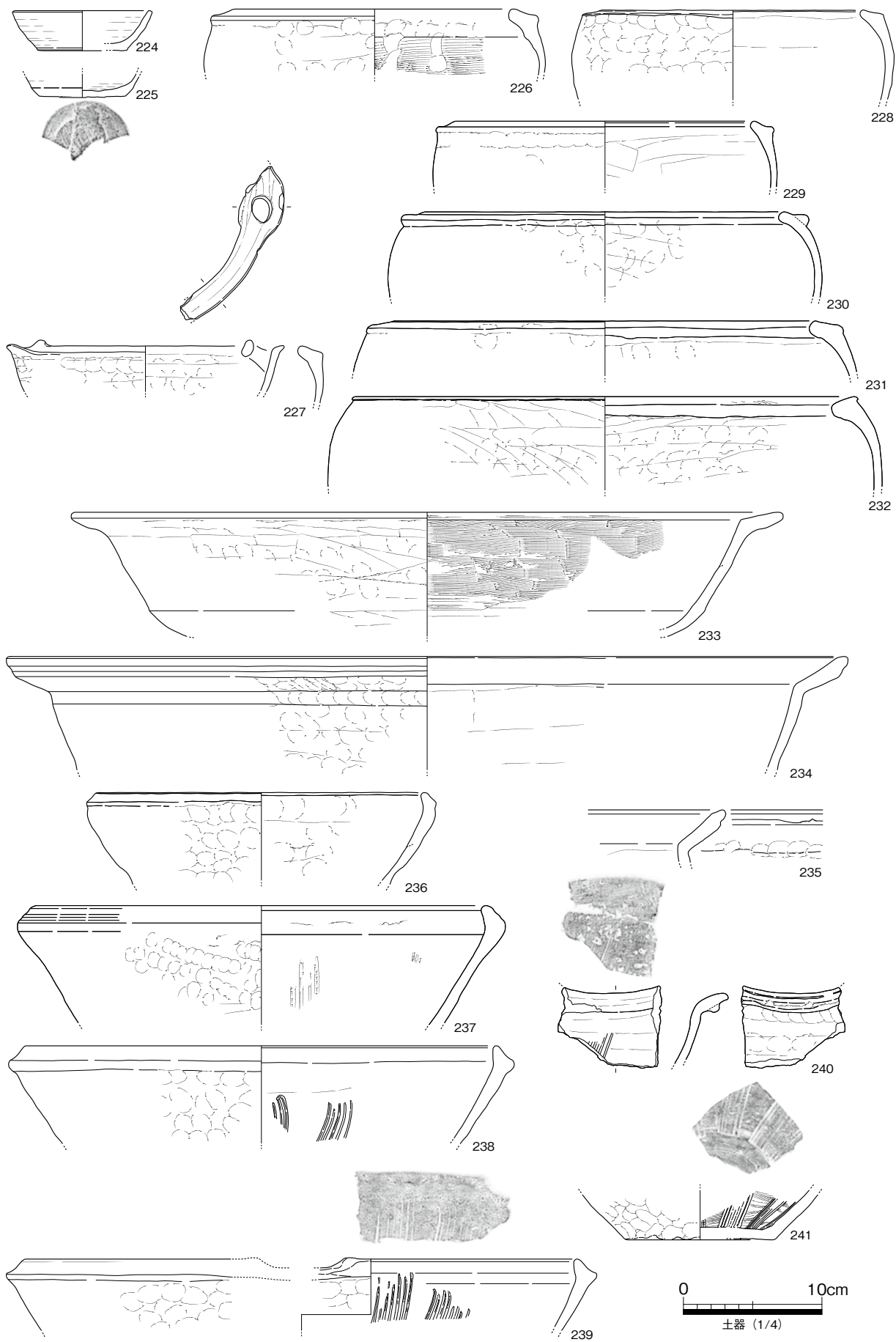
SD3028 は 3-1 区北東付近で検出した南北溝で、北は調査区外へ延長し、隣接する 3-1 区北側拡張区(北)では延長溝は検出していない。SD3033 は位置関係から SD3028 と同一の溝と考えられ、SK3013、SK3017 付近で西へ屈曲して SD3033 へ続くと考えられる。重複関係より SK3008、SK3012、SK3013、SK3016 より先行し、SK3011、SK3021、SK3022、SD3029、SD3039 より後出する。検出面幅 0.9 ~ 1.9m、残存深 0.14m 前後をそれぞれ測り、断面形は皿状を呈する。流路方向 N35.08° W に配され、条里型地割の方向に概ね合致する。溝底面の標高は 3-1 区北拡張部南にて検出された SD3028 の北端で 21.47 m 前後、3-1 区南端で 21.59 m 前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していた可能性が高い。埋土は灰白~褐灰色砂質シルトの単層であった。

SD3028 は 3-1 区南部で西へ屈曲し SD3033 として検出した部分は、重複関係より、SK3017 に先行し、SD3040 より後出する。検出面幅 0.26 ~ 0.32m、残存深 0.06 m をそれぞれ測り、断面形は皿状を呈する。流路方向は N68.59° E に配され条里型地割の方向に合致しない。溝底面の標高は東端部で 21.55 m 前後、西端部で 21.53 m 前後をそれぞれ測り、高低差より西へ流下していた可能性が高い。埋土は褐灰色粘質シルトの単層であった。

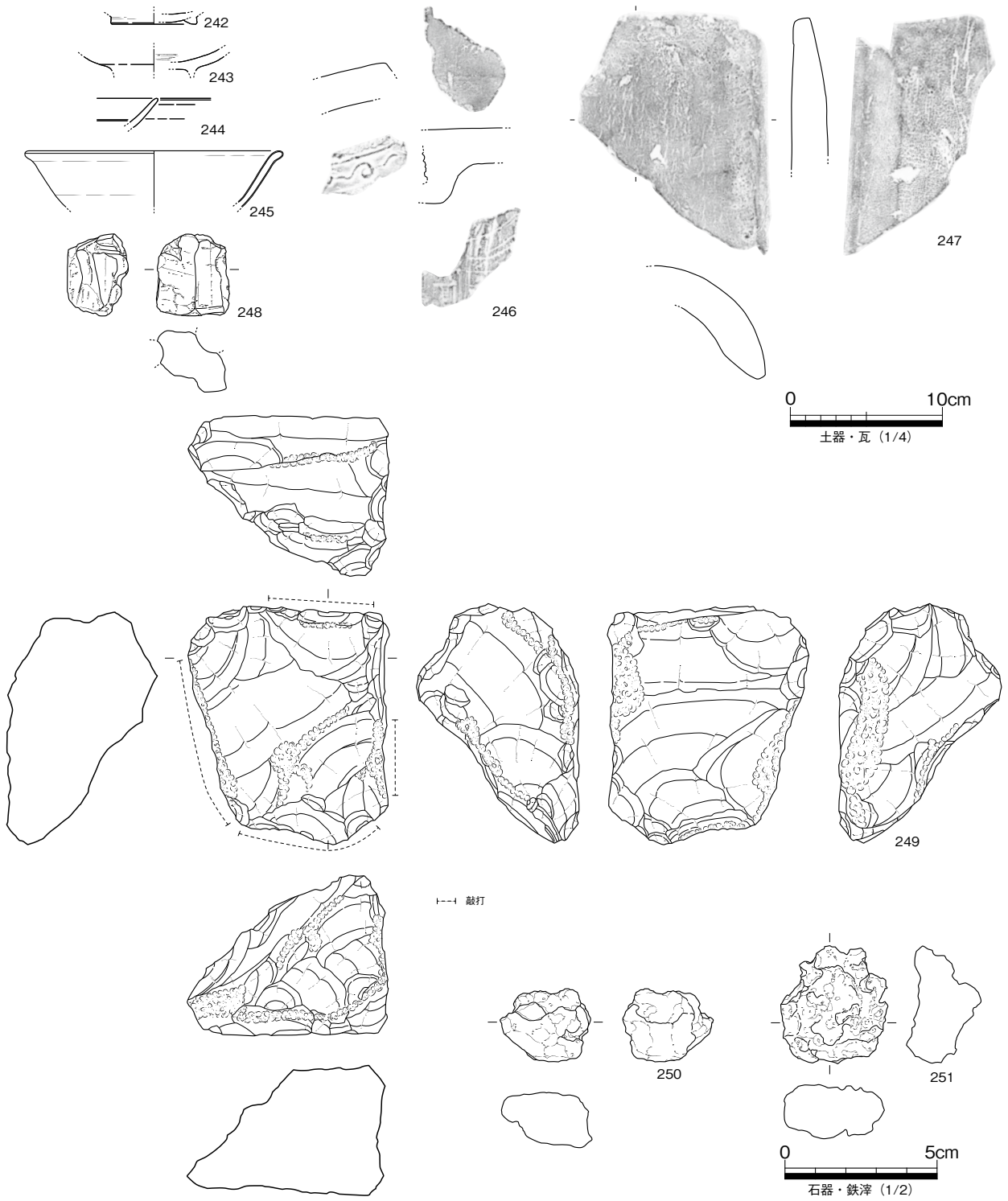
遺物は図示した以外に、土師質土器播鉢・足釜・把手付鍋・鍋、須恵器片、青磁片などがコンテナ 1 箱程度出土した。224 ~ 251 は SD3028 から出土した。224・225 は土師質土器杯。ともに底部は回転ヘラ切りである。226 ~ 231 は土師質土器把手付鍋。226 は体部内面を板ナデで調整、227 は体部外面に煤が付着する。228 は内外面ともに指オサエで調整する。226 は本書編年 C 期 (I-IV 型式)、227・228・231 は本書編年 D 期 (I-V 型式)、229・230 は B 期 (I-II 型式) に相当する。232 は把手付鍋と比較すると口縁端部が内傾する。火鉢の可能性も考えられる。233 ~ 235 は土師質土器鍋。233 は口縁部は大きく外傾する。口縁部から底部の屈曲部までの距離が 10cm 未満と短く浅い鍋であったと想定する。234・235 は丸く収められる口縁部直下に沈線状もしくは段状の凹面が形成されるものでいずれも中讃地方に普遍的な形態である。236 ~ 241 は土師質土器播鉢。236 は体部は全体的に赤茶色を帯び 1mm 程度の砂粒が胎土に混ざる。237・238 は 1mm 程度の砂粒が胎土に混入する。239 は一部欠損しているが、口縁部に注ぎ口を作り出す。238・239 は本書編年の A 期 (I 型式)、236 は A ~ B 期 (II 型式)、237 は B ~ C 期 (III 型式) に相当する。240 は播鉢の口縁部は外傾し口縁部の下に段を作り出す。沖遺跡の播鉢の中で出土したのはこの土器一点のみで、下川津遺跡に同様の形態の播鉢を見ることができる。241 は底部のみの出土のため、全体形は不明である。242 は西村型土器椀で低平な高台が粗雑に貼り付けられる。243 は黒色土器椀底部片。244 は中国産白磁皿 VIII-1 類 (大宰府分類) の口縁部片。245 は中国産青磁 D 類 (上田分類) 椀。口縁部を明瞭に外反させ分厚く釉掛けされる。246 は軒平瓦。中心飾りは不明だが均整さに欠ける唐草文の形状で粗質の胎土から近世瓦と考えられる。247 は丸瓦。凸面はナデに消去されずに縄タタキ目が残し、凹面は布目が見られる。初期の近世瓦と考えられる。248 は用途不明土製品。土製品の中央部に円柱状のものを押し当てた痕跡が残る。図示していないが、同様の土製品は他にも出土している。249 は石英の火打石。石の稜線部のほぼ全てで火打金と打ち合わせた痕跡が残る。250・



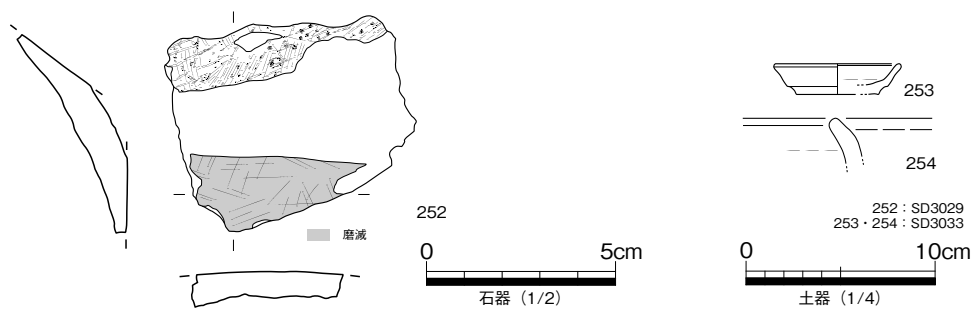
第 141 図 3-1 区 SD3028 SD3029 SD3033 平・断面図



第142図 3-1区SD3028出土遺物1



第 143 図 3-1 区 SD3028 出土遺物 2

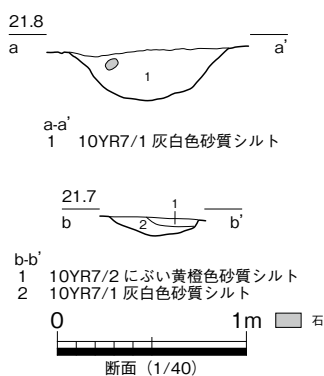
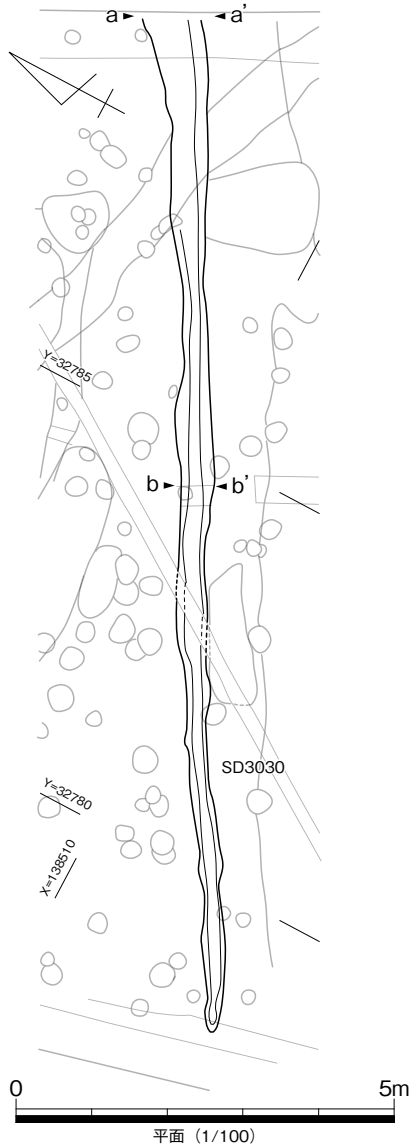


第 144 図 3-1 区 SD3029 SD3033 出土遺物

251は椀形鍛冶滓。250については分析を行っており、詳細については第4章8節に記載している。

253・254はSD3033から出土した。253は土師質土器皿。復元した口径は6.6cmを測る。底部はヘラ切り、体部は回転ナデ。254は土師質土器播鉢口縁部片。口縁部の内傾角度が緩い。

調査時には層別に取り上げられておらず、SD3028の下層にある土坑の遺物が混入している可能性も考えられうるが、少なくとも14世紀以前には開削されていたことを想定する。完全に埋没するのは17世紀中葉以降であろう。(溝上)



第145図 3-1区SD3030  
平・断面図

### 3-1区SD3029 (第141・144図)

3-1区北東付近で検出した南北溝でSD3028の西側で検出した。北は調査区外へ延長し、隣接する3-1区北側拡張区(北)では延長溝は検出していない。南はSD3028に切られる。検出面幅0.35m前後、残存深0.06m前後をそれぞれ測り、断面形は皿状を呈する。流路方向はN42.81°Wに配され、条里型地割の方向に概ね合致する。溝底面の標高は3-1区北拡張部南にて検出されたSD3029の北端で21.5m前後、3-1区SD3028の合流する手前で21.52m前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していた可能性が高い。埋土は褐灰色細砂の単層であった。

図示していないが、本書編年のD期(2-Ⅲ型式)に相当する土師質土器把手付鍋と土師質土器片が数点出土している。252は安山岩製の砥石。砥石として使用しているのは、図示した平面図のトーンをかけた部分のみで、中間部分は割れたままの状態である。底面もまた割れたままの状態であるため、大きな砥石から何らかの理由で割れた破片の可能性はある。

SD3028より先行することから、中世頃に位置づけられる。(溝上)

### 3-1区SD3030 (第145図)

3-1区南部で検出した東西溝で東は調査区外に延長し、隣接する2-2区では延長溝は検出されていない。切り合い関係よりSK3018、SD3040より後出する。検出面幅0.45～0.8m、残存深0.1～0.28mをそれぞれ測り、断面形は浅いU字状ないし皿状を呈する。流路方向はN59.98°Eに配され、条里型地割の方向に概ね合致する。溝底面の標高は東端部で21.46m前後、西端部で21.58m前後をそれぞれ測り、高低差より東へ流下していた可能性が高い。埋土は2層に細分され、灰白色砂質シルトが概ね水平堆積する。

遺物は図示していないが器種不詳の土師質土器片が20点程度

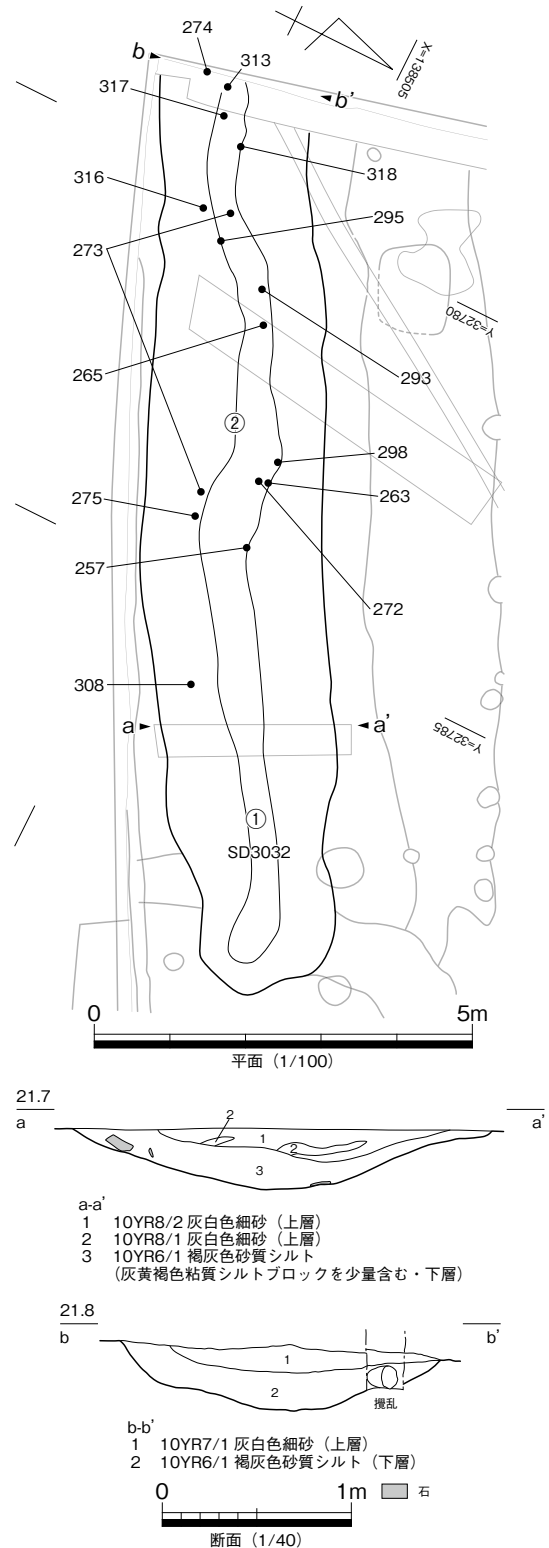
出土した。また、SD3032 出土の 270 と接合できた破片がある。

出土遺物より、17 世紀前半を上限とする。(溝上)

### 3-1 区 SD3032 (第 146 ~ 151 図)

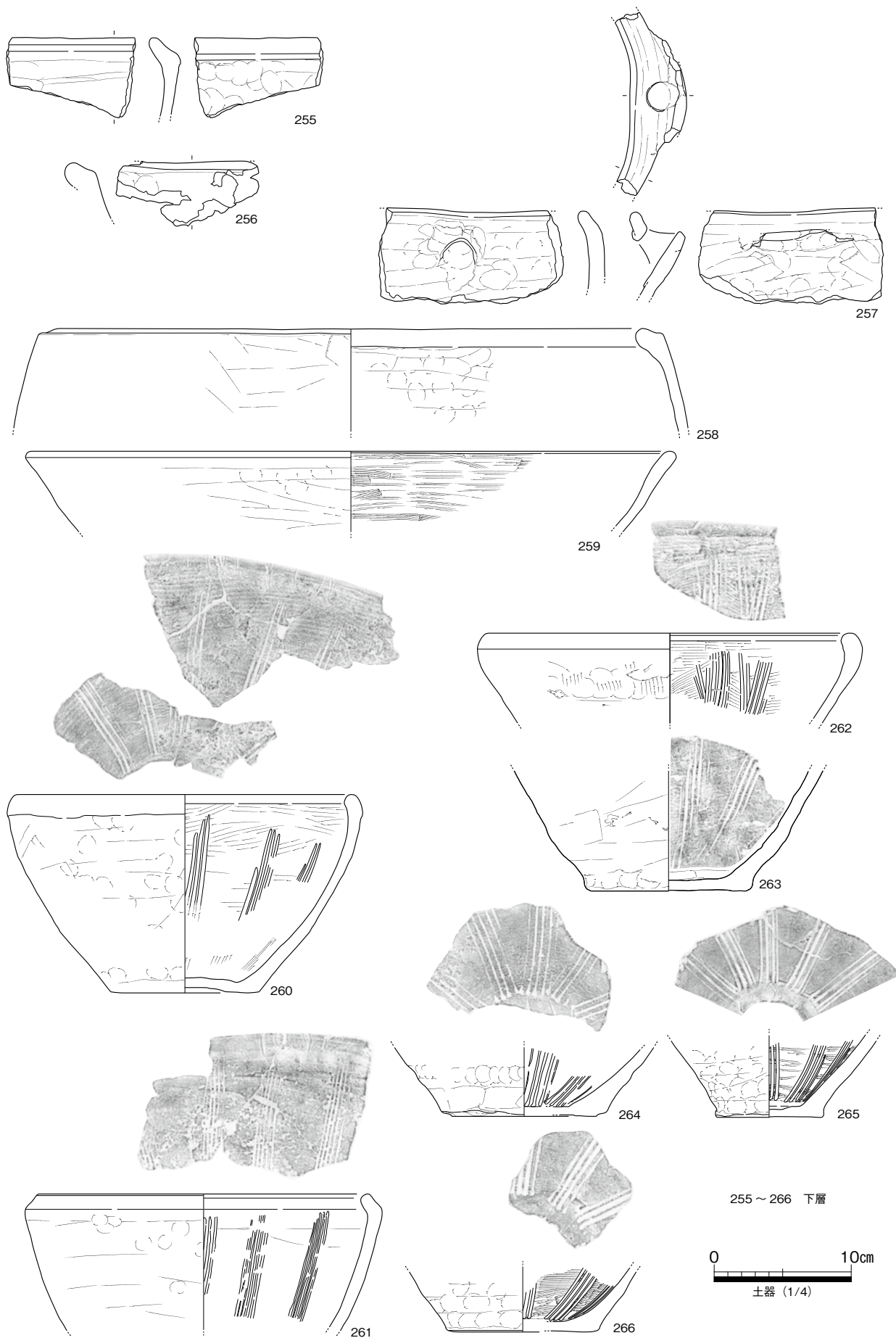
3-1 区南端部で検出した東西溝。西は調査区外に延長し溝の全形は不明である。切り合い関係より、SD3005、SR3001、SR3002 に後出する。検出面幅 1.8 ~ 2.3m 前後、残存深 0.34m 前後をそれぞれ測り、断面形は皿状を呈する。流路方向は N63.62° E に配され、条里型地割の方向に概ね合致する。溝底面の標高は東端部で 21.32 m 前後、西端部で 21.25 m 前後をそれぞれ測り、高低差より西へ流下していた可能性が高い。埋土は 2 層に細分され上層に灰白色細砂、下層に褐灰色砂質シルトがレンズ状に堆積する。

遺物は図示した以外に、土師質土器把手付鍋・鍋・足釜・播鉢、磁器小片、陶器片、平瓦、丸瓦などがコンテナ 1 箱程度出土した。255 ~ 308 は下層から出土した。255 ~ 257 は土師質土器把手付鍋。256 は全体的に割れや剥落が激しく調整を確認することは困難。257 は把手部分の口縁の外傾は弱く、把手部分以外の口縁部の内傾も弱い。255・256 は本書編年 D 期 (I-V 型式)、257 は D 期 (2-III 型式) に相当する。258 は土師質土器火鉢。259 は土師質土器鍋。外面は一面に煤が付着する。260 ~ 266 は土師質土器播鉢。260・262 は 4 条 1 単位、261 は 5 条 1 単位の卸目を施す。260・261 とともに体部内面に煤の付着が確認できる。262 は卸目を重ねて施した跡が残る。261 は本書編年 B ~ C 期 (III 型式)、262 は D 期 (IV 型式)、260 は D 期 (V 型式) にそれぞれ相当する。263 ~ 266 は播鉢の底部。264 ~ 266 は体部内面、割れ断面の一部に煤が付着している。267・268 は土師質土器火鉢の底部片。269 は須恵器杯身の口縁部片。7 世紀に位置づけられる。270 は肥前系磁器皿で、内外面とも鉄釉と灰釉を掛け分ける。高台内に砂目が見られる。SK3018・SD3030 との接合資料である。271・273・274・282・286・290 は肥前系陶器溝縁皿で、内面から口縁部外面にかけて灰釉が掛けられ、271・273・274 には見込みに砂目が残される。この他に肥前系陶器皿には、緩やかに内湾する口縁部を持つもの (272・283・284)、見込みに段を伴い、外

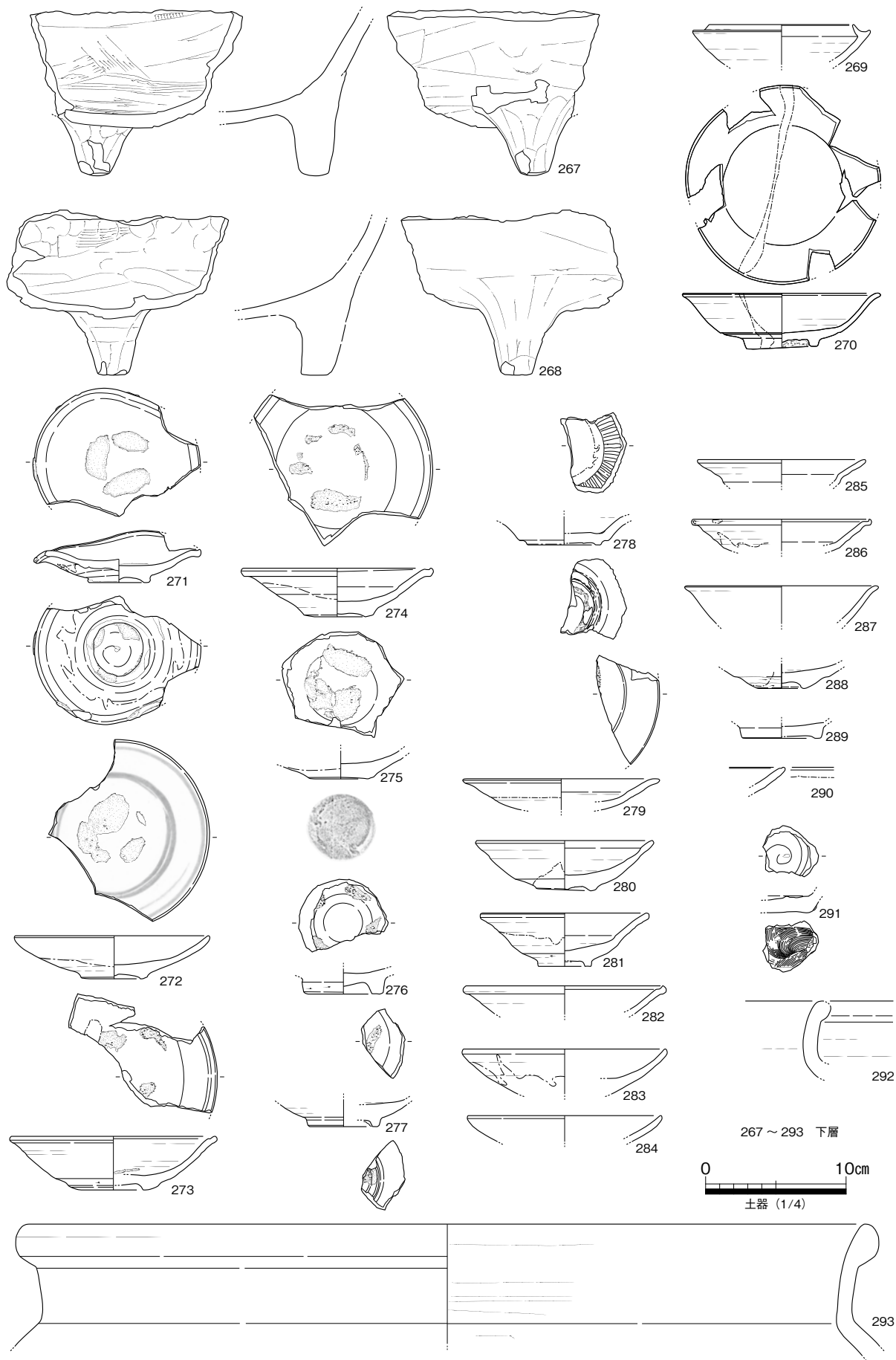


第 146 図 3-1 区 SD3032 平・断面図

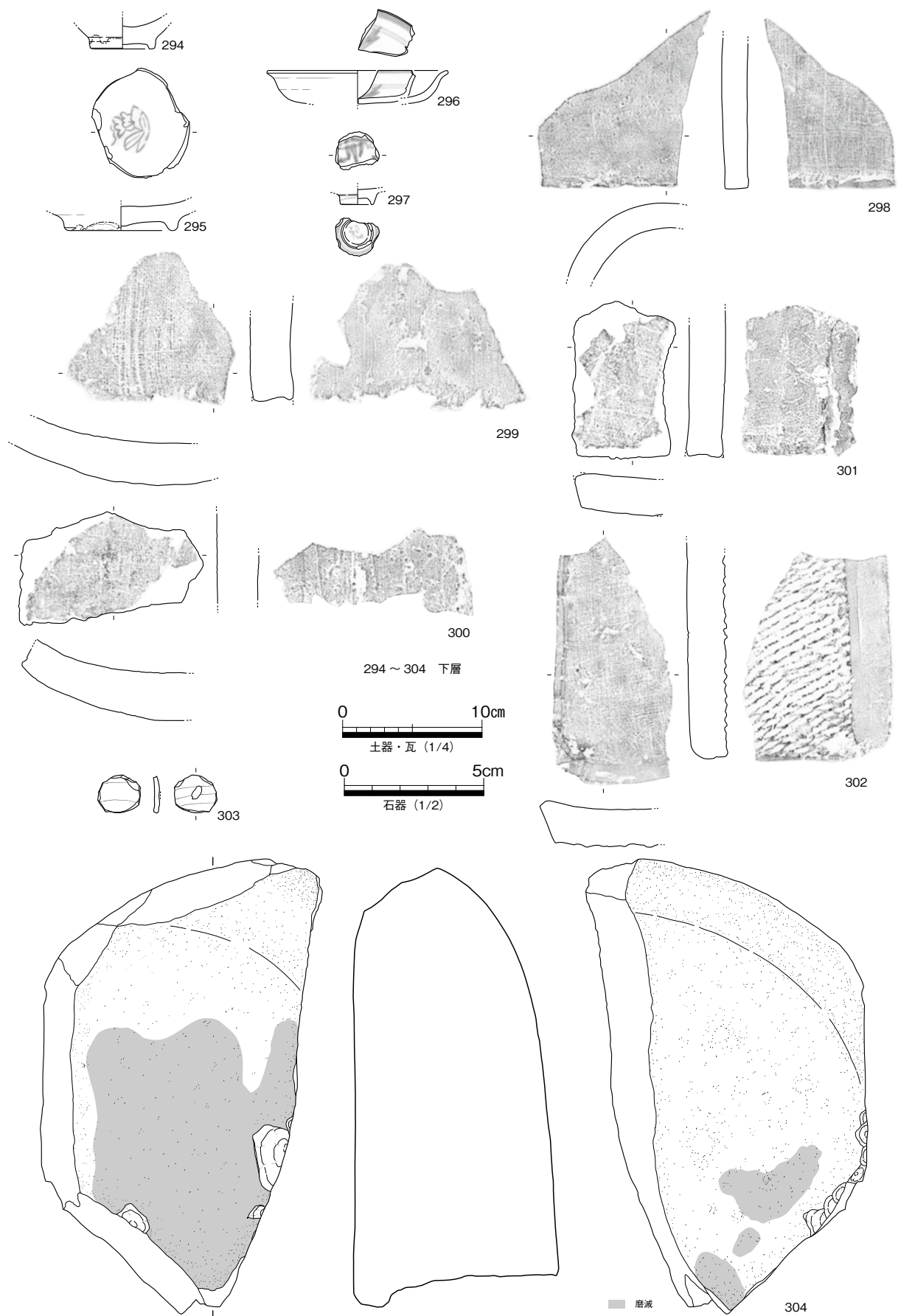




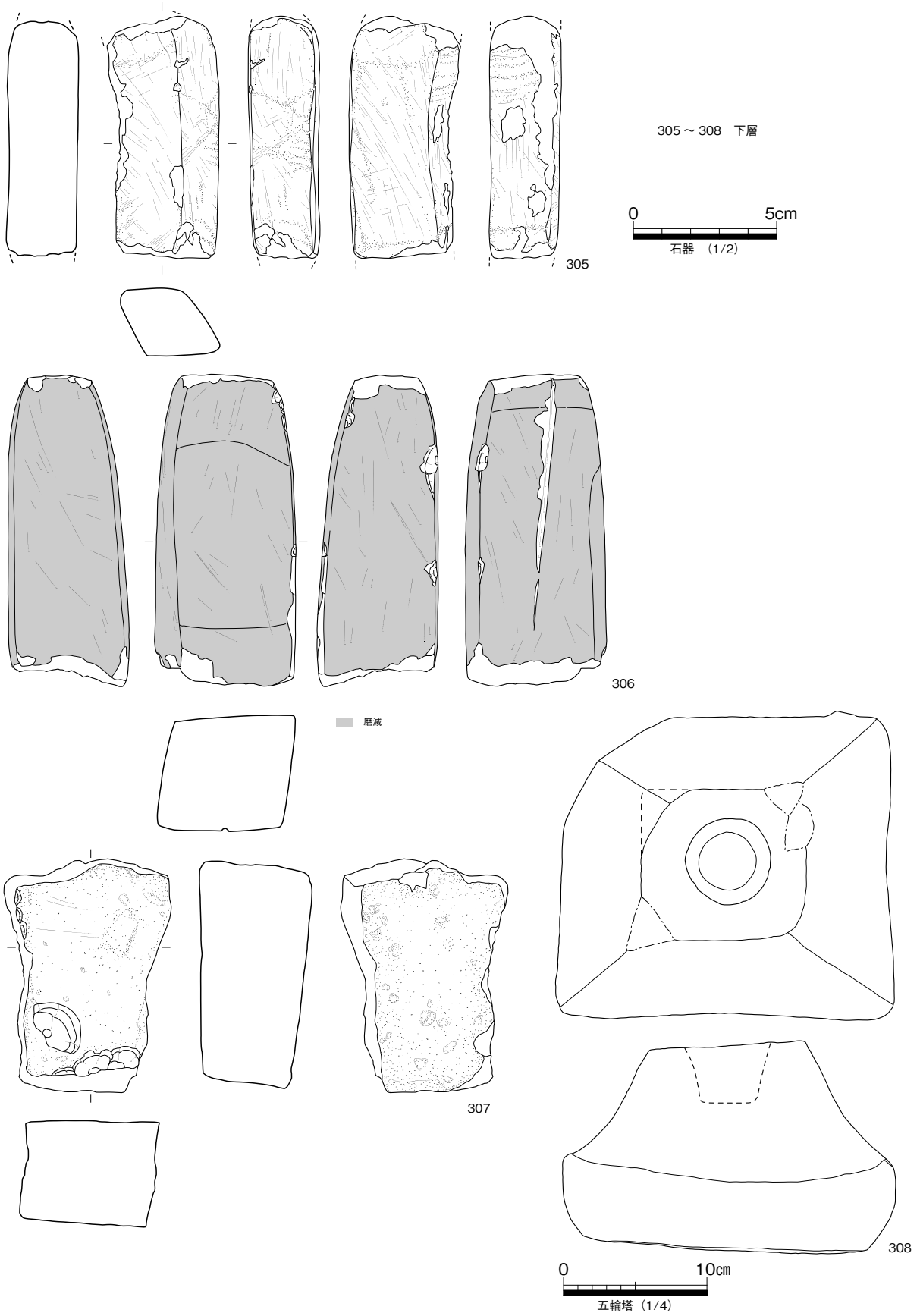
第147図 3-1区 SD3032 出土遺物1



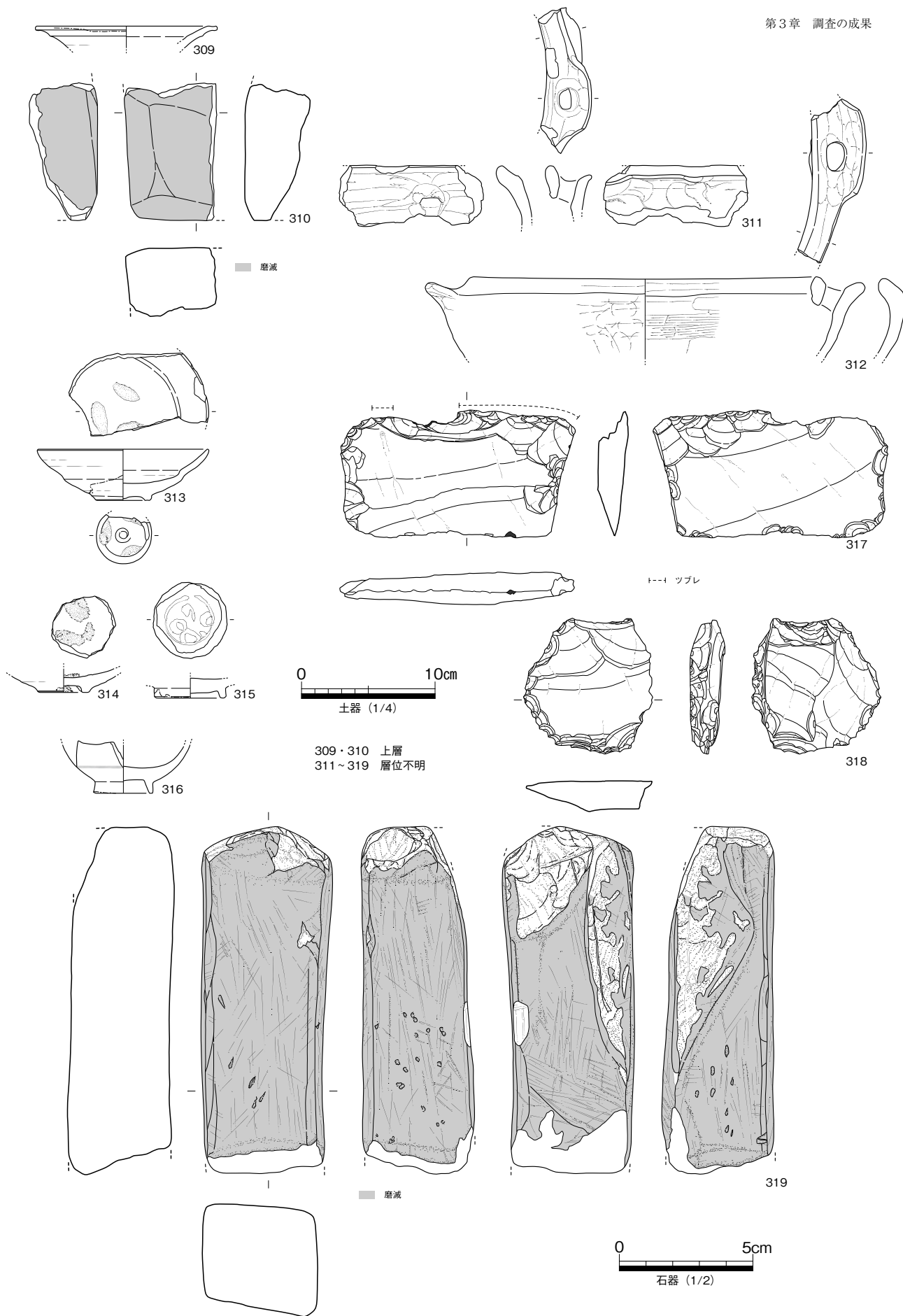
第 148 図 3-1 区 SD3032 出土遺物 2



第149図 3-1区SD3032出土遺物3



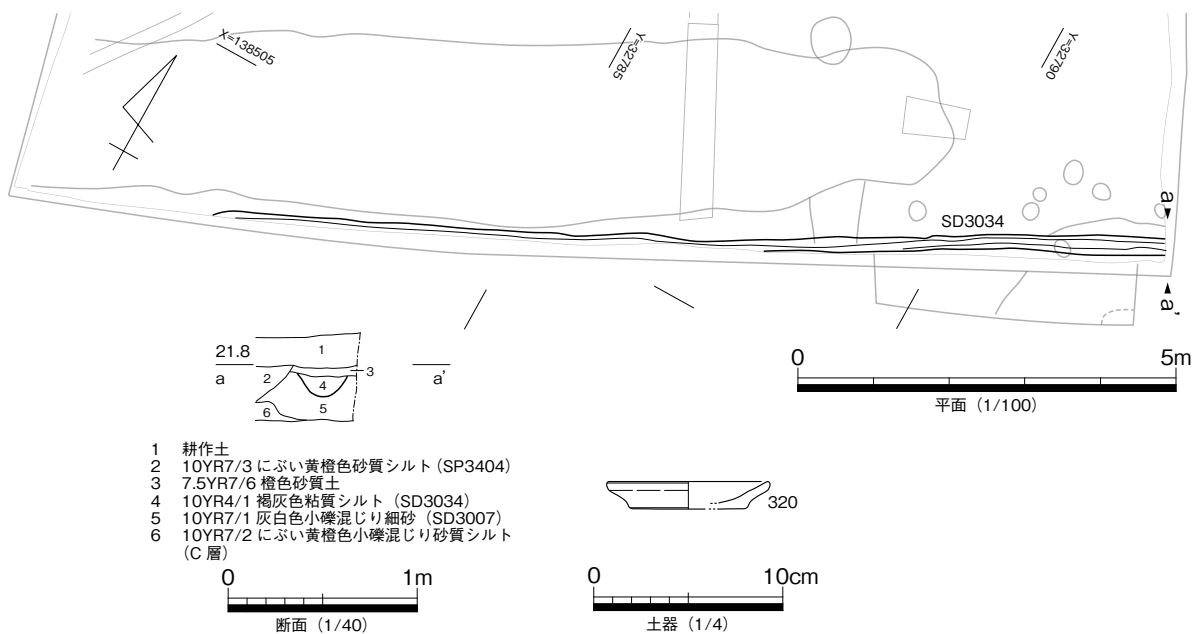
第150図 3-1区SD3032出土遺物4



第151図 3-1区SD3032出土遺物5

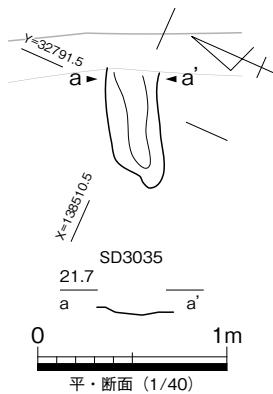
反気味の口縁部を持つもの(277・279～281)等の形態のものがある。272・277・279には見込みに砂目が残される。これらは高松城の様相3に相当する特徴を持つ。278は瀬戸・美濃系陶器灰釉折縁皿。体部内面には丸ノミ状工具によるソギが施され、底部内面と高台内を除いて灰釉が施される。287は肥前系磁器の端反皿。289・294は中国産白磁Ⅳ類椀(大宰府分類)の底部。291は備前焼の壺底部。292は備前焼壺、293は同甕で玉縁状口縁の形態から乗岡編年中世3～4期の所産と考えられる。295は中国産青磁椀Ⅰ類(大宰府分類)で見込みに花文が施される。釉は畳付を越えて高台内に及ぶ。14～16世紀の所産か。296は肥前系磁器皿。端反りの口縁部と、やや白濁した釉調、にじむような呉須から、高松城様相3が考えられる。297は中国産青花小杯。濁った濃い色調の呉須で、見込みに簡略化した風景図、高台内には「福」を描く。298は丸瓦。凹面に布目残り、凸面は板ナデで調整する。299～302は平瓦。299～301は凹面には布目が、凸面には板ナデの痕跡が残る。301は凹凸面とも磨滅を強く受ける。302は凹面に布目残り、凸面は縄タタキ目が見られる。いずれも古代の所産で、法興寺との関わりが注目される。303は円盤状土製品。中世前半の土師質土器杯を転用して作成されたものと考えられる。304～307は砥石である。304は砂岩製の砥石。砥石専用に加工した跡はあまり見られず、自然石の形のまま使用している印象を受ける。砥石として使用しているのは表裏の2面のみで他の面は割れた状態のままである。305は流紋岩製の砥石。断面形は平行四辺形のような形をしており、4面ともに砥石として使用している。長辺の一部が打ち欠かれたようになっているが、使用当時の痕跡なのか、後世のものなのかは不明である。306は流紋岩製の砥石。4面とも砥石として使用している。他の流紋岩の砥石と比較すると有色鉱物の含有率が高い。307は安山岩製の砥石。砥石として使用したのは2面のみで、他の面は割れた状態のままである。砥石として使用された頻度が低いのかあまり磨滅はしていない。308は角礫凝灰岩(天霧石)製の五輪塔火輪。火輪の上面は風輪をうけるための柄穴を作るが、下面には柄を作らない。火輪が最大でも24cm前後であり、天霧石製の五輪塔の中でも小型のものである。16世紀頃のものとみられる。

309・310は上層から出土した。309は肥前系陶器の溝縁皿。310は流紋岩製の砥石。面として4面あるが、2面は使用された痕跡があるのに対し、2面は未加工面である。



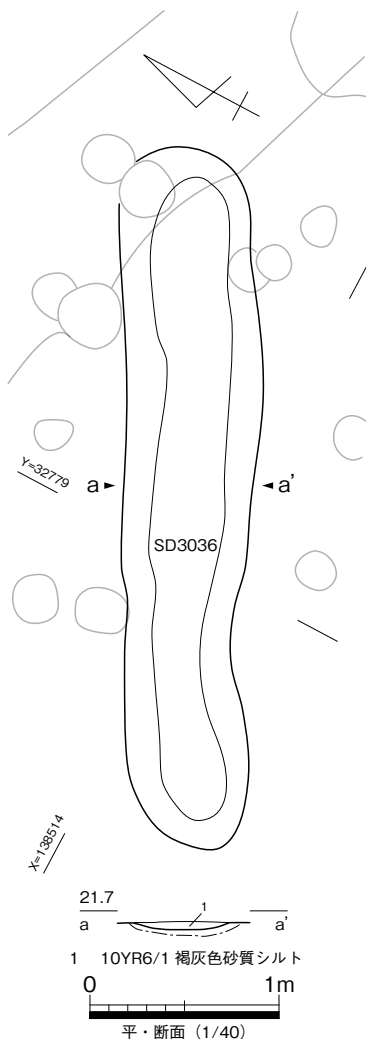
第152図 3-1区SD3034平・断面図、出土遺物

311～319は出土層位不明の遺物である。311・312は土師質土器把手付鍋。両方とも外面の一部に煤が付着する。ともに本書編年D期(1-V型式)に相当する。315は胎土が粗悪であるが、見込みに花文状のスタンプが見られることから、中世後半の中国産青磁椀と考えられる。316は肥前系磁器椀。高台が細長く、腰の張りがやや弱い形態的特徴から高松城様相3に相当する。317はサヌカイト製石包丁。318はサヌカイトの剥片。319は流紋岩製の砥石。断面形は平行四辺形のような形をしており、4面ともに砥石として使用している。



第153図 3-1区 SD3035  
平・断面図

古代の須恵器や瓦を上限として、中世前期(12世紀)の中国産白磁、中世後期(14～16世紀)の中国産青磁、備前焼壺・甕、中世末～近世初頭(16世紀後半～17世紀初頭)の中国産青花等は、いずれもほぼ細片である。これに対し、肥前系陶器・磁器皿は遺存状態がかなりいい。このことから、搬入品の主体は高松城様相3(1640～50年代頃)にあり、土師質土器挿鉢もこれに近い時期の所産と考えられる。このことから、遺物を多く含んでいた下層の埋没年代の下限を17世紀前半～中葉としておきたい。(溝上)



第154図 3-1区 SD3036  
平・断面図

### 3-1区 SD3034 (第152図)

3-1区南端東部で検出した。SD3007を切る溝で、隣接する2-2区で延長する溝は見つかっていない。遺構ラインの大部分が調査区の境界と接しており、全形は不明である。検出面幅0.2m前後、残存深0.1mをそれぞれ測り、断面形は浅いU字形状を呈する。流路方向はN62.72°Eに配され、条里型地割の方向に概ね合致する。溝底面の標高は東端部で21.48m前後、西端部で21.63m前後をそれぞれ測り、高低差より東へ流下していた可能性が高い。埋土は褐灰色粘質シルトの単層である。

遺物は図示した以外に、土師質土器の小片、陶器片が10点程度出土している。320は土師質土器皿。出土遺物より佐藤編年中世II-4～5期に位置づけられる。(溝上)

### 3-1区 SD3035 (第153図)

3-1区南部東壁沿いで検出した。小規模な溝であり、3-1区東壁断面図では確認できていない。検出面幅0.26m、残存深0.04m前後をそれぞれ測り、断面形は浅い皿状を呈する。流路方向はN61.93°Eに配され、条里型地割の方向に概ね合致する。溝底面の標高は東端部で21.578m前後、西端部で21.583m前後をそれぞれ測り、高低差があまりない。遺物は出土しておらず、時期は不明である。(溝上)

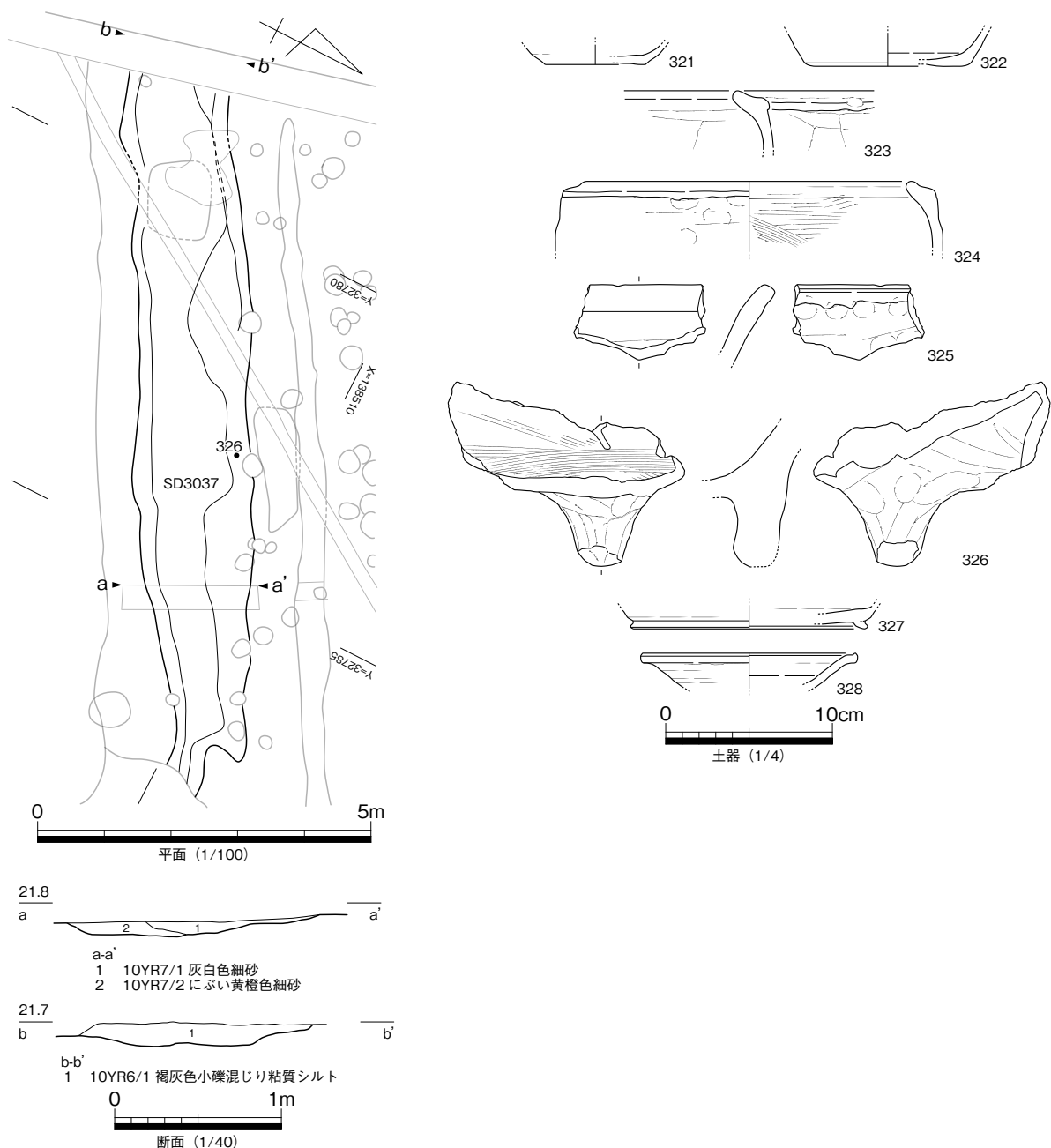
### 3-1 区 SD3036 (第 154 図)

3-1 区南部で検出した。重複関係により SD3040 に後出する。なお、柱穴群は SD3036 掘削後に検出した。検出面幅 0.6m、残存深 0.06m をそれぞれ測り、断面形は浅い皿状を呈する。流路方向は N54.49° E に配され、条里型地割の方向に概ね合致する。溝底面の標高は東端部で 21.66 m 前後、西端部で 21.58 m 前後をそれぞれ測り、高低差より西へ流下していた可能性が高い。埋土は褐灰色砂質シルトの単層である。

遺物は図示していないが、足釜脚部等の土師質土器片が 10 点程度出土している。出土遺物は乏しいが中世に位置づけられる。(溝上)

### 3-1 区 SD3037 (第 155 図)

3-1 区南部で検出した。西は調査区外へ延長し、東は SD3005 に切られる。重複関係より、SR3001、



第 155 図 3-1 区 SD3037 平・断面図、出土遺物







SR3002、SK3023 より後出する。検出面幅 1.6m 前後、残存深 0.1m 前後をそれぞれ測り、断面形は概ね皿状を呈する。流路方向は N61.24° E に配され、条里型地割の方向に概ね合致する。溝底面の標高は東端部で 21.48 m 前後、西端部で 21.49 m 前後をそれぞれ測り、高低差があまりない。埋土は記録位置により相違を認めるが、単層もしくは 2 層に細分され主に灰色系の細砂や粘質シルトが堆積していた。

遺物は図示した以外にも、本書編年 D 期 (I-V 型式) の土師質土器把手付鍋、同じく D 期 (V 型式) の土師質土器播鉢・足釜、器種不詳の土師質土器片などが 70 点程度出土した。SD3037 掘削後に SK3023 を検出したため、一部 SK3023 の遺物が混入している可能性も考えられる。321・322 は土師質土器杯。323・324 は土師質土器把手付鍋。体部内面を 323 は板ナデ、324 はハケ目で調整する。323・324 とともに本書編年 D 期 (I-V 式) に相当する。325 は土師質土器鍋。体部外面一面に煤が付着する。326 土師質土器火鉢の底部。体部外面は指ナデで、内面はハケ目で調整する。327 は須恵器杯。焼成不良で外側に踏ん張る高台をもつ。328 は肥前系陶器溝縁皿。

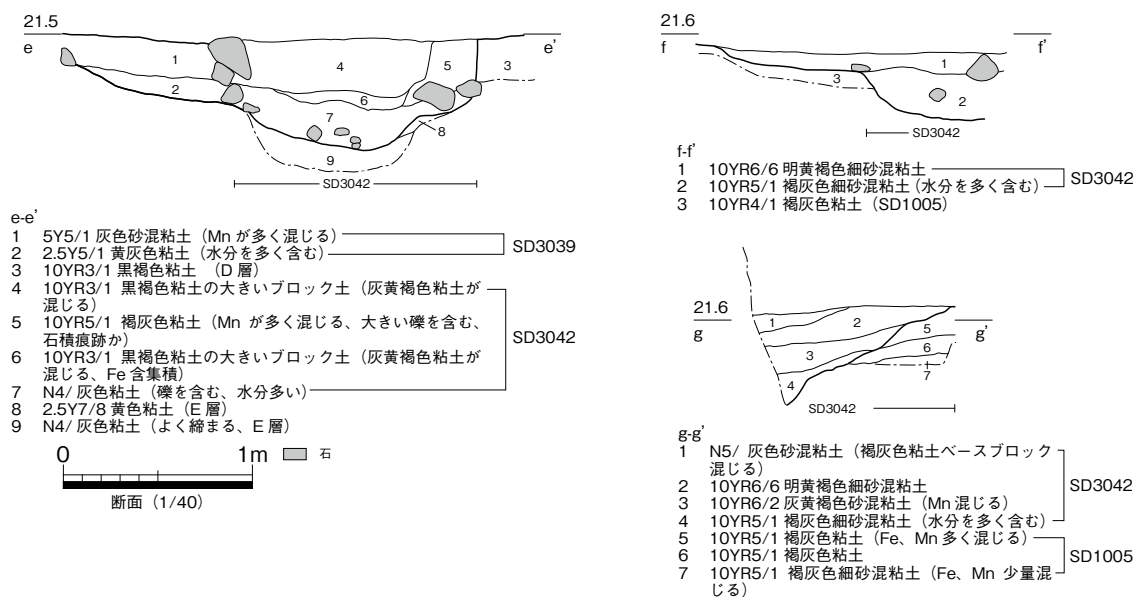
出土遺物より、17 世紀前半～中葉の遺構と考える。(溝上)

### 3-1 区 SD3041 (第 156 図)

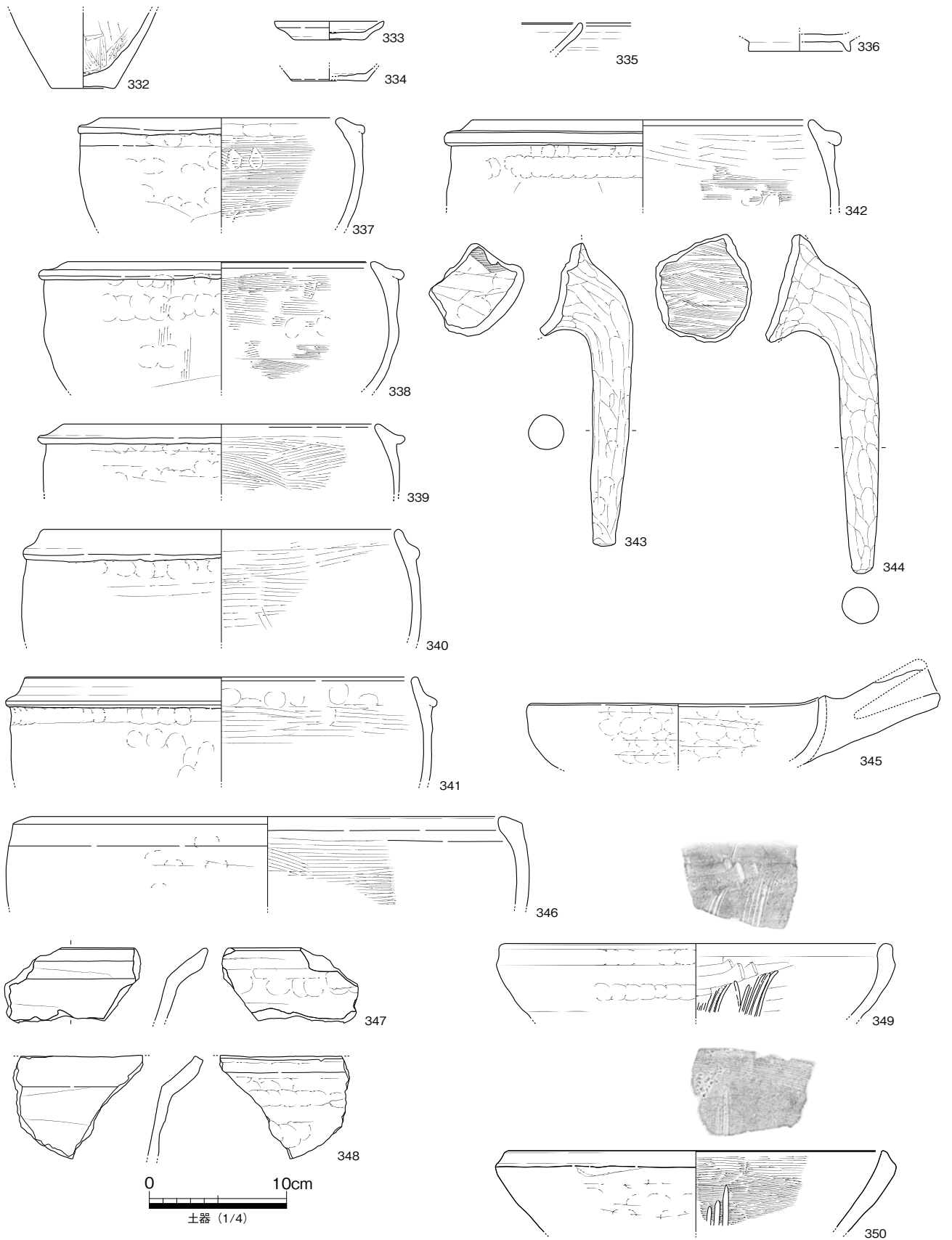
3-1 区の東壁沿いで検出した南北直線溝である。南北両端は調査区外へ延長し、3-1 区北拡張区北で西に屈曲する。また、調査区内では西側掘方を検出したのみで東側掘方は調査区外へ延長し、溝の全形は不詳である。調査区東側の市道は条里型地割の坪界線に想定されており、SD3041 は坪界溝と考えられる。重複関係から SD1006 より後出する。検出面幅 1.35m 以上、残存深 0.34m 前後をそれぞれ測り、断面形は逆台形状を呈するとみられる。流路方向は N31.14° W に配され、条里型地割の方向に概ね合致する。溝底面の標高は北端部で 21.39 m 前後、南端部で 21.50 m 前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していた可能性が高い。埋土は灰白～淡黄色砂質シルトが堆積する。

遺物は図示した以外にも、土師質土器播鉢や備前焼小片が 20 点程度出土している。329 は土師質土器椀。330 は土師質土器羽釜。おそらく近世に普遍化する茶釜形の鏝部であろう。331 は肥前系陶器の溝縁皿口縁部片。

遺構の先後関係と出土遺物より、17 世紀前葉～18 世紀前半の幅で捉えられる。(溝上)



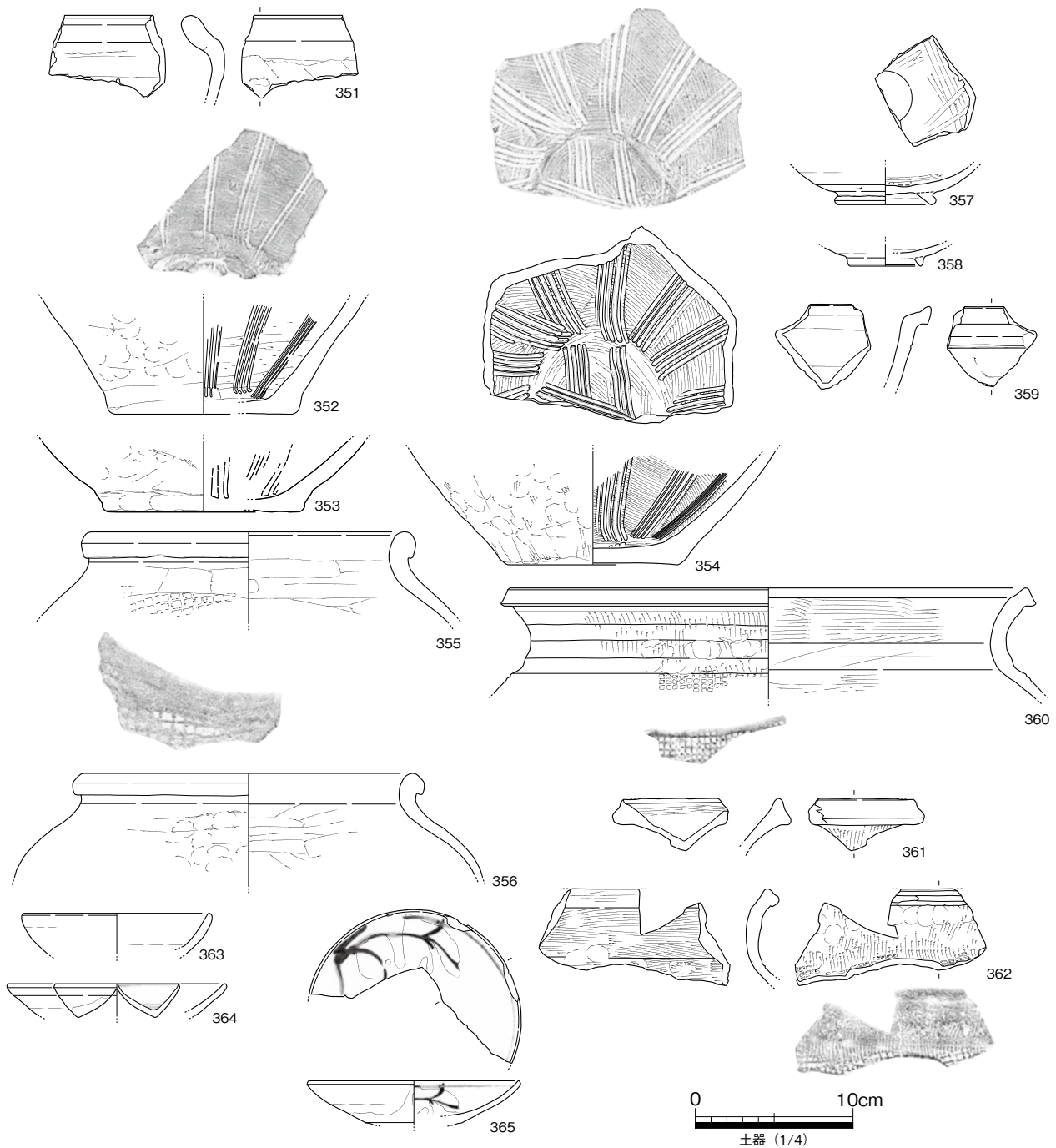
第 158 図 3-3 区 SD3042 SD3043 断面図



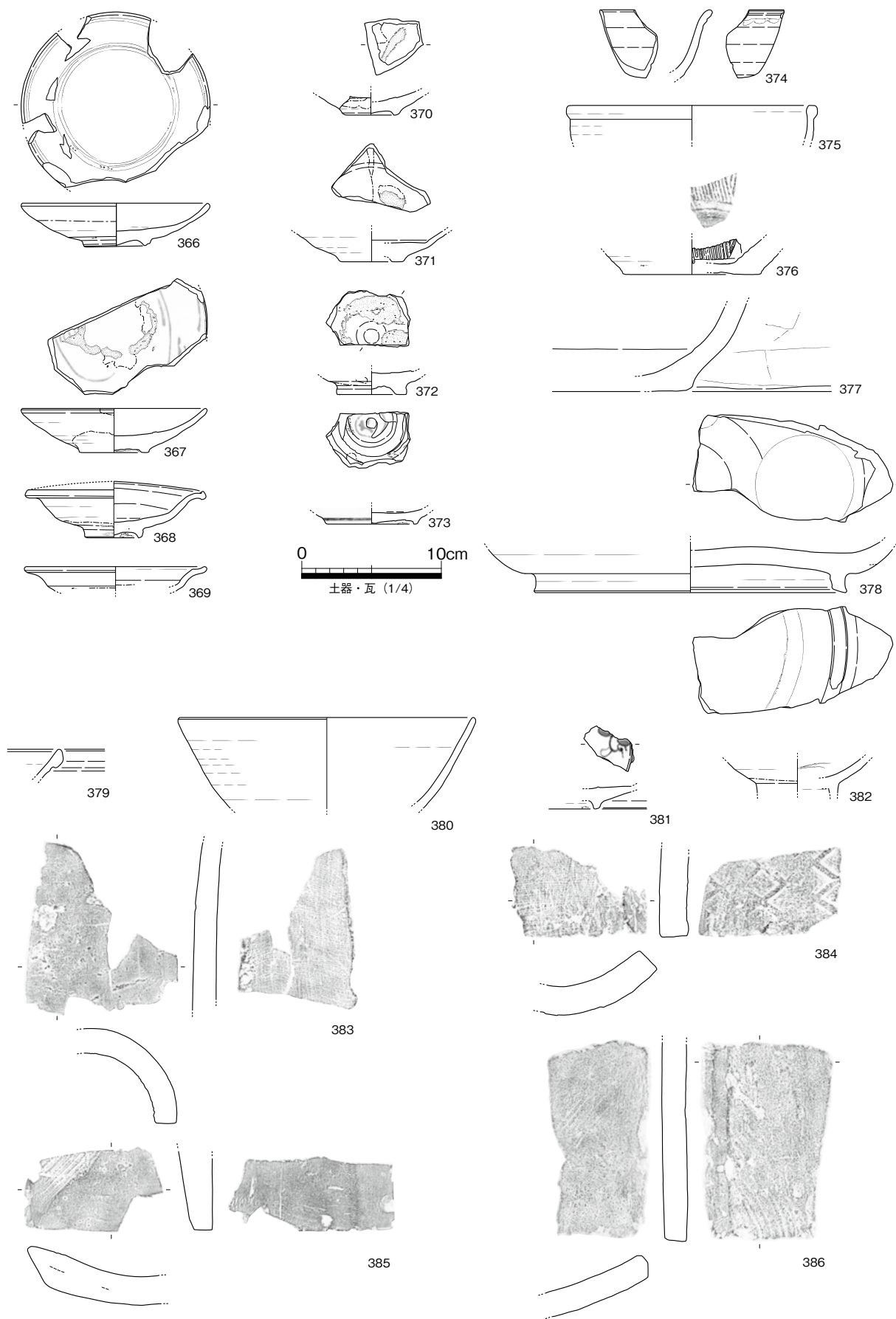
第159図 3-3区SD3042出土遺物1

3-3区 SD3042・SD3043 (第157～165図)

ともに3-3区東部で検出した南北溝である。南北とも調査区外に延長し、隣接する調査区では確認できていない。SD3042がSD3043に先行する溝である。重複関係より、SD1001、SD3047がSD3042より先行する。検出面幅1.2m前後、残存深0.34～0.8m前後をそれぞれ測り、断面形はU字状ないしは概ね逆台形状を呈する。流路方向はN28.06°Wに配され、条里型地割の方向に概ね合致し、坪界溝に相当する。溝底面の標高は北端部で20.71m前後、南端部で20.81m前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していた可能性が高い。埋土は、黒褐色や灰色系の粘土が複数層に分かれて堆積している。d-d'付近では礫が多く検出された。礫の中には、395～398で図示したような石製品が出土しており、人工的に礫が設置された可能性が考えられる。

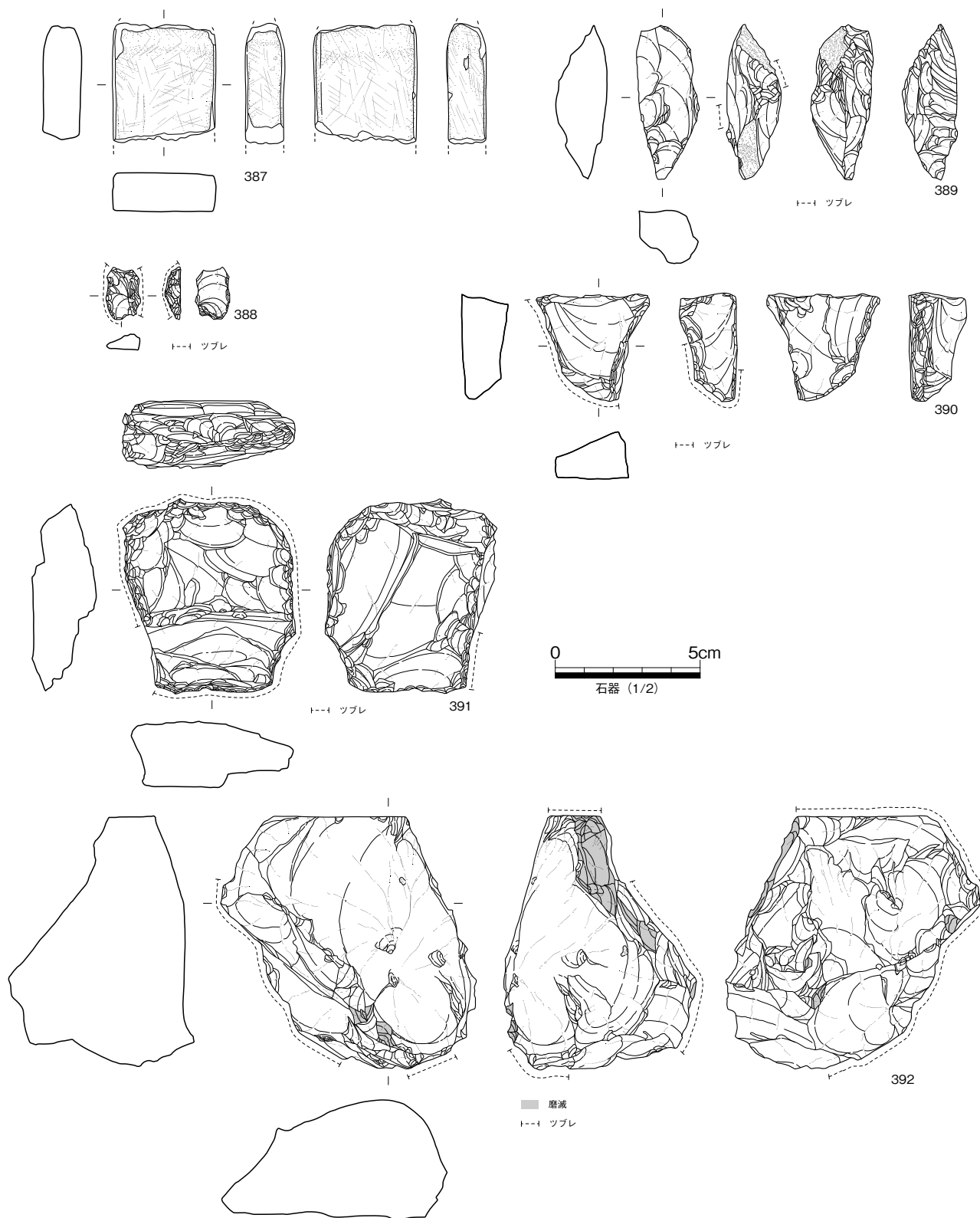


第160図 3-3区 SD3042 出土遺物 2



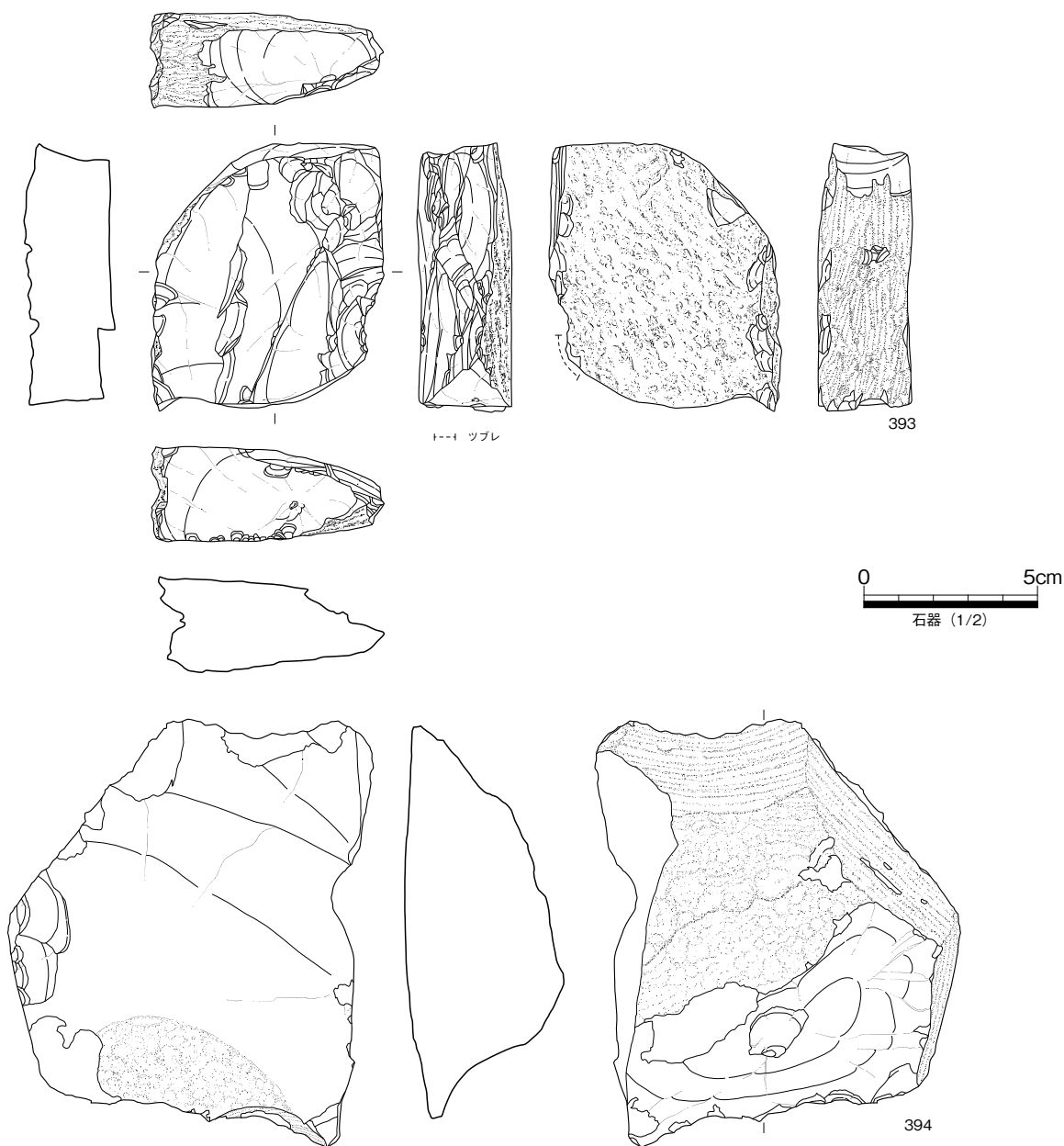
第 161 図 3-3 区 SD3042 出土遺物 3

SD3043はSD3042に重なるように検出した南北溝である。全体のほとんどが調査区外に延長し隣接する調査区では確認できていない。検出面幅0.3m以上、残存深0.2m前後、断面形は不詳である。流路方向はN28.39°Wに配され、条里型地割の方向に概ね合致し、坪界溝に相当する。埋土は灰黄色砂混粘土の単層であった。



第162図 3-3区SD3042出土遺物4

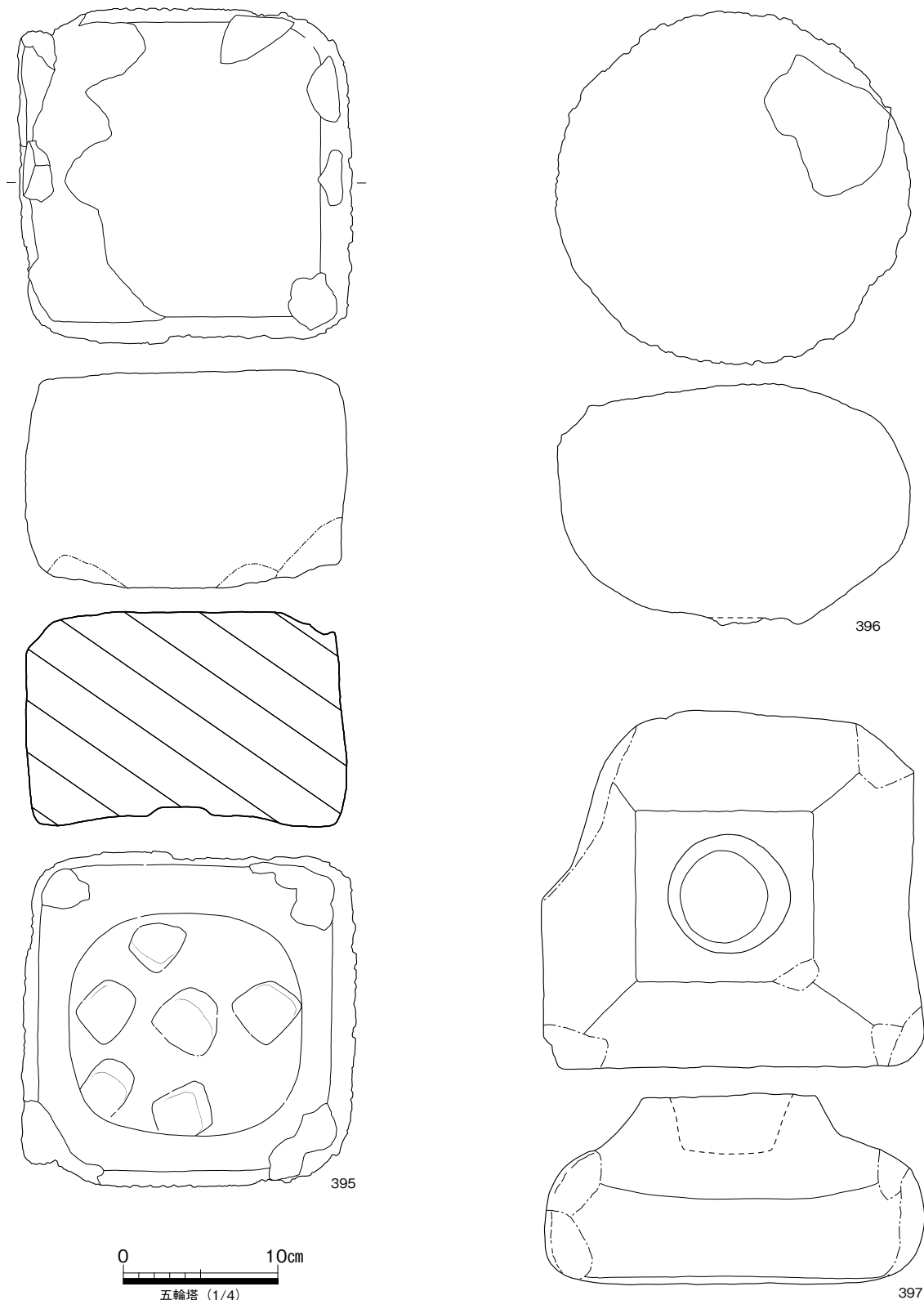
遺物は図示した以外に、土師質土器搗鉢・足釜・把手付鍋・鍋、備前焼片、肥前系溝縁皿片、青磁・白磁片、平瓦、丸瓦などがコンテナ1箱程度出土したほか、ウシやウマの獣骨(第4章第1節参照)が出土している。332～401はSD3042から出土した。332は弥生土器の底部。底部の形より鉢の可能性も想定できる。体部外面は磨滅が激しい。333・334は土師質土器皿。333は外傾度が強く短い口縁部を持つ。佐藤編年中世Ⅱ-1～2期で12世紀後半～13世紀初頭。334は全体的に薄手で比較的長い口縁部と考えられ、中世後期の可能性がある。ともに底部回転ヘラ切り。335は土師質土器杯。336は土師質土器椀。全体的に磨滅している。332は弥生時代の遺物が、333～336は中世の遺物が混入していると考えられる。337～344は土師質土器の足釜。長い口縁部と短い鑊部をもつ340・341は楠井Ⅱ-2期、内傾するがまだ比較的短い口縁部をもつ339は楠井Ⅱ-3期、短い口縁部と瘤状の鑊部をもつ337・338・342は楠井Ⅲ期にそれぞれ該当する。345は十能形鍋(手焙烙)。内面には加熱による変色が認められる。346は土師質土器把手付鍋。347・348は土師質土器鍋。いずれも中讃地域に普遍的なものであ



第163図 3-3区SD3042出土遺物5

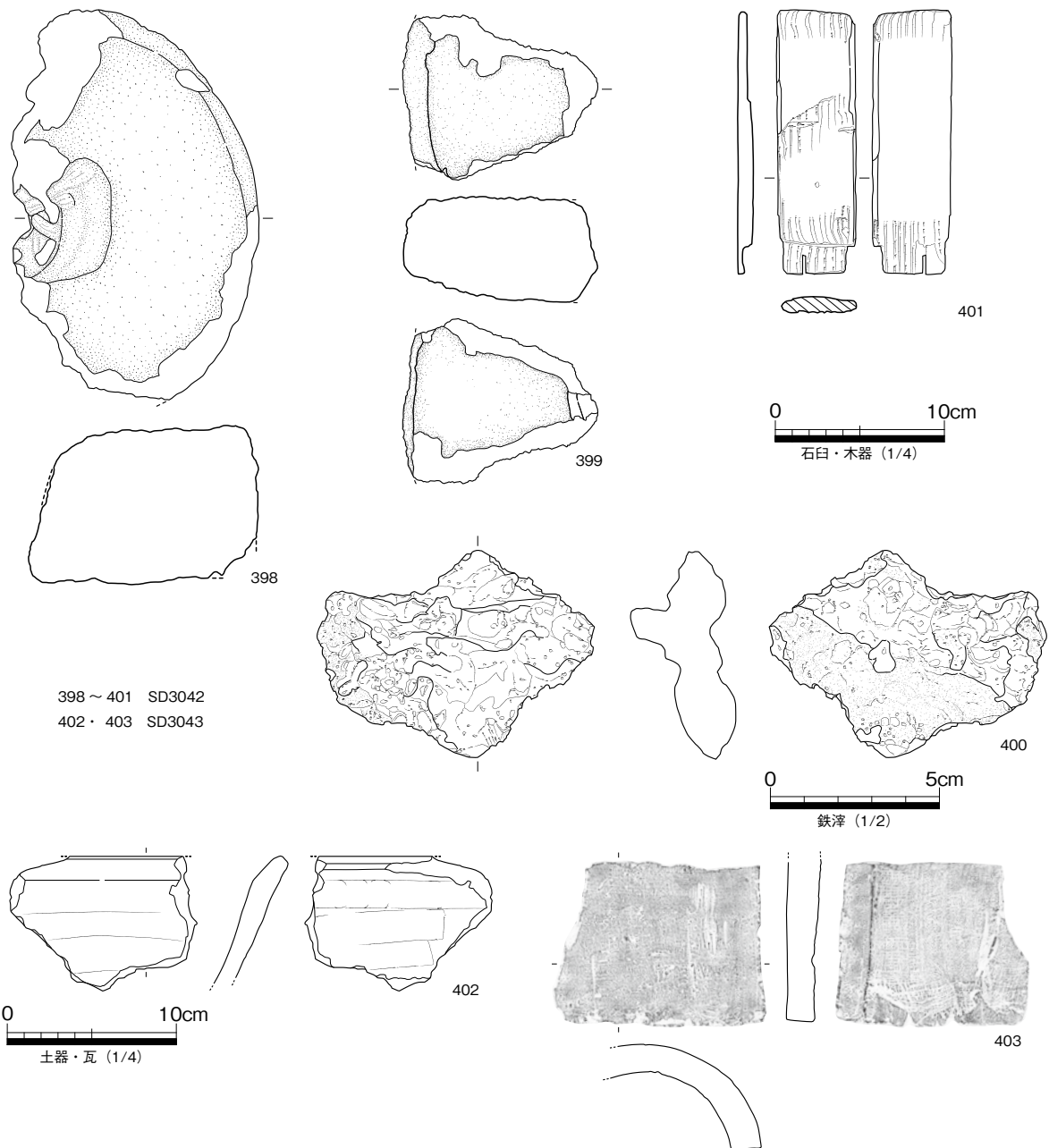


るが、348は口縁端部に平坦面を作り、鉄鍋に似た形状にする折衷的なものである。349～354は土師質土器播鉢。350は体部内面に一部煤が付着する。349は本書編年のD期(V型式)、350は本書編年のA～B期(II型式)に相当する。351は口縁部。本書編年のD期(V型式)に相当する。352～354は底部。354のみ底部まで4条1束の卸目を施す。355・356は土師質土器甕。355は口縁部をヨコナデ、体



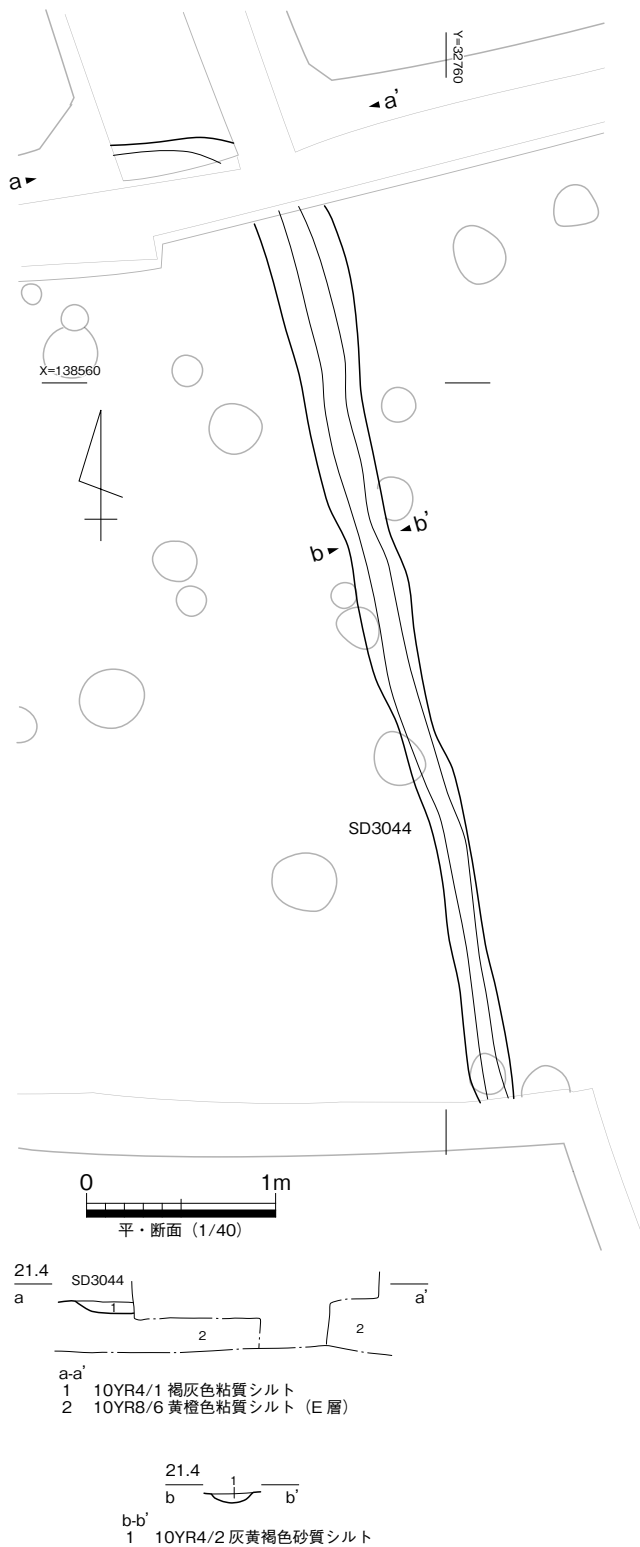
第164図 3-3区SD3042出土遺物6

部外面はタタキ目後板ナデ、体部内面は板ナデで調整する。356は口縁部を外に折りたたむように成形する。国分寺楠井遺跡産である。357は西村型黒色土器碗。底部外面中央に回転ヘラ切り痕、体部外面下半に回転ヘラ削り痕が見られる。また体部内面には4分割のヘラ磨きが施される。358は土師質土器碗。359は十瓶山窯系須恵器鉢。360～362は亀山窯系須恵器甕。上下に拡張した口縁端部をもち、頸部外面に縦位の粗いハケ目、体部外面に格子叩き目を施す。荻野繁春編年V～VII期(14世紀前葉～15世紀後葉)に該当しよう。363～371は肥前系陶器皿。口縁部が内湾する363～367と、溝縁をなす368・369の2者がある。見込みを確認できるものは全て砂目積である。釉は灰釉(透明釉)を主体とするが、371のように灰釉と鉄釉を掛け分けたもの、内面に鉄絵による草花文状の施文をする365・367、界線を施す366がある。372は肥前系陶器碗。高台内に「丸に大」の墨書が見られる。見込みに砂目積が残る。373は瀬戸美濃系陶器灰釉皿。374は肥前系陶器碗。内外面ともに藁灰釉を施すが焼成不良である。



398～401 SD3042  
402・403 SD3043

第165図 3-3区 SD3042 SD3043 出土遺物



第166図 3-4区 SD3044 平・断面図

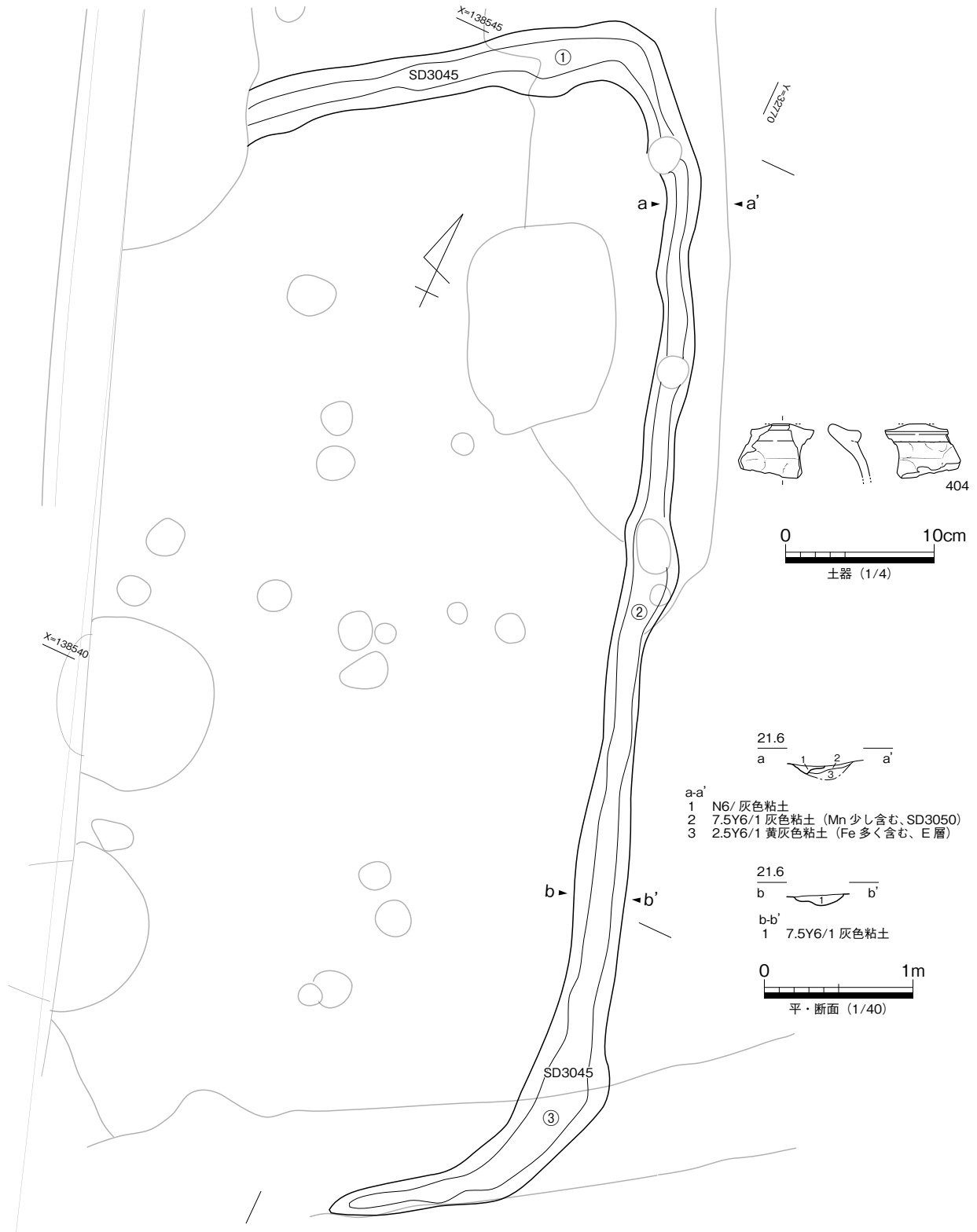
大きく欠損するが、それ以外の目立った欠損はない。凝灰岩の中に混入する礫は径5～10mm程度である。398・399は角礫凝灰岩(天霧石)の石臼。398は芯棒孔、芯棒孔を中心に下臼のふくみが確認できる。2分の1程度破損しており、下臼のふくみ、外縁の一部に煤が付着する。399は石臼片。上下面、外周面、断面片側に煤の付着、被熱痕を確認することができる。激しく破損しており上臼か下臼の判別

375は肥前系陶器鉢。376は備前焼播鉢底部片。377は備前焼甕。378は備前焼大皿。高台は貼り付けで、見込みに胡麻と牡丹餅が交互に見られる。379は中国産白磁Ⅳ類(大宰府分類)(山本2000)。380は肥前系磁器鉢で、高松城様相3頃であろう。381はくすんでにじむ呉須から中国産青花皿と見るが、透明な釉調からあるいは肥前系磁器の可能性もある。382は中国産白磁碗Ⅳ類(大宰府分類)。見込みに沈線による界線が施される。383は丸瓦。焼成は土師質である。384は平瓦。384の凸面には1.5cm角の粗い斜格子叩き目が見られる。須恵質である。385は平瓦で、凹面の糸切り痕、凸面の縄叩き目、側縁の端部は、丁寧なナデ調整により消去される。焼成は堅緻な須恵質であり、古代前期の所産であろう。387は流紋岩製の砥石。面として4面ともに使用されていた痕跡が残る。先端にむかってやや薄くなるように加工する。388は赤色チャート製の火打石。両側面にツブレはあるものの、現存長が1.8cmと小さいため、火打石の剥片の可能性はある。389～394はサヌカイト製の火打石。389は使用痕跡が確認できる個所が少ない。390は一片のみに使用痕跡が集中して残る。391・392は火打石の周縁部を囲うように使用痕跡が確認できる。393の使用痕跡は確認できるものの乏しい。片面には未加工の面が残る。394は一部に加工痕跡が残るが、加工後の石面の風化具合が異なり、幾度か使用を試みた可能性がある。395～397は角礫凝灰岩(天霧石)の五輪塔部材。395は地輪。下面に刳り込みを施す。地輪の幅が20.8cmであり、天霧石製の五輪塔としては小型のものである。396は空輪。397は火輪。一部が

はつかない。400 はガラス質滓。一部に強い熱影響を受けてガラス質化・還元化した部分が認められる。この遺物に関しては化学分析を行っており、分析結果は第 4 章第 8 節に掲載した。401 は板材。

402・403 は SD3043 から出土した。402 は土師質土器鍋。体部外面に煤が付着する。403 は丸瓦。

黒色土器や須恵器など中世前期頃の遺物は遺存状況が悪く細片である。したがってこれらは、直接的に遺構の埋没時期を示すものではない。肥前系陶器が多いことを踏まえると 17 世紀前半～中葉が最終



第 167 図 3-3 区 SD3045 平・断面図

埋没時期を示していると考えられよう。また中世後期の亀山系須恵器や土師質土器足釜の存在から、14～15世紀にまで溝の開削時期が遡る可能性がある。(溝上)

### 3-4 区 SD3044 (第 166 図)

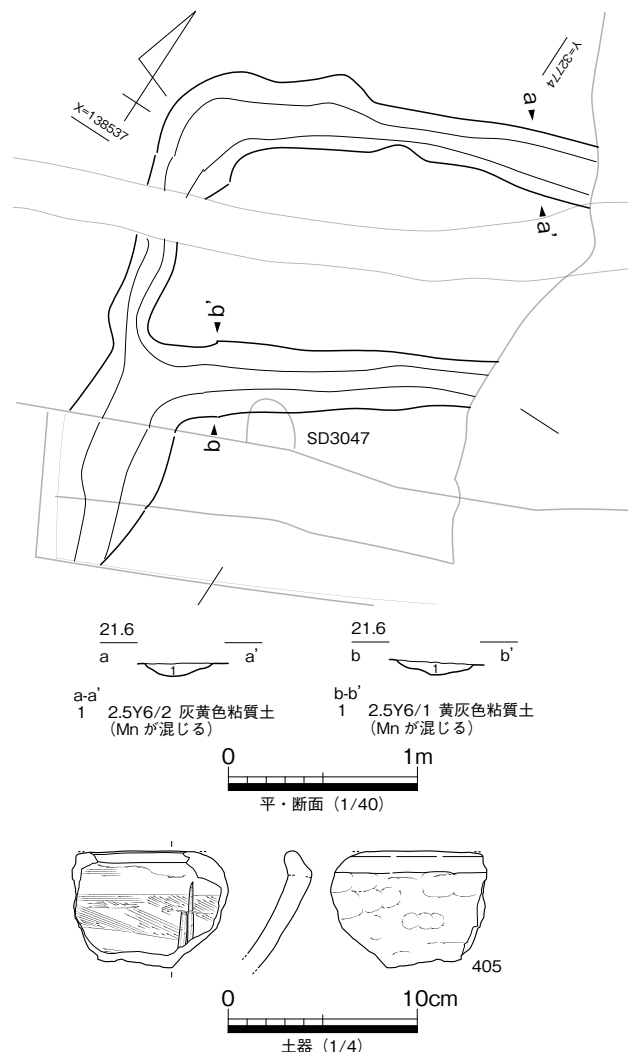
3-4 区の中央からやや東寄りで見出した南北溝である。北端は 3-4 区北側拡張区で西に屈曲する。南端は調査区外へ延長するが、隣接する調査区からは確認されていない。SP3637、SP3639、SP3642、SP3643 は SD3044 を掘削後に検出した。検出面幅 0.2～0.4m、残存深 0.06m をそれぞれ測り、断面形は皿状を呈する。流路方向は N13.44° W に配され、条里型地割の方向よりやや北へ振れる。溝底面の標高は北端部で 21.30 m 前後、南端部で 21.38 m 前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していた可能性が高い。埋土は単層で褐灰～灰黄褐色シルトが堆積する。

遺物は図示していないが、備前焼片と器種不詳の土師質土器片が数点出土している。出土遺物より、近世以降の遺構と考えられるが、詳細な時期を特定することはできない。(溝上)

### 3-3 区 SD3045 (第 167 図)

3-3 区中央部で見出した溝である。溝は 3-3 区西壁付近を通過していたと推察できるが、SK3028 に切れ西壁付近の溝の流路は確認できない。調査区の中央部付近で南に流路を変えるが、SD1001 と重なる付近で、流路を再度西へ変える。重複関係より SK3028、SP3647、SP3648、SP3685 より先行し、SD1001、SD3050、SP3710 より後出する。検出面幅 0.2～0.32 m、残存深 0.06 m をそれぞれ測り、断面形は浅い皿型を呈する。流路方向は北部の西から屈曲部までは N 54.97° E、南北方向は N16.39° W に配され、条里型地割の方向に概ね合致する。溝底面の標高は SK3028 付近で 21.14 m 前後、SD3046 付近で 21.48 m 前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していた可能性が高い。埋土は単層で灰色粘土が堆積する。

遺物は図示した以外に、土師質土器片と用途不明土器片が 10 点程度出土している。404 は土師質土器足釜ないし把手付鍋の口縁部片である。本書編年 B 期(1-II 型式)に相当する。出土遺物より、中世後期 15～16 世紀頃に位置付けられる。(溝上)



第 168 図 3-3 区 SD3047 平・断面図

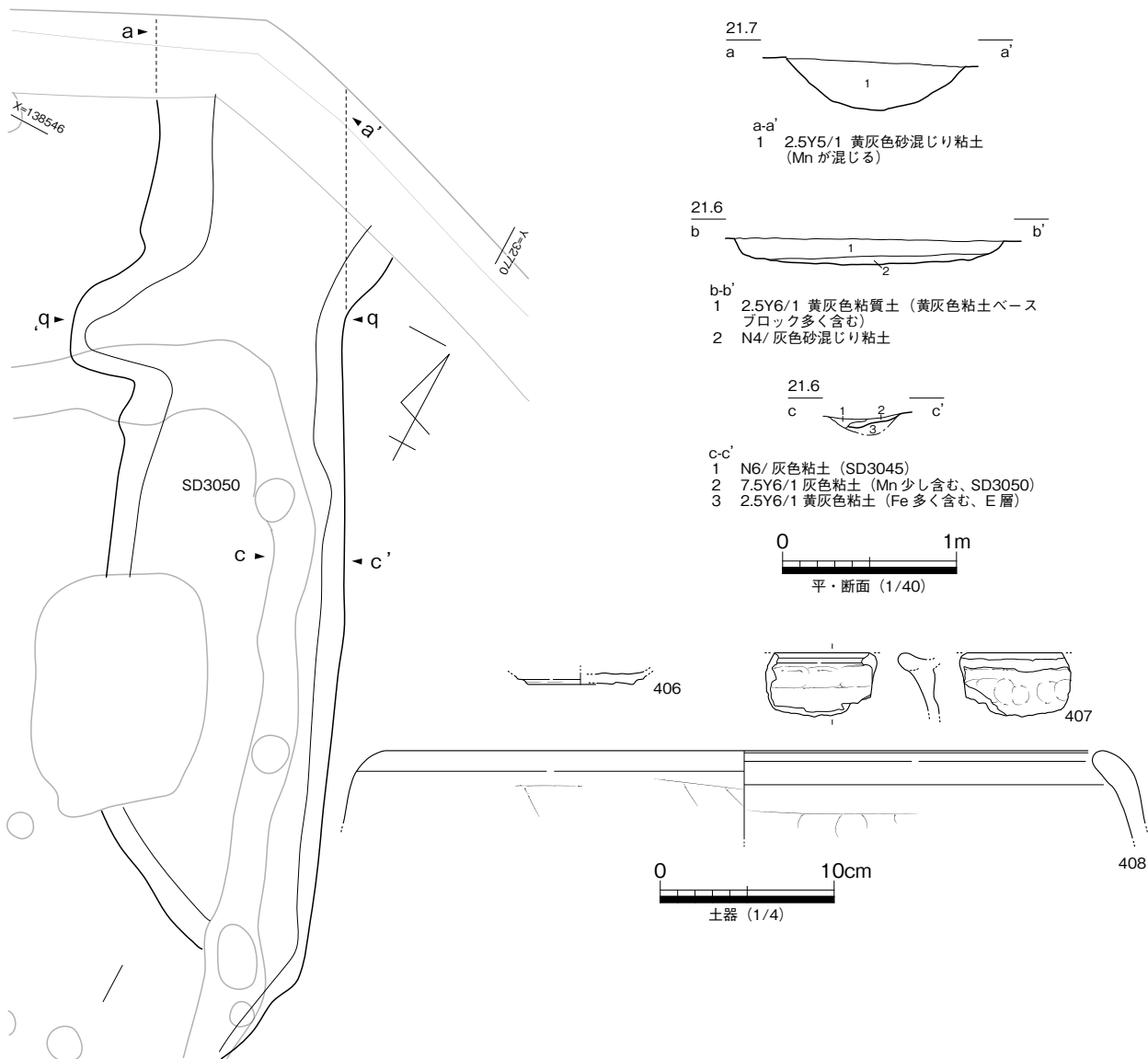
### 3-3区 SD3047 (第168図)

3-3区の南東部で検出した。北端で二股に分かれて東へ直角に屈曲する。重複関係よりSD3042に先行する溝である。検出面幅0.5m前後、残存深0.08mをそれぞれ測り、断面形は皿状を呈する。流路方向は南北方向がN15.7° W、東西方向はN64.43° Eに配され、条里型地割の方向に概ね合致する。溝底面の標高はa-a'断面付近で21.13m前後、b-b'断面の東側SD3042に接する付近では21.09m前後を測る。西側の南北溝の部分では、東に曲がりa-a'につながる部分は21.17m前後、b-b'につながる部分は21.47m前後を測る。高低差より北へ流下し、その流路は溝が曲がるのに従い東へ流下していた可能性が高い。埋土は単層で黄灰～灰黄色粘質土が堆積する。

遺物は図示した以外に播鉢等の土師質土器片が5点程度出土している。405は土師質土器播鉢。口縁部は内側に屈曲しており、外端面はナデにより明確な面をなす。本書編年B～C期(Ⅲ型式)に相当する。SD3042との切り合い関係を踏まえると中世後期、おそらく15～16世紀の遺構と考えられる。(溝上)

### 3-3区 SD3050 (第169図)

3-3区北東部で検出した南北溝である。北端は調査区外へ延長し、隣接する調査区では確認できない。



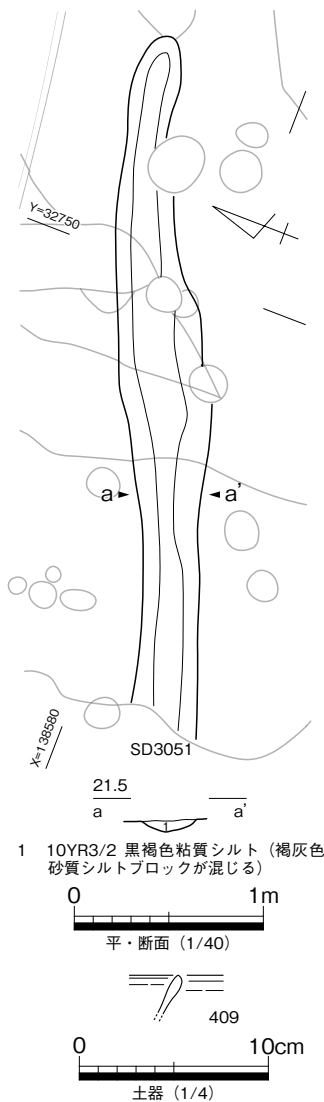
第169図 3-3区 SD3050 平・断面図

南端は調査区内において溝の延長部が確認できなくなる。重複関係より SD3045、SK3024、SP3647、SP3748 に先行し、SD3054、SP3710 に後出する。検出面幅 1.56m、残存深 0.16 ~ 0.26 m をそれぞれ測り、断面形は概ね皿状を呈する。流下方向は N26.57° W に配され、条里型地割の方向に概ね合致する。溝底面の標高は北端部で 21.36 m 前後、南端部で 21.44 m 前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していた可能性が高い。埋土は記録位置により相違を認めるが、単層もしくは 2 層に細分され主に黄灰色の粘質土や灰色粘土が堆積していた。

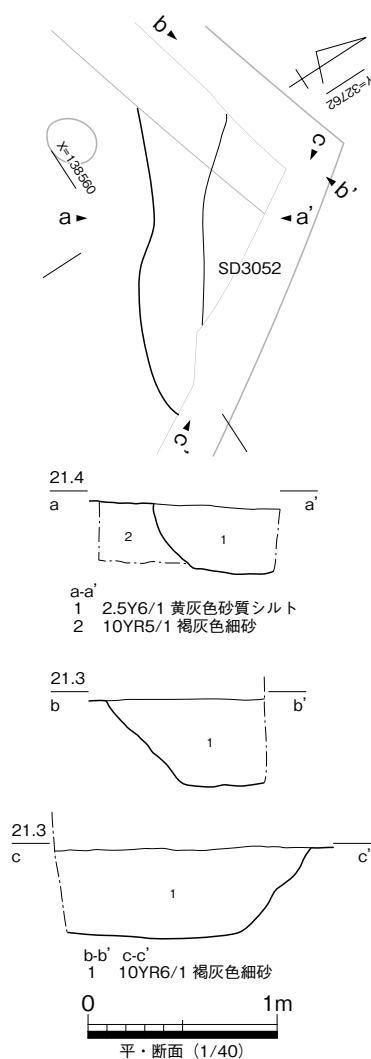
遺物は図示した以外に、土師質土器の小片、備前焼片が 10 点程度出土している。406 は土師質土器皿。底部外面は回転ヘラ切り。407 は土師質土器の把手付鍋。口縁部の一部が欠損している。408 は土師質土器火鉢。口縁部は磨滅している。切り合い関係から中世後期の遺構であろう。(溝上)

### 3-4 区 SD3051 (第 170 図)

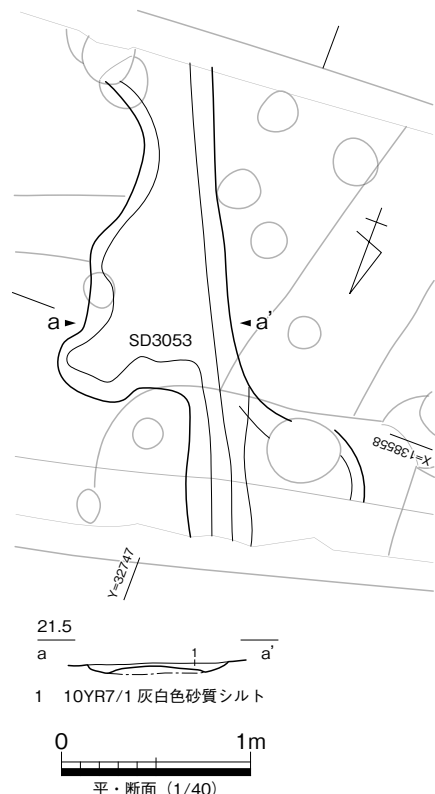
3-4 区の遺構西部で検出した東西溝である。東端は遺構内で途切れ、西端は SD3053 に切られる。重複関係より SD3056、SD3057、SD3059、SP3704、SP3745 より後出し SD3053、SP3687、SP3692、SP3704 より先行する。検出面幅 0.36 ~ 0.42m、残存深 0.06m をそれぞれ測り、断面形は皿状を呈する。流下方向は N68.63° E に配され、条里型地割の方向に概ね合致する。溝底面の標高は東端部で 21.33 m



第 170 図 3-4 区 SD3051  
平・断面図、出土遺物



第 171 図 3-4 区 SD3052  
平・断面図



第 172 図 3-4 区 SD3053  
平・断面図

前後、西端部で 21.35 m 前後をそれぞれ測り、高低差はほとんどない。埋土は黒褐色粘質シルトの単層であった。

遺物は図示した以外に、土師質土器の小片が 10 点程度出土している。409 は土師質土器杯の口縁部。内面は磨滅している。出土遺物より中世前期、12～13 世紀頃の時期が想定される。(溝上)

### 3-4 区 SD3052 (第 171 図)

3-4 区北隅で検出した溝である。南側の掘方しか検出しておらず、溝の全形は不明である。検出面幅 0.8m 以上、残存深 0.44m 前後をそれぞれ測り、断面形は逆台形状を呈する。流下方向は N57.93° E に配され、条里型地割の方向に合致しない。溝底面の標高は溝の中央部で 20.85 m 前後を測るが、部分的な検出のため流路方向までは確定できない。埋土は褐灰色系砂質シルト～細砂の単層であった。

遺物は図示していないが、土師質土器の小片、陶器片、磁器片(青磁片か)が数点出土している。出土遺物より近世以降の遺構と考えるが、詳細な時期は不明である。(溝上)

### 3-4 区 SD3053 (第 172 図)

3-4 区西部で検出した南北溝である。流域は不定形で、南北端とも調査区外へ延長する。重複関係より SP3696 より先行し、SK3031、SD3051、SD3058、SP3706、SP3759、SP3738 より後出する。検出面幅 0.38～0.8 m、残存深 0.06 m をそれぞれ測り、断面形は概ね皿状を呈す。流下方向は N35.1° W に配され、条里型地割の方向に概ね合致する。溝底面の標高は北端部で 21.44 m 前後、南端部で 21.39 m 前後をそれぞれ測り、高低差より南へ流下していた可能性が高い。埋土は灰白色砂質シルトの単層である。

遺物は出土しておらず、切り合い関係より 13 世紀以降に位置付けられるものの、詳細な時期を特定することはできない。(溝上)

### 3-4 区 SD3055 (第 173 図)

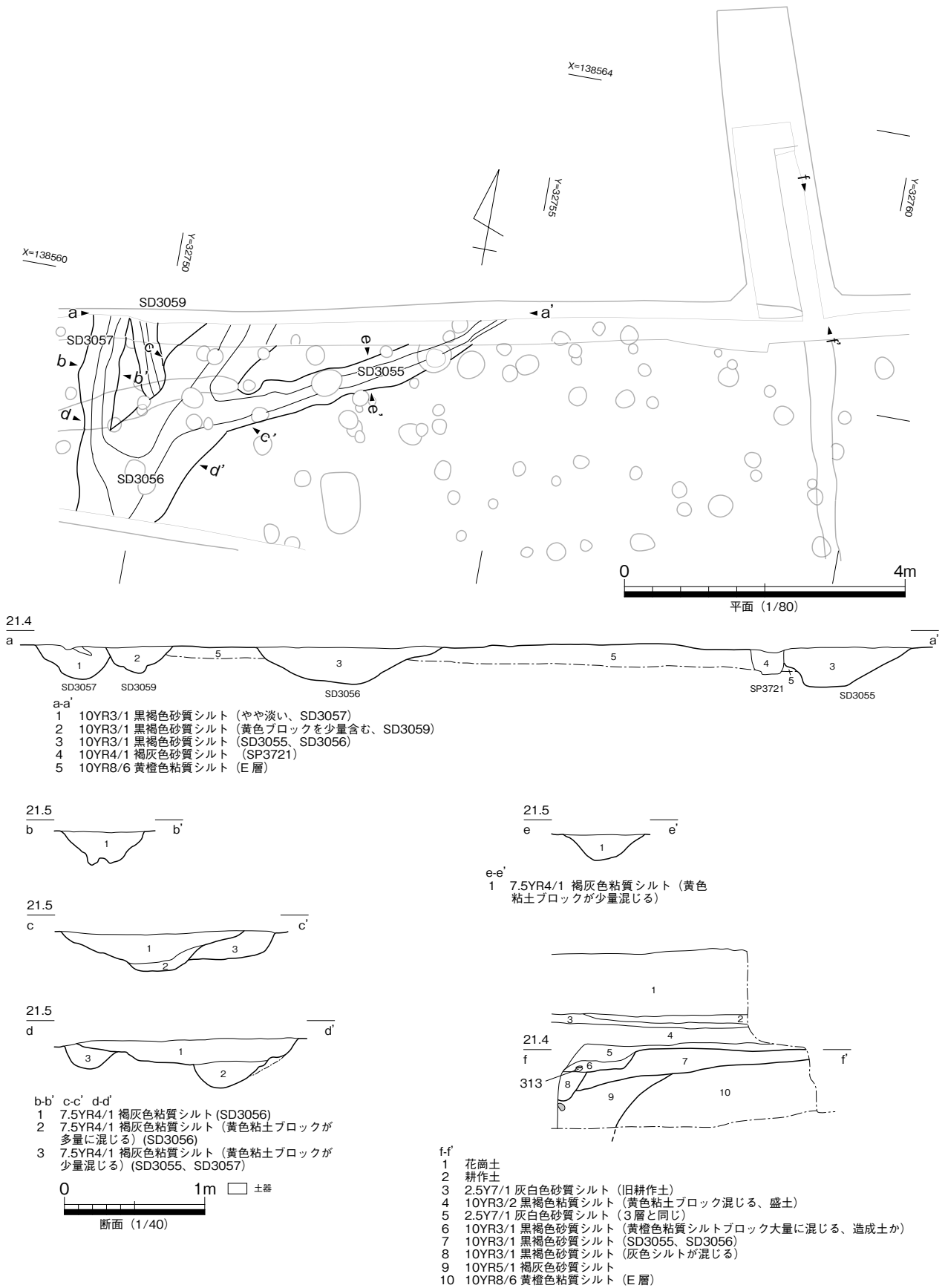
3-4 区西部で検出した東西溝である。東端は調査区外へ延長し、西端は SD3056 に切られる。重複関係より、SP(3671・3673・3675・3676・3683・3721) より後出し、SP3722 より先行する。検出面幅 0.42m 前後、残存深 0.18 m をそれぞれ測り、断面形は概ね逆台形状を呈する。流下方向は N64.59° E に配され、条里型地割の方向に合致しない。溝底面の標高は東端部で 21.39 m 前後、SD3056 と合流する西端部で 21.195 m 前後をそれぞれ測り、高低差より西へ流下していた可能性が高い。埋土は黒褐～褐灰色砂質シルトの単層であった。

遺物は出土しておらず、SD3056 に切られることから 13 世紀以前に位置付けられるものの、詳細な時期を特定することはできない。(溝上)

### 3-4 区 SD3056 (第 173 図)

3-4 区西部で検出した南北溝である。南北端ともに調査区外へ延長する。重複関係より SD3059、SD3057、SD3055、SP3761、SP3751 より後出し、SD3051、SP(3684・3686・3687・3688・3689・3690・3691・3692・3704) より先行する。検出面幅 1.0～1.6 m、残存深 0.24～0.36m をそれぞれ測り、断面形は概ね逆台形状を呈する。流下方向は N19.71° E に配され、条里型地割の方向に合致しない。溝底面の標高は北端部で 21.13 m 前後、南端部で 21.12 m 前後をそれぞれ測り、高低差より南へ流下していた





第173図 3-4区 SD3055 SD3056 SD3057 SD3059 平・断面図

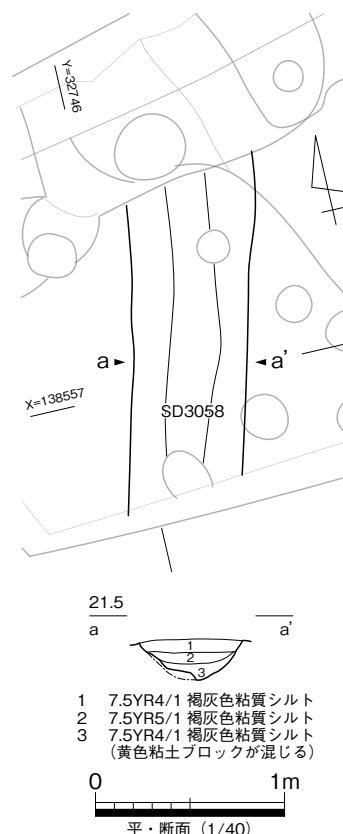
可能性が高い。埋土は記録位置により相違を認めるが、単層もしくは2層に細分され主に黒褐色砂質シルトや褐灰色粘質シルトが堆積していた。

遺物は出土しておらず、SD3051 に切られることから13世紀以前に位置付けられるものの、詳細な時期を特定することはできない。(溝上)

### 3-4区 SD3057 (第173図)

3-4区西部で検出した南北溝である。北端は調査区外へ延長し南端はSD3056に切られる。重複関係よりSD3051、SD3056、SP3692より先行し、SD3059より後出する。検出面幅0.38～0.56m、残存深0.18～0.22mそれぞれ測り、断面形はU字状を呈する。流路方向はN4.09°Wに配され、条里型地割の方向に合致しない。溝底面の標高は北端部で21.16m前後、中間部で21.15m前後、SD3051と合流する南端部で21.18m前後をそれぞれ測り、底面の標高は安定しない。周辺の溝の流下方向を考慮すると南に流下していたと想定する。埋土は黒褐～褐灰色シルトが単層で堆積する。

遺物は図示していないが、器種不詳の土師質土器の底部片のみが出土している。SD3051に切られることから、13世紀以前に位置付けられるものの、詳細な時期を特定することはできない。(溝上)

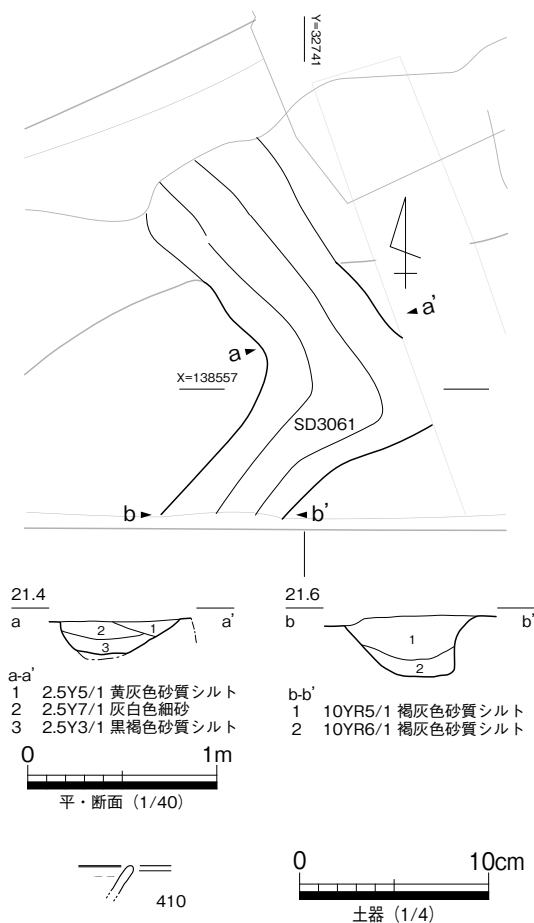


第174図 3-4区 SD3058 平・断面図

### 3-4区 SD3058 (第174図)

3-4区西端部で検出した南北溝である。北端はSK3031に切れ、南端は調査区外へ延長する。重複関係より、SD3053、SP3740、SP3741より先行する。検出面幅0.6m、残存深0.22mをそれぞれ測り、断面形はU字状を呈する。流下方向はN12.45°Eに配され、条里型地割の方向に合致しない。溝底面の標高は北端部で21.19m前後、南端部で21.20m前後をそれぞれ測り、高低差があまりない。埋土は3層に細分化されているが、概ね褐灰色粘質シルトが堆積する。

遺物は出土しておらず、SK3031に切られることから13世紀以前に位置付けられるものの、詳細な時期を特定することはできない。(溝上)

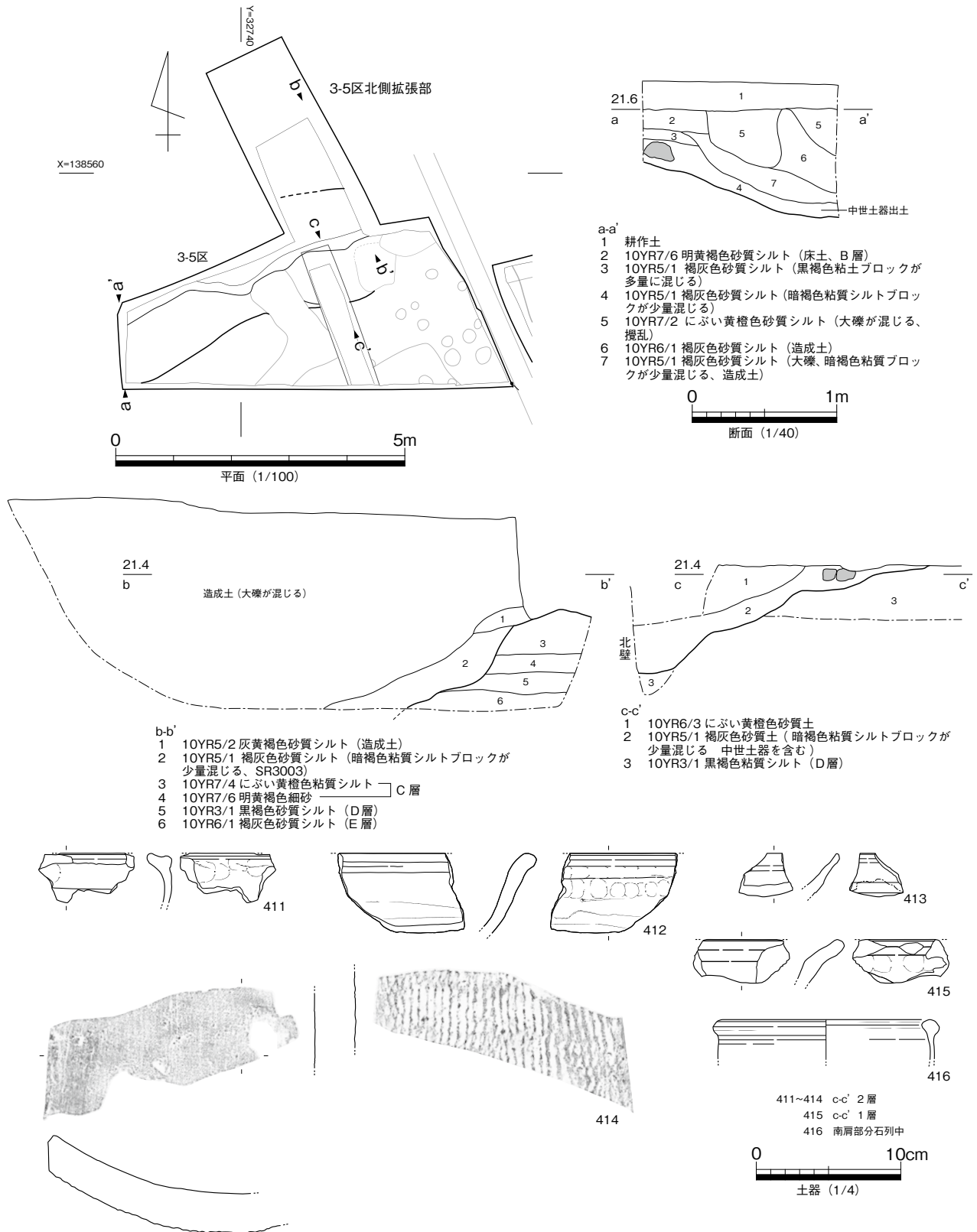


第175図 3-5区 SD3061 平・断面図、出土遺物

### 3-4区 SD3059 (第173図)

3-4区西部で検出した南北溝である。北端は調査区外へ延長し南端はSD3056に切られる。重複関係より

SD3051、SD3056、SD3057、SP3704 より先行する。検出面幅 0.36m、残存深 0.18m をそれぞれ測り、断面形は U 字状を呈する。流下方向は N21.16° W に配され条里型地割の方向に概ね合致する。溝底面の標高は北端部で 21.22 m 前後、SD3056 と合流する南端部で 21.26 m 前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していた可能性が高い。埋土は黒褐色砂質シルトの単層であった。



第176図 3-5区 SR3003 平・断面図、出土遺物

遺物は出土しておらず、SD3056に切られることから13世紀以前に位置付けられるものの、詳細な時期を特定することはできない。(溝上)

### 3-5区 SD3061 (第175図)

3-5区西部で検出した溝である。溝は中央部で屈曲し、北部と南部が調査区外へ延長する。重複関係よりSR3003より後出する。検出面幅0.5～0.66m、残存深0.18m前後をそれぞれ測り、断面形は概ね逆台形状を呈する。流下方向は北部から南東方向へはN36.34°W、屈曲点から南西方向へはN39.81°Eに配され、条里型地割の方向に概ね合致する。溝底面の標高は北端部で21.22m前後、SD3056と合流する南端部で21.26m前後をそれぞれ測り、高低差より北へ流下していた可能性が高い。埋土は記録位置により相違を認めるが、2層もしくは3層に細分され主に灰白～褐灰色砂質シルトや黒褐色砂質シルトが堆積していた。

遺物は図示した以外に、青磁、土師質土器片が10点程度出土している。410は土師質土器杯。全体的に磨滅している。SR3003との切り合い関係より近世の遺構の可能性を想定する。(溝上)

## ⑤自然河川

### 3-5区 SR3003 (第176図)

3-5区北部で検出した大東川の旧流路と考えられる自然河川である。西部は調査区外へ延長し、東部は攪乱によって延長が確認できない。SR3003が東部で確認できるのは3-5区の北側拡張部東壁の壁断面であるが、流路の大部分が造成土によって消失しており北側への延長も確認できない。重複関係よりSD3061より先行する。検出面幅2.0m以上、残存深約0.34m以上をそれぞれ測り、断面形は概ね逆台形を呈する。流下方向はN63.31°Eである。溝底面の標高は東端部で20.47m前後、西端部で20.96m前後をそれぞれ測り、高低差より東へ流下していた可能性が高い。埋土は記録位置によって相違を認めるが、1層もしくは3層に細分され褐灰色砂質シルトが堆積する。砂質シルト中の暗褐色粘質シルトブロックの混入量によって分層を行っている。また、最下層から中世土器が出土している。

遺物は図示した以外にも、灰色砂質土層から陶器片(備前焼、陶器片)、土師質土器足釜脚部・搦鉢、灰色砂質土層下部から土師質土器足釜脚部が80点程度出土している。411は土師質土器の把手付鍋。本書編年B期(1-Ⅲ型式)に相当する。412・415は土師質土器の鍋口縁部。口縁部から底部まで、各部位間の屈曲が緩くなった浅い全形を持つ。体部外面にすすが付着する。413は肥前系陶器皿。414は平瓦。古代の所産であろう。416は肥前系陶器の鉢。内外面ともに施釉する。出土遺物より、17世紀代の遺構の可能性を想定する。(溝上)

#### 4 柱穴（第177～185図、第2・3表）

柱穴は、第1遺構面において約820基を検出した。大部分は残存深10cm以下であり図示困難なことから、本報告では比較的残存深の深いもの、遺物の出土したものを中心に掲載した。前述のSA3201～3207、SB3201～3205以外にも柵列・建物等が存在した可能性があるが、現状では平面図・写真からの復元は困難である。

埋土は灰白色シルト主体と黄灰色砂質シルトを主体とするものに大別でき、混入するシルトブロックの特徴からさらに2～3に細分可能である。

遺物は、建物等を構成しない柱穴出土の遺物のうち、特に必要なもののみを掲載した。

個々の遺構の詳細は煩雑となるため第2・3表へ整理し、以下では出土遺物のみ詳細を記載する。(益崎)

#### 2区柱穴

417は2-1区SP2015出土の土師質土器皿。「口縁部→体部ナデ」技法に伴い、先端の尖る口縁部直下に体部の回転ナデが被るように接する特徴的な形態を持つ。浜ノ町遺跡での編年を援用すると、15世紀(6～7段階)頃と考えられる。418・419は2-1区SP2013から出土した。418は土師質土器杯。底部は回転ヘラ切り。佐藤編年中世Ⅱ-1～2期(12世紀後半～13世紀初頭)。419は吉備系土師質土器椀。草戸千軒町遺跡(鈴木1996)でのⅠ期後半(13世紀後半頃)に相当する。(蔵本)

#### 3区柱穴

420は3-1区SP3245出土の弥生土器の甕底部である。全体的に磨滅しているが、外面はタタキ目、内面は板ナデが確認できる。421は3-1区SP3339出土の肥前系陶器椀である。高松城様相1～2、17世紀前葉のものと考えられる。422は3-1区SP3384出土の土師質土器足釜口縁部片である。口縁部はナデ、体部外面は指オサエ後ナデ、内面はハケ目で調整する。423は3-1区SP3437出土の土師質土器杯である。424は3-1区SP3544出土の肥前系陶器皿である。内面に鉄絵の界線を伴う。(溝上)

425は3-2区SP3010出土の土師質土器杯の口縁部片。426は3-2区SP3034出土、427は3-2区SP3054出土の土師質土器である。ともに杯の底部片で、底部は回転ヘラ切りである。428は土師質土器播鉢または捏鉢の口縁部片。口縁端面は回転ナデ調整により凹面をなす。取り上げ時の錯誤があるが、3-2区SP3083またはSP3084からの出土と考えられる。429は3-2区SP3100、430は3-2区SP3141出土の土師質土器播鉢である。口縁端部が丸く、端部下に端面状の弱い凹面をもつ。本書編年のB～C期(Ⅲ型式)に相当する。431は3-2区SP3143出土の鉄製毛抜き。432は3-2区SP3143出土の土師質土器杯の底部片で、底部は回転糸切りである。433は3-2区SP3144出土で土師質土器足釜口縁部の小片である。剥落が激しいが口縁端部に面をもつようにみえる。434は3-2区SP3183出土で肥前系陶器皿。435は3-2区SP3195出土の土師質土器皿である。底部は回転ヘラ切りである。436・437は3-2区SP3203出土の土師質土器杯で、外傾度の強い口縁部をもち、起伏ある器面であることから、佐藤編年中世Ⅱ-1期(12世紀後半)の所産と見られる。438は3-2区SP3211出土の土師質土器足釜の口縁部片である。口縁端部は丸く、鏝部は短い。断面の観察から、体部-口縁部の成形ののちに、粘土紐を接合して鏝部を成形している。(益崎)

439は3-4区SP3633出土の土師質土器の壺底部である。体部外面は磨滅しているものの、板ナデの跡が確認できる。体部内面はナデによる調整が確認できる。440は3-4区SP3690出土の土師質土器の

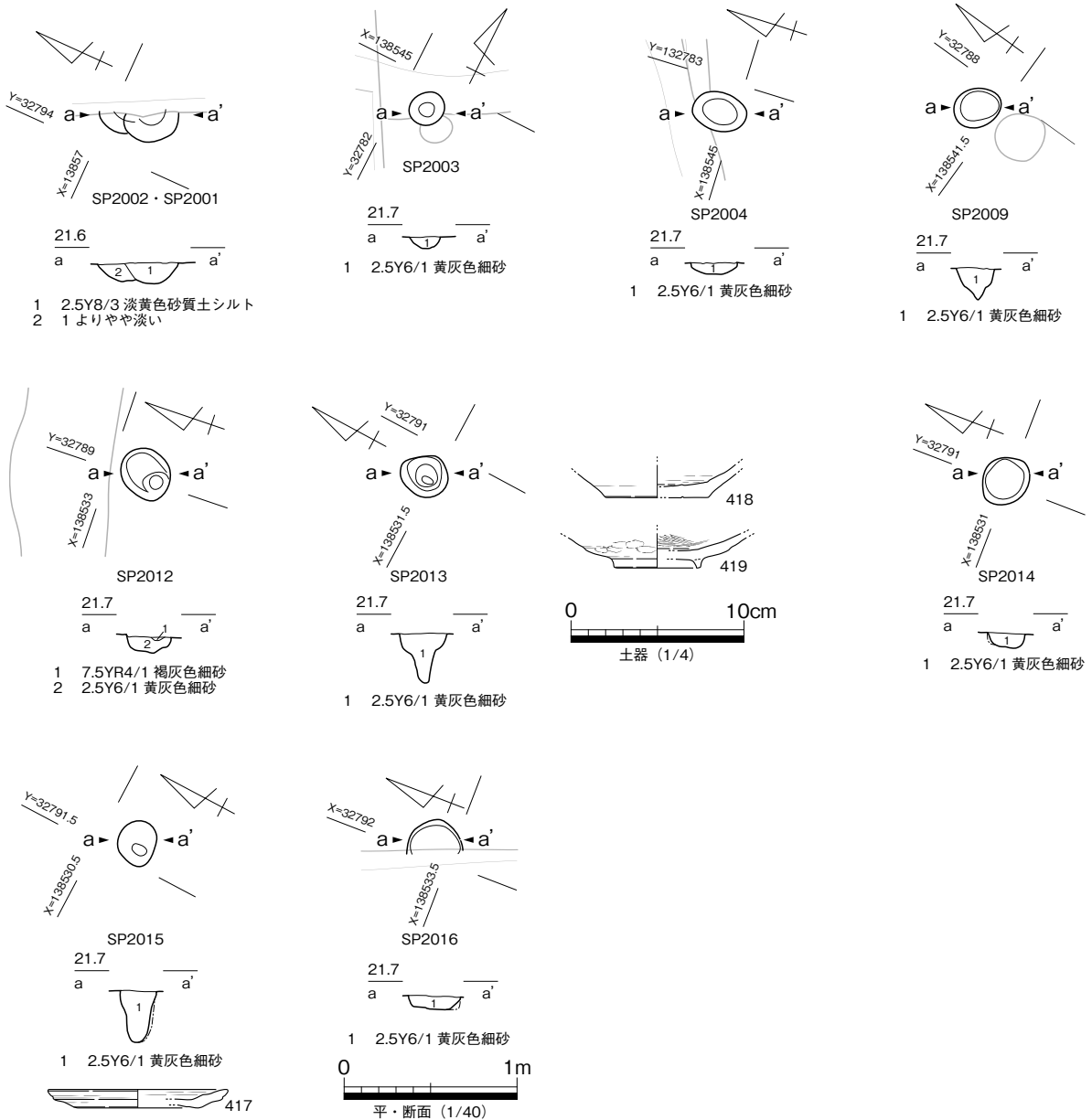
第2表 2・3区ピット一覧

区名	ピット番号	平面形	規模 (cm) (長軸×短軸)	深さ (cm)	掲載遺物	その他の出土遺物	その他
2-2	SP2001	円形か	31～	12		なし	SP2002より後出
2-2	SP2002	円形か	15～	10		なし	SP2001より先行
2-1	SP2003	円形	20	6		なし	
2-1	SP2004	楕円形	32×22	6		なし	
2-1	SP2009	円形	30	18		なし	
2-1	SP2012	円形	36	10		土師質土器杯片	
2-1	SP2013	円形	29	30	418 419		
2-1	SP2014	円形	32	10		なし	
2-1	SP2015	円形	28	30	417		
2-1	SP2016	円形か	31～	8		なし	
3-1	SP3243	楕円形	32×24	40		土器小片	
3-1	SP3245	円形	28	46	420	土器小片	
3-1	SP3248	円形	30	34		土師質土器小片	
3-1	SP3261	円形	20	10		土師質土器小片	
3-1	SP3264	楕円形か	30×24	26		須恵器甕片	
3-1	SP3266	楕円形	28×20	12		土師質土器小片	
3-1	SP3275	円形	32	5		なし	SP3276より後出
3-1	SP3276	円形	20	4		なし	SP3275より先行
3-1	SP3279	円形	24	28		土師質土器小片	
3-1	SP3284	円形	32	56		土器小片 焼土塊	
3-1	SP3291	円形	28	6		土器小片	
3-1	SP3292	楕円形	36×32	28		土師質土器小片	
3-1	SP3293	円形	32	40		土器小片	
3-1	SP3294	円形	24	36		土師質土器杯片	
3-1	SP3297	円形	26	20		土師質土器杯片	
3-1	SP3299	円形	22	44		なし	
3-1	SP3300	円形	24	30		土器小片	SP3303より後出
3-1	SP3303	円形か	20×8	20		なし	SP3300より先行
3-1	SP3304	楕円形	38×32	46		土器小片	
3-1	SP3310	楕円形	28×18	6		土器小片	
3-1	SP3312	円形	20	36		なし	
3-1	SP3319	楕円形	26×20	14		なし	
3-1	SP3323	円形	32	12		土師質土器杯片	
3-1	SP3333	円形	14	6		なし	
3-1	SP3336	円形	28	20		土器小片	
3-1	SP3338	楕円形	32×26	52		土器小片	
3-1	SP3339	円形	44	12	421	土師質土器杯小片	
3-1	SP3346	円形	22	12		土器小片	
3-1	SP3347	円形	26	6		なし	
3-1	SP3351	円形	30	2		土器小片	
3-1	SP3352	円形	32	34		土師質土器杯底部	
3-1	SP3354	円形	20	26		土器小片	
3-1	SP3355	円形	32	9		なし	
3-1	SP3360	楕円形	38×32	2		なし	
3-1	SP3384	円形	28	38	422	土師質土器小片	
3-1	SP3389	楕円形	30×20	26		土器小片	
3-1	SP3403	楕円形	30×24	16		なし	
3-1	SP3409	円形	28	32		なし	
3-1	SP3421	円形	20	36		土師質土器杯片	
3-1	SP3422	楕円形	40×32	26		土器小片	
3-1	SP3426	楕円形	28×22	32		土器小片	
3-1	SP3432	楕円形	32×24	20		なし	
3-1	SP3435	円形	26	38		土器小片	

第3表 3区ピット一覧

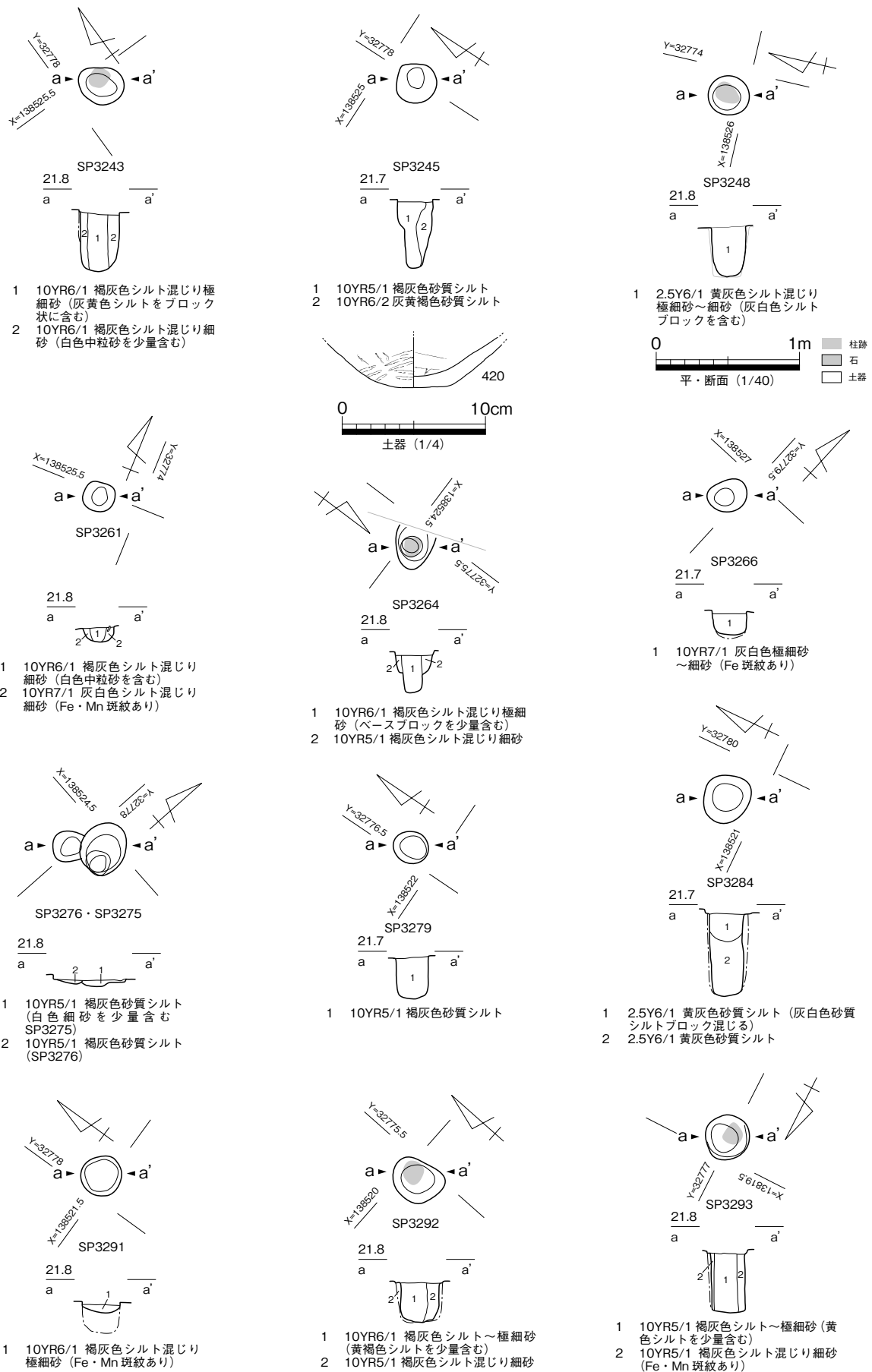
区名	ピット番号	平面形	規模 (cm) (長軸×短軸)	深さ (cm)	掲載遺物	その他の出土遺物	その他
3-1	SP3437	円形	20	16	423	土器小片	
3-1	SP3442	楕円形	30×22	14		なし	
3-1	SP3443	円形	26	30		なし	
3-1	SP3460	円形	30	14		土師質土器小片	
3-1	SP3544	円形	52	12	424	須恵器片	
3-1	SP3545	円形	40	8		なし	
3-2	SP3001	楕円形	26×24	18		土師質土器小片	
3-2	SP3004	円形	32	48		土師質土器小片	
3-2	SP3005	円形	28	20		土師質土器杯底部小片	
3-2	SP3010	円形	22	20	425	土師質土器小片	
3-2	SP3013	円形	28	40		須恵器体部片、土師質土器小片	
3-2	SP3016	楕円形	34×28			弥生土器又は土師器甕片	
3-2	SP3018	円形	30			土師質土器小片	
3-2	SP3019	円形	28	40		なし	
3-2	SP3034	円形	24	28	426	土器小片	
3-2	SP3047	円形	28	36		土師質土器杯小片	
3-2	SP3048	円形	22	50		土師質土器小片	
3-2	SP3053	円形	16	10		なし	
3-2	SP3054	円形	26	34	427	土師質土器小杯片	
3-2	SP3057	楕円形	34×28	30		土師質土器小片	
3-2	SP3066	円形	30	22		土師質土器体部片	
3-2	SP3067	円形	34	42		土師質土器杯小片	
3-2	SP3083	隅丸方形	64	38	428	土師質土器杯小片	SP3084 より後出する
3-2	SP3084	不整円形	48	40	428		SP3083 より先行する
3-2	SP3085	円形	28	44		土師質土器杯底部小片	
3-2	SP3090	円形	30	36		土師質土器小片	
3-2	SP3094	円形	28	34		土師質土器小片	
3-2	SP3098	不整円形	44	28		土器小片	
3-2	SP3100	円形	22	22	429	土師質土器小片	
3-2	SP3130	円形	38	20		土師質土器体部片	
3-2	SP3135	円形	20	44～		木片	
3-2	SP3141	楕円形	40×30	32	430		
3-2	SP3143	楕円形	46×30	10	431 432	土師質土器小片	
3-2	SP3144	円形	40	48	433	土師質土器鉢体部片 土師質土器小片	
3-2	SP3146	楕円形	50～×30～	32		土師質土器小片	
3-2	SP3151	円形	38×36	16		土師質土器体部片 円盤状に整形	
3-2	SP3152	円形	36	34		土師質土器杯底部・鍋小片	
3-2	SP3164	円形	38	54		須恵器体部片	
3-2	SP3165	楕円形	38×32	24		なし	
3-2	SP3170	円形	22	16		なし	
3-2	SP3173	円形	26	50		土器小片	
3-2	SP3179	円形	26	40		土器小片	
3-2	SP3183	円形	22	42	434	土器小片	
3-2	SP3184	楕円形	42×24	20		土器小片	SP3185 より後出する
3-2	SP3085	楕円形	40×20～	24		なし	SP3184 より先行する
3-2	SP3195	円形	12	10	435	土師質土器杯片 須恵器体部片	
3-2	SP3203	円形	24		436 437	土師質土器小片	
3-2	SP3211	円形	20		438		
3-4	SP3633	楕円形	36×22	22	439	土師質土器腕高台部	
3-4	SP3690	円形	32	52	440	土師質土器杯片	
3-4	SP3730	円形	24	7	441	土師質土器体部片	
3-4	SP3732	円形	18	8		土器小片	

灯明皿である。口縁～体部は回転ナデで調整し、底部は静止糸切り。口縁部を中心に煤の付着が認められる。441 は 3-4 区 SP3730 から出土した土師質土器の焙烙 (岡本系) である。口縁部の直径を復元すると約 44cm ある。体部外面には煤が一面に付着する。(溝上)

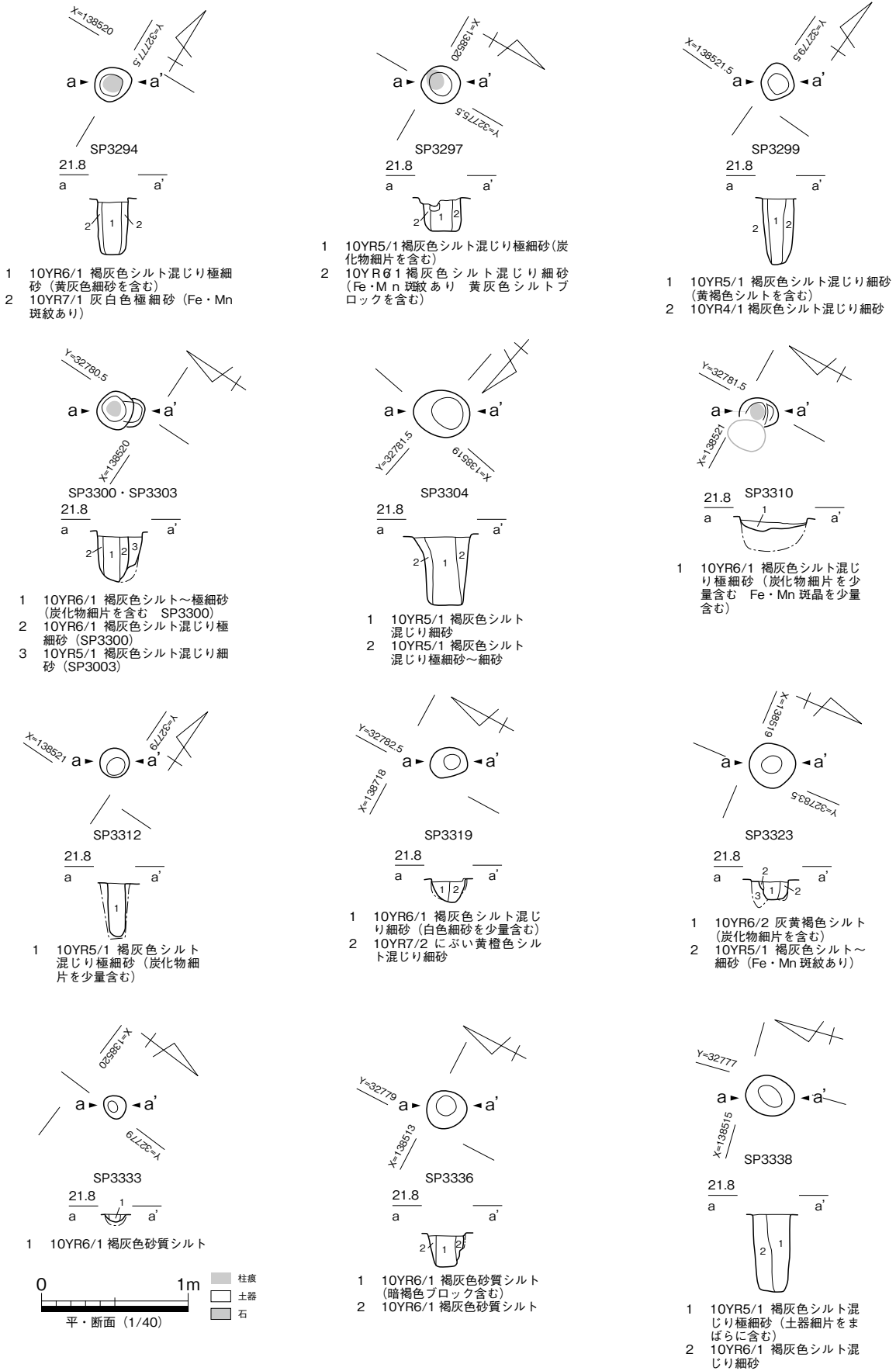


第 177 図 2 区ピット平・断面図

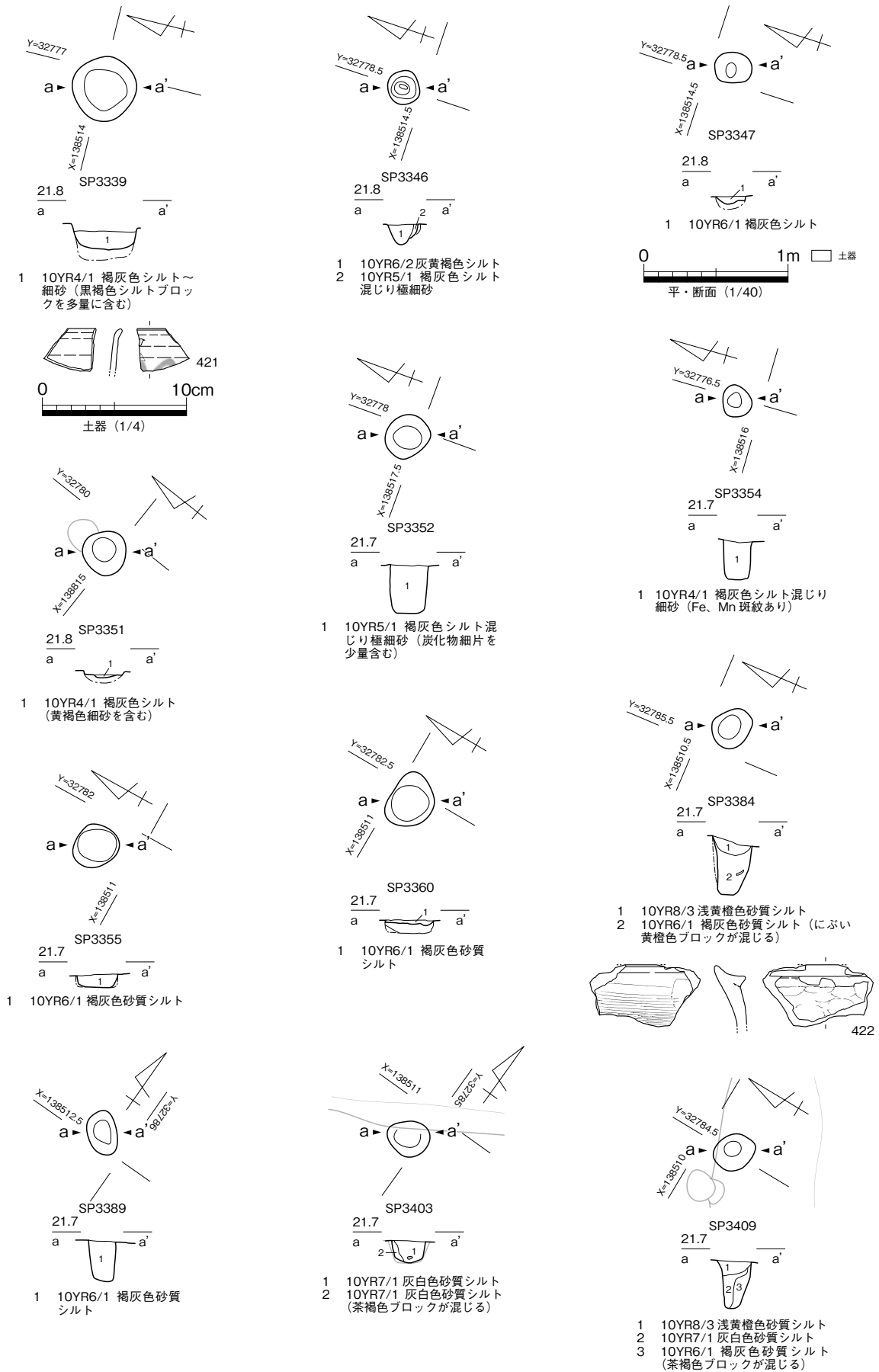




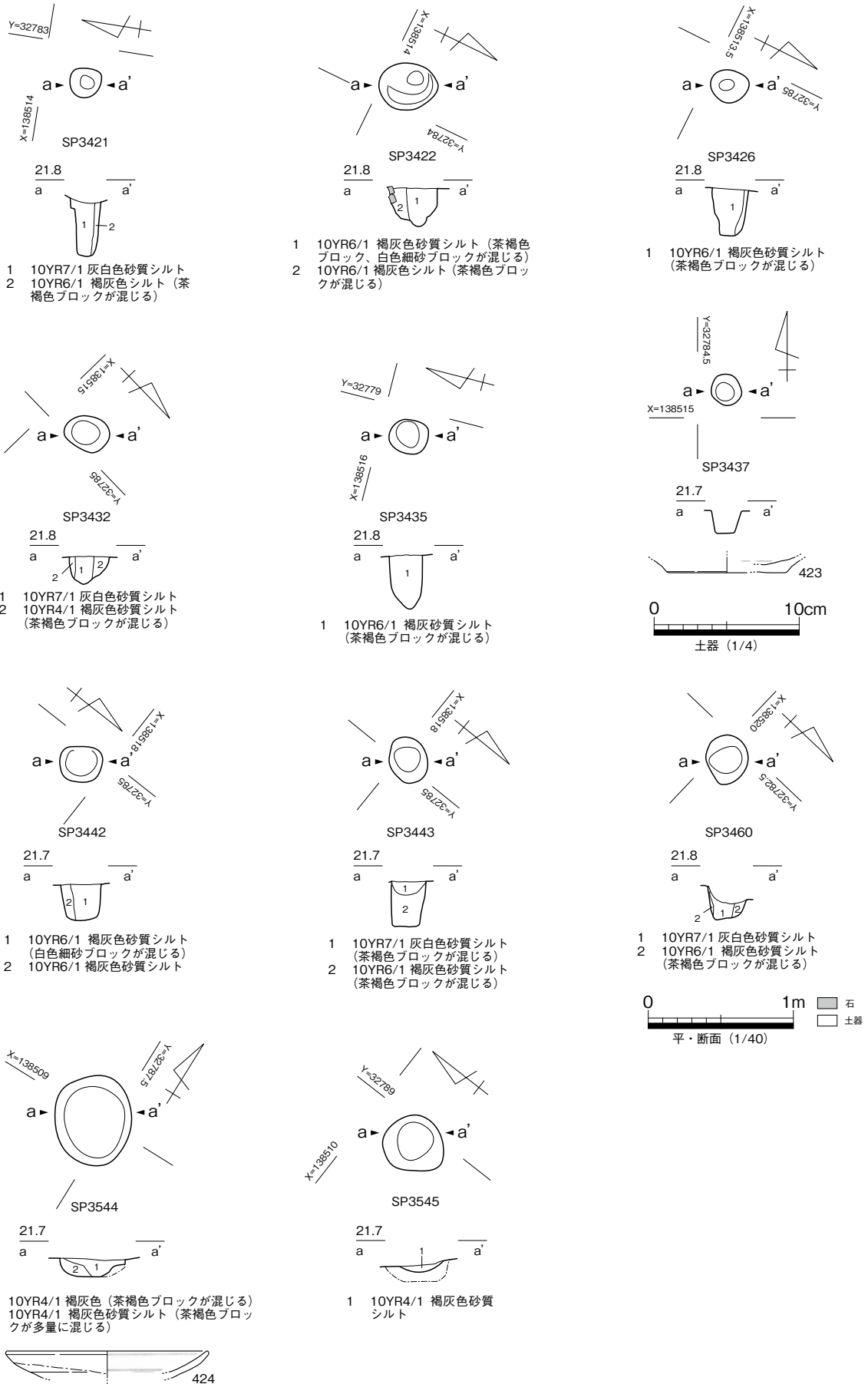
第 178 図 3-1 区 ピット平・断面図 1



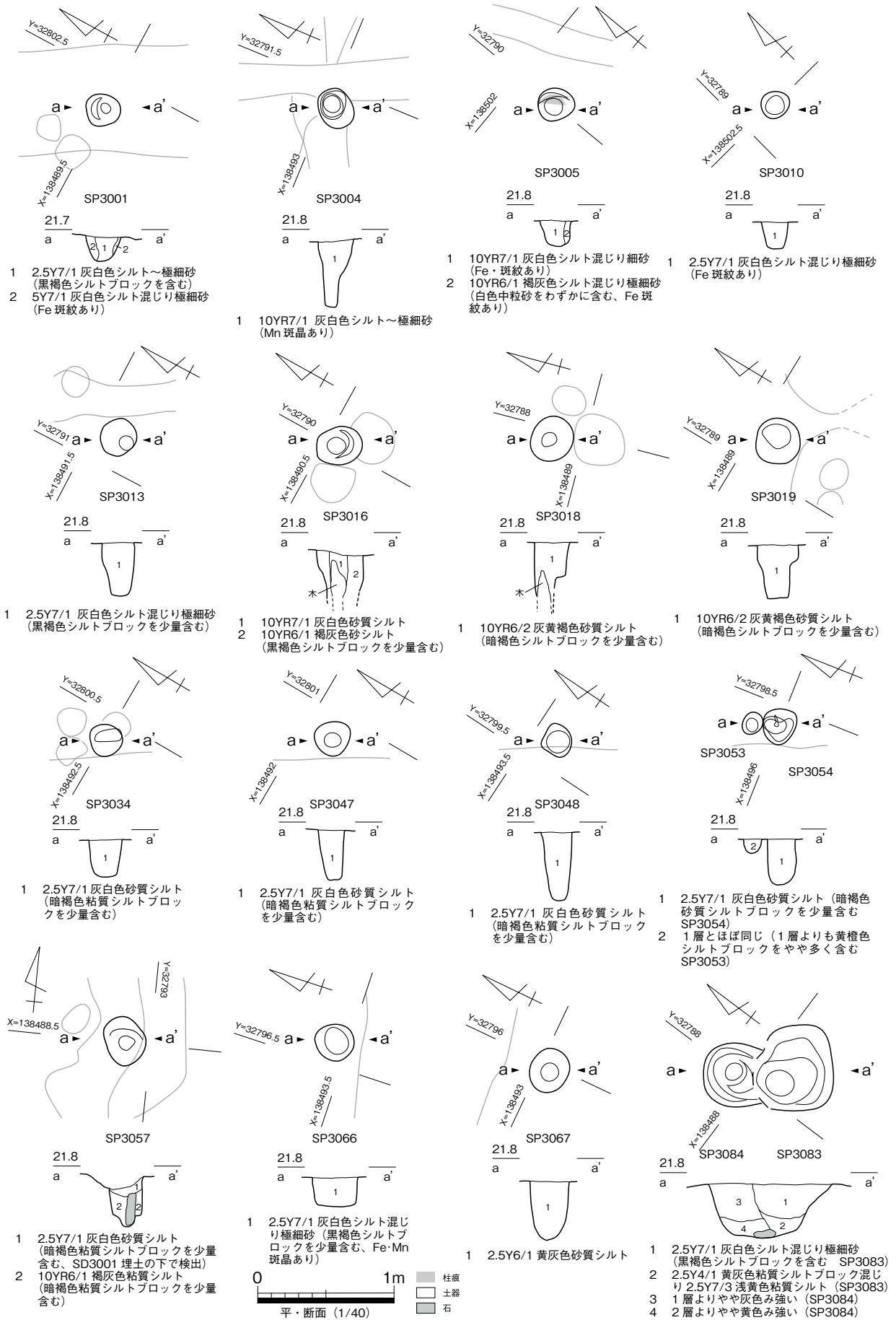
第179図 3-1区ピット平・断面図2



第180図 3-1区ピット平・断面図3

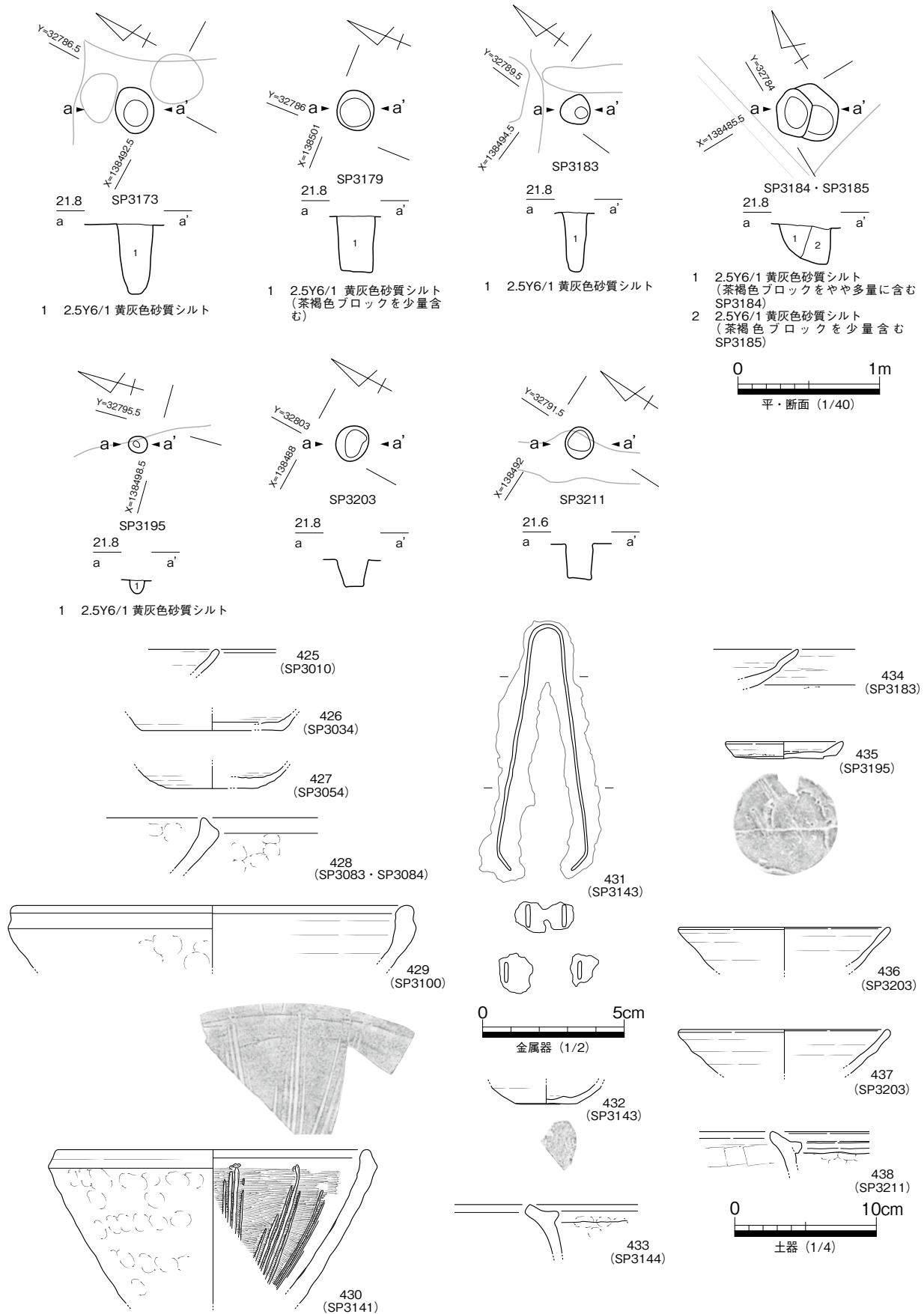


第181図 3-1区ピット平・断面図4

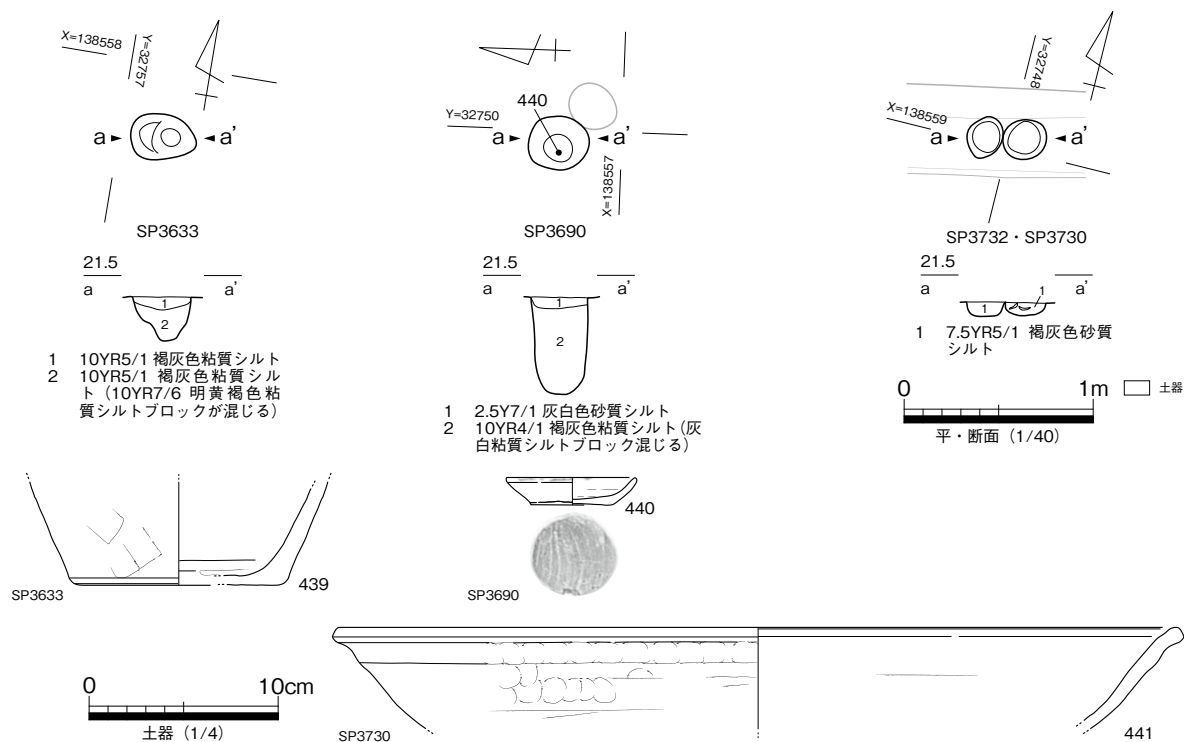


第182図 3-2区ピット平・断面図1





第184図 3-2区ピット平・断面図3



第 185 図 3-4-5 区ピット平・断面図

## 5 遺構外出土遺物

第 186 ~ 190 図は、包含層や遺構面精査中、側溝掘削時に出土した遺物や、出土遺構が不明な遺物について、必要と判断したものを図示した。以下では遺物の特徴について記載する。

### 1 区・2 区出土遺物 (第 186 図)

442 ~ 446 は、1-1 区調査時に出土した遺物である。442 は、備前焼灯明皿である。西側壁面から出土した遺物で 18 世紀前半代に位置付けられる。443・444 は東壁面から出土した遺物。443 は、中国産青花皿の底部片。底部はいわゆる碁笥底を呈し、小野氏の染付皿 C 群 I 類に分類 (小野 1982) される。444 は、青白磁梅瓶の体部片である。外面は、花渦文を印刻し施釉。内面は無釉。445・446 は遺構面精査中に出土した遺物。445 は土師器羽釜である。11 世紀中葉前後に位置付けられる。446 は、瀬戸・美濃系陶器灰釉折縁皿で、体部内面には丸ノミ状工具によるソギが施され、底部内面と高台内を除いて灰釉が施される。藤澤良祐氏 (2008) による大窯第 4 段階前半、16 世紀末前後に位置付けられる。

447 ~ 452 は 2 区調査時に出土した遺物である。447 は 2-1 区西側側溝掘削時に出土した、土師質焼成の管状土錘である。半損しており全形は不明。448 は第 2 遺構面精査時に出土した、弥生土器壺底部。内面には剥離痕が残る。449 は、2-1 区試掘トレンチから出土した瀬戸・美濃系陶器天目椀である。内外面には鉄釉が施される。大窯第 4 段階前半に位置付けられる。450 ~ 452 は 2 区排土より採集した。450 は肥前系陶器丸皿で、内外面に藁灰釉が施される。451 も肥前系陶器皿で、口縁部は小さく外反して開き内面口縁部下端に段を有し、藁灰釉を施す。いずれも肥前 I 期 16 世紀後葉 ~ 17 世紀初頭に位置付けられる (盛 2000)。452 はサヌカイト製の火打石。いずれも正確な出土層位や帰属遺構等は不明である。(蔵本)



### 3-1 区出土遺物（第186・187図）

453～464は3-1区遺構面精査中に出土した遺物。453は土師質土器皿。底部付近に明確な屈曲点を持つ。11世紀第4四半期～13世紀第1四半期のものとみられる。454は土師質土器足釜口縁部片。口縁部内外面、体部内面はナデで調整を行い、体部外面は指オサエをした後ナデもしくは板ナデで調整を施す。口縁部形態より楠井Ⅱ-3期(14世紀末～15世紀前葉)のものと考えられる。455・456は土師質土器鍋。455は441の祖型的な形態であり、17世紀前半頃のものと考えられる。456は体部外面は指オサエ後ナデ、体部内面はハケ目で調整する。口縁部に明確な屈曲点があり、強く外傾する。口縁部外側に段が存在する。457は土師質土器把手付鍋の口縁部片。本書編年B期(Ⅰ-Ⅲ型式)に相当する。外面は指オサエ後ナデ、内面は指オサエ後板ナデで調整を行う。口縁部形態より中世後期のものである。458は瓦質土器香炉。口縁部と体部下半に沈線による2条の文様体を作り、上側には花菱文、下側には菊花文がスタンプされる。459は須恵器蓋つまみ片。蓋の全体形は不明だが、つまみは扁平な擬宝珠形を呈し外面に分厚く濃緑色の自然釉が被る。8世紀のものと考えられる。460～462は肥前系陶器皿。460は溝縁皿。底部内面に砂目積が残る。461・462は底部内面付近に段がみられる。いずれも17世紀前半～中葉。463白磁椀Ⅳ類の底部片。底部は無釉で削り出し高台によって形成する。12～13世紀。464は和釘。465は排土、466は北拡張部第1遺構面精査中、467・468は北拡張部表土掘削中に出土した遺物である。465・466は平瓦。ともに凸面は縄叩き目、凹面は布目の跡が残る。467は不明鉄器片。上部に折返しらしきものが確認できるため鎌の可能性もある。468は釘。鉄釘が3～4本鏝着している。釘頭の形状は鏝により観察できないが、X線写真に写る陰影から丸釘の可能性も考えられる。(溝上)

### 3-2 区出土遺物（第188図）

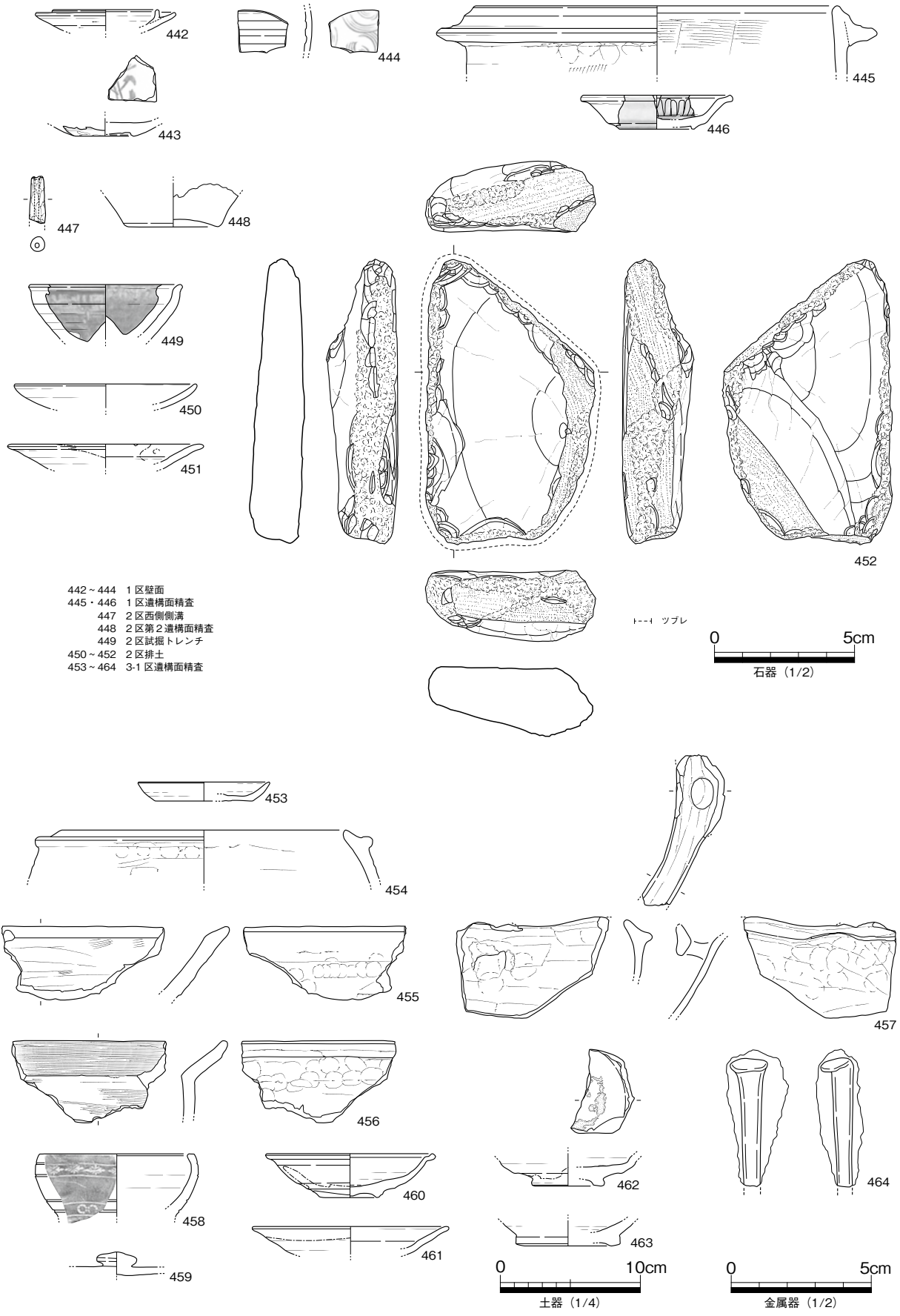
469・470は耕作土・床土中出土遺物である。469は肥前系磁器染付椀で、外面に青磁釉、見込みにコンニャク印判が見られる。470は産地不明の施釉陶器椀ないし鉢で、体部外面に鉄釉が掛けられる。重機での掘削排土より出土しており、出土位置は不明である。

471は土師器二重口縁壺の口縁部片として図示した。重機掘削中に出土しており、詳細な出土層位は不明である。

472・473は南壁沿い側溝の掘削中に出土した土師質土器杯である。体部の外傾度は比較的小さい。南側側溝はSD3013の一部を破壊しており、出土位置からSD3013埋土より出土の可能性はある。

474は東壁沿い側溝の掘削中に出土した、土師質土器杯である。出土位置はSD3026に近接しており、SD3026埋土より出土の可能性が考えられる。

475～488は第1遺構面精査中の出土遺物である。475・476は土師質土器皿。477・478は土師質土器杯である。いずれも磨滅が著しい。479は土師器高杯の脚部である。脚柱部はわずかに膨らみ、脚端部は短く開く。480・481は土師質土器足釜の口縁部片。いずれも口縁端部は丸く、鏝部は小さく短い。482は土師質土器鍋。口縁部は屈曲して直線的に伸び、端部は丸くなる。483は土師質土器捏鉢か。一定部分が残存しているが、おろし目が見られない。口縁端部は丸く、端部下に端面状の弱い屈曲が認められる。484は土師質土器鉢の口縁部片として図化した。口縁端部を内傾させたのち、複数箇所を浅い片口状に作る。485・486は土師質土器播鉢である。口縁端部は丸く、端部下に端面状の屈曲をもつ。485は本書編年のD期(Ⅳ～Ⅴ型式)、486は本書編年のD期(Ⅴ型式)に相当する。487は須恵器杯である。488は肥前系陶器皿である。内面は、外反する口縁部と底部の境に段を作り、口縁部に鉄絵を描く。



第186図 1・2・3-1区遺構外出土遺物

見込みに胎土目積みの痕跡が明瞭に残る。高松城様相1～2、17世紀前半である。

489は第2遺構面構成土中より出土した、平基式の打製石鏃である。蛍光X線分析による石材産地推定の結果、金山産サヌカイト製と推定される。出土層位から弥生時代後期以前に位置付けられるが、詳細は不明である。490は出土位置不明のサヌカイト剥片である。側面には自然面が残る。稜線に顕著な敲打痕がみられることから、火打石として図示した。(益崎)

### 3-3区出土遺物(第189図)

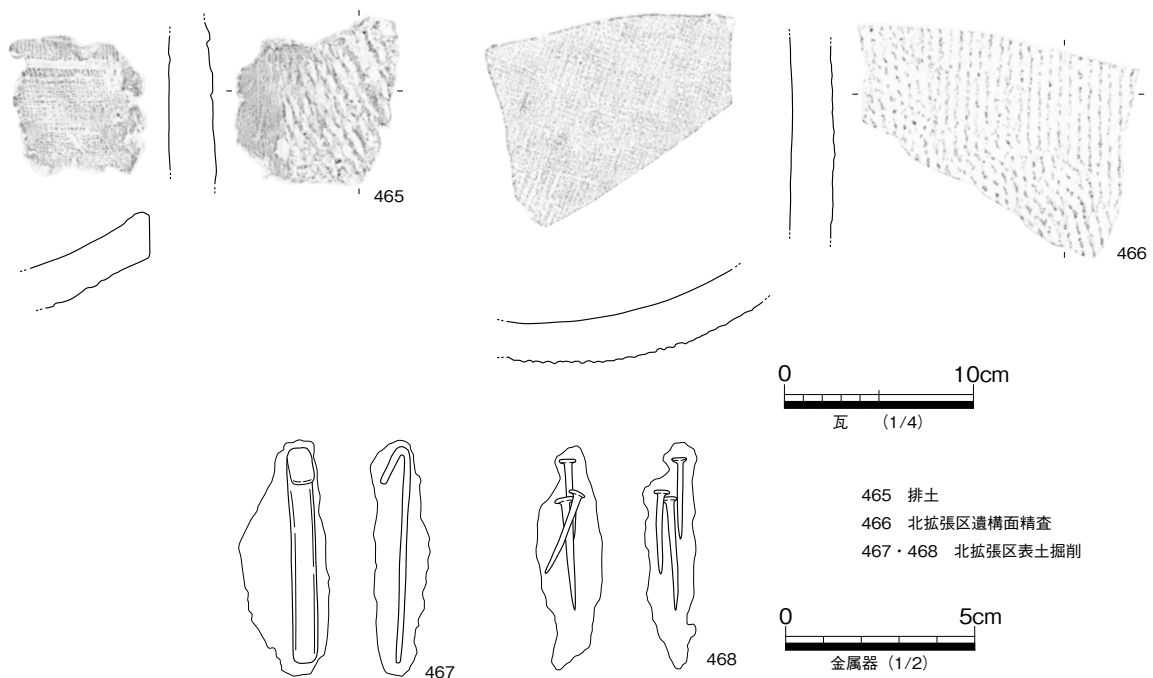
491は精査中に出土した肥前系陶器溝縁皿。17世紀中葉のものである。492は第2遺構面精査中に出土したサヌカイト製火打石。火打石として使用された部分は極一部である。片面と石の上部は、未加工のままであり、その部分を避けるようにして使用痕跡は形成されている。(溝上)

### 3-4区・3-5区・3区出土遺物(第190図)

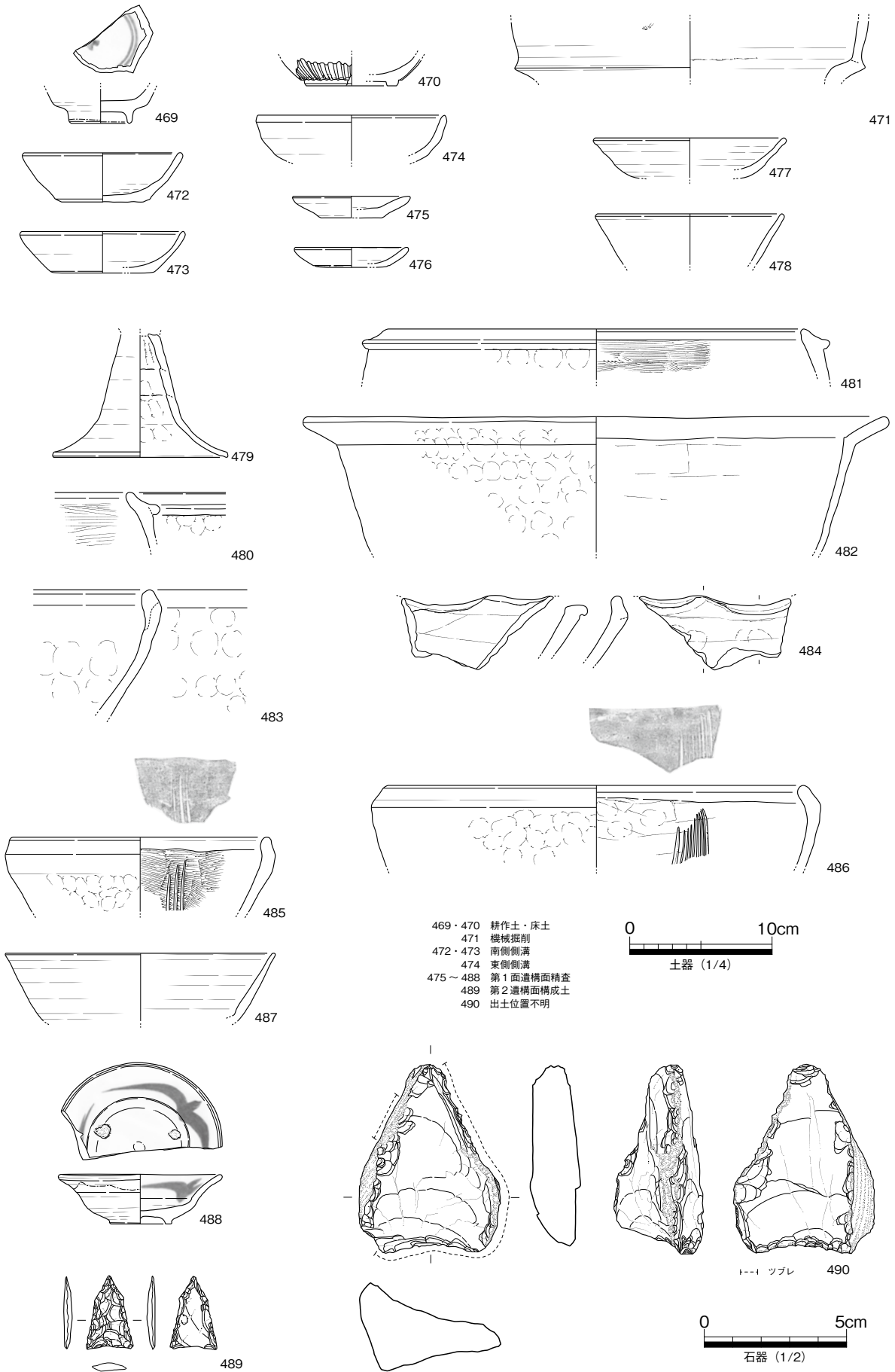
493・494は3-4区から出土した。493は機械掘削等で出土した土師質土器杯。内外面ともに回転ナデで調整する。494は遺構面精査中に出土した。破片のため器種は確定できないが、石鏃の可能性がある。

495・496は3-5区から出土した。495はSR3003と直交するトレンチから出土した土師質土器杯。体部は回転ナデで、底部は回転ヘラ切り。内面は回転ナデで調整する。496は遺構面精査中に出土した平瓦。凸面は縄目叩き、凹面は板ナデの跡が残る。

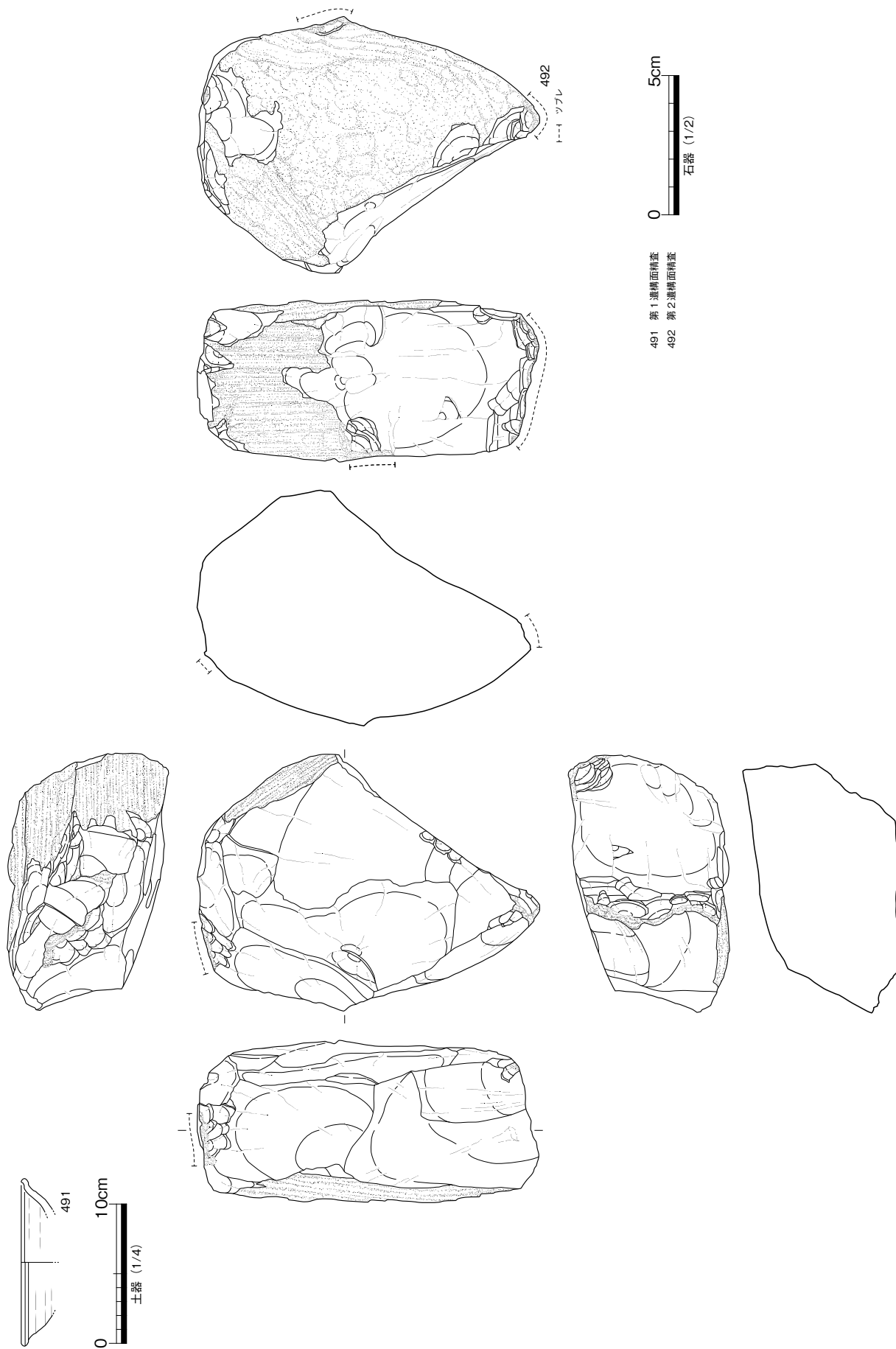
497は3区排土から出土した。用途不明石製品。上面の中央部付近が楕円形に磨滅する。楕円形に磨滅する部分の周縁には刃の平たい道具で外側に傾斜するように加工した痕跡が残る。中央部が磨滅しているのに対し、上面の外縁部には磨滅が見られないことから、中央部のみで磨滅を伴う作業が行われたと考える。(溝上)



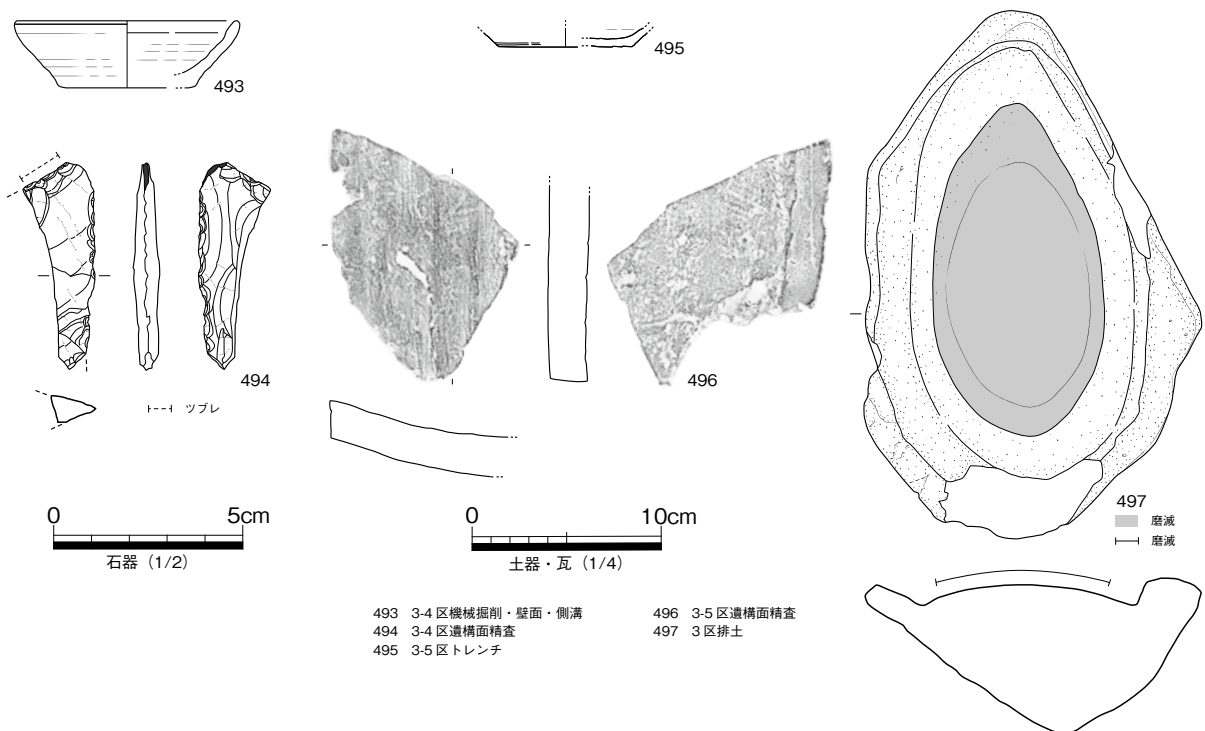
第187図 3-1区遺構外出土遺物



第188図 3-2区遺構外出土遺物



第 189 図 3-3 区遺構外出土遺物



493 3-4区機械掘削・壁面・側溝  
 494 3-4区遺構面精査  
 495 3-5区トレンチ  
 496 3-5区遺構面精査  
 497 3区排土

第190図 3-4・3-5・3区遺構外出土遺物

#### 第4節 4・5区の調査

##### 1 遺構・遺物

##### ①土坑

##### 5区 SK5013 (第192図)

SK5013は5区南部で検出した土坑である。重複関係よりSD5014より後出する。長軸1.3m以上、短軸0.5m、残存深0.18mをそれぞれ測り、平面形は溝状、断面形は概ね逆台形状を呈する。埋土は単層で、にぶい黄褐色粘質土と褐灰色混細砂粘質土が混ざる。

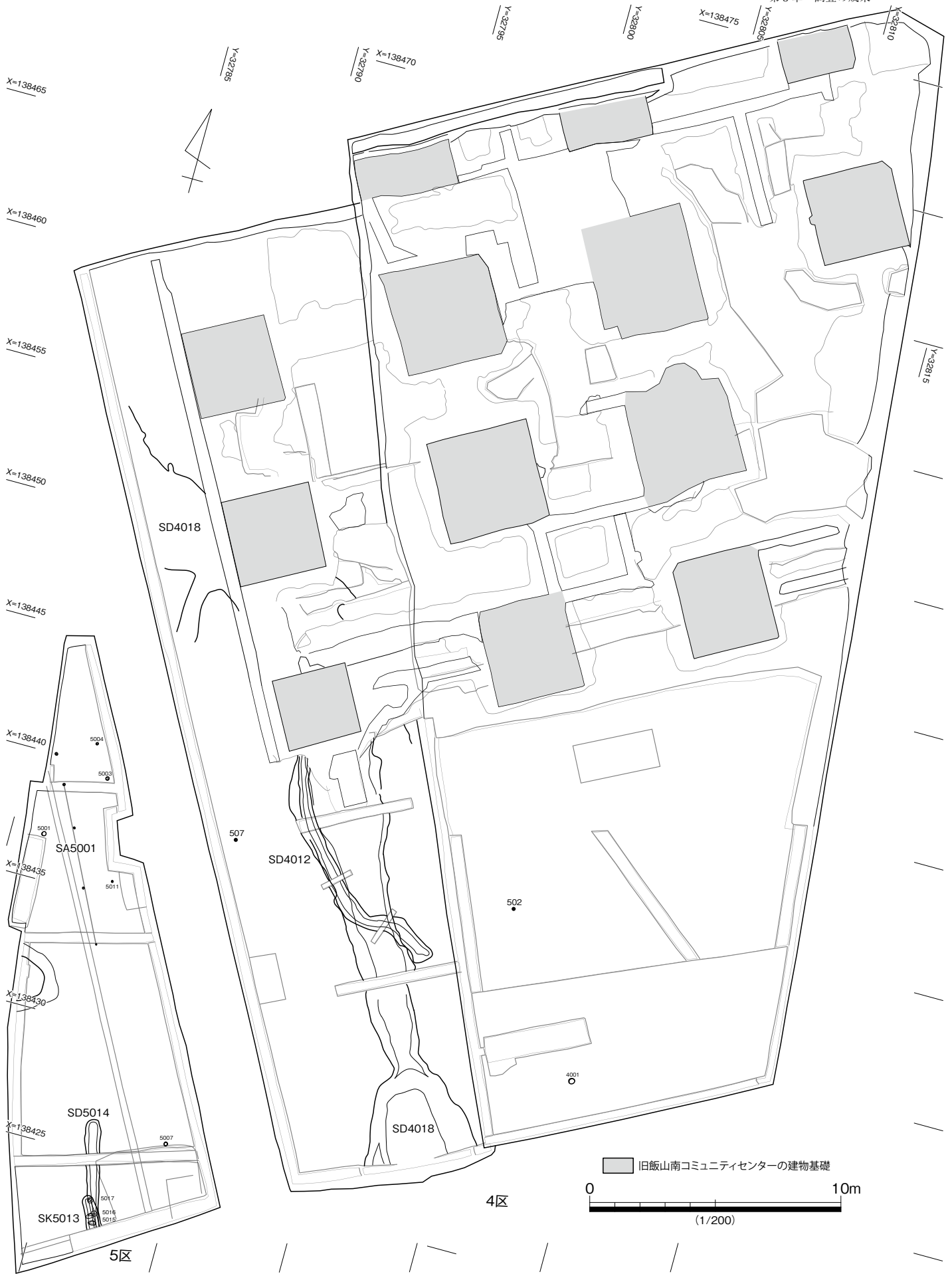
遺物は出土していない。検出面より古墳時代の遺構と考えられるが、詳細な時期決定は困難である。

##### ②溝

##### 4区 SD4012 (第193図)

SD4012は4区南西部で検出した南北溝で、北部は攪乱によって検出できず、南部は途中で途切れ延長は検出していない。重複関係よりSD4018より後出する。検出面幅0.3～0.5m前後、残存深0.16m前後をそれぞれ測り、断面形は浅いU字状を呈する。流路方向N41.6°Wに配され、周辺の条里型地割方向とは一致しない。溝底面の標高は北端で21.47m前後、南部で21.46m前後をそれぞれ測り、高低差がほとんどなく流路方向の決定には至らない。埋土は黄灰色混細砂粘質土の単層であった。

遺物は図示していないが、器種不明の土師質土器小片が50点程度出土している。いずれもローリングしたように磨滅しており、遠隔地から流入品の可能性がある。検出した遺構面より古墳時代と考えられるが、詳細な時期決定は困難である。

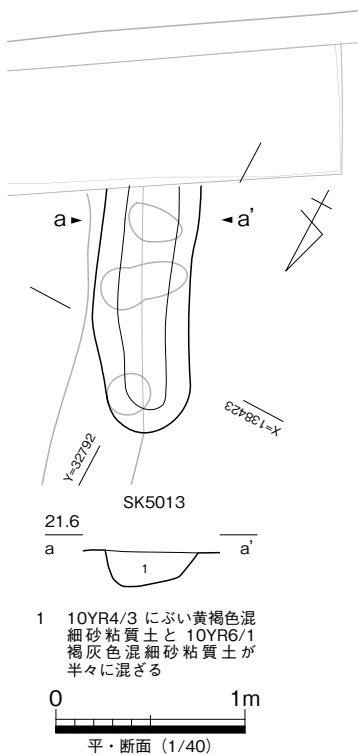


第191図 4・5区 遺構平面図

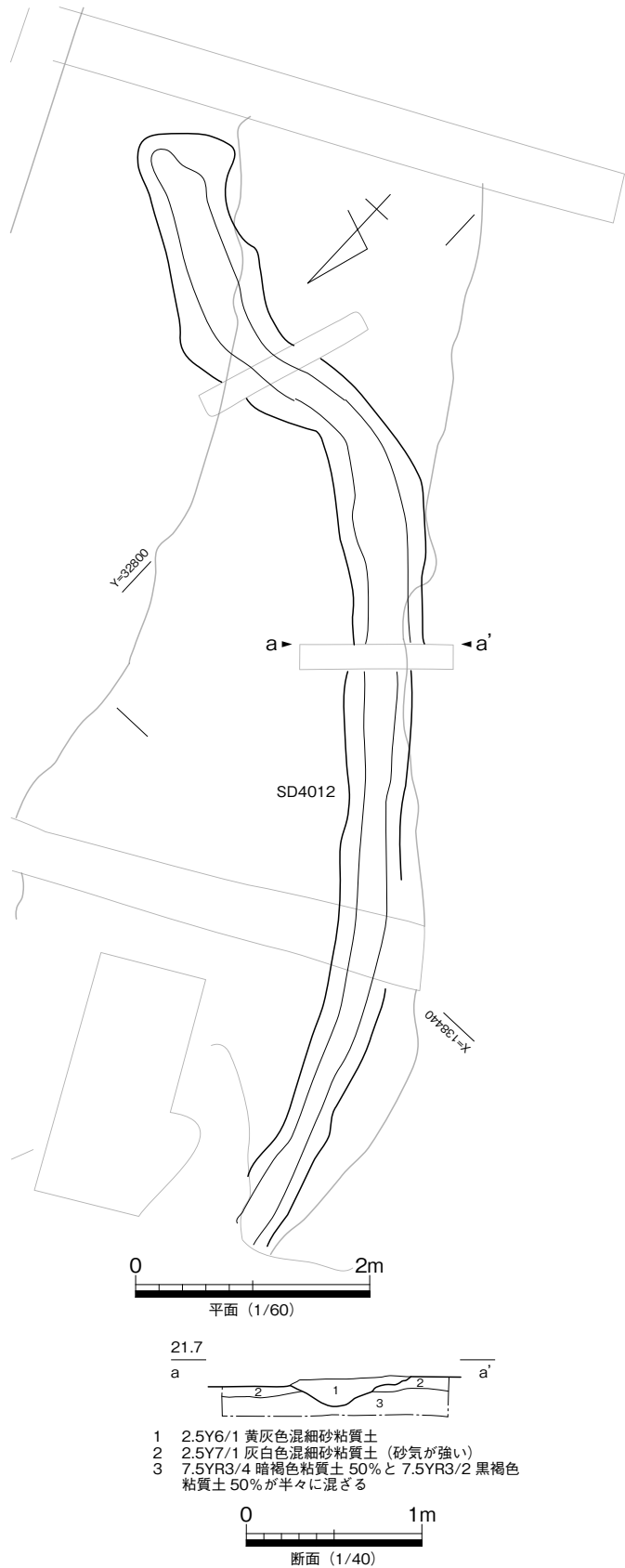
4区 SD4018・SD4019

(第194・195図)

SD4018・SD4019は4区西部で検出した南北溝である。c-c'断面ではSD4018に切られるようにしてSD4019を検出したものの、b-b'断面では1条しか溝が検出されなかったことから、この間で溝が合流したものと考えられる。北部は攪乱によって延長は確認できないものの、4区西壁においてSD4018もしくはSD4019の延長部と考えられる土層の堆積を確認している。南部は調査区外へ延長すると考えられる。重複関係より、SD4012より先行する。検出面幅は最大4.2m前後、残存深0.5m前後をそれぞれ測り、断面形は中央に向かって深まる皿状を呈する。溝底面の標高は北部で20.79m前後、南部で20.66m前後を測り、高低差より南へ流下していた可能性が高い。埋土は記録位置により相違を認めるが、2～

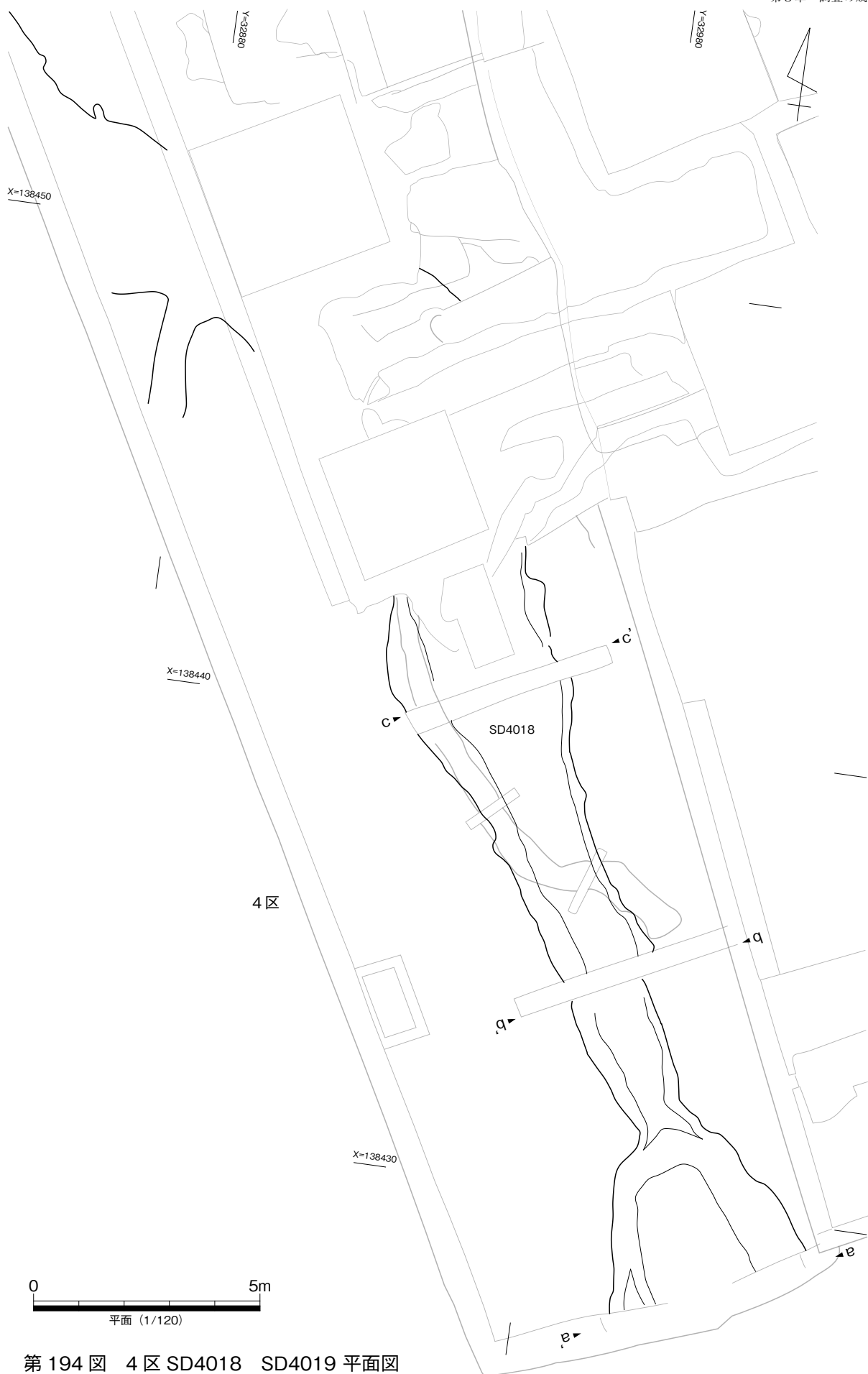


第192図 5区 SK5013 平・断面図

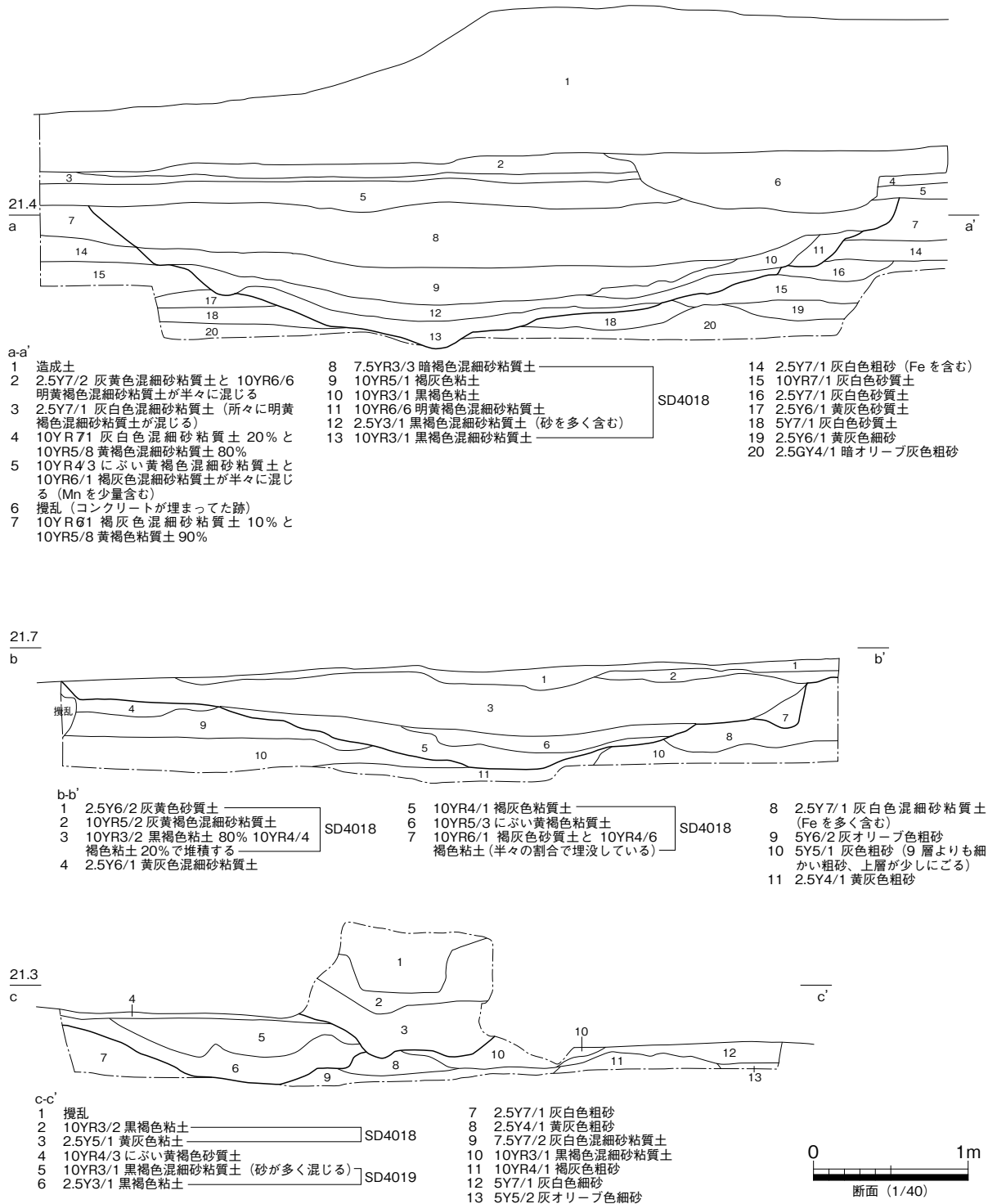


第193図 4区 SD4012 平・断面図





第194図 4区 SD4018 SD4019 平面図



第 195 図 4 区 SD4018 SD4019 断面図

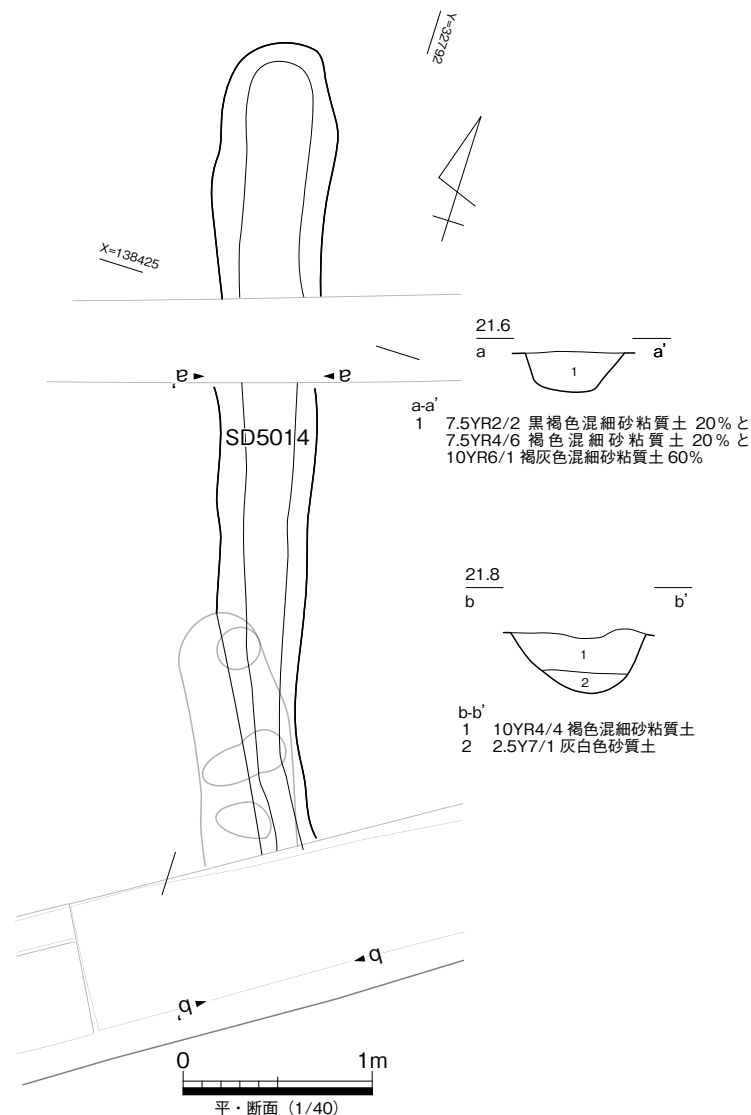
6層に細分され主に褐色系の粘土もしくは粘質土が堆積していた。

遺物は図示していないがSD4018の最下層からサヌカイトの剥片のみが出土している。検出面幅や南壁で検出した幅や深さから大型灌漑水路の可能性が考えられ、検出面から古墳時代と想定される。なお、遺物が出土していないため詳細な時期決定は困難である。

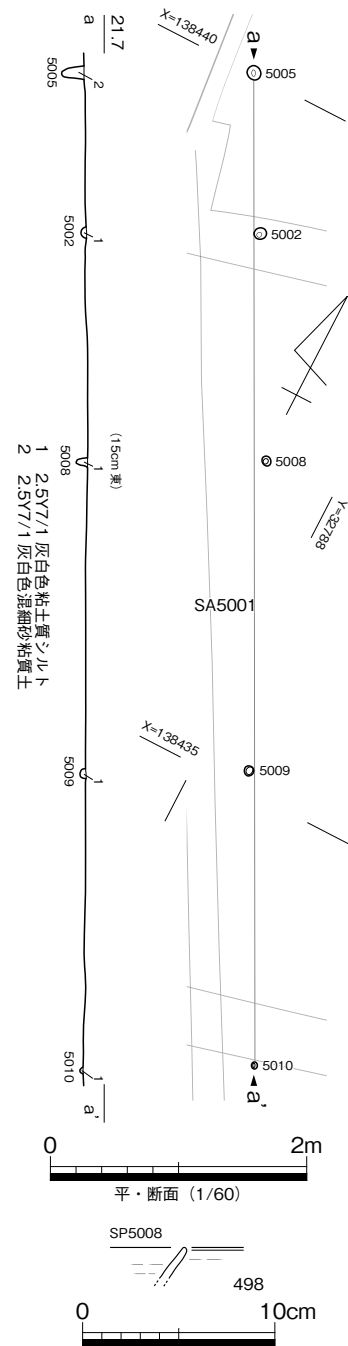
5区 SD5014 (第196図)

SD5014は5区南部で検出した東西溝で、北部は途切れ検出できず、南部は調査区外へ延長する。重複関係よりSK5013より先行する。検出面幅0.63m、残存深0.2mをそれぞれ測り、断面形は逆台形状を呈する。流下方向はN14.73°Wに配され、条里型地割とは一致しない。溝底面の標高は北部で21.36m前後、南部で21.34m前後をそれぞれ測り、高低差より南へ流下していた可能性が高い。埋土は単層もしくは2層で、褐色系混細砂粘質土と灰白色砂質土が堆積していた。

遺物は出土していない。検出面から古墳時代と考えられるが、詳細な時期決定は困難である。



第196図 5区 SD5014 平・断面図



第197図 5区 SA5001 平・断面図、出土遺物

③ 柵列

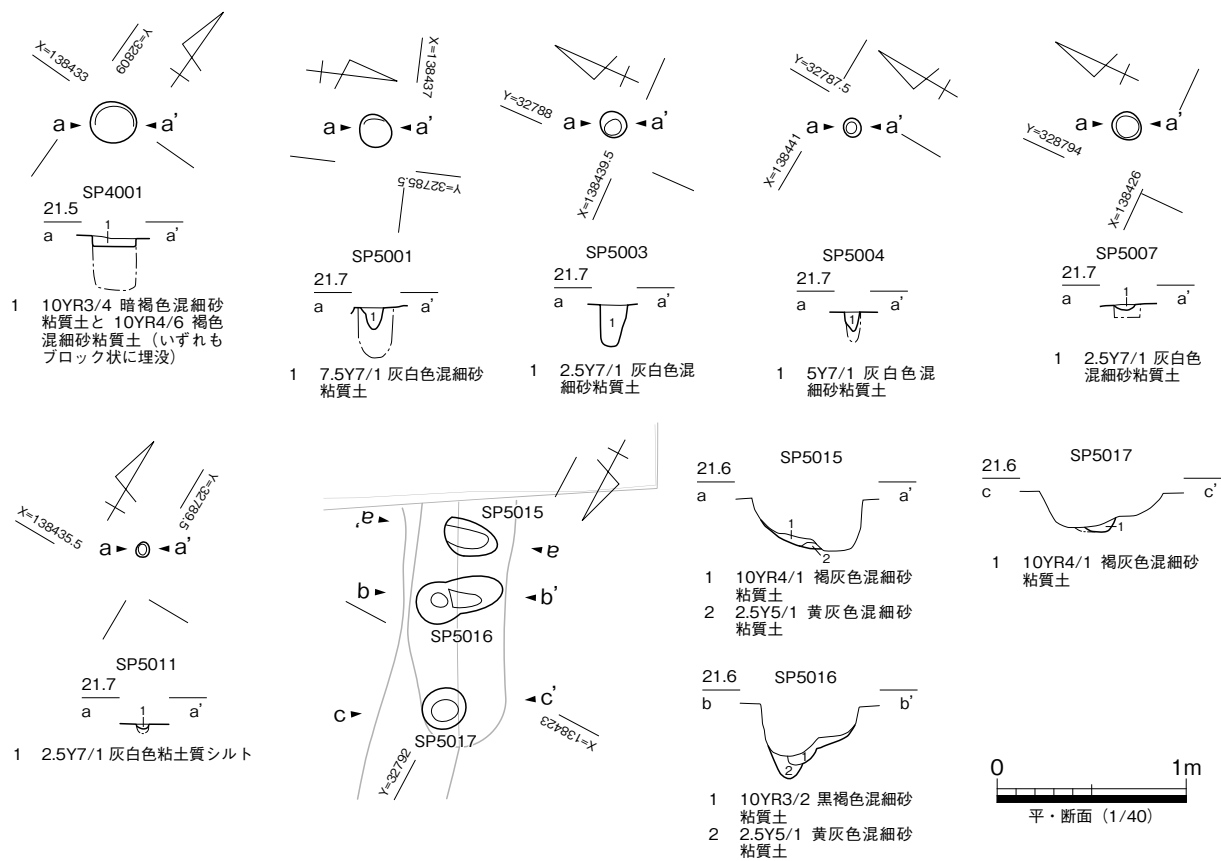
5区 SA5001 (第197図)

5区北部で検出した南北延長7.8mの柵列である。主軸方向はN27.54°Wで、周辺の条里型地割と概ね合致する。柱間隔は1.25～2.45mと一定せず、柱通りも揃わない。柱穴の掘り方は0.03～0.1mの楕円形で、底面の標高21.46～21.5m、残存深は0.05～0.15mをそれぞれ測る。

遺物はSP5008から498土師質土器杯が出土している。検出面と遺物より、中世以降と考えられるが、詳細な時期決定は困難である。

④ 柱穴 (第198図)

4・5区では、柱穴を19穴確認し、その一部を第198図に示した。図示した遺物の詳細は第4表に記した。



第198図 4・5区ピット平・断面図

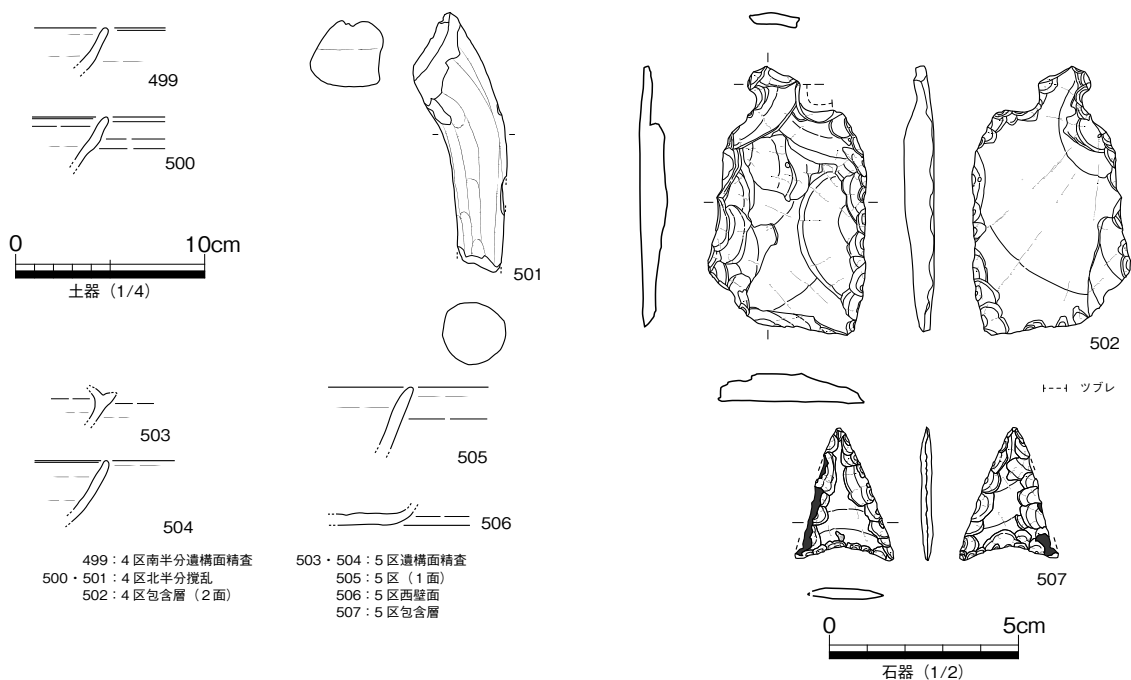
区名	ピット番号	平面形	規模 (cm) (長軸×短軸)	深さ (cm)	掲載遺物	その他の出土遺物	その他
4	SP4001	円形	26	4		なし	
5	SP5001	円形	16	12		なし	
5	SP5003	円形	14	22		なし	
5	SP5004	円形	10	10		なし	
5	SP5007	円形	16	2		なし	
5	SP5011	円形	8	2		なし	
5	SP5015	楕円形	28 × 18	39		なし	
5	SP5016	楕円形	46 × 18	24		なし	
5	SP5017	円形	14	20		なし	

第4表 4・5区ピット一覧

⑤遺構外出土遺物（第199図）

包含層や遺構検出中、壁切作業中時に出土した遺物について必要と判断したものを図示した。以下では遺物の特徴について記載する。

499～502は4区から出土した遺物である。499・500は土師質土器杯。ともに全体を回転ナデで調整する。501は土師質土器足釜脚部。全体的に指ナデで調整し、体部との接する部分も指ナデで調整する。502はサヌカイト製の石匙。ツマミ付近にツブレが集中する。503～507は5区から出土した遺物である。503は須恵器杯身。焼成不良のため土器全体が橙色を呈する。504は土師質土器杯。全体に磨滅している。505須恵器杯口縁部片。8世紀頃の所産と考える。506は土師質土器杯。全体的に磨滅している。507はサヌカイト製の石鏃である。



499：4区南半分遺構面精査  
500・501：4区北半分攪乱  
502：4区包含層（2面）  
503・504：5区遺構面精査  
505：5区（1面）  
506：5区西壁面  
507：5区包含層

第199図 4・5区遺構外出土遺物